

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅷ

— 第13次発掘調査報告 —

2024年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会



第13次調査出土縄文土器



第12次・第13次調査出土打製石鏃

愛媛県越智郡上島町

宮ノ浦遺跡Ⅷ

— 第13次発掘調査報告 —

2024年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会

序 文

上島町は、愛媛県の北東部、広島県との県境に位置し、瀬戸内海のはほぼ中央に浮かぶ上島諸島および魚島群島で構成されています。瀬戸内海国立公園区域内にあり、穏やかな海と多島美からなる景観が町の大きな魅力です。2004（平成16）年10月1日に、弓削町、生名村、岩城村、魚島村の4町村が合併し、現在の上島町が誕生しました。そして、2024（令和6）年10月1日に、上島町は合併20周年を迎えます。これを契機に、これまで島々で育まれてきた歴史文化を振り返り、次世代に継承する取り組みを推進することが期待されています。

瀬戸内海は古くから海上交通の要路であり、沿岸には港町が整備され、漁業のほか塩業や海運業、造船業などの海に関わる産業が発達しました。先人の営みによって瀬戸内海地方の多様な文化や景観、風土が形成され、私たちの生活の重要な基盤となっています。私たちは、土地に埋蔵されている遺跡からも先人の生活や知恵を学ぶことができます。上島町は、このような歴史文化を保存・継承し、地域資源として活かすまちづくりを目指しています。

上島町では、平成25年度から上島町内遺跡発掘調査等事業として、文化庁、愛媛県教育委員会のご指導ご助言を賜りながら、製塩遺跡の発掘調査、弓削島荘の総合調査および埋蔵文化財包蔵地詳細分布調査を進めて参りました。宮ノ浦（みやんな）遺跡の発掘調査は、愛媛大学法文学部考古学研究室の皆様のご尽力を賜り継続して実施してきました。

本報告書は、令和5年度に実施された宮ノ浦遺跡の第13次の発掘調査の成果を中心に報告するものです。また、平成23年度からの調査成果を総括する内容にもなっています。当初は、古墳時代前期の製塩を明らかにするために宮ノ浦遺跡の発掘調査を開始しました。その後の調査によって、宮ノ浦遺跡は、国の史跡に指定された中世の荘園遺跡である弓削島荘遺跡の前段階となる時代の島嶼部の生業や交易、景観などを示す重要な遺跡であることがわかってきました。

このように宮ノ浦遺跡は、郷土の歴史を理解し復元するために必要な多くの情報をもった貴重な遺跡です。本報告書が文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究、郷土史研究の基礎資料として広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査事業を実施するにあたり、懇切なるご指導とご助言を賜りました諸先生方、そして、多大なるご理解とご協力を賜りました関係機関および地元住民の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月

愛媛県上島町教育委員会

教育長 清水 伸

序 文

ポストコロナを迎えて、一昨年から通常の夏期実習発掘を再開し、今年度の第13次調査もなんとか無事に終えることができた。調査は明確な目的を掲げて臨んだものの、遺跡の最下層をねらって掘るとなると、もちろん上層の遺構や包含層も精査し、記録するわけであるから、目的の調査にかける時間が短くなり、思うように発掘が進まない。そういうもどかしさを感じつつの調査ではあったが、一方で、たかだか2m四方のトレンチにおいて、撚糸文土器や刺突文土器の小片が少ないながらもレベルを違えて発見されると、皆で顔をみあわせて驚き、喜ぶ、という一喜一憂の調査であった。

第13次調査は、各地からの来訪者を迎えて賑やかな現場となり、また意見交換の場となったことはたいへん有り難かった。発見される遺物にも関心を惹いたが、地形や環境の成り立ちと人間の活動とを関連付けて説明できる遺跡として一定の評価をいただいたこともうれしい。

遺跡でそれまで最古と考えていた撚糸文土器や無文土器よりもさらに古い刺突文土器、そして隆帯文土器を今回発見することができた。包含層出土という点で、検証すべき点は多々あるものの、縄文時代のその段階に人の生活があったということは否定できない。現状では芸予諸島における最古の土器となるが、そのことをことさら強調するつもりはない。重要な点はこれらに付随する1万年という数字であって、そこからみえてくるそのころの瀬戸内の景色である。海のない時代のこの地域で、宮ノ浦遺跡がどのような環境にあったのかという点は大きな論点となるし、それによって今後派生する問題点も少なくない。

さて、今回の報告書には第12次調査で発掘された中世人骨についても舟橋京子先生を中心に検討いただいた成果をご寄稿いただいた。この地域における古人骨研究のモデルケースとなるであろう。このほかにも地形環境、縄文土器、古式土師器、古代製塩土器、中世土器・陶磁器といった宮ノ浦遺跡の各トピックについて考察の成果が収められている。そして今回の発掘と報告をもって13年間におよび宮ノ浦遺跡発掘調査の中締めとしたい。

令和6年3月

愛媛大学考古学研究室

村 上 恭 通

例 言

1. 本書は、愛媛県越智郡上島町弓削佐島に所在する宮ノ浦遺跡の第13次発掘調査報告である。
2. 遺跡における発掘・記録作業は第2章2に記載した参加者が行った。
3. 遺物の整理作業は次のメンバーが行った。
鄭宗鎬、馬赤嬰〈以上、愛媛大学大学院博士課程〉、ブズレン・サミ、松澤樹生〈以上、愛媛大学大学院修士課程〉、伴井嘉正、福本佳織、益田千遥、江本晃季、朝日岳斗、植田知也、藤原碧生、〈以上、愛媛大学学部生〉、青木聡志〈愛媛県埋蔵文化財センター〉
4. 図のトレースは鄭、馬、ブズレン、伴井、福本、益田、江本が担当した。
5. 遺物の写真撮影は福本、益田、江本、藤原および安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）が行った。
6. 文責については各担当者の氏名を文末に記した。
7. 第4章は宮ノ浦遺跡出土資料に関する自然科学分析の成果、第5章は遺跡に関わる考察をまとめた。これらについては各執筆者の意向を尊重して、一部の表現や体裁をあえて統一していない。
8. 第4章の執筆者は次の通りである（執筆順）
舟橋京子（九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）、米元史織（九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）、田渕朱莉、足立達朗、中野伸彦（九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）、竹原弘展・伊藤茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻康男（パレオ・ラボAMS年代測定グループ）。
9. 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に依拠した。
10. 本文中における緯度、経度は国土地理院の地図情報データに基づいている。
11. 図中の方位の北は図2・図7・図8・図17・図23・図47・図74を除き、すべて真北である。
12. 本文中の遺物番号と巻末写真図版の遺物番号は対応している。
13. 縄文土器片、製塩土器片の傾きは不明な点が多いため、それらについては断面図を垂直に表現している。
14. トレンチごとに遺構番号を付している。
15. 本報告書の作成に当たり、次の方々よりご指導、ご協力いただいた。
及川穰（中央大学人文科学研究所）、岡田憲一（橿原考古学研究所）、沖野実（愛媛県埋蔵文化財センター）、尾野善裕（京都国立博物館）、遠部慎（久万高原町教育委員会）、郭新宇（愛媛大学）、久住猛雄（福岡市埋蔵文化財センター）、榊原正幸（愛媛大学）、佐藤竜馬（香川県埋蔵文化財センター）、柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）、柴田昌児（愛媛大学）、神野恵（奈良文化財研究所）、菅波正人（福岡市経済観光文化局）、長井謙治（愛知学院大学）、畠山義範（花巻市博物館）、兵頭勲（愛媛県教育委員会）、福永将大（九州大学総合研究博物館）、松本安紀彦（愛南町教育委員会）、山崎純男、綿貫俊一（大分県埋蔵文化財センター）
16. 本書の編集は村上恭通の監修のもと有馬啓介、福本佳織、鄭宗鎬が行った。

宮ノ浦遺跡Ⅷ

－第13次調査発掘調査報告－

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

	頁
第1章 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
3. 旧石器時代～縄文時代の周辺遺跡	6
4. 古代製塩の動向	7
第2章 調査の経緯・体制・経過	11
1. 調査の経緯と目的	11
2. 調査の体制	12
3. 調査の経過	13
第3章 発掘調査成果	15
1. 調査区の設定	15
2. 各トレンチの成果	15
(1) 12トレンチ	15
(2) 17トレンチ	37
(3) 18トレンチ	52
3. 小結	67
第4章 自然科学分析	71
I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について	71
II. 宮ノ浦遺跡出土人骨の歯牙ストロンチウム同位体比分析	89
III. サヌカイト石材の産地推定	97
IV. 放射性炭素年代測定	101

第5章 考察	105
Ⅰ. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境－縄文時代草創期～早期の景観を意識して－	105
Ⅱ. 宮ノ浦遺跡における縄文時代草創期・早期移行期の土器	111
Ⅲ. 古式土師器について	119
Ⅳ. 宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器	125
Ⅴ. Ⅱ区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物－2号遺構の再評価を中心に－	133
Ⅵ. 宮ノ浦遺跡の古代・中世土器－流通品からみた宮ノ浦遺跡－	147
Ⅶ. 宮ノ浦遺跡の発掘調査とまちづくり	159
第6章 総括	163

図 版 目 次

図版1	1. 宮ノ浦遺跡遠景（南から）	図版4	1. 18トレンチ東壁
	2. 全景（南から）		2. 18トレンチ西壁
図版2	1. 12トレンチ全景（南から）		3. 18トレンチ北壁
	2. 12トレンチ東壁（一部）		4. 18トレンチ南壁
	3. 12トレンチⅡ層上面礫群 （南から）		5. 18トレンチⅣ－1層遺物出土状況 （西から）
	4. 12トレンチ2号遺構（南から）		6. 18トレンチⅣ－1層遺物出土状況 （西から）
	5. 12トレンチ4号遺構半裁状況 （西から）	図版5	12トレンチ出土縄文土器1
	6. 12トレンチⅣ－2層刺突文土器出 土状況（南から）	図版6	12トレンチ出土縄文土器2、12トレン チ出土石器、12トレンチ出土脚台式製 塩土器
	7. 左の写真の拡大	図版7	12トレンチ出土遺物1
図版3	1. 17トレンチ北壁	図版8	12トレンチ出土遺物2、12トレンチ出 土製塩土器、12トレンチ出土鉄製品・ 鍛冶関連遺物
	2. 17トレンチ南壁	図版9	17トレンチ出土縄文土器1
	3. 17トレンチ東壁	図版10	17トレンチ出土縄文土器2、17トレン チ出土石器、17トレンチ出土土器1
	4. 17トレンチ西壁	図版11	17トレンチ出土土器2
	5. 17トレンチⅣ－1層下層縄文土器 （西から）		
	6. 17トレンチⅣ－1層下層縄文土器 （北から）		

図版12 18トレンチ出土縄文土器 1
図版13 18トレンチ出土縄文土器 2、18トレン
チ出土石器

図版14 18トレンチ出土脚台式製塩土器、18ト
レンチ出土土器、18トレンチ出土製塩
土器、1・3トレンチ出土縄文土器

図 目 次

- | | |
|-------------------------------|---|
| 図 1 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図 | 図26 II区18トレンチ出土石器 |
| 図 2 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図 | 図27 II区18トレンチ出土脚台式製塩土器 |
| 図 3 佐島遺跡分布図 | 図28 II区18トレンチ出土土器 |
| 図 4 芸予諸島における縄文時代遺跡分布図 | 図29 II区18トレンチ出土製塩土器 |
| 図 5 芸予諸島における古代製塩土器出土遺跡
分布図 | 図30 II区南北方向の柱状土層図 |
| 図 6 II区第13次調査地点(図中の網掛け部分) | 図31 II区1・3トレンチ出土縄文土器 |
| 図 7 II区トレンチ配置図(網掛け部分を調査) | 図32 単変量(頭長幅示数/顔示数(V)) |
| 図 8 II区12トレンチ平面図・土層図 | 図33 単変量(眼窩示数/顔示数(V)) |
| 図 9 II区12トレンチ出土縄文土器 1 | 図34 単変量(鼻示数/眼窩示数) |
| 図10 II区12トレンチ出土縄文土器 2 | 図35 主成分得点散布図 |
| 図11 II区12トレンチ出土石器 | 図36 MSMs対象22部位 |
| 図12 II区12トレンチ出土脚台式製塩土器 | 図37 地質図 |
| 図13 II区12トレンチ出土土器 | 図38 Sr同位体比分析結果 |
| 図14 II区12トレンチ出土土器・土製品 | 図39 Sr同位体比および $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 比の散布図 |
| 図15 II区12トレンチ出土製塩土器 | 図40 香川県内の原石採取位置 |
| 図16 II区12トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺
物 | 図41 サヌカイト産地推定判別図(1) |
| 図17 II区17トレンチ平面図・土層図 | 図42 サヌカイト産地推定判別図(2) |
| 図18 II区17トレンチ出土縄文土器 1 | 図43 サヌカイト産地推定判別図(3) |
| 図19 II区17トレンチ出土縄文土器 2 | 図44 暦年較正結果 |
| 図20 II区17トレンチ出土石器 | 図45 II区5トレンチ東壁土層図 |
| 図21 II区17トレンチ出土土器 1 | 図46 ボーリング地点 |
| 図22 II区17トレンチ出土土器 2 | 図47 宮ノ浦遺跡周辺の地形区分図 |
| 図23 II区18トレンチ平面図・土層図 | 図48 宮ノ浦湾の海底地形 |
| 図24 II区18トレンチ出土縄文土器 1 | 図49 海底の標高変化 |
| 図25 II区18トレンチ出土縄文土器 2 | 図50 宮ノ浦遺跡II区出土の隆帯文土器・刺突
文土器・無文土器・撚糸文土器 |
| | 図51 森の木遺跡の隆帯文土器口縁部分類〔綿 |

	貫編2016]	図64	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物その1
図52	森の木遺跡出土縄文草創期土器の一例 [綿貫編2016]	図65	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物その2
図53	宮ノ浦遺跡Ⅱ区出土打製石鏃	図66	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物その3
図54	1万年前の海岸線復元図	図67	Ⅱ区4トレンチ3号遺構出土遺物
図55	Ⅰ区出土の古式土師器と製塩土器	図68	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物破片数 計測（左）および重量計測（右）
図56	Ⅱ区出土の古式土師器と製塩土器	図69	Ⅱ区4トレンチ2号遺構供膳具破片数計 測（左）および重量計測（右）
図57	製塩土器の変遷（柴田2015より引用）	図70	和泉型瓦器碗の法量分布
図58	製塩土器の脚台径	図71	和泉型瓦器碗の時期と出土点数
図59	宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器	図72	和泉型瓦器碗の見込みの暗文
図60	略円錐形・砲弾形を呈する古代製塩土器	図73	和泉型瓦器碗の高台形状
図61	東予・安芸・備後の典型的製塩土器	図74	宮ノ浦遺跡の調査区配置図
図62	愛媛県および広島県域における古代製塩 土器出土遺跡分布図	図75	Ⅰ区出土流通品
図63	Ⅱ区4トレンチ2号・3号遺構検出状況 （左）、完掘状況（右）	図76	Ⅱ区出土流通品
		図77	流通品からみた消長

写真目次

写真1	発掘調査風景	写真7	資料No. 1（PLD-52261）
写真2	現地説明会風景	写真8	資料No. 2（PLD-52262）
写真3	製塩土器内面の布目痕拡大写真	写真9	サウンディング・ボーリング作業風景
写真4	宮ノ浦遺跡の人骨出土状況	写真10	海底地形測量風景
写真5	宮ノ浦遺跡出土人骨1	写真11	大原D遺跡（左2点）と宮ノ浦遺跡出 土の刺突文土器
写真6	宮ノ浦遺跡出土人骨2		

表目次

表1	Ⅱ区12トレンチ出土脚台部計測値	表4	Ⅱ区18トレンチ出土脚台部計測値
表2	Ⅱ区17トレンチ出土石器計測値	表5	主要頭蓋計測項目の平均値比較（男性）
表3	Ⅱ区18トレンチ出土石器計測値	表6	下顎骨計測値の比較（男性）

表7	鼻根部計測値の比較（男性）	表18	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果
表8	四肢骨計測値（男性、左）比較	表19	ボーリング結果
表9	推定身長	表20	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物観察表 その1
表10	固有ベクトル	表21	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物観察表 その2
表11	主成分負荷量	表22	Ⅱ区4トレンチ3号遺構出土遺物観察表
表12	宮ノ浦遺跡出土人骨のMSMsスコア	表23	Ⅱ区4トレンチ2号遺構出土遺物の内訳
表13	ストロンチウム同位体比分析の結果	表24	宮ノ浦遺跡の流通品出土点数
表14	分析対象		
表15	原石採取地と判別群名称		
表16	測定値および産地推定結果		
表17	測定試料および処理		

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

瀬戸内海の西部に位置する芸予諸島は、広島県（安芸）と愛媛県（伊予）にかけて所在する島々を総称している。その北部には広島県に属する向島、因島、生口島があり、それに愛媛県の上島諸島が連なる。上島諸島は越智郡上島町に所属し、弓削島、佐島、生名島、岩城島、赤穂根島、津波島などで構成されている。これら瀬戸内海の島々は、西南日本内帯の領家帯に属する花崗岩類を基岩とする。この海域は、第四紀更新世ごろ、地球規模の海水面低下により、草原地帯であったと考えられている。しかし、完新世の気温上昇にともなった氷解は、海水面の上昇をもたらし、現在のような景観をもたらした。

弓削島の南西に接する佐島は、南北方向に細長い島であり、南北約3.5km、東西約2km、面積は約2.67km²を測る。島の脊梁を幅の広い丘陵が占め、平地は海岸沿いにわずかにある程度である。島の北東部と南部は、山や小丘陵がそのまま海に没し、海面近くで波蝕崖が形成されている。そして、島の東部は小規模で浅い湾と波蝕崖とが交互に連なっており、その湾のうちの一つが宮ノ浦湾と呼ばれ、遺跡はそれに面して立地している（図1）。

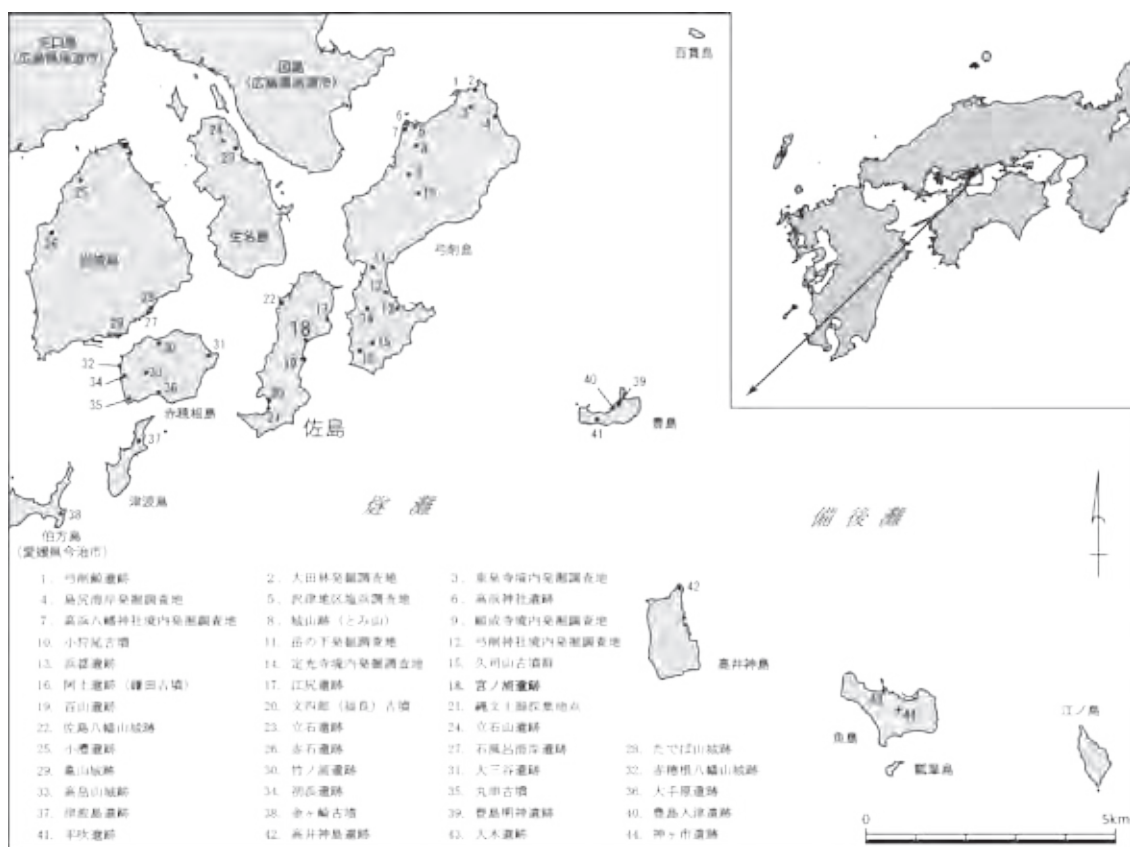


図1 宮ノ浦遺跡の位置と周辺遺跡分布図

1. 地理的環境

宮ノ浦遺跡は、上島町弓削佐島2232番地外に所在し、北緯34度14分42秒、東経133度11分30秒（Ⅰ区地点）に位置する。湾曲しながらのびる東西約400mの海岸線があり、それに併行して形成された浜堤は、北側背後にある丘陵から南側にのびる低い舌状丘陵を境に、二つの浜堤に分かれている。遺跡は主に浜堤上に立地しており、西側浜堤を中心とした地区と東側浜堤を中心とした地区があり、第7次調査から西側をⅠ区、東側をⅡ区と区分した（図2）。

Ⅰ区とその周辺は、海側から砂浜、浜堤、後背湿地、そして標高約30～50mの小丘陵で構成されている。後背湿地において第6次調査で実施したボーリング調査の結果、現湿地面から約11m掘っても岩盤には到達せず、また約9m下から検出された木炭が年代測定の結果 $15828 \pm 40\text{BP}$ を示すことから、最終氷期以前のこの一帯は崖錐地形であることが判明した〔パリノ・サーヴェイ株式会社2018〕。つまり、もともと深く擂鉢状に落ち込んでいた谷地形であり、そこに陸、海から土砂が供給されることで現在の地形が形成されたことがわかった。

一方、Ⅱ区はⅠ区と類似した地貌を呈してはいるものの、第10次、第11次調査で、浜堤堆積物の下に縄文土器を含む花崗岩の風化層があり、さらにその下に花崗岩の風化礫層が確認された。このことは包含層の下に埋没丘陵があることを示しており、その丘陵が東側の元見山からのびていた様子を想定できるようになった。仮に海水がないものと想定して、宮ノ浦湾側から北をみるならば、元見山から西に低丘陵がのび、その西側に高い崖が連なる景観を復元することができよう。なお、調査区最奥部の2トレンチでは、標高1m以下は水成堆積層が深く形成されていることがわかり、元見山の北にある江尻浜の方から海が湾入し、その後、湿地化して現況にいたったと考えられる。

（鄭 宗鎬）



図2 宮ノ浦遺跡とその周辺の地形図

2. 歴史的環境

宮ノ浦遺跡から海岸に沿って南へ500m離れた場所に、東に向かって宮ノ浦湾に突出した小丘陵がある。その標高約30mの比較的平坦な丘陵上には旧石器時代の遺跡である百山遺跡があり、サヌカイト製のナイフ形石器が採集されている〔長井2008〕。

縄文時代の遺跡については、宮ノ浦遺跡Ⅱ区の遺物包含層で、刺突文、撚糸文、条痕文をもつ縄文土器が発見され、新しく見積もっても早期前半に遡ると報告されている〔有馬・青木編2021、有馬・品川編2019〕。宮ノ浦遺跡ではこれら以外にもⅠ区やⅡ区で前期、中期、後期、晩期の土器が出土した。また、佐島南西部にある福良地区や北東部の江尻地区の砂浜海岸においても前期や後期の縄文土器片が採集されている（図3）。

弥生時代の遺跡については、佐島で周知されている例は稀であり、宮ノ浦遺跡でも土器数点が確認されているに過ぎない。隣島の生名島では、その北部にあり、水道を見下ろす山頂に立石山遺跡がある〔生名村史編纂委員会編2004、長井・土居1979〕。標高約140mに位置しており、山頂あるいはやや下った岩陰周辺で中期末葉の凹線文土器や磨製蛤刃石斧が発見された。また、岩城島のほぼ中心にそびえる標高 369.6mの積善山山頂でも凹線文土器が採集されている〔愛媛県史編さん委員会編1982〕。岩城島では、この山頂から南へ派生する丘陵上の標高 70～80mにある空久保遺跡でも中期中葉の土器が採集されており、この時期から丘陵や山頂へ居住域が徐々に展開するものと思われる。全体的に低平な佐島では、このようないわゆる「高地性集落」に適した地形はない。しかし、江尻地区において、砂浜海岸の北にある標高約20mの小丘陵傾斜面から凹線文を有する甕や壺の口縁部片が採集されており、当時の生活域である可能性が考えられる。立石山遺跡や積善山遺跡に比較すれば、はるかに標高は低いものの、海を見下ろす立地は同じである。この占地は、凹線文期の中期末葉において浜堤上の生活址が全く発見されないことと密接な関係があると考えられる。

古墳時代の遺跡としては、福良湾の北にある丘陵上に文四郎（福良）古墳が古くから知られていた〔弓削町役場1986〕。1970（昭和45）年10月、農道工事中に花崗岩製の箱式石棺墓が発見され、棺内から頭蓋骨片や骨盤片のほか、長さ約1mの鉄刀が出土した。その後、人骨について調査した結果、成年男子であることがわかり〔田中2014〕、さらに頭蓋骨から抽出したコラーゲンを試料として自然科学的な年代測定を実施した結果、3世紀中葉の年代が得られた〔今治市村上水軍博物館編2014〕。この年代は、宮ノ浦遺跡で製塩が盛んに行われた時期に相当し、生産活動が活発な段階において箱式石棺に埋葬された佐島の有力者の存在を垣間見ることができる。そして脚台式製塩土器が使用されたこの時期の製塩遺跡として、岩城島の石風呂海岸遺跡、赤石遺跡、長江遺跡〔有馬編2018〕、赤穂根島の大三谷遺跡、竹ノ浦遺跡、大手原遺跡、初浜遺跡が知られており〔野口編1992〕、上島諸島各地で製塩が行われていたことがわかる。

製塩活動が一旦低調となる古墳時代中期には、瀬戸内各地の島に祭祀の痕跡がのこされているが、上島諸島では魚島の大木遺跡がそれを代表する著名な遺跡である〔長井1975〕。稀少なコップ形製塩土器、ミニチュア土器、小型仿製鏡、鉄鋌を含む鉄器類が採集されている。鉄器類は時を経て再

2. 歴史的環境



図3 佐島遺跡分布図

1. 宮ノ浦遺跡 2. 江尻遺跡 3. 百山遺跡 4. 文四郎(福良)古墳 5. 縄文土器採集地点 6. 佐島八幡山城跡

整理され、鉄鋌に複数の種類があることや小型鉄剣の存在が判明した。なおこのような製塩土器を伴う祭祀遺跡が脚台式の段階、つまり前期にまで遡ることを豊島明神遺跡の発掘調査が示している〔村上編2016〕。

古墳時代後期をむかえると、製塩は小規模ではあるが復調をみせ、宮ノ浦遺跡や岩城島の石風呂海岸遺跡、船越遺跡にその痕跡がのこされている。また後期後半から終末期にかけては、上島諸島でも横穴式石室を主体部とする古墳が築造されており、弓削島下弓削の久司山古墳群、上弓削の小狩尾古墳が知られている〔弓削町役場1986〕。生名島東岸にも、完形の須恵器や土師器が今に伝わる厳島古墳があった〔生名村誌編纂委員会編2004〕。現在までのところ、佐島では後期古墳の存在は知られていない。製塩活動が各島で行われたのに対し、古墳築造を可能とした島は限定される。

宮ノ浦遺跡では、これまでの発掘調査で、奈良時代から平安時代にかけての土器、陶磁器が出土している。I区N15グリッドでは、鍛冶滓、鍛造剥片という鍛冶関連遺物がまとまって出土し、うち1点の鍛冶滓に噛み込んだ木炭を年代測定した結果、calAD779～984の年代が得られた〔大澤・パリノ・サーヴェイ株式会社2021〕。この時期、海に面した浜堤上に、鍛冶屋を備えた漁村の存在が想定できるようになった。さらに第12次調査の5・18トレンチにおいて、古代製塩土器が発見されたことにより、古代の製塩址という性格もこの遺跡に付加されることとなった〔福本2023〕。

古代の様相を礎に、海との関わりは中世をむかえてますます強くなっていくものと考えられる。とくに京都の東寺領荘園であった弓削島は、年貢として塩を納めた「塩の荘園」として知られている〔清水1975〕。2015（平成27）年10月、世界の記憶（ユネスコ記憶遺産）に登録された「東寺百合文書」には、弓削島荘に関する記録が400通ほど残されている。2016（平成28）年より始まった弓削島荘総合調査の一環で、この文書にも登場する高浜八幡神社や大田林で発掘調査が行われ、当時の塩田の浜床が確認され〔有馬・曾根編2020、村上編2020〕、塩田の構造や景観も捉えやすくなったといえよう。

さて東寺百合文書では、「弓削御庄」の名が1150（久安6）年の記録にはじめて現れるが、それと時をほぼ同じくする1158（保元3）年の石清水八幡宮の文書によれば、佐島は生名島、岩城島、味酒郷（愛媛県松山市）とともに京都の石清水八幡宮領荘園となっている。宮ノ浦遺跡ではまさにその時期の土器・陶磁器類が大量に出土し、また第9次発掘調査では鹹水溜めの機能が想定される槽状遺構も発見された〔有馬・青木編2021〕。この時期の宮ノ浦遺跡が単なる漁村、海村ではなく、荘園に関わる製塩という機能を有していた可能性はきわめて高いといえよう。

14世紀をむかえると、弓削島では小早川氏や小泉氏の出現により東寺の荘園経営が困難になる。その後、「村上海賊」で知られる村上氏の出現により、各島に海城が築城されることとなる。佐島では、現在八幡神社の社殿がある佐島八幡山城跡が中世城館跡とされている。

（鄭 宗鎬）

3. 旧石器時代～縄文時代の周辺遺跡

佐島にある旧石器時代の百山遺跡、縄文土器を出土した宮ノ浦遺跡を評価するために、芸予諸島から高縄半島にかけて分布する旧石器時代、縄文時代の遺跡について概観しておきたい。

佐島に隣接する島々でも旧石器が採集されており、弓削島の弓削鯨遺跡、生名島の立石山遺跡、津波島ではナイフ形石器が採集されている〔長井2008〕。遺跡はいずれも百山遺跡と同様、海を眼下におく丘陵上にあり、当時における居住域の特徴を示している。津波島の南西に位置する今治市伯方島の金ヶ崎遺跡も芸予諸島の旧石器時代の遺跡として著名であり、サヌカイト、頁岩、チャート製のナイフ形石器を中心とする石器群が出土している。

続く縄文時代は、芸予諸島から高縄半島にかけて、海岸線に沿って多数の遺跡が分布している（図4）。今治市波方町にある江口貝塚の発掘を機に、入り江ごとに個別に定着するパターンが指摘され、縄文前期以降の瀬戸内島嶼部の生活形態を反映するものと評価された〔宮本1991〕。ただし、中期には季節的な集落経営を反映して集落の数が減少し、後・晩期になって定住化が促進されるという〔宮本1994〕。上島諸島でも、佐島では宮ノ浦遺跡、福良海岸、弓削島では高浜海岸、岩城島では小漕遺跡、長江遺跡、船越遺跡、石風呂海岸遺跡、赤穂根島では竹ノ浦遺跡、大三谷遺跡、大手原遺跡、そして豊島では豊島明神遺跡で後期の土器が発掘ないしは採集されており、上述の指摘を反映



図4 芸予諸島における縄文時代遺跡分布図

している。

この状況に対し、縄文早期以前の遺跡は数が限られている。押型文土器が出土した遺跡としては、今治市の伯方島西岸を見下ろす台地上にあった叶浦B遺跡が挙げられる。この遺跡では黄島式から高山寺式にいたる押型文土器、そして厚手無文土器、条痕文土器が出土した〔井原・野口編1980〕。また上島諸島では、佐島の隣島、生名島南岸の谷にある稲浦遺跡で高山寺式の押型文土器が採集されている〔村上編2014〕。草創期については、有舌尖頭器が採集された遺跡が点在している。北から岩城島の小漕遺跡、大三島の深山七衛門遺跡、深山大平遺跡、伯方島の熊口遺跡、そして今治市の別所定地遺跡が挙げられる〔多田1997〕。草創期と早期の押型文土器段階との間に関しては、現在のところ考古学的な知見がほとんどないという現状にある。

(鄭 宗鎬)

4. 古代製塩の動向

宮ノ浦遺跡では第12次調査において古代製塩土器が出土したことから、古代製塩址としての遺跡の評価が必要である。愛媛県東予地域と広島県備後地域、そしてその間をつなぐ芸予諸島では、古代の製塩土器を出土する遺跡が点在している。遺跡は内陸部でも認められるものの、陸地部、島嶼



図5 芸予諸島における古代製塩土器出土遺跡分布図

4. 古代製塩の動向

部の沿岸地域にその多くが分布している（図5）。

宮ノ浦遺跡に隣接する例としては、上島町弓削島東側の海浜部に位置する浜都遺跡があげられる〔長井2008〕。また、大三島の上浦町に位置し、旧海浜部に立地した多々羅製塩遺跡は宮ノ浦遺跡と同様、古墳時代から製塩活動の痕跡をのこしている。この遺跡で出土した7世紀後半～8世紀ごろの製塩土器は、器壁が薄く、尖底という特徴から「倉浦式土器」と報告されている〔柴田・相原編1994〕。さらに芸予諸島の南部に連なる島々には、今治市馬島亀ヶ浦遺跡、糸大谷遺跡などがある。馬島亀ヶ浦遺跡では、焼塩に関わる遺構は発見されていないものの、製塩土器や瓦、須恵器の出土分布状況から、浜堤上で焼塩が行われ、その付近に瓦葺き建物の関連施設が存在した可能性が指摘されている〔谷若ほか編1999〕。また、煎熬容器の出土を欠くものの煎熬から焼塩工程までの一貫した塩作りが行われ、その背景には郡衙や国府との関係が想定されている〔愛媛県埋蔵文化財センター編 2017〕。糸大谷遺跡では、多々羅製塩遺跡での製塩土器分類でⅥ－2類に位置付けられる製塩土器が出土した〔塩見1996〕。

また今治平野や道前平野を中心に古代製塩土器の出土例が報告されている。今治市四村額ヶ内遺跡では県内唯一の完形の製塩土器が2点出土しており、全体形が略円錐形を呈することが判明した。隣接する四村日本遺跡でも同じ形態に復元される製塩土器片が出土している。

一方、中予地域でもわずかであるが製塩土器の報告があり、伊予市旗屋遺跡Ⅱの発掘調査出土資料や伊方町野坂貝塚表採資料のなかに六連島式土器があることがわかっている〔池尻ほか編2018、石貫2023〕。六連島式土器とは山口県から北部九州地域にかけて分布する型作り成形の製塩土器であり、全体の器形は円筒形を呈し、大型で、内面に布目痕をのこすものが多い〔市橋1982、東2004〕。県内における六連島式土器出土例は現在のところ、この2遺跡のみである。

広島県側では、広島大学考古学研究室によって調査された大崎上島において複数の遺跡から古代の製塩土器が出土している。さらに、呉市蒲刈町の沖浦遺跡や、廿日市市の大川浦遺跡においても同研究室による踏査で古代の製塩土器が採集されており、これらの成果をふまえ、古墳時代と奈良時代の2時期に土器製塩の最盛期をむかえるといわれる〔古瀬編1981〕。また、府中町下岡田遺跡や大崎上島諸島の遺跡から出土した製塩土器は古瀬清秀氏により「六連島式土器」と評価されている〔古瀬1994〕。

（福本佳織）

【参考文献】

- 有馬啓介編2018『上島町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ－平成25～27年度上島町内遺跡発掘調査等事業報告書－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・曾根大地編2020『弓削島庄総合調査報告書』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 生名村史編集委員会編2004『生名村誌』生名村

- 池尻伸吾・石貫睦子・多田仁・土井光一郎・中野邦子編2018『旗屋遺跡Ⅱ 上三谷篠田・鶴吉遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書 第194集、愛媛県埋蔵文化財センター
- 石貫弘泰 2023「愛媛県伊方町野坂貝塚出土の焼塩土器－布目痕の観察を軸に－」『伊方町見郷土館研究紀要』第7号、町見郷土館
- 市橋重喜 1982「第五章 調査の記録－遺物Ⅱ（生産用具）－1 製塩土器」『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集、福岡市教育委員会
- 井原忠昭・野口光比古編1980「叶浦B遺跡」『大三島・伯方島本四連絡道路（一般国道317号）埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）』埋蔵文化財調査報告書第3集、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 今治市村上水軍博物館編2014『芸予諸島・海民文化の考古学』平成26年度今治市村上水軍博物館開館10周年記念特別展、今治市村上水軍博物館
- 愛媛県史編さん委員会編1982『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県
- 愛媛県埋蔵文化財センター編2017『伊予の古代－未知なる伊予国府の探求に向けて－』愛媛県埋蔵文化センター
- 大澤正己・バリノ・サーヴェイ株式会社 2021「宮ノ浦遺跡第8次発掘調査Ⅰ区出土鉄滓の分析」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 塩見靖彦 1996「Ⅰ 製塩土器」『糸大谷遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第63集、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌兄・相原清志編1994『多々羅製塩遺跡 多々羅大橋関連埋蔵文化財発掘調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書第52集、愛媛県埋蔵文化財センター
- 清水三男 1975「塩の莊園「伊予国弓削島」『中世莊園の基礎構造』清水三男著作集第3巻、校倉書房
- 多田 仁 1997「中四国における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器群」『中・四国の縄文時代草創期の土器と石器組成』第8回中四国縄文研究会
- 多田 仁 1997「愛媛の有舌尖頭器」『愛媛考古学』14、愛媛考古学会
- 田中良之 2014「人骨から見えてくる原始古代」『弥生・古墳時代の芸予諸島：環境と人間＜予稿集＞』愛媛大学考古学研究室第14回公開シンポジウム・今治市村上水軍博物館開館10周年記念講演会、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 谷若倫郎・楠真依子・真鍋昭文編1999『馬島亀ヶ浦遺跡 馬島ハゼヶ浦遺跡－来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集－』埋蔵文化財発掘調査報告書第79集、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 長井數秋 1975「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井數秋 2008「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』第33号、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井數秋・土居睦子 1979「愛媛県立石山遺跡発掘調査報告」『愛媛の文化』第19号、愛媛県文化財保護協会
- 野口光比古編1992『赤穂根島埋蔵文化財試掘調査報告書』岩城村教育委員会
- 東 哲志 2004「六連島式土器小考－長門国（山口県西部域）出土例を中心に－」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会
- 福本佳織 2023「愛媛県内における古代の製塩土器出土遺跡について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 福本佳織 2023「上島町宮ノ浦遺跡における古代の塩生産」『愛媛大学法文学部考古学研究室 第19回シンポジウム 古代の塩の生産と消費－中央と地方－』愛媛大学考古学研究室
- 古瀬清秀 1981「考古学班調査報告 大崎上島諸島における製塩遺跡について」『内海文化研究紀要』9号、広島大学文学部内海文化研究室
- 古瀬清秀 1994「広島県」『日本土器製塩研究』青木書店
- 宮本一夫 1991「江口貝塚第1次調査の成果と課題」『江口貝塚第1次調査』愛媛大学法文学部考古学研究報告第1冊、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 宮本一夫 1994「江口貝塚の調査成果と瀬戸内の縄文文化」『江口貝塚Ⅱ－縄文後晩期編－』愛媛大学法文学部考古学研究室報告第3冊、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 村上恭通編2014『上島町における動産的文化財の調査・整理協力プロジェクト』2013（平成25）年愛媛大学法文学部人文系学

4. 古代製塩の動向

部長裁量経費（地域プロジェクト）報告書、愛媛大学法文学部考古学研究室

村上恭通編2016『愛媛県越智郡上島町豊島明神遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会

村上恭通編2020『東寺領荘園（新見荘・弓削荘）の考古学的基礎研究』愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター

パリノ・サーヴェイ株式会社 2018「宮ノ浦遺跡ボーリング調査および分析（概要）」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

弓削町役場 1986『弓削町誌』

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査の経緯と目的

2011年8月に着手した宮ノ浦遺跡の発掘調査は、当初西側のⅠ区から開始し、古墳時代前期の製塩址を中心に、縄文時代から現代にいたる人々の生活の痕跡を明らかにしてきた。このⅠ区の発掘は2018年の第8次調査で終了し〔有馬・品川編2019〕、続いて、遺跡の東への広がりを確認するために元見山に近い平坦地を第7次調査からⅡ区として発掘を開始した。

Ⅱ区では、まず南北の基準線に沿って1～8トレンチを設定した。発掘してまもなくⅡ区の層順がⅠ区のそれと異なり、分厚く形成されたクロスナ層が古代～中世に属することが判明した。また5トレンチでは、クロスナ層の上面から中層にかけて被熱礫を含む亜円礫、円礫が広く、大量に検出され、それらに古代～中世の土器、越州窯系を含む陶磁器、土製品、鉄製品、骨角器および貝だまりがともなうことを確認した。5トレンチの礫群の性格が十分につかめないまま、第8次調査では調査を西に展開したところ、礫や灰白色粘土が包含層中に散在する状況を確認し、さらに第9次調査の10、15トレンチで内壁に灰白色粘土を貼った土坑が各1基検出され、槽状遺構とした。その時期は相伴土器から12世紀を中心とし、機能としては鹹水溜めを想定した。また各トレンチの北に配した14、16トレンチでも土坑や厚い焼土の堆積が検出されており、当該期の製塩活動に関連するものと判断した。また5トレンチでは礫群検出面の下層で被熱礫からなる集石遺構が発見され、それが火床であるとともに、大量の礫が元来、集石遺構の部材であったことも想定できるようになった。

第9次調査では、宮ノ浦遺跡の発掘調査も翌2020年には10年目の節目を迎えることから、幕引きすることも考慮し、掘削のおよんでいない下層における遺構・遺物の存否を確認することとした。そして、広い面積をもつ5トレンチ東壁沿いを1m幅で掘り下げたところ、古代～中世の分厚いクロスナ層の下に、棲痕が顕著で、小型製塩土器の脚台部を含む薄い包含層があり、さらにその下層との境あたりから1㎡の範囲で縄文土器が面的に出土した。しかもその縄文土器には捺糸文、条痕文、刺突文などが認められ、押型文土器よりも古い様相をもつと判断された。また検出時、砂層と判断していた縄文土器の包含層は、5cm大の花崗岩風化礫をまばらに含んでおり、色調も黄味が強く、それまで見慣れていたいわゆる浜堤堆積物と判断するには違和感を覚えた。

このようにして、第9次調査では芸予諸島における最古級の縄文土器を検出し、さらに広い面積を調査し、その時期の物質文化を解明する課題が新たに生じた。またその包含層の供給源あるいは旧地形についても、疑問点をのこしたまま調査を終えることとなった。この地形の問題は、Ⅰ区とⅡ区の層順の相違、すなわち、Ⅱ区では表土層直下で古代～中世のクロスナ層が現れることの理由にも関連するものと推察された。そこで2020年度の第10次調査は、縄文時代早期の物質文化と包含層形成の要因ならびに旧地形の復元を目的に実施することとした。ただし、第10次調査では、既往のトレンチを拡張・設定した4トレンチにおいて、上層のクロスナ層中で中世に属する複数の遺構

1. 調査の経緯と目的

が検出され、その調査に時間を要した。またコロナ禍で発掘調査参加者が限られていたことも重なり、十分な時間をかけて縄文土器包含層を精査することができなかった。

翌2021年度に実施した第11次調査では、4トレンチの継続調査と4トレンチの南に接して17トレンチを設定し、掘り下げを開始した。4トレンチでは前年度発見された中世の遺構を完掘し、東壁沿いの一部をのこして、縄文時代の包含層を掘り下げた。その結果、この包含層が上下二層（Ⅳ－1、2層）に分かれることを確認し、包含層自体も浜堤堆積物ではなく、花崗岩の風化土層（パイラン土層）であることを明らかにした。さらにその包含層の下には、無遺物層をはさんで花崗岩の岩盤を検出できた。このことによりⅡ区の地下には、花崗岩を岩体とする元見山から西にのびる埋没丘陵が存在することがほぼ確実になった。一方、17トレンチでは古墳時代の遺物包含層であるⅢ層を一部確認したところで発掘終了せざるを得なかった。第11次調査も前年度同様、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、調査に参加する学生の数を制限する必要があったためである。

そして昨年度の第12次調査は、新型コロナウイルス感染拡大前の調査体制とスケジュールで発掘を進めることができた。主たる目的を縄文時代の包含層であるⅣ層の精査とし、はじめて縄文時代の包含層を捉えた5トレンチ、前年度発掘を開始した17トレンチに加え、5トレンチの南側、17トレンチの西側に接して18トレンチを設定した。ところが5トレンチではⅡ層に伴ってカマド状遺構の基底部分を検出されたことから、その精査に時間を要し、トレンチ東側に沿った1m幅を深掘りし、Ⅳ層を調査することとなった。その結果、Ⅳ層が北に向けて大きく傾斜することが判明し、Ⅳ－1層から前期～後期を主体とする縄文土器、そしてⅣ－2層の上部から撚糸文土器、下部から無文土器が出土することを確認した。17トレンチはⅢ層での古墳時代包含層の調査に時間を要し、Ⅳ層は1層で縄文前期～後期の土器片を検出できたものの、先行的に掘り下げた北半分の範囲では2層での土器の検出はみられなかった。新たに設置した18トレンチでは、Ⅱ層中で完存する人骨1体を収めた鎌倉時代初期の土坑墓が発見され、その検出、記録、人骨の取り上げに時間がかかった。また18トレンチ北部から5トレンチ南部にかけての範囲で、これまでの調査で確認されていなかった古代の製塩土器を含む層（Ⅱ－5層）が新たに検出され、精査を行った。そのため18トレンチではⅢ層上面を確認して調査を終えることとなった。第12次調査は、結果的に5トレンチ東壁沿いの先行トレンチでのみⅣ－2層の遺物を検出したにとどまり、当初設定した目的を達成できず、次の課題としてのこすこととなった。

したがって第13次調査では、18トレンチから5トレンチにかけて発見された古代製塩土器を含む包含層、Ⅱ－5層の西への広がりや縄文時代の包含層であるⅣ層、とりわけⅣ－2層における遺物の出土状況とその特徴を明らかにすることを目的とした。

（村上恭通）

2. 調査の体制

宮ノ浦遺跡の第13次発掘調査は愛媛大学考古学研究室と上島町教育委員会が協力して実施した。

その実施体制は次の通りである。

事業主体：上島町

調査主体：上島町教育委員会

発掘調査担当：愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）、有馬啓介（上島町教育委員会）

発掘調査の参加者は次の通りである。

有馬啓介、曾根大地（上島町教育委員会教育課）、村上恭通（愛媛大学教授）、笹田朋孝（同大学准教授）、辻康男（株式会社パレオ・ラボ）、馬赤嬰（愛媛大学大学院博士課程3年生）、ブズレン・サミ、松澤樹生（同修士課程2年生）、伴井嘉正、福本佳織、益田千遥（愛媛大学4年生）、江本晃季（同3年生）、朝日岳斗、植田知也、藤原碧生（同2年生）、青木聡志（愛媛県埋蔵文化財センター）、安藤公雄（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）、谷若倫郎（瀬戸内海考古学研究会）、国安登

なお、愛媛大学社会共創学部教育カリキュラムの一環で、崎山きよら、西川ひなの（愛媛大学3年生）、秋川莉央、渡邊あみ（同2年生）が参画した。

（村上恭通）

3. 調査の経過

第13次発掘調査は2023年8月2日～17日の期間に発掘調査を実施し、18日に調査を終了した。この調査では、4トレンチ、5トレンチで確認された縄文時代包含層であるⅣ層の広がりを確認し、とくに下層のⅣ－2層から出土する早期の土器様相を明らかにすることを目的とした。そのため第11次調査で着手した17トレンチ、第12次調査で着手した18トレンチを継続発掘し、第8次調査で発掘した12トレンチを拡張して調査区を新たに設定し、掘り下げを開始した。

12トレンチは、第8次調査のⅡ－2層で確認された礫群を除去しながら掘り下げた。Ⅱ層で4基の遺構が検出され、トレンチ東北部から被熱礫群が確認された2号遺構を除くとすべてピットであった。Ⅳ－1層では中期、後期を主体とする縄文土器片が出土し、Ⅳ－2層では出土量が少なくなるものの上部で燃糸文土器、そして最下部で刺突文土器を検出した。その後、トレンチの東側に先行トレンチを設定してⅣ－4層まで掘り下げ、湧水のために標高1.05mのレベルで発掘を中止した。

17トレンチでは、第12次調査においてトレンチ北壁沿いに設定した幅1mの先行トレンチで、Ⅳ－2層上面が確認されていた。今年度の調査は南側の幅1mを掘り下げ、トレンチ全体でⅣ－2層上面を検出した。その後、トレンチ北壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定し、Ⅳ－2層を掘り下げ、遺物の出土がみられないことを確認し、標高1.27mのレベルで発掘を中止した。

18トレンチは、Ⅲ層、Ⅳ層と順次掘り下げ、Ⅳ層で縄文土器をトレンチ全面にわたって検出し、その出土状況を記録した。Ⅳ－2層までを完掘したのち、トレンチの北東部に幅50cmの先行トレンチを設定してⅣ－4層まで掘り下げ、遺物が出土しないことを確認し、湧水もあって標高1.50m

3. 調査の経過



写真1 発掘調査風景



写真2 現地説明会風景

のレベルで発掘を中止した。

第13次調査では、12、17、18トレンチにおいて縄文時代の包含層であるⅣ層の広がりを確認することができた。Ⅳ－2層の土器出土量は東端の17トレンチで少なく、5トレンチ南に接する18トレンチから12トレンチにかけて増加する傾向をつかむことができた。とくに12トレンチでは、本層上部における撚糸文土器、最下部の刺突文土器の出土状況を確実に押さえることができ、Ⅳ－2層に含まれる縄文土器に新たな評価を加えるとともに、発掘調査の目的の達成にも寄与した。

なお8月12日に現地説明会を実施し、上島町内外から60名の参加者を得た。

(鄭 宗鎬)

謝 辞

宮ノ浦遺跡第13次調査に際して調査地の地権者である山下敏久氏のご理解とご協力があったはじめて可能となりました。心から感謝いたします。

日常生活においては、村上知貴氏、村上律子氏、村上友美氏、NPO法人弓削の荘のみなさまに格別なご配慮とご支援を頂戴いたしました。

また、下記の皆さまには、宮ノ浦遺跡に足をお運びいただき、ご指導とご支援を頂戴しました。心より感謝申し上げます（敬称略）。岩崎郁実、岩崎志保、小野隼弥、尾野善裕、金田明大、亀澤一平、藏本 諭、栗林誠治、佐藤直人、篠原年克、柴田圭子、柴田昌児、下條信行、神 啓崇、神野 恵、菅波正人、鈴木康之、田中 謙、長井謙治、丹羽崇史、畑守泰子、比佐陽一郎、福永将大、藤田一希、古江稚和、榎林啓介、松田凌馬、松葉竜司、柳本照男、山崎純男、吉田正広、若杉智宏
(村上恭通)

【参考文献】

有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

第3章 発掘調査成果

1. 調査区の設定

現在の汀線や集落を西南西～東北東に走る生活道路を、Ⅱ区を調査していく上で基本となる軸と考えて、道路上にポイントを設置し、それに直交するラインを調査予定の宅地跡に設定した（図6・7）。この直交するラインを南北基準線とし、以下のように発掘区を設定した。この南北基準線は、真北から西に22度ずれている。

第13次調査では、第12次調査の成果をふまえて、12トレンチと17トレンチ、そして18トレンチの調査を実施した。12トレンチは第8次調査の発掘区を拡幅して実施した。17トレンチと18トレンチは第12次調査と同じ範囲で設定され、それぞれ発掘を行った。また、1トレンチと3トレンチを掘り返して、土層観察を実施した。

以下、Ⅱ区の調査成果の概要について報告したい。なお、各調査区における土層の注記はいずれもアラビア数字で記している。このうち調査区間で共通する土層が確認されている。共通する土層についてはローマ数字で記載しており、Ⅰ層が近現代の土層、Ⅱ層が古代～中世の土層（おもに古代末～中世初頭）、Ⅲ層が弥生～古墳時代（おもに古墳時代前期）、Ⅳ層が縄文時代の土層である。

（笹田朋孝）

2. 各トレンチの成果

（1）12トレンチ（図8）

第12次調査において、18トレンチ北部で検出された古代製塩土器を含むⅡ－5層と、縄文土器を包含するⅣ層の広がりを確認するために発掘したトレンチである。第8次調査で設定したトレンチは1m×2mであったが、それを拡張し、当時の発掘停止面であるⅡ層からさらに掘り下げた。地表から確認される攪乱坑を避けて設定したため、最終的には南北2.37m、東西2.02mとなった。

土層は表土を含め、4つに分層され、Ⅲ層を除き各層は細分される。Ⅰ層は表土であり、その層厚は20～50cmを測り、Ⅰa層、Ⅰb層に分層される。Ⅰa層はにぶい黄褐色を呈し、細礫～極粗粒砂を含んだ粗粒砂を主体とする。Ⅰb層は暗赤褐色を呈し、粗粒砂主体である。東壁ではⅠa層～Ⅱ－1層にかけて攪乱坑が確認された。Ⅱ層は5層に分かれ、Ⅱ－1層は黒褐色を呈し、小礫～中礫大の角礫を含む粗粒砂を主体としており、層厚は10～20cmである。Ⅱ－2層は黒褐色を呈し、細粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。層厚は20～30cmを測る。貝類を多く含んでおり、巻貝はほぼ完形であるのに対し、二枚貝はほとんどが破碎している。Ⅱ－3層は黒褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、層厚は5～15cmを測る。Ⅱ－4層はにぶい黄褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂主体である。層厚は5～20cmである。本層からは製塩土器が多量に出土しており、とくにⅡ－

2. 各トレンチの成果

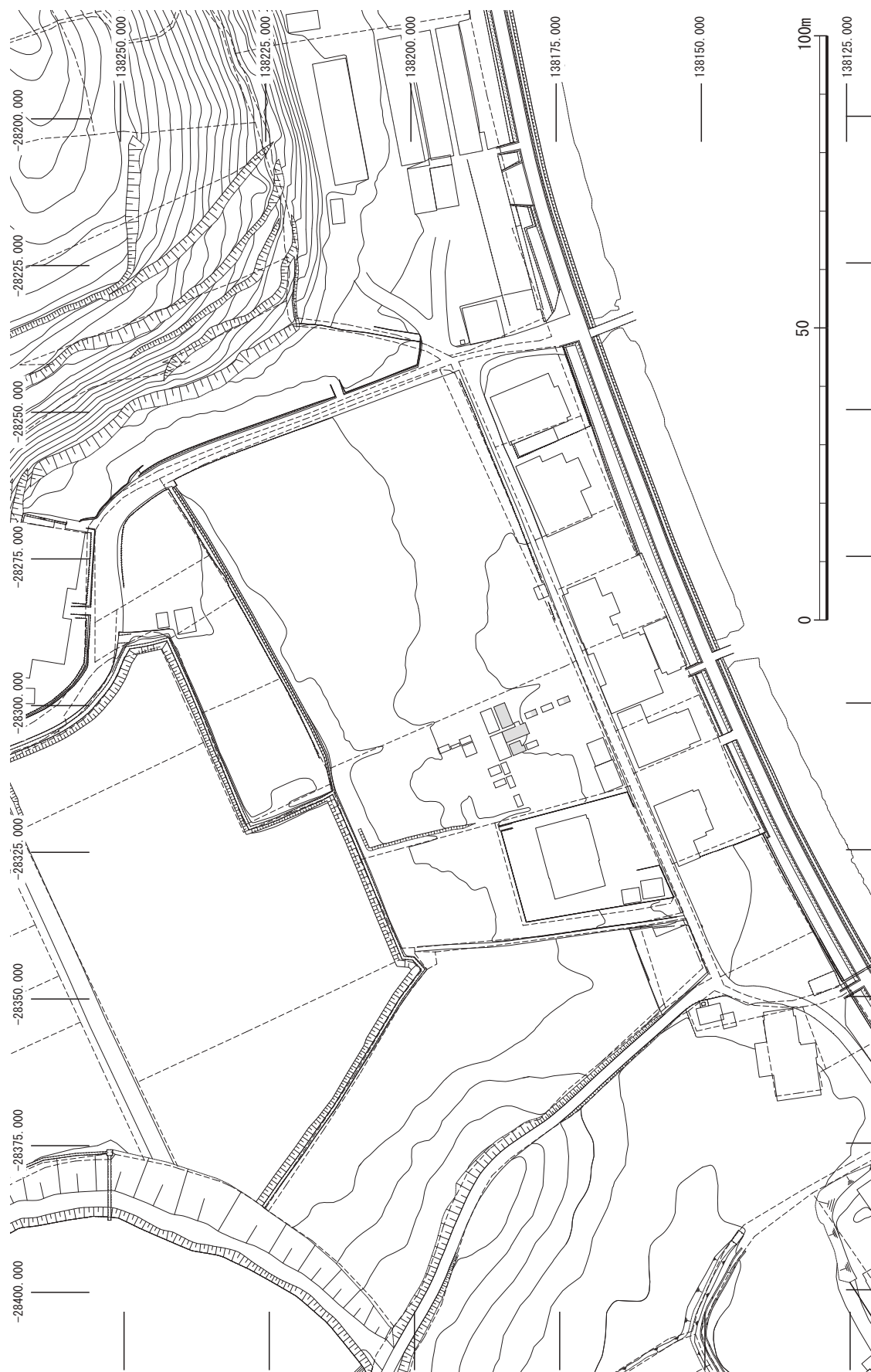


図6 II区第13次調査地点（図中の網掛け部分）

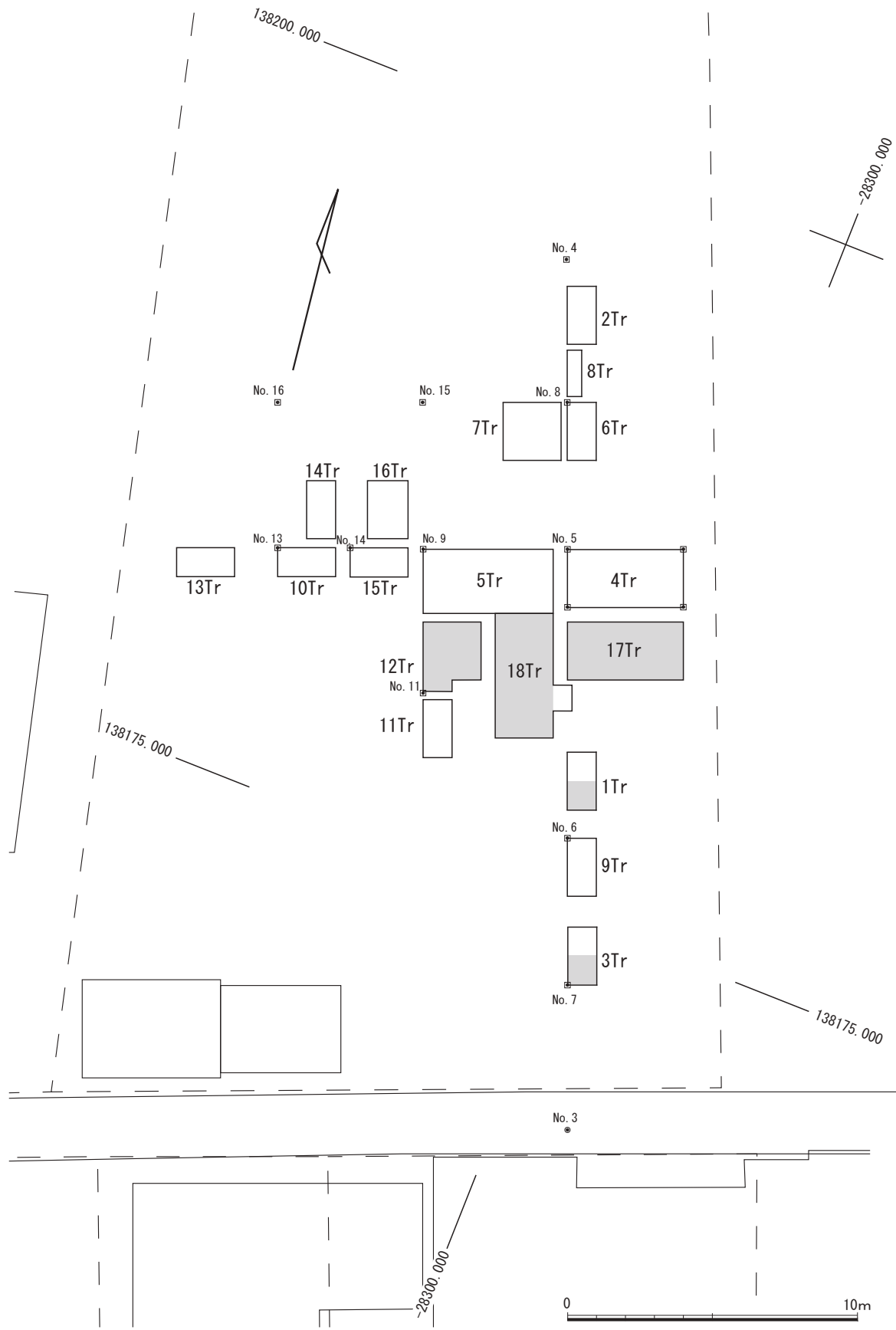


図7 II区トレンチ配置図（網掛け部分を調査）

2. 各トレンチの成果

4層ではトレンチ北側に偏在する傾向がみられた。そして第12次調査において18トレンチで検出されたⅡ－5層は確認されず、Ⅱ－6層が調査区の北から西にかけて検出された。本層は今回の調査ではじめて確認された包含層であり、古墳時代から古代にかけての遺物が出土した。黒褐色を呈し、細粒砂を含む中粒砂を主体とする。層厚は5～15cmを測り、やや赤みを帯びている。Ⅲ層は明黄褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、層厚は10～15cmである。本層では脚台式製塩土器の小片が多量に出土しており、とくに検出面から上層部にかけて多く含まれている。脚台式製塩土器の破片は上層のⅡ－4層でも確認された。Ⅳ層は4層に分かれ、いずれも花崗岩の風化砂層である。Ⅳ－1層は明黄褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とし、層厚3～30cmである。Ⅳ－2層は明黄褐色を呈し、中粒砂を多く含む粗粒砂主体である。層厚は9～24cmを測る。Ⅳ層は北へ傾斜しているため、北側で厚くなっており、5トレンチでの所見と整合している。Ⅳ－1層では大小の縄文土器片がトレンチ全域で出土し、Ⅳ－2層では出土量が激減し、破片も小さくなる。Ⅳ－2層の上部では標高1.48mで撚糸文土器が出土し、下部の標高1.45mで刺突文土器が出土した。Ⅳ－3層はにぶい黄橙色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂主体である。Ⅳ－4層は褐色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂主体である。Ⅳ－3層以下は無遺物層である。

各層の主な出土遺物の概要は以下の通りである。Ⅱ－1層では土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、白磁、移動式カマド、土錘、丸瓦、Ⅱ－2層では脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、移動式カマド、土錘、鉄製釣針、韃羽口、Ⅱ－3層では脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、黒色土器、移動式カマド、Ⅱ－4層では古式土師器、脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、移動式カマド、鉄塊、Ⅱ－6層では脚台式製塩土器、土師質土器、黒色土器、移動式カマド、Ⅲ層では弥生土器、脚台式製塩土器、製塩土器、土師質土器、須恵器、移動式カマド、鉄片、Ⅳ層では縄文土器、打製石鏃、磨製石斧、剥片、チップが出土した。

1号遺構

トレンチ北西隅に位置する土坑であり、Ⅱ－2層上面で検出された。不整円形を呈し、東西方向に長い。全長81cm、幅は最大で18cm、最小で2cmを測る。検出面から土坑底までは約20cmであり、覆土には脚台式製塩土器や、スガイやウミニナなどの貝が含まれていた。

2号遺構

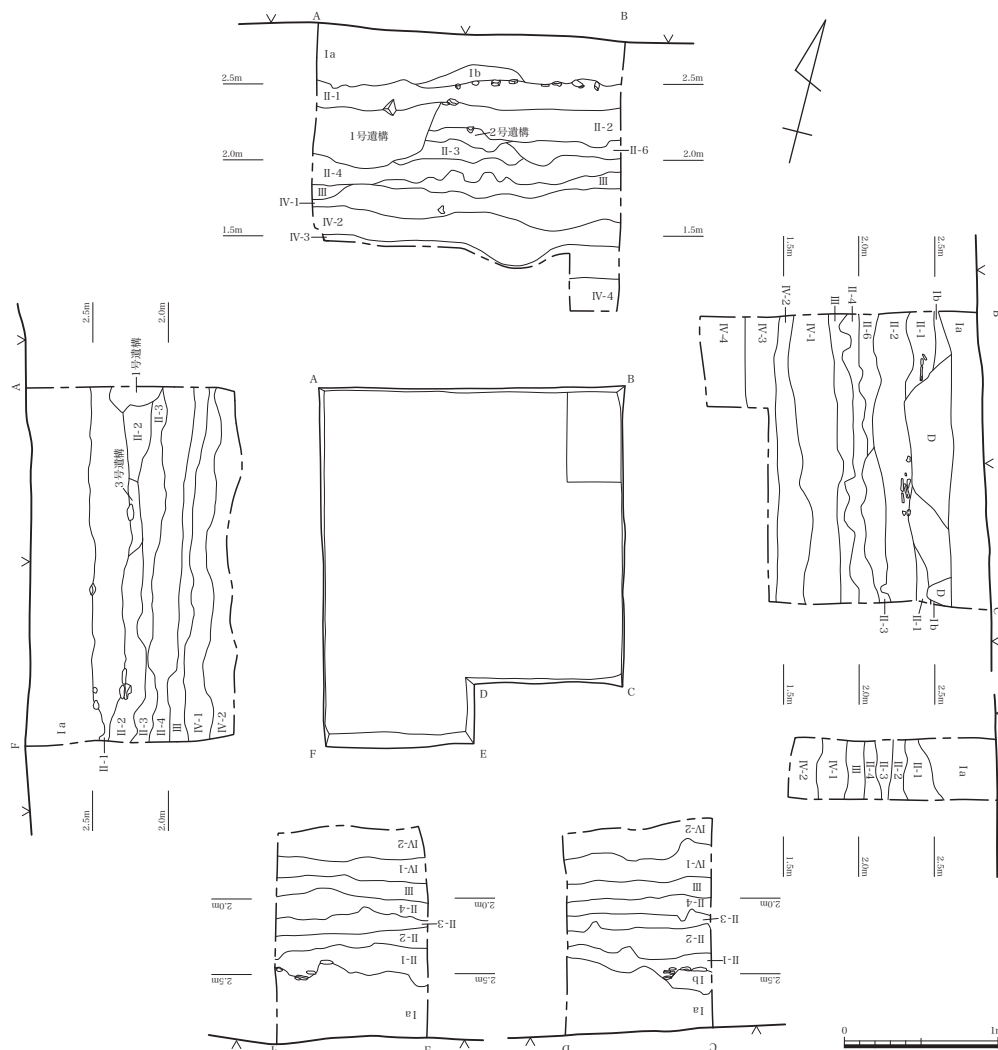
調査区北東部で検出した礫群であり、Ⅱ－2層で検出された。1～20cm程度の礫が南北50cm、東西80cmの範囲に集中しており、礫はほとんどが被熱し、その大半は平坦面を上に向けている。中世の土師質土器やスガイ、ウミニナ、カキなどの貝、獣骨が出土した。

3号遺構

調査区西壁中央部で検出したピットであり、Ⅱ－2層上面で検出された。平面形は楕円形を呈する。南北約75cm、東西約50cmを測り、調査区西側につづく。覆土は細粒砂主体で黒色を呈し、貝が出土している。

4号遺構

調査区東側中央部に位置するピットであり、Ⅱ-1層で検出された。直径約60cmの円形で、深さは最大で40cmである。ピット内の中部から底部にかけて5～15cmの被熱礫が検出されており、柱の根固め石の可能性が考えられる。覆土は3つに分層され、1層は黒褐色を呈し、極粗粒砂、粗粒砂を含む中粒砂主体で、しまりがある。2層は黒褐色を呈し、極粗粒砂、粗粒砂を含む中粒砂主体である。しまりはない。3層は黒褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂主体である。Ⅲ層由来の黄色いブ



Ia層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂主体。細礫～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性なし。Ib層：暗赤褐色（5YR3/3）粗粒砂主体。小礫～中礫（円礫・亜角礫）を含む。しまりあり。粘性ややあり。Ⅱ-1層：黒褐色（2.5Y3/1）粗粒砂主体。小礫～中礫（角礫）を含む。しまり、粘性あり。Ⅱ-2層：黒褐色（10YR2/2）中粒砂主体。細粒砂を多く含む。しまりあり。粘性ややあり。10cm程度の角礫、亜円礫、円礫が多面的に広がる。貝類を含む。Ⅱ-3層：黒褐色（10YR2/3）中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまり、粘性ややあり。Ⅱ-4層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。しまりややあり。粘性なし。棲痕あり（黒褐色10YR2/2）。Ⅱ-6層：黒褐色（10YR2/3）中粒砂主体。細粒砂を含む。しまり強い。粘性なし。黒色ブロックを含む。やや赤みを帯びる。Ⅲ層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまり、粘性なし。棲痕あり（暗褐色10YR3/4）。Ⅳ-1層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。しまり、粘性なし。Ⅳ-2層：明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂主体。中粒砂を多く含む。しまり、粘性なし。Ⅳ-3層：にぶい黄褐色（10YR6/3）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。Ⅳ-4層：褐色（10YR4/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を多く含む。真砂土層。D：攪乱。1号遺構：灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂主体。1～3cm程度の亜円礫～円礫を多量に含む。しまりあり。粘性やや強い。2号遺構：黒色（10YR1.7/1）粗粒砂主体。中粒砂・細粒砂を多量に含む。灰黄褐色ブロック（10YR4/2）を含む。しまりあり。粘性あり。3号遺構：褐灰色（7.5YR5/1）細粒砂主体。しまりあり。粘性なし。

図8 Ⅱ区12トレンチ平面図・土層図

2. 各トレンチの成果

ロックを含む。土器や移動式カマドのほか、獣骨が出土している。

(福本佳織)

出土遺物

縄文時代

縄文土器 (図9・10) 1～3、9、10はⅣ－2層、4～8、11～32、34～49はⅣ－1層、33は表土層出土品である。

1～6は外面に刺突あるいは短沈線を施す土器の口縁部片である。1、3～5は端部が肥厚しており、低い隆帯の貼り付けとも評価できる。1は端部が面取りされ、口唇部および口縁部外面には円形の刺突が3個観察される。口唇部の刺突文の間隔は6～7mm、外面の刺突文の間隔は約3mmである。破片の下縁部にくぼみの一部がわずかに認められることから、外面の刺突は2段に及ぶ可能性がある。肥厚部は幅狭い半円形で、口唇部と一体化している。胎土は4mm程度の石英粒がみられ、1mm以下の金雲母粒と赤色頁岩粒を含む。色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。2はⅣ－2層最下部の標高1.45mで検出された口縁部片である。その端部はナデ調整による平坦面をもち、口縁直下には刺突文が2段にわたり施される。刺突文は平面形が隅丸方形、断面形は略三角形であり、幅3～4mmで、刺突文の間隔は5～6mmを測る。刺突文の周囲は施文時に生じたとみられるわずかな粘土の隆起が観察される。内面はナデ調整と指頭圧痕が認められ、わずかな凹凸がみられる。厚さは4～5mmである。胎土は2mm程度の石英粒を少量含み、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒を多量に含む。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色である。3はわずかに外方に開き、端部は丸くおさまり、肥厚部は1よりも幅広い。内外面ともにナデ調整と指頭圧痕がみられる。肥厚部に円形の刺突文を施し、その上縁には刺突の際に生じた粘土の隆起がみられる。刺突文の幅は3～4mm、間隔は5mmである。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粉と雲母粉を含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。4は端部が丸くおさまり、肥厚部は低く、幅が広い。その上には縦長楕円形の刺突文が施される。刺突文の大きさは長さ約7mm、幅約5mmであり、間隔は約5mmを測る。破片の下縁部にくぼみの一部がわずかに認められることから、刺突文は2段の可能性がある。内面にはナデ調整と指頭圧痕が観察される。胎土は4mm程度の長石粒が少量みられ、1mm以下の長石粒、石英粒、雲母粒を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。5は外方に開き、端部はやや尖り気味に丸くおさまる。肥厚部は1に比べて低く、幅広い。口唇部直下には縦長楕円形の刺突文が2個みられる。その大きさは長さ約8mm、幅約3mmを測る。内面には施文原体を回転ないしは押圧したような痕跡がみられる。胎土は7mm程度の長石粒がごくわずかにみられ、2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含む。色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色である。6は左上がりの短沈線が浅く施文されたのち、端部にナデ調整が施されている。端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

7～12は撚糸文土器の破片であり、いずれも撚糸原体は無節Rと考えられる。7は縦位の撚糸が

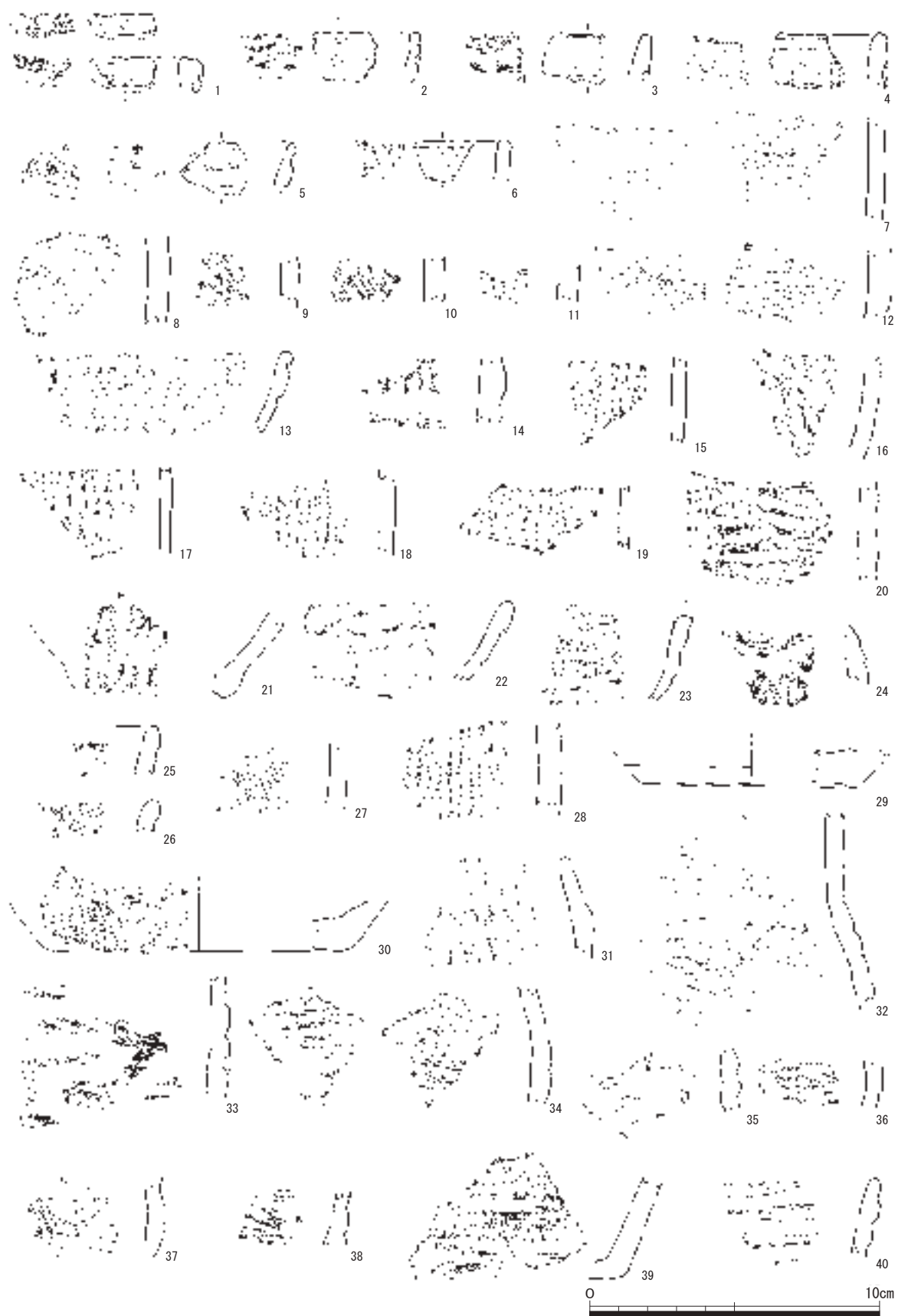


図9 II区12トレンチ出土縄文土器 1

2. 各トレンチの成果

施文され、一部が指頭圧痕によって消えている。撚糸の間隔は密で、1～2mmを測る。内面に横位の条痕が施されたのち、斜位の条痕が施される。厚さは5～6mmである。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒を含む。色調は外面がにぶい黄褐色、内面はにぶい黄橙色である。8は原体の撚りが比較的大きい斜位の撚糸文が施されており、その間隔はやや密で2～3mmである。器厚は6～8mmを測り、胎土は3mm程度の長石粒、石英粒を少量含み、1mm以下の角閃石粒、金雲母粒を少量含み。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。10は斜位の撚糸文が密に施されており、その間隔は約1mmである。器厚は7～8mmであり、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉を少量含み。色調は外面が橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。11は縦位の間隔の狭い撚糸文が施され、撚糸の間隔は約1mm、厚さは約7mmを測る。胎土は2mm程度の長石粒、石英粒を多量に含み、1mm以下の金雲母粒をわずかに含む。9、12は絡状体を引きずって条痕状の文様が施されている。9はⅣ－2層の標高1.48mで出土した。文様は斜めに施され、撚糸はほかの破片と比較してやや太く、その間隔は3～5mmである。厚さは6～7mmを測り、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒を含み、色調は外面がにぶい橙色、内面は灰黄色である。12は縦位に施文されており、撚糸の間隔は約2mmである。内面には横位の条痕ののち、斜位の条痕が施される。器厚は約8mmを測り、胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、外面の一部は褐灰色を呈する。

13は口縁部片であり、その端部はナデ調整による平坦面をもつ。半裁竹管状の施文具を用いた押引文が浅く施文され、その幅は約15mmを測る。胎土は精良で、3mm程度の長石粒、1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粉と金雲母粉を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色とにぶい褐色を呈する。14は半裁竹管状の工具で施された押引文が確認され、その幅は16mm程度である。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒が少量みられ、2mm以下の金雲母粒、赤色頁岩粒を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。器表面の摩耗が著しい。15～20は外面全体に縄文が施され、その原体は15、17、18、20が単節LR、16、19は単節RLである。20の縄文原体は節が大きく、複数回の施文が行なわれている。21は底部片であり、わずかに上げ底気味の平底で、やや内湾しながら立ち上がる。底部付近には縄文が施され、原体は単節LRである。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を含む。色調は外面が赤色と橙色、内面はにぶい黄橙色である。

22～26は口縁部片であり、23は波状口縁、22、24はキャリパー形とみられる。25、26は小片であるため、全体の形態は不明である。22は端部が肥厚しており、肥厚部に波状沈線文がみられ、続いて横位の沈線が2条施される。23～26は口縁部下に波状沈線を1条あるいは2条施し、その下に23は横位、24は縦位に、弧状沈線を施している。22、23は地文に撚糸状の文様が確認され、その原体はどちらも無節Rと考えられる。胎土はいずれも長石粒、石英粒を含み、23、25、26は金雲母粒、22、26は角閃石粉がみられる。27、28は胴部片で、いずれも撚糸が施され、その原体は撚りが大きい無節Rである。27は撚糸の間隔が3～4mmと広く、28は1～2mmと狭い。胎土はいずれも長石粒、石英粒、角閃石粉を含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

29、30は底部片である。29はわずかに上げ底気味の平底であり、器表面はやや平滑に仕上げられ

ている。胎土は4mm程度の長石粒が少量みられ、2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒と雲母粉を少量含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。30は平底であり、外面に間隔が広い斜位の撚糸文が認められる。その原体は無節Lであり、撚糸の間隔は3mm程度である。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒を多量に含み、1mm以下の金雲母粒が少量みられる。色調は外面が明黄褐色、内面は黄灰色を呈する。

31は縦位の短沈線文が施された口縁部片であり、屈曲して内傾する。短沈線文は口縁部下から2段にわたり施され、間隔は縦が5～7mm、横が4～7mmである。また横位の沈線がわずかに確認される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉、雲母粉を含み、色調は外面が橙色、内面はにぶい橙色を呈する。

32～34は胴部片である。32は幅4mmの沈線でJ字文が描かれている。地文には精緻な斜位の貝殻条痕が認められる。内面はナデ調整と外面の沈線の影響を受けて若干波打っている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉を少量含み、1mm以下の金雲母粒もみられる。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。33も沈線でJ字文が描かれており、沈線の幅は5～6mmである。内面は沈線文の影響を受けた部分が突出している。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉を多量に含み、1mm以下の赤色頁岩粒と金雲母粒を少量含む。色調は外面がにぶい橙色と橙色、内面はにぶい黄橙色がみられる。34は地文が横位の巻貝条痕で、その上に幅約3mmの沈線を横位にめぐらしている。内面には斜位の貝殻条痕が施され、指頭圧痕とナデ調整がのこる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒を含み、色調は内外面ともに明赤褐色である。

35～38は胴部片で、いずれも外面に沈線を施文したのちに縄文が部分的に施される。35は弧状沈線を3条施したのちに単節RL縄文を施している。沈線幅は5～7mmである。内面は沈線文の影響で波打っている。胎土は3mm以下の長石粒が少量みられ、1mm以下の石英粒、赤色頁岩粒、雲母粉を少量含む。色調は外面がにぶい黄色と黒色、内面は橙色である。36は弧状沈線がわずかに認められ、その幅は約5mmである。その上に縄文が認められ、その原体は単節RLである。内面は沈線の影響で突出している。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粉と雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色である。37は横位と斜位の直線的な沈線文がのこり、その間に単節RL縄文が認められる。沈線幅は約6mmであり、部分的に沈線が重複している。内面は器表面からの指頭圧痕と沈線の影響によって表面の凹凸が大きい。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。38は直線的な沈線が2条施されたのちに、単節LR縄文がわずかに施される。沈線幅は約3mmであり、35～37に比べて細い。沈線間の縄文は朦朧としており、ナデ調整によって消されている可能性がある。内面はナデ調整によってやや平滑に仕上げられている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粉と金雲母粒を含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色である。

39は平底の底部片であり、底部から外方へ開きながら立ち上がる。巻貝条痕による横位の擬縄文は、その施文の強さから器表面をわずかに波打たせている。内面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒と雲母粉を含む。色調は外面がにぶ

2. 各トレンチの成果

い黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。40は口縁部片であり、横位の3条の沈線は平行には走っていない。沈線の幅は約5mmで、間隔は2～5mmを測る。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、金雲母粒、赤色頁岩粒が少量みられる。色調は内外面ともに橙色である。

41～45は無文土器である。41は口縁部片で、復元口径は17.8cmを測る。口縁部は直線的に大きく外方へ開き、端部は肥厚し丸くおさまる。内面はナデ調整と指頭圧痕が強くのこる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒を含み、1mm以下の金雲母粒も少量みられ、色調は外面が橙色、内面はにぶい橙色を呈する。外面は著しく摩耗している。42～44は胴部片である。42は外面がナデ調整と指頭圧痕で大きく波打ち、内面は縦位の貝殻条痕が施される。器厚は約3mmと薄手である。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を少量含み、金雲母粉が多量にみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。43は斜位の貝殻条痕が施され、指頭圧痕も認められる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、1mm以下の雲母粒と赤色頁岩粒を少量含む。色調は外面がにぶい橙色、内面は明赤褐色である。44は内外面ともに横位と斜位の直線的な貝殻条痕がのこる。内面は貝殻条痕ののちに施されたナデ調整と指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、1mm以下の角閃石粒と雲母粒がみられる。色調は外面が橙色、内面はにぶい橙色を呈する。45は丸平底の底部と考えられる。内面には明瞭な指頭圧痕がみられ、底部外面は剥離している可能性がある。胎土は3mm程度の長石粒がみられ、1mm以下の石英粒、雲母粒、赤色頁岩粒を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

46は幅4～5mmを測る方向を違えた2条の斜位沈線が施され、沈線は下端で交差している。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒を含み、1mm以下の金雲母粒が少量みられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

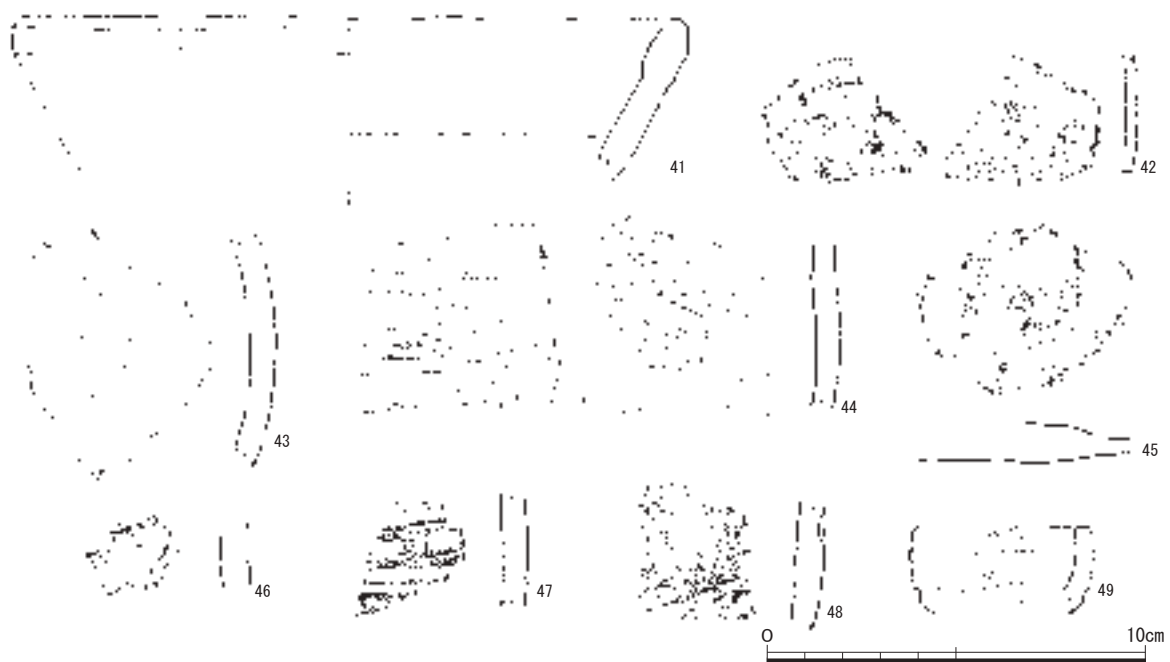


図10 II区12トレンチ出土縄文土器2

ぶい黄橙色である。47は横位の浅い沈線が施され、その幅は約4mmを測る。胎土は3mm程度の長石粒、石英粒を少量含み、1mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒がみられ、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。内外面ともに摩耗している。48は直径約9mmの円形の凹文が2つ施される。凹文の間隔は8～9mmであり、その下半には斜位の条痕が確認される。胎土は3mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、2mm以下の金雲母粒がみられる。色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。49はミニチュア土器で、復元口径4.6cmを測る。外面に3条の沈線をめぐらし、その幅は3～4mmである。胎土は精良で、3mm以下の長石粒、石英粒と金雲母粉を少量含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。

1～6については、隆帯文あるいは擬隆帯上施文の土器群〔綿貫2016〕に類似することから草創期末期～早期初頭の時期が想定される。また、7～12の撚糸文土器は早期初頭と考えられる。以上の土器については、考察編において詳述することとしたい。そして13～19は船元Ⅱ式、20、21は船元Ⅰ式～Ⅱ式、22～28は里木Ⅱ式、32～34は中津式と考えられる。したがって13～21は縄文時代中期、22～28は縄文時代中期後半、31は縄文時代中期末～後期初頭、32～34は縄文時代後期初頭、35～38は縄文時代後期初頭～中葉ごろ、39、40は縄文時代後期前半に位置付けられる。

（江本晃季）

石器（図11） 石器は打製石鏃1点、磨製石斧1点、剥片12点を検出した。またスクリーニングにより石鏃調整剥片6点（重量1.98g）、チップ2点（0.30g）を検出した。チップ1点がⅣ－2層出土である以外は全てⅣ－1層からの出土である。

打製石鏃（50） 三角形の無茎凹基鏃である。正面、裏面の先端部近くには右縁から細く深い剥離が施されている。全長1.45cm、幅1.38cmであり、厚みは最大で0.27cmを測る。安山岩製である。

磨製石斧（53） 片刃石斧の刃部片である。旧状は半円に近い弧を描く平面形を呈し、前主面は

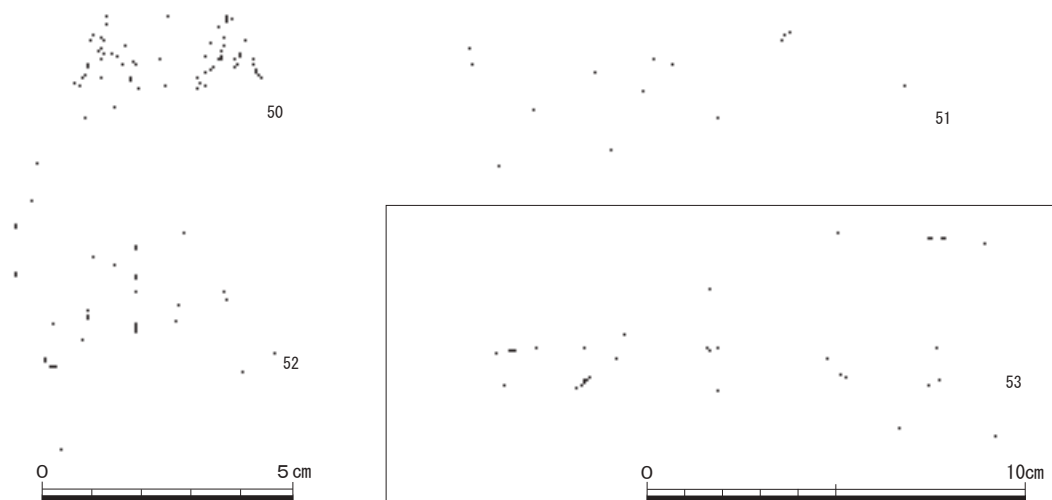


図11 II区12トレンチ出土石器

2. 各トレンチの成果

広く剥落し、刃縁部にわずかな研磨面をのこすのみである。現存長4.10cm、幅6.30cm、厚さは0.51cmである。硬質砂岩である。

剥片（51・52） 51は横長の剥片であり、長さ4.00cm、幅1.90cm、厚さ0.55cmである。52は厚手の剥片であり、下縁部には両面に衝撃剥離面をのこす。全長3.8cm、幅1.70cm、厚さ0.90cmを測る。いずれも安山岩製である。これらのほか10点の小型剥片があり、1点のみ姫島産黒曜石である。

（藤原碧生・村上恭通）

弥生時代～中世

脚台式製塩土器（図12・表1） 脚台式製塩土器はⅡ－3層からⅢ層にかけて出土し、総量は1.4kgである。出土量はⅢ層が多いものの、ほとんどは小片である。脚台部の大きさから、すべて柴田昌児氏による型式分類の芸予Ⅲ－3類に相当する〔柴田2015〕。図示可能な資料は25点あり、54～56は口縁部片、57～78は脚台片である。胎土は1mm以下の長石粒を含み、雲母もみられるものが大半を占め、いずれも焼成は良好である。

口縁部片は厚さが最大2.5mmを測る。54は外面にタタキの痕跡をのこし、それ以外はタタキの痕跡が丁寧にナデ消されている。内面には丁寧なナデ調整が施される。

脚台部はその底径が最小で1.4cm、最大で3.06cmであり（表1）、おおむね2.0cm以下、2.0～2.5cm、2.5cm以上に分けることができる。色調は赤褐色を呈し、58、66、68、69、71、74は被熱により脚台底部が白色化している。脚台部は成形時の指頭圧痕をのこすものが多く、さらに縦位のナデ調整によって仕上げられている。73は胴部をわずかにのこし、外面に左上がりのタタキが認められ、内面にはナデ調整が施される。また、64、65、69、71、73、75は内面に絞り痕をのこし、成形方法を示している。57、58、61、67、70、74、76は、体部と脚台部の断面に粘土を充填した痕跡が確認される。また、脚台部の端部形状は多様であり、先細りするもの、丸くおさまるもの、肥厚するものなどがある。体部の底部内面は多くが剥落し、粗い面をみせている。

弥生土器（図13） 79は壺の底部であり、復元底径7.6cmを測る。底部は上げ底を呈し、体部にかけて外方へ直線的に立ち上がる。胎土は3mm以下の長石粒と5mm以下の石英粒、3mm以下の角閃石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、外面は一部にぶい橙色と褐灰色を呈する。焼成は良好である。内外面ともにあばた状に風化しており、飛砂の影響を受けたと考えられる。Ⅲ層から出土しており、時期は不明である。

古式土師器（図13） 80は甕の口縁部であり、復元口径は13.6cmを測る。口縁部は「く」字状を呈し、口縁部は厚みを減じながら外方へ開き、端部には面取りがみられる。内面は端部付近に横位のナデ調整が施される。外面には縦位と横位のナデ調整が密に施され、平滑に仕上げられている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粒、赤色粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。Ⅱ－4層から出土した。布留1式の範疇で捉えられる。

土師質土器（図13） 81～82は皿、83～90は杯、91は托、92は鍋、93～95は甕である。いずれも

焼成は良好である。

81～82は畿内系土師器の皿である。81は口縁部の断面形態が「て」字状を呈する。復元口径は10.0cmを測り、内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の角閃石粒を少量含み、色調は内面が灰白色、外面は浅黄橙色を呈する。82は復元口径13.0cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに2段のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。

83～87は口縁部である。83は復元口径12.4cmである。口縁部は外方へ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、赤色粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。84は復元口径13.8cmを測る。口縁部は若干内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は赤色粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰白色とにぶい黄色を呈する。

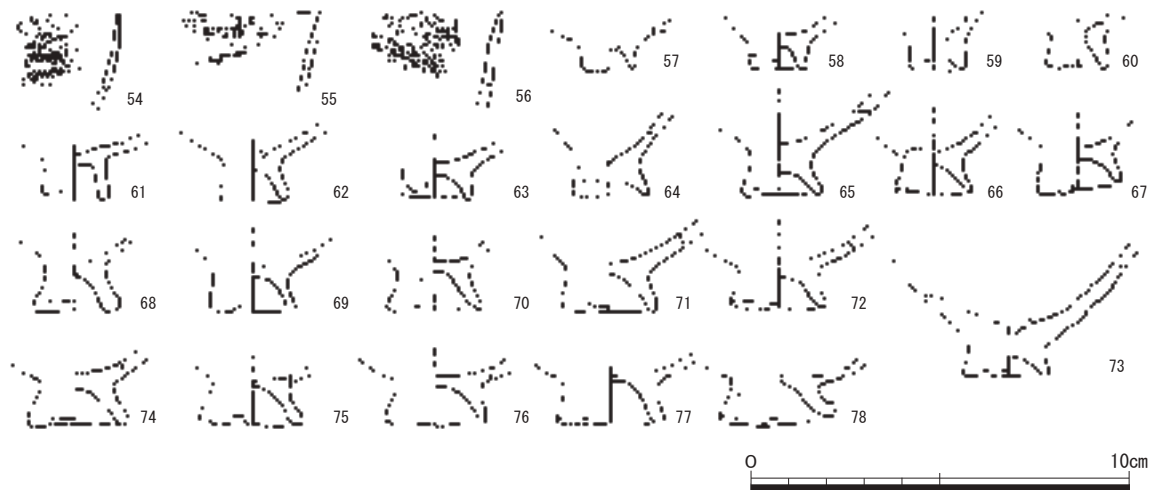


図12 II区12トレンチ出土脚台式製塩土器

表1 II区12トレンチ出土脚台部計測値

No.	層	径 (cm)	高 (cm)	No.	層	径 (cm)	高 (cm)	No.	層	径 (cm)	高 (cm)
57	不明	1.40	0.60	65	1号遺構	2.11	1.00	73	Ⅲ	2.30	0.80
58	Ⅱ-4	1.43	0.55	66	Ⅱ-4	2.04	0.90	74	不明	2.69	1.10
59	Ⅱ-3	1.44	0.75	67	不明	2.20	0.95	75	Ⅱ-4	2.80	1.00
60	Ⅱ-4	1.70	0.80	68	Ⅱ-4	2.30	1.20	76	Ⅱ-4	2.58	1.00
61	Ⅱ-3	1.67	1.05	69	Ⅱ-4	2.31	0.90	77	Ⅲ	2.87	1.05
62	Ⅱ-4	1.84	1.10	70	Ⅱ-2	2.28	1.00	78	Ⅲ	3.06	0.90
63	Ⅱ-4	1.89	0.70	71	Ⅱ-4	2.60	1.10				
64	Ⅱ-4	2.04	0.90	72	Ⅱ-4	2.55	1.10				

2. 各トレンチの成果

85は口縁部が直線的に立ち上がり、端部はやや外反しながら、丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色と黒褐色、外面は明褐色と黒褐色を呈する。86は口縁部がやや直線的に立ち上がる。口縁部なかほどはわずかに肥厚し、端部は丸くおさまる。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに赤褐色を呈する。87は口縁部が外方へ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。

88～90は底部である。88は復元底径7.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底面には回転糸切り痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。89は復元底径7.8cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、外面の底部と体部の境には強いナデ調整がみられる。底部の切り離し技法は回転糸切りである。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。90は内外面に回転ナデ調整が施され、底部外面には回転ヘラ切り痕がのこり、切り離しが粗雑である。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色であり、内面は部分的に褐灰色を呈する。

91は高台が厚みを減じながら外方へ開き、体部下半に托部分が貼り付けられている托付碗である。底部には断面三角形の「ハ」字状に開く輪高台が貼り付けられ、端部は欠損している。高台内面、外面に丁寧なナデ調整がみられる。胎土は0.1mm程の角閃石粒を含み、色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色を呈する。

92～95は口縁部である。92は外方へ開き、端部に向けてわずかに肥厚する。端部は面をもち、やや凹みがみられる。内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内面が灰白色、外面はにぶい黄橙色と黒褐色を呈する。93は直線的に外方へ開き、その端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。94は直線的に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、頸部内面には横位のハケメがみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面が褐灰色、外面はにぶい赤褐色を呈する。95は直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。内外面にナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面は暗褐色を呈する。

81～83、88はⅡ層上面、84、89、90はⅡ－1層、87、91、92はⅡ－2層、85、86はⅡ－4層、93はⅡ－6層、94、95はⅢ層から出土している。81、83は11世紀ごろに比定される。82、84～87、90は古代後半、88、89は12世紀、91は10～11世紀、92は11～12世紀、93～95は10～11世紀に位置付けられる。

須恵器（図13） 96は小皿、97～103は杯、104～106は碗、107は捏鉢、108～111は甕である。いずれも焼成は堅緻である。

96は復元口径11.4cm、復元底径5.9cm、器高は1.9cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部は丸く

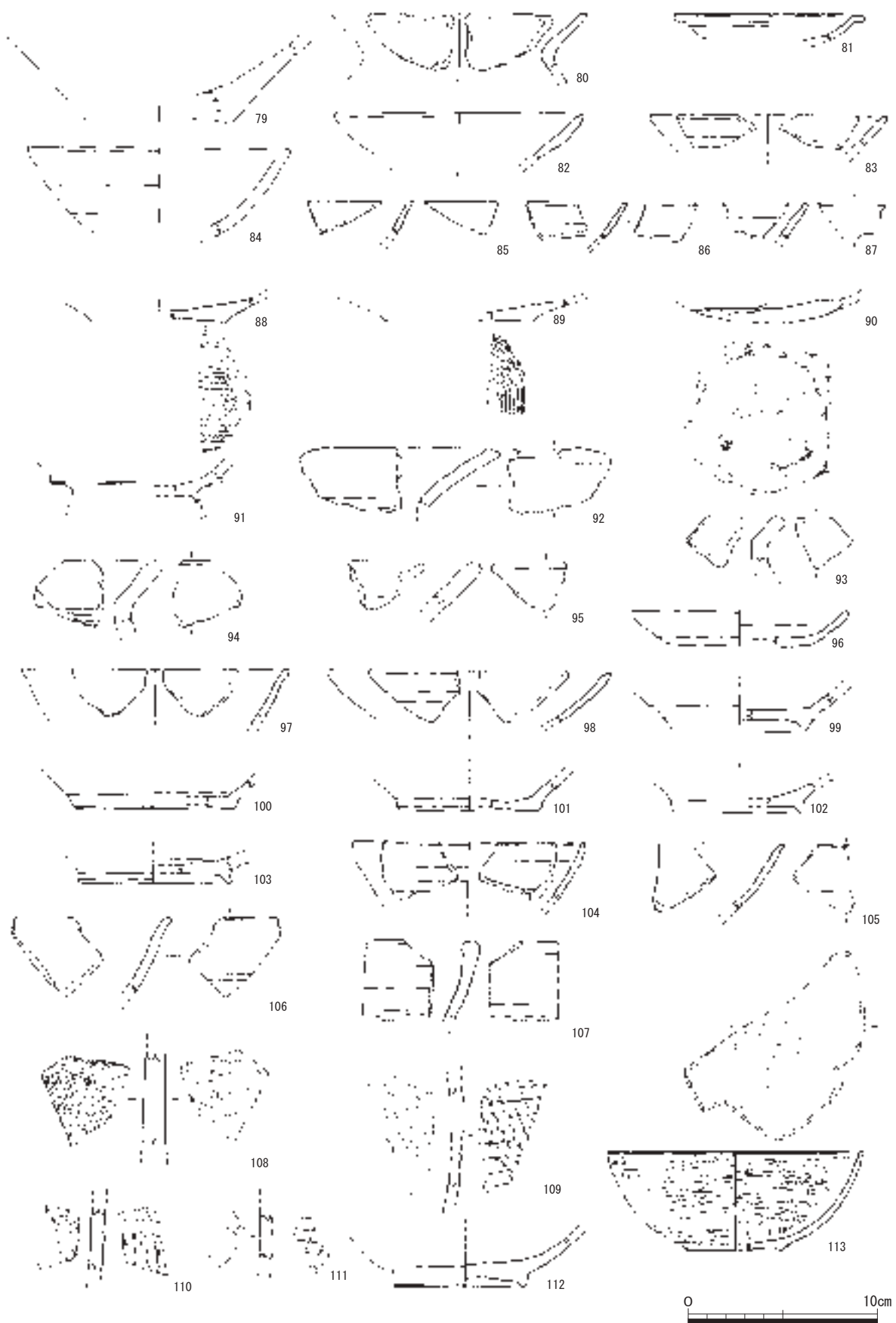


図13 II区12トレンチ出土土器

2. 各トレンチの成果

おさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部はヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに灰白色と灰色を呈する。

97、98は口縁部である。97は復元口径14.0cmを測る。やや直線的に立ち上がり、なかほどでやや外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄灰色を呈し、外面は部分的に灰黄褐色である。98は復元口径14.8cmを測る。わずかに内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。

99～103は底部である。99は復元底径7.0cm、高台の高さは0.6cmを測る。貼り付け輪高台をもち、高台の断面形態は三角形を呈する。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。100は復元底径8.4cmを測る。外面の底部と体部の境に強いナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。101は復元底径7.4cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は1mm程度の長石粒と角閃石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。102は復元底径6.8cm、高台の高さは0.6cmを測る。底部は貼り付け輪高台であり、高台の断面形は三角形を呈する。内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに褐灰色を呈する。103は復元底径7.9cm、高台の高さは0.7cmを測る。底部は貼り付け輪高台であり、高台の断面形状は台形を呈する。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面が黄灰色、外面は暗黄灰色を呈する。

104～106は口縁部である。104は復元口径12.2cmを測る。若干内湾しながら開き、なかほどで直線的に立ち上がる。端部は丸くおさまる、調整は内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。105はやや内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内面が灰白色、外面は灰黄色を呈する。106もやや内湾しながら開き、端部でわずかに外反し、丸くおさまる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。

107は口縁部である。端部はつぶれた玉縁状口縁を呈し、肩部は張りが弱い。これらの特徴から、西長尾5・6号窯の可能性ある〔高橋2016〕。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土は1mm以下の白色粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰黄色、外面は黄灰色を呈する。

108～111は胴部片である。108は内面に当て具痕、外面には横位と斜位のハケメが認められる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を含み、色調は内面が黄褐色、外面は黒褐色を呈する。109～111は内面にナデ調整が施され、外面には格子目状のタタキが施される。いずれも胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに黒褐色を呈する。

98、99、101～103、105、106はⅡ－1層、96、100、104、107～111はⅡ－2層、97はⅢ層から出土した。96～106、108～111は古代後半、107は10世紀後半に比定される。

黒色土器（図13・14） 112は黒色土器A類、113～115は黒色土器B類である。いずれも器種は椀であり、焼成は良好である。

112は底部であり、直径6.9cm、高さ0.7cmの高台をもつ。高台の断面形状は台形であり、接合痕がみられるほど雑に貼り付けられている。調整は内外面ともに回転ナデ調整が施され、内面にはミガキがわずかに確認される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を少量含み、金雲母も多量にみられる。色調は内面が灰色、外面は明黄褐色を呈する。

113は直径13.4cm、器高5.2cm、復元底径5.6cm、高台の高さ0.4cmを測る。口縁部はゆるやかに開き、端部は丸くおさまる。端部内面には沈線が1条めぐり、内面は横位のミガキが密に施され、見込みには放射状のミガキがみられる。外面は全体に横位のミガキが密に施され、体部中位は斜位のミガキが観察される。胎土は金雲母が多量にみられ、色調は内外面ともに黒色を呈する。

114、115は口縁部である。114は若干内湾しながら開き、端部はナデ調整によりやや外反し、丸くおさまる。内外面ともに細いミガキが密に施され、端部内面には沈線が1条めぐり、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母を含み、色調は内外面ともに黒色を呈する。115は若干内湾しながら開き、なかほどやや直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反する。内外面ともに細い密なミガキがみられ、端部には沈線が1条めぐり、胎土は金雲母がみられ、色調は内外面ともに黒色である。113～115はⅡ－1層、112はⅡ－2層から出土している。112は10～11世紀、113～115は11世紀に比定される。

吉備型土師器（図14） 116、117は吉備型土師器であり、いずれも器種は椀で、焼成は良好である。

116、117は口縁部である。116は内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。内面は横位と斜位のミガキが密に施され、外面は横位のミガキがやや間隔をあけて施される。外面下半部には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母がみられ、色調は内外面ともに淡黄色を呈する。117は内湾しながら開き、上半はナデ調整により外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位と斜位のミガキが施される。胎土は1mm以下の角閃石粒と石英粒を少量含み、金雲母がみられる。色調は内外面ともに灰白色を呈する。116はⅠ－2～Ⅰ－3期、117はⅠ－3～Ⅱ期に比定される〔山本悦1993〕。116、117はⅡ層上面から出土し、116は11世紀、117は12世紀前半に比定される。

瓦器（図14） 118は和泉型瓦器椀の口縁部である。直線的に開き、端部に向かうにつれ厚みを増し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横位のミガキがやや間隔をあけて施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄灰色を呈し、内面には部分的に黒褐色がみられる。焼成は良好である。和泉Ⅱ－3期に比定される〔橋本2018〕。Ⅱ－1層から出土しており、時期は12世紀後半と推測される。

陶磁器（図14） 119は白磁碗であり、復元底径は6.5cmを測る。器厚は厚く、高台は幅広で削り出しは浅い。灰白色の釉が薄くかかり、高台と底部外面は露胎している。胎土は精緻であり、胎土は灰白色を呈する。焼成は堅緻である。大宰府編年の白磁碗Ⅳ類に比定される。Ⅱ－1層から出土しており、時期は11世紀後半～12世紀前半と推測される〔山本信2000〕。

土製品（図14） 120～126は移動式カマドの破片である。120～124は掛口部、125は裾部、126は

2. 各トレンチの成果

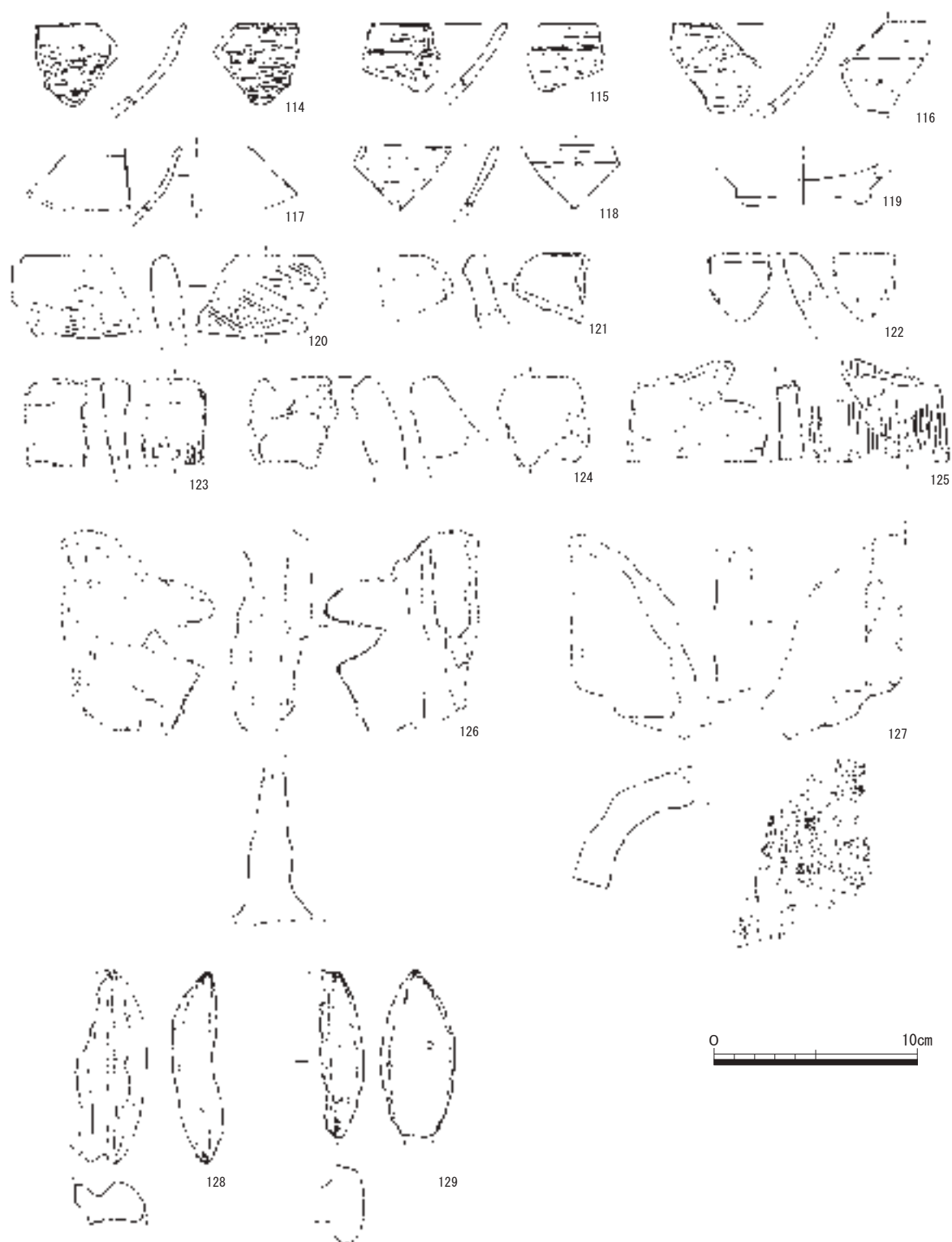


図14 II区12トレンチ出土土器・土製品

胴部から底部付近の破片であると考えられる。いずれも焼成は良好である。

120は内外面ともに斜位の粗いハケメが施され、端部内面には横位のナデ調整がみられる。胎土は5mm以下の長石粒と1mm以下の石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄褐色と黒褐色、外面はにぶい褐色を呈する。121は内外面ともに強いナデ調整が施され、明瞭な凹凸が確認される。端部にはやや面がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色と灰色、外面は黄灰色と褐灰色を呈する。122は内外面ともにナデ調整が施され、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒と4mm以下の石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい褐色、外面は灰黄褐色とにぶい橙色を呈する。

123は外面下半に縦位の粗いハケメが施され、端部は内外面ともに横位のナデ調整がみられる。掛口上部は肥厚し、端部には面がみられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面が黄灰色、外面は灰褐色を呈する。124は掛口部の把手付近の破片とみられる。内外面ともにナデ調整が施される。胎土は4mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい橙色を呈する。125は内面に強いナデ調整や指頭圧痕がみられ、外面は縦位の粗いハケメが施されている。接地面は平坦である。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい黄色を呈する。126は内外面ともに強いナデ調整と指頭圧痕がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と4mm以下の石英粒を多量に含む。色調は内面が暗灰黄色とにぶい黄褐色、褐灰色を呈し、外面はにぶい赤褐色と褐灰色を呈する。

127は丸瓦である。側縁は面取りされ、粘土の残余がみられる。凸面はナデ調整が施され、凹面には布目痕がみられる。胎土は金雲母を含む。色調は凹凸面ともににぶい褐色を呈し、凹面は一部黒褐色、凸面は一部灰黄色である。焼成は良好である。

128、129は大型の有溝土鍾である。128は全体の2分の1ほど残存し、平面形が紡錘形を呈するとみられる。現存長9.3cm、現存幅3.0cm、重量は51gを測る。溝の断面形態は「U」字状を呈し、溝の深さは0.7cmである。全体にナデ調整が施され、指頭圧痕がみられる。胎土は1mm程度の長石粒と2mm以下の石英粒を少量含み、色調は内外面ともに橙色を呈する。129は2分の1ほど残存し、平面形は紡錘形を呈する。断面形態は「H」字状を呈するとみられ、現存長は8.1cm、現存幅3.6cm、重量49gを測る。全体にナデ調整と指頭圧痕がみられる。胎土は1mm程度の長石粒と2mm以下の石英粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

128はⅡ層上面、127はⅡ-1層、121、126、129はⅡ-2層、123、125はⅡ-3層、122はⅡ-4層、120はⅢ層から出土し、124は出土層位不明である。時期は120～126がいずれも10～11世紀に比定される。

製塩土器（図15） 130～136、138～148はいずれも焼成が良好で、137、149は焼成が堅緻である。口縁部の開き方が推測できないものについては、体部を直立させて表している。いずれも赤色化するなどの色調の部分的な変化や内外面の荒れがみられ、二次的被熱痕の可能性がある。

130～145は口縁部である。口縁部はやや直立気味のもの、やや内湾しながら外方へ開くもの、直線的に外方へ開くものがある。130は口縁部が若干内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味である。

2. 各トレンチの成果

内面に横位のナデ調整が施され、筋状の痕跡が確認できる。また、内外面ともに指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄色を呈し、内面がやや赤化している。131はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部に面がみられる。内面に縦位と横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄色、外面は暗灰黄色を呈する。132は口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。内面は器表面が大きく剥離しているため調整が不明瞭であるが、横位のナデ調整が施されているとみられ、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒を含み、色調は内面がにぶい黄褐色、外面は黄褐色を呈する。133は口縁部が直線的に立ち上がり、端部はやや尖り気味である。内面に縦位のナデ調整が施され、筋状の痕跡がみられる。外面には指頭圧痕が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内面がにぶい褐色と橙色、外面はにぶい黄褐色と橙色を呈する。134は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、端部は斜めに切って整えられたとみられる。内面にナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色である。断面には輪積み痕とみられる痕跡が確認できる。口縁端部の形状は型作り成形のものと共通しており、内面に布目痕はともなわないものの、型作り成形の可能性がある。135は口縁端部がやや面的である。内面にナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい橙色を呈し、外面の一部は橙色を呈する。136は口縁端部が一部尖り気味である。内面に指頭圧痕が認められ、外面にはナデ調整が施されているとみられる。胎土は3mm以下の長石粒を含み、金

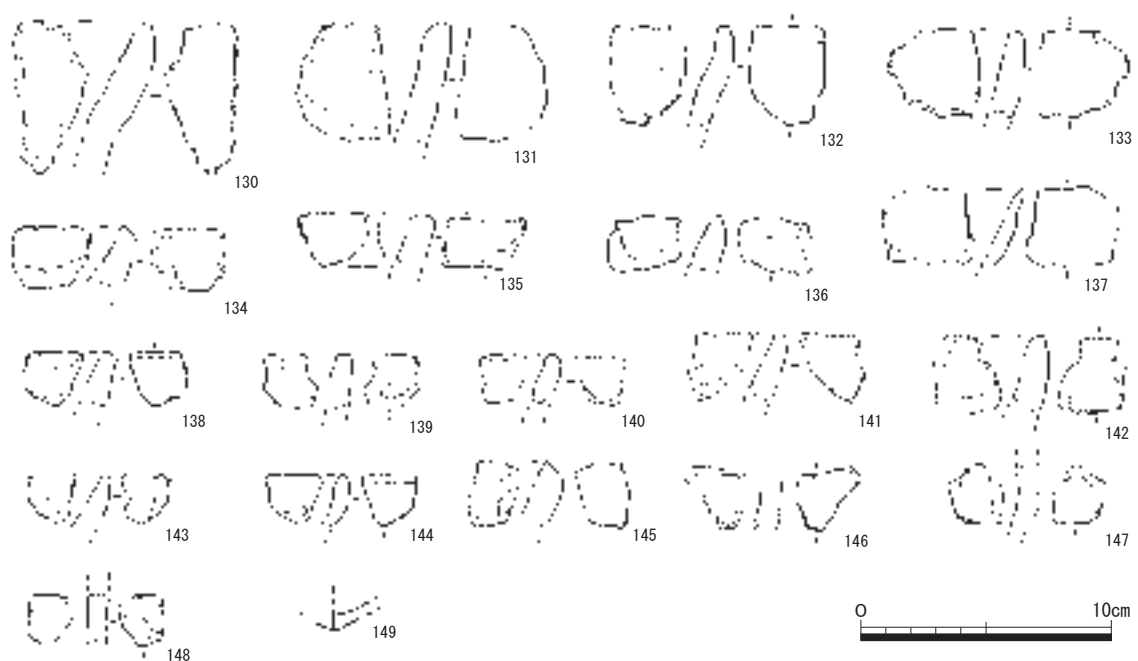


図15 II区12トレンチ出土製塩土器

雲母もみられる。色調は内面が橙色、外面はにぶい赤褐色である。137は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。内面に縦位と横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。薄手かつ焼成具合が堅緻であるという特徴から、「倉浦式土器」の可能性がある。138は口縁端部に面取りがみられ、内外面ともにナデ調整が施されていると想定される。胎土は3mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに暗灰黄色である。139は口縁端部が面的で、端部を切って成形された可能性が考えられる。内面に縦位と横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに橙色を呈し、内面はにぶい褐色、外面は褐灰色が部分的にみられる。140は口縁端部に面がみられ、端部内面側に粘土のヨレが認められる。内面が横位のナデ調整、外面には指頭圧痕が確認される。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内面が橙色、外面はにぶい黄橙色である。141は口縁端部がやや面的である。調整は内外面ともにナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに灰黄色を呈し、外面は一部橙色がみられる。142は口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がり、端部はやや面がみられる部分と丸くおさまる部分が確認される。内外面ともに指頭圧痕が認められ、胎土は3mm以下の長石粒を多量に含む。色調は内外面ともに暗灰黄色とにぶい黄褐色である。143は口縁端部が尖り気味で、最大厚は8mmを測り、器厚が薄い。内外面ともにナデ調整が施されているとみられる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈し、内面は一部にぶい橙色である。144は口縁端部が丸くおさまる。内面に横位のナデ調整、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は5mm以下の長石粒を含む。色調は内外面ともに暗灰黄色を呈し、内面は部分的ににぶい褐色がみられる。内外面ともに細かいひび割れがみられ、やや荒れている。

145～148は内面に布目痕がのこる破片で、型作り成形とみられる。これらはいずれも厚みがやや薄い傾向にあり、最大厚は9～10mmを測る。145は内面端部まで布目痕が確認でき、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内面が灰黄褐色とにぶい褐色、一部褐灰色、外面はにぶい黄褐色と橙色である。内面の大半は剥離している。146は内面に非常に細かい布目痕がのこり、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒を含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は灰色を呈する。外面は細かいひび割れがみられ、やや荒れている。147は内面に布目痕がのこり、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。148は内面にやや粗めの布目痕がのこり、外面はナデ調整が施されているとみられる。胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい黄橙色を呈する。149は尖底を呈する底部である。内面はナデ調整が施されているとみられ、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を少量含む。色調は内面がにぶい黄橙色、外面は明褐色を呈する。薄手かつ尖底という特徴から、「倉浦式土器」の可能性が高い。焼成は堅緻である。

2. 各トレンチの成果

133、134、136、138、142～144、146～148はⅡ－4層、130～132、135、139、140、149はⅢ層、137は4号遺構から出土し、141、145は出土層不明である。いずれも時期は9世紀に比定される。

(福本佳織)

鉄製品・鍛冶関連遺物 (図16) 150は釣針である。先端にはアグをもたず、チモト部分を欠損しており、軸部の断面形は略円形を呈している。現存長4.1cm、幅2.7cm、軸部の太さ0.4～0.5cmであり、重量は4.1gを測る。

151は三角形を呈する鉄器片であり、厚さが均一で0.2cmと薄い。両側縁は鋭いため、鉄鏃の先端部の可能性がある。現存長2.3cm、最大幅1.6cm、重量1.9gを測る。

152は轡羽口の破片であり、先端部、基部ともに認められない。外面には指頭圧痕を顕著にのこし、内面の孔の表面には微細な擦痕がみられる。先端部側には被熱痕をのこし、黒灰色を呈する。現存長7.1cm、復元外径および孔径はそれぞれ6.2～7.4cm、2.8cmであり、重量は93.3gを測る。

153は不定形の鉄塊であり、湾曲した外縁が厚く、それ以外は薄い。現存長4.3cm、最大幅2cm、最大厚さ1.6cmであり、重量は21.3gを測る。

150、152はⅡ－2層、153はⅡ－4層、151はⅢ層から出土している。

(ブズレン・サミ)

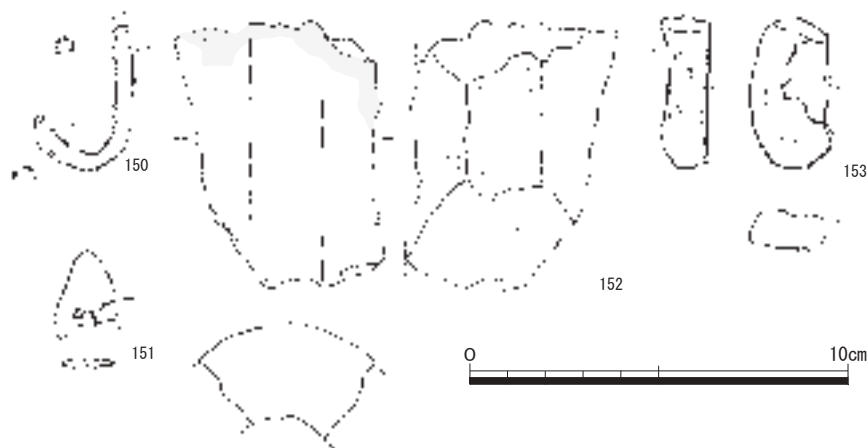


図16 Ⅱ区12トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

(2) 17トレンチ (図17)

第9・10次調査で検出された縄文時代の包含層の広がり把握するため、第11次調査において設定された。4トレンチの50cm南側に設定され、南北2m、東西4mのトレンチである。第12次調査ではⅡ-4層からⅣ-1層まで順に掘り下げた後、トレンチ北壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定してⅣ-2層上面を確認した。今年度の調査では南側のⅣ-1層を掘り下げ、トレンチ全体にわたってⅣ-2層上面を検出した。その後、トレンチ北壁沿いに幅1mの先行トレンチを設定してⅣ-2層を掘り下げ、遺物の出土がないことを確認し、標高1.27mのレベルで発掘を停止した。今回の調査ではⅣ層のみを掘り下げたが、壁面清掃時に新たな所見が得られたため、改めて層全体の説明を行いたい。

土層は表土を含めて大きく4層に分かれる。Ⅰ層は表土であり、Ⅰa層、Ⅰb層に分層される。Ⅰa層は褐色を呈し、細礫と極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は10～31cmを測り、ほぼ水平に堆積している。Ⅰb層はにぶい黄褐色を呈し、中礫～大礫を多く含む極粗粒砂主体である。層厚は1～16cmであり、西から東に向かって薄くなる。南壁では、Ⅰb層からⅡ-2層にかけて攪乱坑D1、D2が検出された。Ⅱ層は4つに分層され、Ⅱ-1層は暗褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は2～20cmであり、南から北に向かってゆるやかに傾斜する。Ⅱ-2層は暗褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。層厚は最大19cmであり、東から西に向かって薄くなる。4トレンチの同じ層に比べて多くの陶磁器片が出土している。Ⅱ-1層とⅡ-2層では破碎した貝類がみられ、しまりがあることから整地層と考えられる。Ⅱ-3層は黒褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、焼土を含む。トレンチ西側でのみ検出され、層厚は最大で23cmである。Ⅱ-4層は黒褐色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。炭化物をわずかに含み、部分的に焼土と粘土小塊も確認された。層厚は3～19cmを測る。Ⅱ-5層およびⅡ-6層は検出されていない。Ⅲ層は2層に分かれる。Ⅲ-1層はにぶい黄褐色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、炭化物を含む。芸予Ⅲ-3類〔柴田2015〕の脚台式製塩土器の脚台部片と体部片が面的に出土している。層厚は4～13cmであり、南東から北西に向かって傾斜している。上層からの棲痕が無数に確認された。Ⅲ-2層は褐色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。西側では炭化物を多く含み、層厚は3～15cmである。

Ⅳ層は花崗岩の風化砂層であり、2層に分かれ、Ⅳ-1層は純粋な風化層に比較してやや赤色化していることから、土壌化の影響を受けている。Ⅳ-1層は褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。炭化物を少量含み、層厚は28～54cmである。調査区の南半においては縄文土器や打製石鏃が多く出土し、その下層で縄文時代前期から後期の土器が出土する傾向がある。Ⅳ-2層はにぶい黄褐色を呈し、中粒砂を主体とする。5～10mmの角礫と亜角礫を多く含み、炭化物を少量含む。層厚は5～20cmであり、南西から北東に向かって傾斜している。遺物はほとんど確認されず、棲痕などを介して上層から落ち込んだと考えられる土器片が数点みられるのみである。

今回の調査では、Ⅳ-1層で早期～後期の縄文土器、打製石鏃、剥片、チップ、Ⅳ-2層では縄文土器小片、剥片が出土している。なお、ここでは第11次調査で発掘した古代～中世遺物について

2. 各トレンチの成果

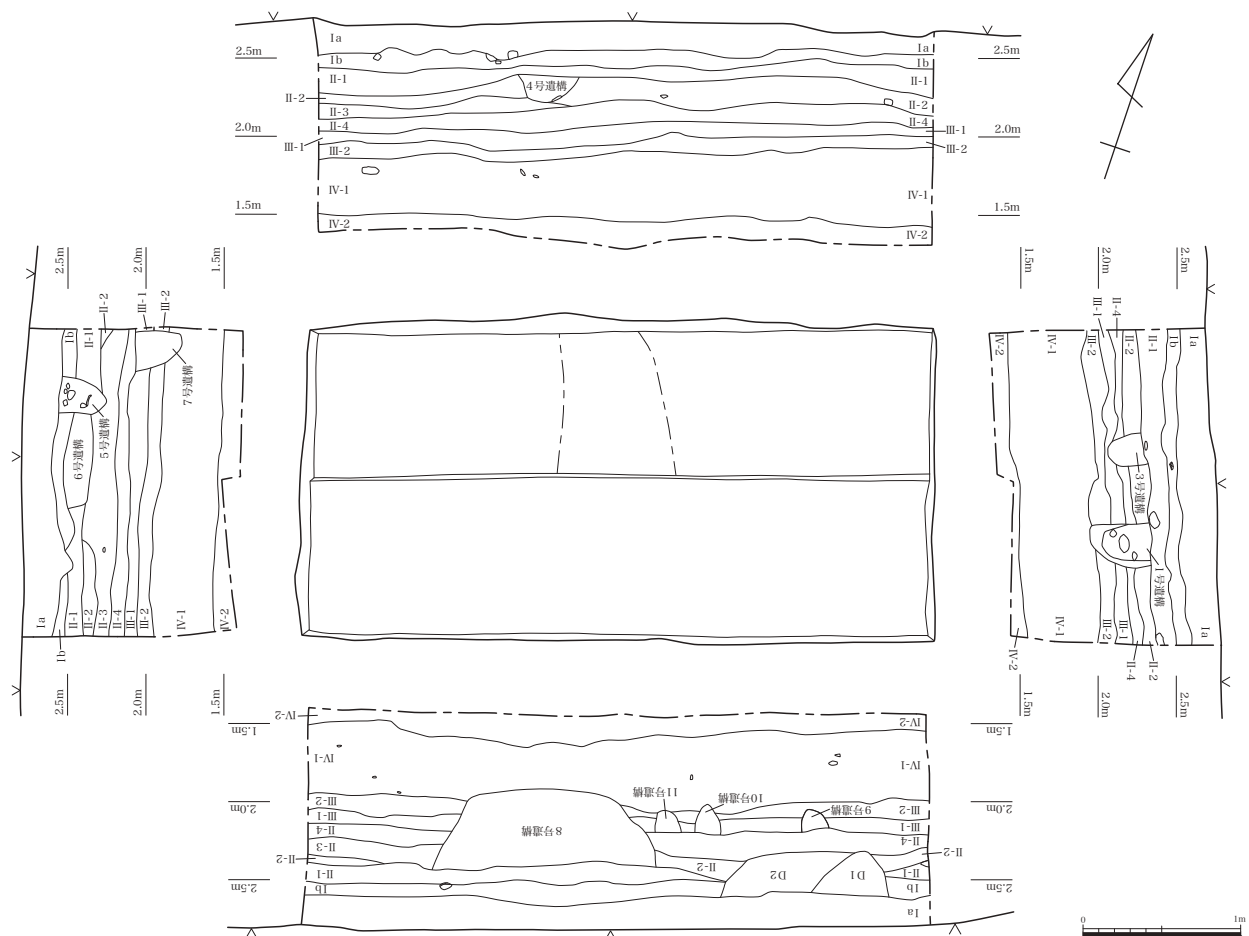
も報告する。

1号遺構

調査区東壁面南側においてⅡ－2層上面で検出されたピットである。調査区東側にもものびるため全体形は不明であるが、平面形は楕円形が想定され、底面はやや丸い。上部の幅28cm、底部の幅12cm、深さ40cmを測る。覆土は黄橙色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。覆土より獣骨が出土している。

3号遺構

東壁において確認されたⅡ－2層上面からⅢ－1層にいたるピットであり、上部の幅20cm、底部



Ia層：褐色（10YR4/4）粗粒砂主体。細礫と極粗粒砂を含む。しまりあり。Ib層：にぶい黄褐色（10YR4/3）極粗粒砂主体。中礫～大礫を含む。粗粒砂を含む。しまりあり。Ⅱ-1層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を含む。しまりあり。Ⅱ-2層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を含む。しまりあり。Ⅱ-3層：黒褐色（2.5Y3/2）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を含む。焼土を含む。しまりあり。Ⅱ-4層：黒褐色（2.5Y3/2）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。炭化物を少量、一部で焼土と粘土を含む。しまりあり。Ⅲ-1層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粗粒砂主体。極粗粒砂を含む。炭化物を含む。暗褐色（10YR3/3）の土が混ざる。Ⅲ-2層：褐色（10YR4/4）粗粒砂主体。極粗粒砂を含む。炭化物を含む。Ⅳ-1層：褐色（10YR4/4）中粒砂主体。粗粒砂を含む。炭化物を含む。しまり弱い。Ⅳ-2層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂主体。5～10mm程度の角礫と亜角礫を多く含む。炭化物を微量に含む。しまり弱い。1号遺構：黄橙色（10YR8/6）粗粒砂主体。極粗粒砂を多く含む。しまりあり。3号遺構：黒褐色（10YR2/2）粗粒砂主体。極粗粒砂を多く含む。2cm程度の角礫を少量含む。しまりあり。4号遺構：黒褐色（7.5YR2/2）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。しまりあり。5号遺構：黄褐色（10YR5/6）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。1～3cm程度の角礫を少量含む。しまりあり。6号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。1～3cm程度の角礫を少量含む。貝を含む。しまりあり。7号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を少量含む。しまりあり。8号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。極粗粒砂を少量含む。粗粒砂を含む。しまりあり。9号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。細粒砂～粗粒砂を含む。しまりあり。10号遺構：黒褐色（10YR3/1）中粒砂主体。粗粒砂を含む。1cm程度の角礫を少量含む。11号遺構：黒褐色（7.5YR3/1）中粒砂主体。極粗粒砂を含む。1cm程度の角礫を少量含む。

図17 Ⅱ区17トレンチ平面図・土層図

幅6cm、深さ23cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、2cm程度の角礫を少量含む。遺物の出土はない。

4号遺構

北壁中央付近においてⅡ－2層で確認された土坑である。上部の幅38cm、底部の幅20cm、深さ18cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。壁面から緑釉陶器が出土している。

5号遺構

西壁において確認されたⅠb層からⅡ－3層にいたるピットであり、上部の幅23cm、深さ31cmを測る。覆土は黄褐色を呈し、極粗粒砂と粗粒砂を少量含む中粒砂を主体とし、1～3cmの角礫と貝をまばらに含む。

6号遺構

西壁中央付近においてⅡ－1層で確認されたピットである。5号遺構に切られているため全体形は明らかではないが、上部の幅60cm、底部の幅57cm、深さは19cmである。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂と粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、1～3cmの角礫をまばらに含む。遺物の出土はない。

7号遺構

西壁においてⅢ－1層からⅣ－1層にかけて検出されたピットであり、上部の幅25cm、底部の幅7cm、深さ30cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂と粗粒砂を少量含む中粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

8号遺構

南壁において確認された、Ⅱ－2層からⅣ－1層にいたる土坑である。断面形は半円形を呈し、上部の幅142cm、底部の幅97cm、深さ48cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、1cm程度の角礫を少量含む。遺物の出土はない。

9号遺構

南壁においてⅢ－1層からⅣ－1層にかけて確認されたピットである。上部の幅16cm、深さは13cmである。覆土は黒褐色を呈し、細粒砂～粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

10号遺構

南壁において確認されたⅢ－1層からⅣ－1層にいたるピットである。上部の幅16cm、深さ19cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。遺物の出土はない。

11号遺構

南壁において確認されたⅢ－1層からⅣ－1層にいたるピットである。上部の幅16cm、底部の幅10cm、深さは14cmを測る。覆土は黒褐色を呈し、極粗粒砂を含む中粒砂を主体とし、1cm程度の角礫を少量含む。遺物は出土していない。

(伴井嘉正)

2. 各トレンチの成果

出土遺物

縄文時代

縄文土器（図18・19） 縄文土器は全てⅣ－1層からの出土品である。

154は口縁部片であり、口唇部に棒状工具による刻目がみられる。内外面ともに横位と斜位の条痕が施され、内面の条痕は明瞭である。胎土は精良で、1mm以下の長石粒、角閃石粉と金雲母粉を少量含み、3mm程度の石英粒もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

155は内傾する口縁部片であり、端部はナデ調整による平坦面がみられる。貼り付けられた低い突帯には、半裁竹管状の工具による押引文が施される。押引文の幅は13～16mmで、上部の方が深い。胎土は角閃石粉を含み、2mm以下の長石粒、石英粒、雲母粉がみられる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄色である。156～158は胴部片で、いずれも断面形状が略三角形を呈する細い突帯をもつ。突帯は156が弧状、157、158は直線的にはしり、地文はいずれも節の大きい単節LR縄文が施文される。158は一部、縄文がやや不明瞭な部分があり、細い突帯が貼り付けられていた可能性がある。胎土はいずれも2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒と角閃石粉、雲母粉を含み、色調は156が内外面ともににぶい黄橙色、157、158は内外面ともに橙色を呈する。

159は波状口縁の破片であり、わずかに内傾する。端部はナデ調整によって平坦気味である。突帯を貼り付けたのち、やや細い半裁竹管状の押引文が施され、その幅は約11mmである。内面は丁寧なナデ調整で平滑に仕上げられている。胎土は精良で、1mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉を少量含み、3mm程度の石英粒もみられる。色調は内外面ともににぶい赤褐色である。160は外面に半裁竹管状の横位の押引文が施され、その幅は約14mmである。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、雲母粉もみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

161～165は胴部片で、いずれも地文に無節Rの太く、間隔を取った撚糸が施文され、撚糸の繊維痕が観察される。胎土はいずれも2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉、雲母粉を含む。色調は161、162、164が内外面ともににぶい黄色、163は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄色で、165が外面はにぶい黄橙色、内面がにぶい褐色を呈する。

166、167は口縁部片である。166はやや外に開き、端部は若干先細る。外面と端部内面に半裁竹管状の押引文が施され、幅15～16mmを測る。外面の押引文は2段にわたり、同時に施文されたと考えられる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒を含み、1mm以下の角閃石粒と雲母粉もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。167は波状口縁の破片であり、口縁端部の下に突帯を貼り付け、その上に半裁竹管状の工具による押引文が施される。突帯下には押引文の痕跡がみられ、突帯は2段であった可能性がある。地文は明瞭ではないが単節LR縄文の可能性がある。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を少量含み、色調は外面がにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色である。168～170は縄文をもつ胴部片で、原体は168が単節LR、169、170が単節RLである。169、170は内面がナデ調整により、平滑に仕上げられている。いずれも2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉、雲母粉を少量含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄色である。171は胴部片で、器形はキャリパー形を呈する。外面は撚糸あるいは縄文が施文され、原体は単節RLと考



図18 II区17トレンチ出土縄文土器 1

2. 各トレンチの成果

えられる。内面はナデ調整により平滑に仕上げられている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒を含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色を呈する。

172、173は口縁部片で、半裁竹管状の押引文が施される。172は外湾しながら開き、端部はやや内傾する。口縁に平行する突帯をもち、幅14～16mmの押引文が施される。押引の深さは突帯上部で深く、下部では浅いあるいはほとんどみられない。地文は縦位の撚糸で、原体は単節LRである。内面がナデ調整によって平滑に仕上げられる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒を含み、1mm以下の金雲母粒と角閃石粉もみられる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄色を呈する。173は大きく外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁に平行する押引文が施され、その幅は10～11mmである。地文は縦位の撚糸で、原体は単節LRである。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色である。174～176は胴部片で、いずれも撚糸が施され、内面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。原体は175が単節LR、174、176は単節RLとみられる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、雲母粉を少量含む。色調は外面が174、176はにぶい黄橙色、175がにぶい黄色と橙色で、内面はいずれもにぶい黄色を呈する。

177は外方へ開く口縁部の破片で、端部には平坦面をもつ。口唇部に二枚貝の殻頂による押圧文が施され、その幅は約8mmである。地文には無節Rの撚糸が施され、その繊維痕も観察される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を含み、色調は外面がにぶい黄色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

178、179は底部片で、復元底径は178が6.2cm、179は4.8cmを測る。いずれも平底であり、胴部へ直線的に立ち上がる。外面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉がみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色である。

180～184は沈線文系土器で、180、181は口縁部である。いずれもナデ調整が施され、磨かれているため表面がなめらかである。幅6～8mmと太い沈線が直線的あるいは弧状に施され、沈線の断面形は弧状である。181を除き、外面の沈線の影響により内面が若干波打つ。胎土には2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉がみられ、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。185は沈線が浅く、幅3～4mmと比較的狭い。内面は外面の沈線の影響を受けて突出する。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒を少量含む、色調は外面が明赤褐色、内面は橙色である。186は口縁部片とみられ、端部は剥離している。内外面ともにナデ調整とが施され、磨かれているため器表面はなめらかである。幅約2mmの狭い沈線が横位に施され、沈線下には連続刺突文がみられる。胎土は精良で、金雲母粒が少量みられる。色調は外面が黒褐色、内面は橙色を呈し、外面には二次的被熱の痕跡が認められる。

187、188はⅣ－1層の下部から出土した無文土器で、同一個体と考えられる。器厚は2～5mmを測り、薄手である。187は口縁部片で、内外面ともに強いナデ調整と指頭圧痕が強くのこる。口縁端部には小型ながら鋭く、かつ不揃いの爪形の刻みが6個認められる。188は胴部片であり、爪形の痕跡が2つのこる。いずれも胎土は精良で、1mm以下の長石粒、赤色頁岩粒と雲母粉を少量含む、色調は外面がにぶい赤褐色、内面はにぶい橙色である。

189、190は口縁部片であり、いずれも口縁部が内傾し、端部は平坦面をもつ。その平坦面に、189は口唇部に「X」字状、190は鋸刃状の文様が施されている。外面は丁寧なナデ調整によってやや平滑に仕上げられる。胎土はいずれも1mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、色調は外面がにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

191、192は巻貝による左上がりの条痕が施された胴部片で、同一個体の可能性がある。胎土に3mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、赤色頁岩粒を含み、色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい橙色を呈する。193、194は底部片で、いずれも上げ底である。193は内面が剥離し、被熱の痕跡もみられる。胎土に4mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、金雲母粉もみられる。色調は外面が灰黄褐色とにぶい赤褐色を呈する。194は外面がナデ調整で平滑に仕上げられる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色である。

154は月崎下層式あるいは彦崎Ⅱ式、155～158は船元Ⅰ式、159、160は船元Ⅰ式～船元Ⅱ式、166～170は船元Ⅱ式、171、176は船元式あるいは里木Ⅱ式、161～165、172～175は里木Ⅱ式と考えられる。時期は154が縄文時代前期、155～160、166～170は縄文時代中期、161～165、172～175は縄文時代中期後半に位置付けられる。171、176～179は縄文時代中期、180～185は縄文時代中期末～後期初頭、186、191、192は縄文時代後期前半である。なお、187～190、193、194は時期が不明である。

(江本晃季)

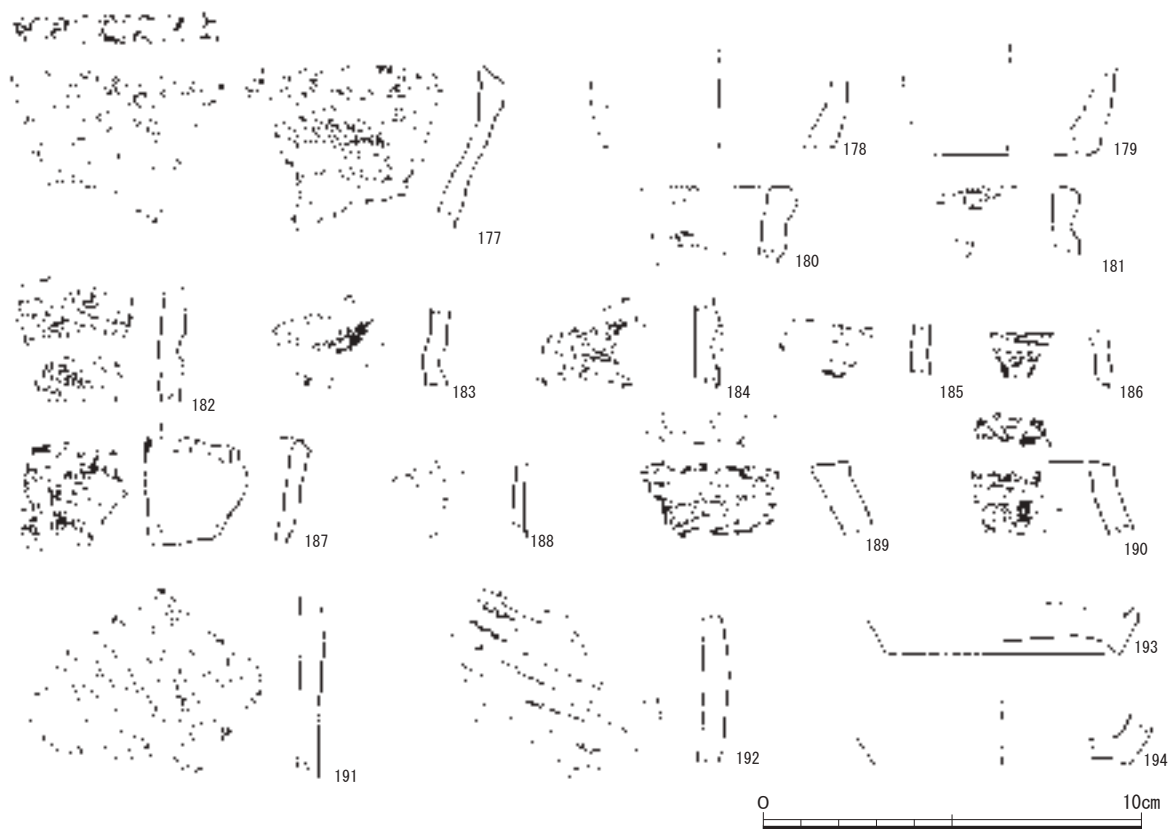


図19 II区17トレンチ出土縄文土器2

2. 各トレンチの成果

石器（図20・表2）

Ⅳ－1層の下層より剥片12点、チップ3点が出土した。200の横長剥片が姫島産黒曜石である以外は、全て安山岩である。

（植田知也・村上恭通）

古代～中世

第13次調査において17トレンチから出土した古代～中世の遺物は、4号遺構で出土した緑釉陶器1点（図22-249）のみであり、その他の報告資料はいずれも第11次調査で出土した資料である。

土師質土器（図21） 201～204は皿、205～207は杯、208～217は甕、218は鍋、219は土釜、220、221は製塩土器であり、213は鍋の可能性はある。いずれも焼成は良好である。

201、202は畿内系土師器であり、口縁部の断面形態が「て」字状を呈する。201は復元口径9.3cmを測り、器厚が4mm前後とやや厚い。口縁部内面にはやや不明瞭な沈線がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、外面下部には指頭圧痕がみられる。胎土は1mm以下の角閃石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに黄橙色を呈し、外面は部分的に褐灰色である。202は口縁部であり、内外面ともに剥離が激しい。口縁部内面にはやや不明瞭な沈線がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、外面下部には指頭圧痕がみられる。胎土は金雲母と赤色粒がみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。203は口縁部であり、復元口径11.2cmを測る。口縁部は直線的に外方へ開き、内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を多量に含み、色調は内外面とも

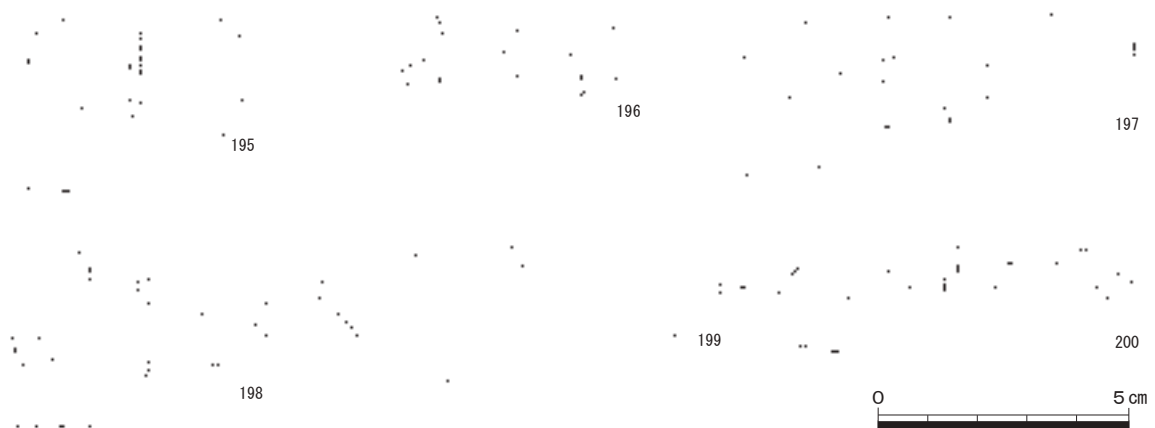


図20 II区17トレンチ出土石器

表2 II区17トレンチ出土石器計測値

No.	層	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	No.	層	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)
195	Ⅳ-1	剥片	2.50	1.40	0.29	0.87	198	Ⅳ-1	剥片	2.35	1.80	0.30	1.20
196	Ⅳ-1	剥片	2.00	1.35	0.32	0.62	199	Ⅳ-1	剥片	1.80	3.20	0.24	1.74
197	Ⅳ-1	剥片	3.00	2.20	0.46	2.69	200	Ⅳ-1	剥片	1.10	2.90	0.29	0.85

ににぶい橙色を呈する。204は底部であり、復元底径5.6cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転糸切りである。切り離し後、底部外面と体部の境には丁寧なナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面が灰白色とにぶい橙色であり、外面はにぶい橙色と浅黄橙色を呈する。

205～207はいずれも底部であり、内外面ともに回転ナデ調整が施される。205は復元底径6.3cmを測る。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りであり、底部外面と体部の境には切り離しの際に生じた粘土の残余がみられる。また底部外面と体部の境には強いナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒と角閃石粒を少量含み、金雲母もみられる。また2mm程度の石英粒を少量含む。色調は内面ににぶい黄橙色、外面は灰黄褐色を呈する。206は復元底径6.3cmを測る。底部外面には回転ヘラ切り痕がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母と赤色粒もみられ、色調は内面ににぶい橙色と橙色、外面はにぶい橙色を呈する。207は復元底径8.3cmを測り、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。底部外面と体部の境には弱いナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母も多量にみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

208～217は口縁部である。208～210は体部で屈曲したのち強く外方へ開き、端部は丸くおさまる。208は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は金雲母がみられ、色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。209は口縁部外面下半から体部にかけて粗いハケメが施され、内面にはナデ調整がみられる。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。210は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、1mm以下の角閃石粒と金雲母もみられる。色調は内面の口縁部付近が灰黄褐色、頸部から体部にかけて黒褐色を呈し、外面はにぶい褐色である。211は口縁部なかほどで強く屈曲したのち、上半で立ち上がり、端部には平坦面がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、頸部外面には爪と推測される痕跡がまばらにみられ、体部外面には粗いハケメが施される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、3mm程度の石英粒も少量みられる。色調は内面ににぶい黄褐色、外面はにぶい橙色を呈する。212はゆるやかに外反しながら開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、体部には強いナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、1mm以下の角閃石粒と金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。213は大きく外方へ開き、端部には平坦面をもつ。胎土は1mm以下の長石粒を含み、2mm程度の長石粒、石英粒も少量みられる。色調は内面ににぶい黄褐色と灰黄褐色、外面は灰黄褐色を呈する。214はゆるやかに外方へ開き、端部が丸くおさまる。調整は内外面ともにナデ調整が施される。胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。215はゆるやかに立ち上がり気味に開き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施される。外面上部には指頭圧痕がみられ、下半には粗いハケメが施される。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰黄褐色、外面は橙色を呈する。216は外方へ直線的に開き、端部は厚みを減じながら丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は1mm程度の長石粒と石英粒を多量に含み、3mm程度の長石粒、石英粒も少量みられる。色調は内面が褐灰色、外面は

2. 各トレンチの成果

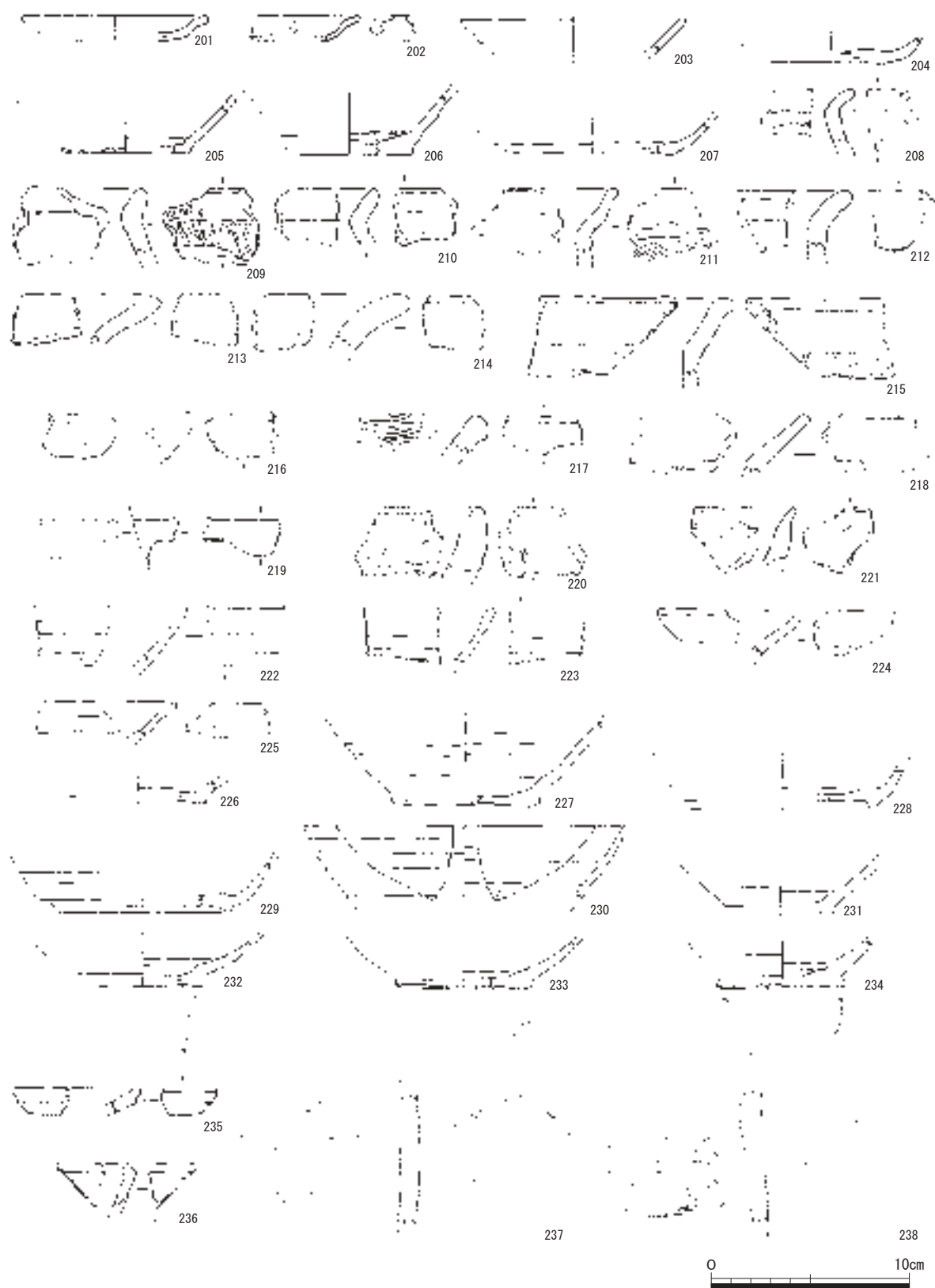


図21 II区17トレンチ出土土器1

黒褐色を呈し、口縁端部はにぶい黄橙色である。217は外方へ直線的に開き、端部はやや肥厚する。内面は粗いハケメがみられ、外面にはナデ調整が施される。胎土はやや粗く、2mm以下の長石粒、石英粒を多量に含み、3mm程度の長石粒も少量みられる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい褐色を呈する。

218は口縁部であり、体部で屈曲したのち外方に開き、端部には平坦面をもつ。外面は二次的被熱により黒色化している。内外面ともにナデ調整が施され、特に口縁端部と外面上部には強いナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面は灰黄褐色を呈する。

219は土釜の鰐部であり、上面と下面にはナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を含み、金雲母もみられ、色調は上面が灰黄褐色、下面はにぶい褐色を呈する。鰐の幅は狭く、直立気味に口縁部・体部へと開くと推測されるため摂津C型の可能性がある〔菅原1983〕。

220、221は口縁部である。220はわずかに内湾しながら立ち上がる。端部は丸くおさまり、尖り気味の部分も一部みられる。内面は指頭圧痕と縦位のナデ調整、外面には指頭圧痕がみられる。胎土は5mm以下の長石粒を少量含む。明確な黒斑などはみられないが、内外面ともに亀裂やひび割れが確認されるため、二次的被熱痕の可能性がある。色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。221はわずかに内湾しながら立ち上がり、上半にはナデ調整が施されることで外反し、端部は尖り気味におさまる。内面には横位のナデ調整と指頭圧痕、外面にはナデ調整と指頭圧痕がみられ、特に端部付近にはやや強いナデ調整と指頭圧痕が確認される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。口縁端部に集中してひび割れが確認できるが、層状剥離はみられず、明確な二次的被熱痕も確認できない。色調は内面がにぶい黄褐色、外面は褐色を呈する。

201はI b層、202、208、209、211、212、215、221はII - 1層、203～207、210、216、219、220はII - 2層、217はII - 3層、214はII - 4層から出土している。213、218は出土層位不明である。220、221は8～9世紀、208～217は古代後半、219は10世紀、203は11世紀、205～207は10～11世紀、201、202は11世紀、204、218は12世紀に比定される。

須恵器（図21） 222～229は杯、230～234は椀、235は壺あるいは瓶、236は器種不明、237、238は甕である。

222～225は口縁部である。いずれも内外面ともに回転ナデ調整が施され、胎土が精緻で焼成は堅緻である。222はゆるやかに内湾しながら開き、端部は丸くおさまる。色調は内面が灰色、外面は灰黄色を呈する。223はゆるやかに内湾しながら開き、端部が若干肥厚し、丸くおさまる。外面には一部を除いて自然釉が付着する。色調は内面が褐灰色、外面は黒褐色と褐灰色を呈する。224は大きく外方へ開き、上半に強いナデ調整が施されることで内湾し、端部はやや尖る。色調は内面が灰色、外面は灰白色を呈する。225はゆるやかに外方へ開き、端部は丸くおさまる。外面には自然釉がみられ、黒色を呈する。色調は内面が灰色と灰白色であり、外面は灰白色を呈する。

226～229は底部であり、226は円盤状高台、228、229は貼り付け輪高台をもつ。いずれも内外面

2. 各トレンチの成果

に回転ナデ調整が施され、焼成は堅緻である。226は復元底径6.8cmを測り、ナデ調整により、底部内面と体部の境には明瞭な凹みをもつ。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は精緻で、1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。227は復元底径7.4cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕がみられる。底部外面と体部の境には粘土の残余が付着する。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともに灰黄色を呈する。228は復元底径9.5cm、高さ0.4cmの高台をもつ。高台は断面形態が台形状を呈し、端部には凹面がみられる。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。外面には自然釉が付着する。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。229は復元底径8.6cm、高台の高さは0.3cmである。高台の断面形態は三角形状を呈する。胎土は1mm以下の長石粒と角閃石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色である。

230は口縁部で、復元口径16.1cmを測る。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は1mm程度の石英粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色であり、焼成はやや軟質である。

231～234は東播系須恵器の可能性があり、高台は円盤状高台である。いずれも内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転糸切りである。焼成は堅緻である。231は復元底径5.4cmを測り、底部から直線的に外方へ立ち上がる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈する。232は復元底径6.1cmを測る。底部から内湾気味に外方へ開き、底部内面と体部の境には明瞭な凹みがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰白色を呈する。233は復元底径6.6cmを測り、底部外面と体部の境には粘土の残余が付着する。内面にはやや不明瞭な稜をもつ。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が灰白色、外面は灰色を呈する。234は復元底径6.5cmを測る。内面は底部と体部の境に明瞭な凹みがみられる。底部外面と体部の境には粘土の残余がわずかに観察される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに灰色を呈する。

235は口縁部であり、内外面ともに回転ナデ調整が施され、口縁端部には凹みがみられる。胎土は1mm程度の長石粒を多量に含む。色調は内外面ともに灰白色であり、内面は部分的に暗赤褐色を呈する。焼成は堅緻である。

236は口縁部であり、上部は強く内側に屈曲し、端部には面がみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含む。内外面ともに自然釉が付着し、色調は黒色を呈する。

237は体部であり、内面は青海波文状の当て具痕、外面には平行タタキ痕が顕著である。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰色を呈し、焼成は堅緻である。238は肩部付近の破片であり、内外面ともにナデ調整が施され、内面には青海波文状の当て具痕、外面には斜位のタタキ痕がみられる。胎土は1mm程度の長石粒を少量含み、色調は内面が褐灰色、外面は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。

230はI b層、226、231、232、235、236はII - 1層、223～225、229、233、234、237、238はII - 2層、222、227、228はII - 4層から出土している。222～225、230、231、237、238は古代後半、228、229は9～10世紀、226、227は10～11世紀、232～234は11世紀後半～12世紀に比定され、235、

236は時期不明である。

黒色土器（図22） 239～242、244～248は黒色土器A類の椀、243は黒色土器B類の椀である。焼成はいずれも良好である。

239は口縁部であり、復元口径14.8cmを測る。内湾気味に外方へ開いたのち、上部で外反し、端部はやや尖り気味におさまる。内面には斜位のミガキが施され、外面には屈曲部付近にのみミガキが確認される。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面と外面口縁部付近が黒褐色、外面体部は灰黄褐色を呈する。240～242は口縁端部内面に沈線がめぐる畿内系黒色土器A類である。240は内面に横方向のミガキが密に施される。外面はナデ調整と指頭圧痕がみられ、上半の一部にのみミガキが施される。胎土は金雲母が少量みられ、色調は内面と外面上半が黒色、外面下半は褐色を呈する。241はやや内湾しながら外方へ開き、口縁端部内面には明瞭な沈線が確認される。内面にはミガキ、外面にはナデ調整が施され、胎土は金雲母がみられる。色調は内面が黒色、外面は明褐色を呈し、外面の口縁端部付近は褐灰色を呈する。242は外面下部の器面がやや荒れている。内面にはミガキが密に施され、外面には口縁部上部にナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒と金雲母がみられ、色調は内面と外面上半が黒色を呈し、外面下半は明赤褐色を呈する。243は畿内系黒色土器B類の口縁部である。上半はナデ調整により若干外反し、端部内面には比較的明瞭な沈線がみられ、内外面ともに横位のミガキが密に施される。胎土は金雲母を少量含み、色調は内外面ともにオリーブ黒色を呈する。

244～248は底部であり、輪高台が貼り付けられる。244は復元底径7.2cm、高台の高さは0.8cmを測る。高台は断面形態が三角形状を呈し、底部から直線的に開く。外面にはナデ調整が施され、見込みにはミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面が黄灰色、外面は橙色を呈する。245は復元底径5.8cm、高さ0.4cmの高台をもつ。高台は底部から直線的に開き、断面形態は三角形状を呈する。外面にはナデ調整が施され、見込みには非常に緻密なミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母も多量みられる。色調は内面が黒色、外面は明赤褐色を呈する。246は復元底径8.0cm、高さ0.4cmの高台をもつ。高台は底部から直線的に開き、断面形態は三角形状を呈する。外面にはナデ調整がみられ、見込みには平行線状のミガキが密に施される。胎土は金雲母が多量にみられ、色調は内面が黒色、外面はにぶい赤褐色を呈し、高台内面は灰褐色を呈する。247は復元底径6.0cm、高さ0.6cmの高台をもつ。高台は「ハ」字状に開き、断面形態は台形状を呈する。外面にナデ調整が施され、見込みにはミガキがみられる。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられ、色調は内面が黒色、外面はにぶい褐色を呈する。248は復元底径8.8cm、高台の高さは1.2cmを測り、やや高い。高台は「ハ」字状に開き、断面形態は三角形状を呈し、貼り付けは丁寧である。外面にはナデ調整、見込みにはミガキが施される。胎土は金雲母が多量にみられ、色調は内面が黒色、外面は明赤褐色を呈し、高台内面はにぶい褐色を呈する。

242～245、247はⅡ－1層、240、241、246、248はⅡ－2層、239はⅢ層上面から出土している。

2. 各トレンチの成果

239～242、244～248は10～11世紀、243は11世紀に比定される。

緑釉陶器（図22） 249は椀であり、復元底径7.9cm、高台の高さは0.5cmを測る。内面の見込み付近には1条の圈線がめぐる。高台は「ハ」字状に開き、内面端部に段を有する有段貼り付け輪高台である。底部外面には回転糸切り痕がみられる。胎土は精緻であり、色調は灰色を呈する。釉調は濃緑色を呈し、全面施釉されている。また、二次的被熱により内外面ともに大部分が変色している。焼成は硬質である。高橋照彦氏の有段輪高台 y 2〔高橋1995〕に該当し、近江産であると考えられる。4号遺構から出土し、時期は10世紀後半に比定される。

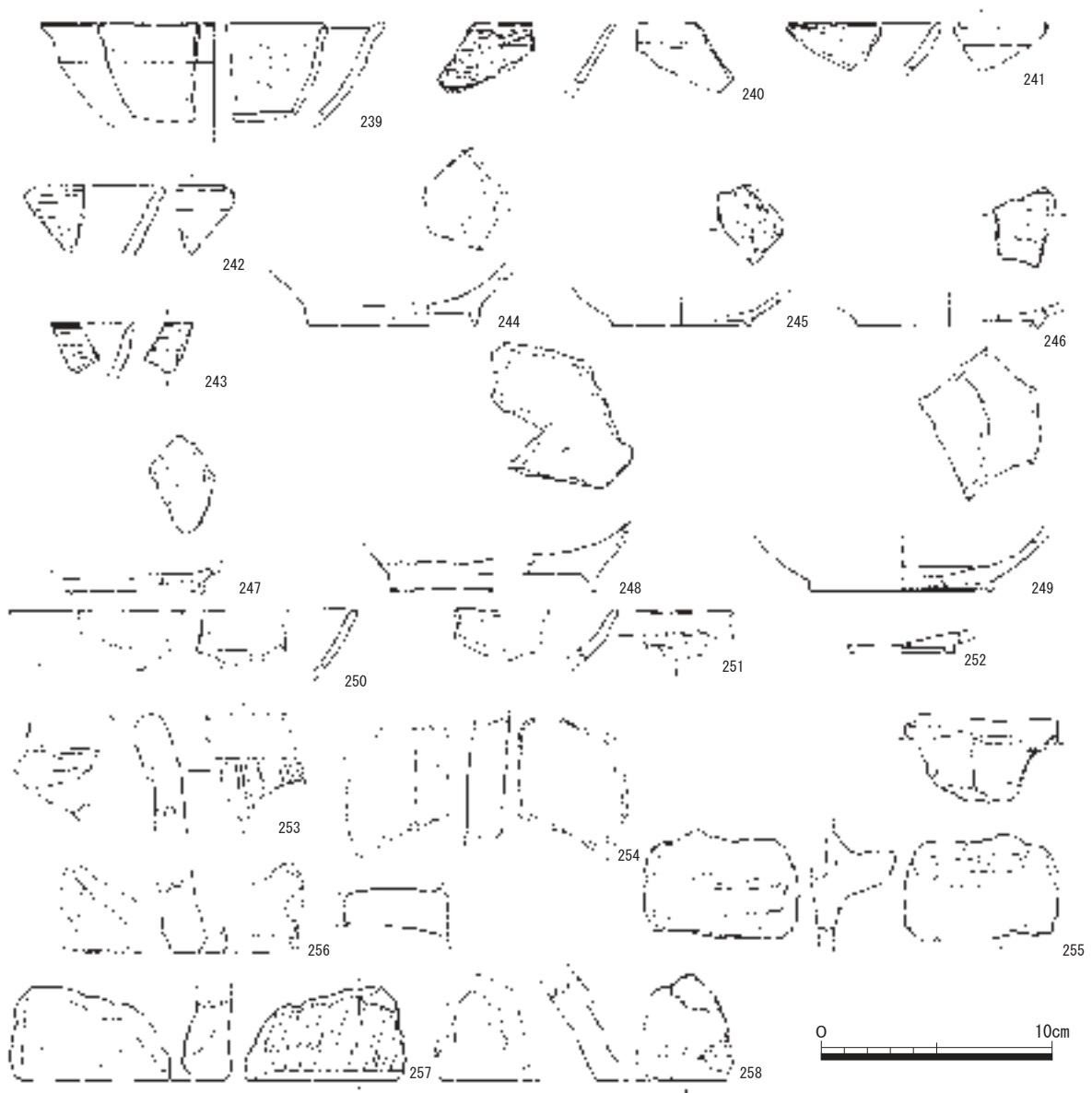


図22 II区17トレンチ出土土器2

吉備型土師器（図22） 250は碗の口縁部であり、復元口径15.0cmを測る。やや内湾気味に外方へ開き、上半はナデ調整により若干外反する。内面にはミガキが施され、外面にも数本ミガキが確認される。胎土は1mm程度の石英粒と1mm以下の角閃石粒を少量含み、色調は内面が灰白色、外面はにぶい黄橙色を呈する。山本編年Ⅱ期に該当する〔山本悦1993〕。Ⅱ－1層から出土し、12世紀後半に比定される。

瓦器（図22） 251は楠葉型瓦器碗の口縁部である。内湾しながら開いたのち、上半はナデ調整により外反する。口縁端部内面には沈線がみられる。内面には横位のミガキ、外面には斜位のミガキが密に施される。胎土は金雲母が少量みられ、色調は内面が灰色、外面はオリーブ灰色を呈し、焼成は良好である。楠葉Ⅰ－2～Ⅱ－1期に比定される〔橋本2018〕。252は和泉型瓦器碗の底部であり、復元底径4.6cm、高さ0.4cmの高台をもつ。高台は貼り付け輪高台であり、「ハ」字状に開き、断面形態は台形状を呈する。外面にはナデ調整、見込みにはミガキが施される。胎土は精緻であり、色調は内外面ともに黄灰色を呈し、焼成は良好である。和泉Ⅲ－1期に該当する〔橋本2018〕。

いずれもⅡ－1層からの出土であり、251は11世紀後半～12世紀前半、252は12世紀後葉～13世紀初頭に比定される。

土製品（図22） 253～258は移動式カマドであり、いずれも焼成は良好である。

253は掛口部であり、内面は上半に横位のハケメ、下半にはナデ調整が施される。外面は上半にナデ調整、下半には斜位のハケメがみられる。胎土は2mm以下の長石粒を含み、色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい赤褐色を呈する。

254は底部であり、端部が欠損している。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は2mm以下の長石粒を含み、色調は内面が灰褐色、外面はにぶい褐色を呈する。

255は把手であり、内外面ともにナデ調整が施され、把手の上面には一部ハケメがみられる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。

256～258は裾部であり、接地面は面取りされ、平坦面がみられる。256は内面にナデ調整、外面にはナデ調整と粗いハケメが施される。胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに褐灰色を呈する。257は内面にナデ調整、外面には縦位の粗いハケメが施される。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともに灰褐色を呈する。258は内面にナデ調整、外面には粗い横位のハケメが施される。外面上部には貼り付けの痕跡が確認される。胎土は1mm程度の長石粒を含み、色調は内面が灰黄褐色、外面はにぶい黄褐色を呈する。

256、257はⅡ－2層、253～255はⅡ－4層から出土している。258は出土層位不明である。いずれも10～11世紀に比定される。

（伴井嘉正）

2. 各トレンチの成果

(3) 18トレンチ (図23)

第11次調査までに明らかになった縄文時代包含層の広がりを確認するために、第12次調査において設定された。5トレンチの南に接し、17トレンチの西側に設定された南北4.2m、東西2.0mのトレンチである。なお、図23は第13次調査で発掘した部分のみ図示している。第13次調査ではⅡ-3層からⅣ-2層まで順に掘り下げた後、トレンチ北東部に幅50cmの先行トレンチを設定してⅣ-4層上面を検出した後、掘り下げを停止した。今回の調査ではⅡ-3層からⅣ層までを掘り下げたが、壁面清掃時に新たな所見が得られたため、改めて層全体の説明を行う。

土層は表土を含めて大きく4層に分かれる。Ⅰ層は表土であり、2層に分けられ、Ⅰa層はにぶい黄褐色を呈し、細礫～極粗粒砂を含む粗粒砂を主体とし、層厚は15～20cmを測る。Ⅰb層は暗赤褐色を呈し、小礫～中礫大の円礫・亜角礫を含む粗粒砂を主体としており、層厚は10～15cmである。西壁ではⅠa層～Ⅱ-1層にかけて攪乱坑が検出された。Ⅱ層は4層に分かれ、Ⅱ-1層は黒褐色を呈し、小礫～中礫大の角礫を含む粗粒砂主体である。完形率の高い貝類を多く含む。層厚は10～20cmであり、Ⅰ層～本層までは南から北へ2～3度ゆるやかに傾斜している。Ⅱ-2層は暗褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を含む粗粒砂を主体とし、粘性がある。Ⅱ-3層は暗褐色を呈し、細粒砂～中粒砂を含む粗粒砂を主体とする。粘性はなく、層厚は5～10cmを測る。調査区南側で厚みを減じ、途切れる箇所もある。第12次調査ではⅡ-3層の上面で1号墓が検出された。Ⅱ-4層は黒褐色を呈し、粗粒砂～極粗粒砂を含む中粒砂を主体とする。層厚は5～10cmを測る。Ⅱ-3層～Ⅱ-4層にかけて、マンガンだまりが検出されており、水がたまる環境があったものと考えられる。マンガンだまりは中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とし、赤褐色、黒褐色、にぶい黄褐色の土をブロック状に含む。Ⅲ層は明黄褐色を呈し、中礫～大礫を含む粗粒砂主体である。層厚は10～15cmを測り、南から北に向かって厚みを増しており、炭化物を含む。本層からは脚台式製塩土器がトレンチ全体に面的に出土しており、Ⅱ-4下層～Ⅲ層の層境にかけて多く出土している。

Ⅳ層は4層に分かれ、いずれも花崗岩の風化砂層である。Ⅳ-1層はにぶい黄褐色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂を主体とする。5mm大の亜角礫を含み、炭化物を少量含む。層厚は25～37cmであり、南から北に向かってゆるやかに傾斜している。Ⅳ-2層は明黄褐色を呈し、中粒砂を多く含む粗粒砂を主体とする。Ⅳ層では縄文土器、石器が出土しており、Ⅳ-1層ではトレンチ全体から遺物が検出される。Ⅳ-2層では出土量が激減し、その分布は北側に集中する。Ⅳ-3層はにぶい黄橙色を呈し、粗粒砂を多く含む中粒砂主体である。Ⅳ-4層はにぶい黄橙色を呈し、極粗粒砂を多く含む粗粒砂主体である。Ⅳ-3層以下は無遺物層である。

各層の主な出土遺物は以下の通りである。Ⅱ-3層では製塩土器、土師質土器、須恵器、灰釉陶器、移動式カマド、Ⅱ-4層では古式土師器、製塩土器、土師質土器、須恵器、Ⅲ層では古式土師器、製塩土器、Ⅳ層では縄文土器、打製石鏃、剥片、チップが出土した。

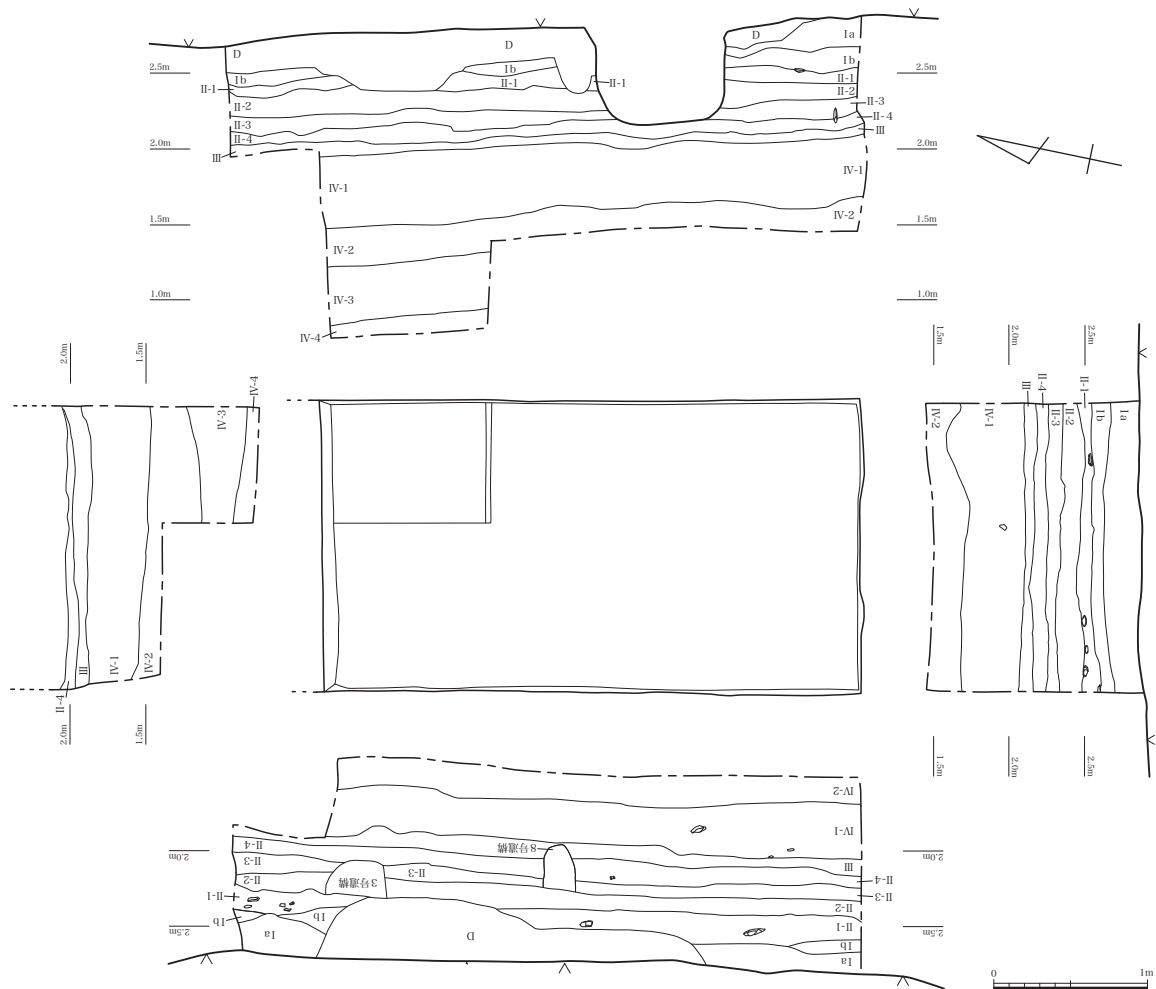
3号遺構

トレンチ西壁北側で検出された円形のピットであり、直径40cm、深さ15cmを測る。Ⅱ-2層に掘

り込まれており、覆土は1層で、黒褐色を呈し、中礫を含む粗粒砂を主体とする。遺物は出土していない。

4号遺構

東側中央付近で検出された円形のピットであり、Ⅱ－4層に掘り込まれている。直径18cm、深さ16cmを測る。覆土は1層で、黒褐色を呈し、粗粒砂を主体とする。遺物の出土はない。



Ia層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂主体。細礫～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性なし。Ib層：暗赤褐色（5YR3/3）粗粒砂主体。小礫～中礫（円礫・亜角礫）を含む。しまりあり。粘性ややあり。Ⅱ-1層：黒褐色（7.5YR3/1）粗粒砂主体。小礫～中礫（角礫）を含む。しまりあり。粘性あり。Ⅱ-2層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を多く含む。しまりあり。粘性あり。3～4cm程度の小礫～中礫をやや含む。貝を多く含む。Ⅱ-3層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂主体。細粒砂～中粒砂を多く含む。しまりあり。粘性なし。Ⅱ-4層：黒褐色（10YR2/2）中粒砂主体。粗粒砂～極粗粒砂を含む。しまりあり。粘性あり。Ⅲ層：明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂主体。中粒砂を多く含む。中礫～大礫を含む。炭化物を含む。しまり、粘性なし。Ⅳ-1層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。5mm程度の亜角礫を含む。炭化物を含む。しまり、粘性なし。Ⅳ-2層：明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂主体。中粒砂を多く含む。しまり、粘性なし。Ⅳ-3層：にぶい黄褐色（10YR6/3）中粒砂主体。粗粒砂を多く含む。しまりあり。真砂土層。Ⅳ-4層：にぶい黄褐色（10YR6/4）粗粒砂主体。極粗粒砂を多く含む。真砂土層。D：攪乱。オリーブ褐色（2.5Y4/6）中粒砂主体。粗粒砂を含む。しまりあり。3号遺構：黒褐色（10YR2/2）粗粒砂主体。中礫を含む。しまりあり。粘性あり。8号遺構：黒褐色（10YR3/2）粗粒砂主体。にぶい黄褐色（10YR5/4）ブロックを含む。しまり弱い。粘性なし。

図23 Ⅱ区18トレンチ平面図・土層図

2. 各トレンチの成果

5号遺構

東側中央付近で検出された円形のピットであり、4号遺構の北側に近接する。Ⅱ－4層に掘り込まれている。直径12cm、深さ10cmを測る。覆土は1層で、灰黄褐色を呈し、暗褐色、褐色粗粒砂ブロックを含む粗粒砂を主体とし、遺物の出土はない。

6号遺構

南側付近で検出された円形のピットであり、Ⅲ層に掘り込まれている。直径15cm、深さ9cmを測る。覆土は1層で、黒褐色を呈する。粗粒砂を含む細粒砂を主体とし、遺物の出土はない。

7号遺構

北側で検出された円形のピットであり、Ⅲ層まで掘り込まれている。直径12cm、深さ8cmを測る。覆土は1層で、黒褐色を呈し、粗粒砂を含む細粒砂が主体であり、遺物の出土はない。

8号遺構

トレンチ西壁中央付近において検出された円形のピットであり、Ⅱ－3層～Ⅲ層にかけて掘り込まれている。直径18cm、深さ30cmを測る。覆土は1層であり、黒褐色を呈し、にぶい黄褐色ブロックを含む粗粒砂を主体としている。遺物は出土していない。

(益田千遥)

出土遺物

縄文時代

縄文土器 (図24・25)

263、264、305はⅣ－2層上面、265、306はⅣ－2層、259～262、266～304、307～311はⅣ－1層から出土した。

259～261は外面に刺突文あるいは短沈線が施される口縁部片で、259、260は口縁端部が肥厚し、低い隆帯の貼り付けとも評価できる。色調はいずれも内外面ともににぶい黄橙色を呈する。259は若干外に開き、端部は丸くおさまる。肥厚部下端に円形の刺突文が施されており、刺突文の幅は約4mmである。刺突文の上縁には施文時に生じたとみられる粘土の隆起が観察される。器厚は5～8mmであり、胎土は3mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉を含む。260は低く、幅広い肥厚帯に、長さ約10mm、幅約2～3mmの不揃いの短沈線が3段施される。刺突文同士の間隔は約6mmで、器厚は3～6mmを測る。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉を多量に含み、3mm程度の石英粒もみられる。261は口縁端部がやや尖り気味におさまる。約10mmの斜位の楕円形刺突文が施される。刺突文の頭部の間隔は約5mmである。厚さは2～4mmと薄手であり、胎土は精良で、1mm以下の長石粒と角閃石粉、雲母粉がわずかにみられる。

262～265は撚糸文土器の破片で、いずれも撚糸の一部がナデ調整と指頭圧痕により消えており、内面はやや平滑に仕上げられる。色調は265を除き、内外面ともににぶい黄橙色を呈する。262は無節Lの撚糸を巻いた絡状体で、器表を引きずって、左上がりの条痕様の文様が施される。撚糸の間隔は1～2mmとやや密である。外面上部には横位の刺突が一つ確認される。厚さは6～7mmを測り、



図24 II区18トレンチ出土縄文土器 1

2. 各トレンチの成果

胎土には1mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉を含む。263、264は同一個体と考えられ、無節Lの縦位の撚糸が施される。撚糸の間隔は1～2mmとやや密で、器厚は4～6mmを測る。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒と金雲母粉がみられる。265は横位の撚糸が密に施される。撚糸原体は無節Rで、撚りは比較的大きい。器厚は7～8mmであり、胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と金雲母粉を含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面は褐灰色を呈する。

266～268は口縁部片である。266は肥厚した口縁部が内湾しながら開き、端部はナデ調整により平坦である。外面には斜位の貝殻条痕が施され、内面に横位の貝殻条痕が密に確認される。口唇部に接するように刺突文が1段施され、刺突が口唇部側から行われたためその下縁が隆起している。刺突文の幅は約5mmであり、相互の間隔は約4～5mmを測る。胎土は2mm以下の長石粒と石英粒を少量含み、角閃石粉と金雲母粉がみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。267は下端部で内側に大きく屈曲もしくは内湾すると考えられる。直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整と指頭圧痕が明瞭にのこる。端部はわずかに肥厚し、その下端にやや半円形の刺突が1段施される。刺突の幅は約4mmを測り、刺突同士の間隔は3～7mmと一様ではない。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と雲母粉を含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。268はわずかに内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。口唇部には棒状工具による刻目が施される。口縁端部は肥厚し、その下端に幅約4mmの刺突文が1段施される。内外面にはナデ調整と指頭圧痕がのこる。胎土は精良で、1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒が少量みられ、色調は内外面ともににぶい橙色である。269は胴部片であり、上縁に肥厚部をのこし、内外面には接合痕が明瞭にみられる。肥厚部の下端には刺突が観察され、その幅は約4mmである。内外面ともにナデ調整と指頭圧痕がのこる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉と金雲母粉を少量含む。色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい黄褐色を呈する。

270は稜のはしる微突帯が略三角形に貼り付けられ、地文に節の大きい単節LR縄文が施される。内面はナデ調整によって平滑に仕上げられる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、赤色頁岩粒を含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色である。

271、272は口縁部片で、端部にナデ調整による平坦面がみられる。半裁竹管状の工具による横位の押引文が施され、その幅は271が18mm～19mm、272が7mmである。271は縄文が施文され、原体は単節LR縄文とみられる。胎土は271が4mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉を多量に含み、272は精良で、3mm程度の長石粒、角閃石粒と雲母粉がみられる。色調は271の外面が橙色、内面はにぶい橙色で、272は外面が橙色、内面はにぶい黄橙色である。273～281は外面に縄文が施文される胴部片で、273～276は同一個体の可能性がある。縄文原体は273～279が単節LR、280、281は単節RLと考えられる。279は外面が指頭圧痕により器表面が大きく波打ち、文様の状態から粘土が柔らかい段階に施文されたものとみられる。胎土にはいずれも長石粒、石英粒、雲母粉を含み、273～276には金雲母粒もみられる。

282は胴部片で、器表面は摩耗している。縄文あるいは撚糸文が施され、内面には縦位の条痕が観察される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、雲母粒、赤色頁岩粒がみられ、色調は外面が橙色、

内面はにぶい橙色を呈する。283、284は平底の底部片であり、283の復元底径は7.6cmである。外面はやや平滑で、二次的被熱の痕跡が認められ、内面にナデ調整がのこる。胎土は金雲母粉を多量に含み、3mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒もみられる。色調は外面が褐色、内面はにぶい橙色を呈する。284は復元底径が4.0cmを測り、わずかに上げ底気味であり、胴部に向けて直線的に立ち上がる。胎土は角閃石粉が多量にみられ、3mm以下の長石粒、石英粒、雲母粉も含む。色調は外面が橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

285～290は短沈線が施される土器群で、285～287は口縁部片、288～290は胴部片である。285、286は端部にナデ調整による平坦面をもつ。斜位の条痕文を地文とし、右下がりの斜位の短沈線が2段にわたって施される。短沈線の幅はいずれも3～4mmである。短沈線同士の間隔は285が縦3～5mm、横3～4mmで、286が縦と横ともに3～4mmを測る。285は外面の下部に短沈線が施された可能性がある。胎土は285が1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒を少量含み、286は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、赤色頁岩粒が少量みられる。色調は285が内外面ともににぶい黄橙色、286の外面が灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。287は波状口縁であり、口縁部は大きく開き、端部は丸くおさまる。幅約4mmの横位の沈線がめぐらされたのち、それに接するように幅約3mmの縦位の短沈線が施される。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色である。288は幅約5mmの短沈線が横位に2段施され、短沈線の間隔は約11mm程度である。内面は外面の沈線施文によって波打つ。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、雲母粒、赤色頁岩粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。289は2段の短沈線を横位に施し、短沈線の幅は3～5mm、間隔は縦約6mm、横約3mmを測る。外面が内面のナデ調整と指頭圧痕によってやや突出する。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、色調は内外面ともににぶい橙色である。290は斜位の貝殻条痕が施されたのち、3段の斜位の短沈線が比較的浅く施される。短沈線の幅、短沈線間の間隔はいずれも3～4mmである。内面には横位と斜位の貝殻条痕が施される。胎土に1mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と雲母粉を含み、3mm程度の長石粒もみられる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は橙色を呈する。

291、292は沈線をのこす胴部片であり、291は幅約4mmの横位の沈線が1条施される。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、5mm程度の長石粒もわずかにみられる。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。292は上下2条の弧状沈線がそれぞれの端でつながっている。沈線は浅く、沈線の幅は2～3mm程度を測る。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒と金雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい橙色である。

293～295の胴部片は、沈線を施したのちに縄文が部分的に施されており、その縄文原体は単節R Lである。またいずれも内面が外面の沈線施文の影響で波打つ。293は丁寧なナデ調整で平滑に仕上げたのち、沈線で渦文が描かれており、沈線の幅は5～6mmを測る。縄文を施したのち、部分的に沈線を引き直した可能性がある。外面には赤色顔料が塗布されている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒と角閃石粉、雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色で、外面の一部は赤褐色を呈する。294は幅約6mmの弧状の沈線が施され、縄文の繊維痕がのこる。縄文は一

2. 各トレンチの成果

部ナデ調整によって消されている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒と雲母粉を含み、色調は外面がにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色である。295は弧状沈線がわずかにのこり、その幅は約6mmである。縄文は方向を変えて施文され、その繊維痕まで観察される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒と金雲母粉が少量みられ、色調は内外面ともににぶい黄色を呈する。

296、297はいずれも口縁部片であり、幅3mm程度の横位の沈線を2条めぐらしたのち、沈線の下端に幅3～4mmの円形の刺突が2～4mm間隔で施される。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、3mm程度の長石粒もみられる。色調は296が内外面ともににぶい赤褐色、297は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色を呈する。

298、299は横位の巻貝条痕をのこす胴部片であり。298は擬縄文で、299は内面にも巻貝条痕がみられる。胎土は298が2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を含み、299は3mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、赤色頁岩粒と雲母粉がみられる。色調は298の外面がにぶい褐色、内面

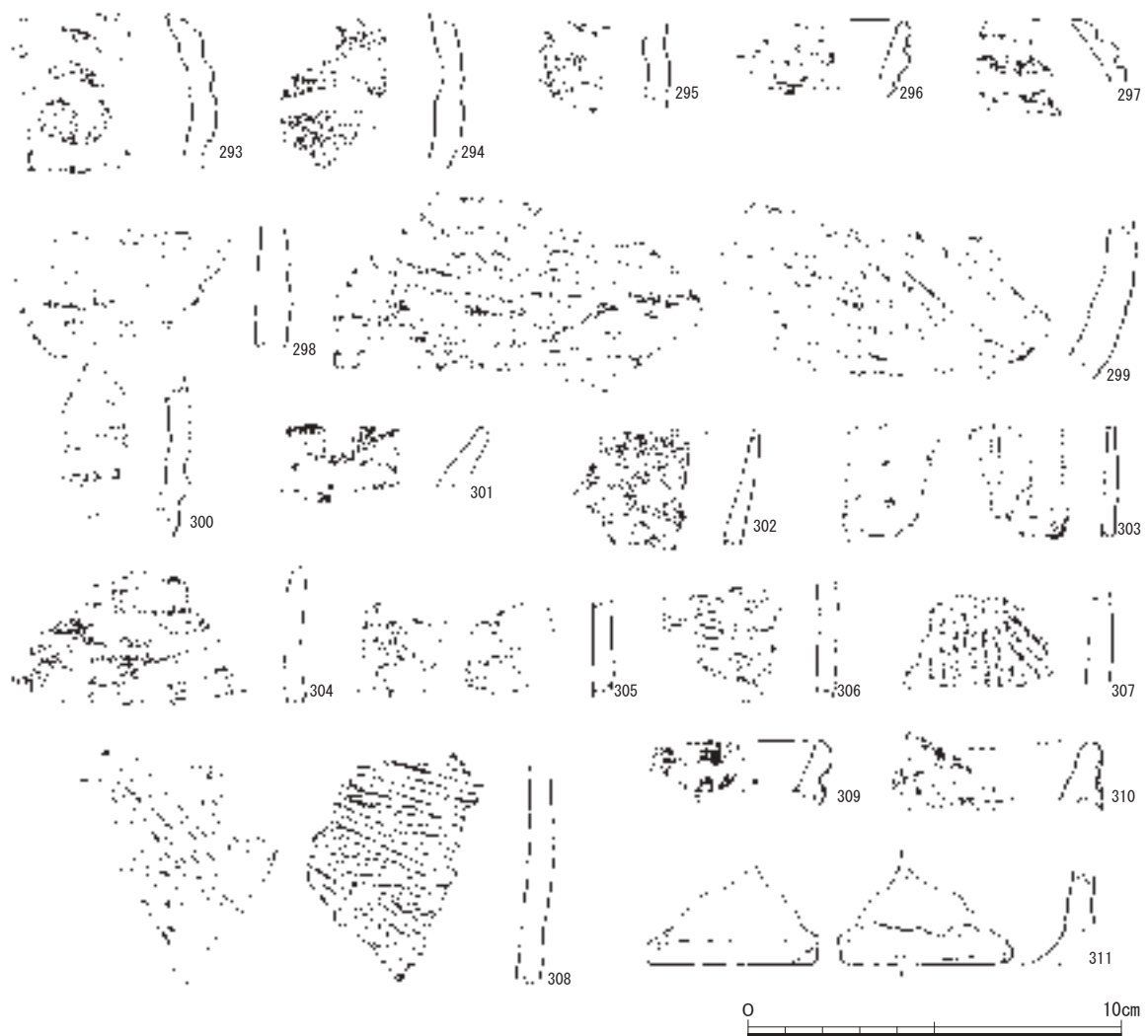


図25 II区18トレンチ出土縄文土器2

はにぶい黄褐色を呈し、299は外面がにぶい黄橙色、内面はにぶい橙色である。300は外面には3条の沈線をのこし、沈線の幅は幅6～7mmで、沈線間は約4mmである。内面は外面の施文の影響を受け波打つ。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒、雲母粉を少量含み、1mm以下の金雲母粒もみられる。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

301～308は無文土器あるいは条痕文土器であり、301、302は口縁部片、303～308は胴部片である。301～306は内外面にナデ調整と指頭圧痕が明瞭にのこる。301は口縁部が大きく外に開き、端部は丸くおさまる。胎土は1mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒と角閃石粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。302は波状口縁であり、やや外に開き、端部は丸くおさまる。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、雲母粉を含み、色調は内外面ともににぶい橙色である。303は内面に縦位の条痕が施され、器厚が2～4mmと薄い。胎土は金雲母粉を多量に含み、1mm以下の長石粒も観察される。色調は内外面ともににぶい黄橙色である。304はやや外反しており、上端部には擬口縁がのこる。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒と雲母粉がみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。305は内面に横位の条痕が施され、胎土は3mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉を含み、1mm以下の金雲母粒もみられる。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は浅黄色である。306は細い植物を束ねた原体により斜位の細い条線が施され、その間隔は密である。胎土は2mm以下の金雲母粒を多量に含み、2mm程度の長石粒、石英粒もみられる。色調は内外面ともににぶい赤褐色を呈する。307は縦位の貝殻条痕ののち、斜位の貝殻条痕が施される。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、赤色頁岩粒を多量に含み、色調は内外面ともに灰黄褐色である。308は縦位あるいは右下がりの斜位の条痕をのこし、内面には条痕が横位ののち、斜位に施されている。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、金雲母粒、赤色頁岩粒がみられ、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

309、310は口縁部片であり、いずれも刺突が施される。309は外方へ開き、端部は丸くおさまる。口縁部は肥厚し、その上端に断面形状が略三角形を呈する右下がりの刺突文が施される。刺突の幅は6～7mm、刺突文同士の間隔は約4mmを測る。内面はナデ調整や指頭圧痕により波打つ。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒と角閃石粉、雲母粉がみられ、色調は外面がにぶい橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。310は波状口縁になると考えられ、端部は丸くおさまる。肥厚し、その両端に竹管状の施文具で刺突が施される。刺突文の幅は約5mmで、刺突文同士の間隔は1～3mmと一様ではない。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒を含み、1mm以下の角閃石粒、雲母粒もみられ、色調は内外面ともににぶい黄色である。

311は底部の一部であり、外面が剥離している。胎土は2mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粒、金雲母粒、赤色頁岩粒を多量に含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。

259～261は隆帯文あるいは擬隆帯上施文の土器群に類似するため、草創期末期～早期初頭が想定される。301～303の薄手無文土器や262～265の撚糸文土器も早期初頭までの時期におさまるものと考えられる。また266～269は彦崎Ⅱ式あるいは月崎下層式、270は船元Ⅰ～Ⅱ式、271、273～281が船元Ⅱ式であり、272は船元Ⅱ式の可能性がある。したがって、266～269が縄文時代前期、270、

2. 各トレンチの成果

271、273～281が縄文時代中期、285～292が縄文時代中期末～後期初頭、293～295が縄文時代後期初頭、296、297が縄文時代後期前半、298、299が縄文時代後期初頭～中葉に比定される。また272、282～284が縄文時代中期の可能性があり、300が縄文時代後期の中でも後出する可能性がある。

(江本晃季)

石器 (図26・表3) 石器は打製石鏃9点、剥片12点 (25.18g)、チップ28点 (3.82g)、その他3点 (0.32g) を検出した。その他は石鏃の破片と考えられる。大型の打製石鏃 (320) が表土層、剥片3点がⅣ－2層出土である以外は全てⅣ－1層からの出土であり、石材は全て安山岩である。

打製石鏃 (312～320) 未製品あるいは破損品である1点 (319) を除き、完成品であり、全て無茎凹基鏃である。長幅比が小さい石鏃 (312～314) と大きい石鏃 (315～318、320) とに分けられる。また左右非対称形という特徴 (312～314) も分類の基準としてあげられる。

312は側縁の一方がわずかに外湾、他方が内湾し、基部の長さも異なっている。313も側縁の一方が直線的、他方はなかほどに挟りを入れて湾曲させている。基部の長さ、幅が異なり、その端部は先鋭で、張り出している。314もわずかではあるが側縁がそれぞれ直線と外湾という対照をみせ、基部の長さ、幅が異なり、その端部は先鋭となっている。

全体形が二等辺三角形に近くなる315は器体の中部よりやや下位で、両側から長い剥離が施され、横断的な平坦面を有している。全長1.37cmと最小の316は基部の挟りが浅く、また基部の両端部は強く開き、四角くおさめられている。摩耗が著しく、稜線は朦朧としている。一方の基部を欠く317は、他の石鏃に比べて最も挟りが深く、基部の端部は幅広で丸くおさまる。318は両側縁がゆるやかに内湾し、幅広の先端部をもつ。表面は器体の中央までおよぼ剥離面で構成されているが、裏面には広く素材面をのこしている。320は全長3.98cmと大型であり、階段状の剥離痕をのこす基部は浅い。両側縁からの調整剥離は浅く、両面ともに素材面を広くのこしている。全て安山岩製であるが、色調が多様であり、316、320は黒みが強く、312～314、318、319は灰色であり、315、317は白みの強い灰色を呈する。

剥片 (321～331) 剥片は図示した例が大きい部類である。325はその上縁が潰れて白くなっており、両極技法で生じた剥片である。また324、326は主要剥離面に両端から生じたリングを観察することができ、これらも両極技法により生じた剥片とみられる。

(朝日岳斗・村上恭通)

古墳時代～中世

脚台式製塩土器 (図27・表4) 脚台式製塩土器はⅡ－3層～Ⅲ層にかけて小片の状態で出土し、総量は0.7kgを測る。脚台の大きさから、すべて柴田氏による型式分類の芸予Ⅲ－3類に相当する〔柴田2015〕。なお、341については底径がやや大きく、Ⅲ－2類に該当する可能性も考えられる。図示可能な資料は10点あり、332～334は口縁部片、335～341は脚台片である。胎土は1mm以下の長石粒を含み、雲母もみられるものが大半を占め、焼成はいずれも良好である。



図26 II区18トレンチ出土石器

2. 各トレンチの成果

表3 II区18トレンチ出土石器計測値

No.	層	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	No.	層位	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)
312	IV-1	石鏃	2.22	1.66	0.41	0.95	322	IV-2	剥片	2.60	2.10	0.50	2.42
313	IV-1	石鏃	1.95	1.53	0.33	0.58	323	IV-1	剥片	2.45	1.50	0.35	1.49
314	IV-1	石鏃	1.73	1.35	0.37	0.57	324	IV-2	剥片	2.70	1.80	0.49	1.83
315	IV-1	石鏃	2.01	1.08	0.25	0.46	325	IV-1	剥片	2.50	2.40	0.50	2.60
316	IV-1	石鏃	1.37	1.00	0.21	0.25	326	IV-1	剥片	3.80	2.80	0.40	1.83
317	IV-1	石鏃	2.07	1.25	0.30	0.77	327	IV-1	剥片	2.20	1.55	0.45	1.20
318	IV-1	石鏃	2.19	1.53	0.26	0.85	328	IV-1	剥片	2.90	1.70	0.27	1.24
319	IV-1	石鏃	1.54	1.71	0.35	0.83	329	IV-2	剥片	2.50	2.30	0.23	1.14
320	表採	石鏃	3.98	2.05	0.45	4.27	330	IV-1	剥片	2.20	1.60	0.50	1.57
321	IV-1	剥片	2.00	2.10	0.39	1.08	331	IV-1	剥片	2.50	2.00	0.29	1.47

口縁部片は厚さ最大2.6mmを測る。332は外面にタタキの痕跡をのこし、それ以外はタタキの痕跡が丁寧にナデ消されている。内面には丁寧なナデ調整が施される。

脚台部はその底径が最小で2.31cm、最大で3.13cmであり（表4）、7点の平均値は2.65cmである。色調は赤褐色を呈し、335～337、340は被熱により脚台底部が白色化している。脚台部はその成形時の指頭圧痕をのこすものが多く、ナデ調整によって仕上げられている。336、337、341は内面に絞りをのこし、整形方法を示している。335、338、339、340は、体部と脚台部の断面に粘土を充填した痕跡が確認される。また、脚台部の端部形状は多様であり、先細りするものと丸くおさまるものなどがある。体部の底部内面は多くが剥落し、粗い面をみせている。

（福本佳織）

古式土師器（図28） 342、343はいずれも甕であり、同一個体の可能性がある。いずれも焼成は良好である。342は口縁部から胴部にかけての破片である。復元口径は15.4cmを測り、口縁は外方に直線的に開き、その端部は丸くおさまる。内面に接合痕がみられるほど雑に張り付けられている。口縁部と肩部接合部の内面には、指頭圧痕と上方へのナデ調整が明瞭にのこる。外面には左上がり

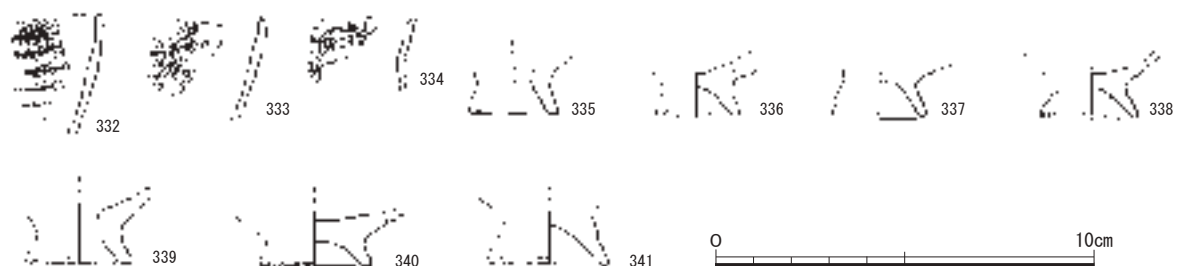


図27 II区18トレンチ出土脚台式製塩土器

表4 II区18トレンチ出土脚台部計測値

No.	層	径 (cm)	高 (cm)	No.	層	径 (cm)	高 (cm)	No.	層	径 (cm)	高 (cm)
335	II-3	2.31	0.95	338	II-4	2.60	1.02	340	II-4	2.90	0.82
336	II-3	2.31	0.88	339	II-4	2.85	1.02	341	II-4	3.13	1.18
337	II-3	2.48	1.15								

のハケメが観察され、胴部下半のハケメはより明瞭で細かい。胴部外面には平坦面が確認できることから無文タタキと判断される。上半には横位のナデ調整がみられる。口縁部内面には、斜位のハケメが施される。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒を多量に含み、5mm以下の長石粒と石英粒、1mm以下の角閃石粒も少量みられる。また赤色粒と金雲母も観察される。色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい黄橙色を呈し、頸部付近の一部はにぶい褐色である。343は頸部から肩部にかけての破片で、頸部はやや鋭く屈曲し、頸部内面には指頭圧痕と上方へのナデ調整による粘土のかき上げ痕が残る。胴部内面には横方向のヘラケズリが施され、外面にはナデ調整と左上がりの粗いハケメがみられる。また外面の一部には平坦面が確認され、無文タタキの痕とみられる。胎土は1mm以下の長石粒と石英粒、角閃石粒を少量含み、金雲母と赤色粒がみられる。色調は内面がにぶい黄橙色、外面はにぶい橙色であり、部分的ににぶい赤褐色を呈する。

342、343はII-4層からの出土であり、布留0式から布留1式の範疇で捉えられる。

土師質土器 (図28) 344は土釜の鏝部である。外面全体には丁寧なナデ調整が施される。胎土は2mm以下の長石粒を少量含み、精緻である。色調は外面上半がにぶい褐色、外面下半は灰黄褐色を呈する。また外面の一部と剥離面は二次的被熱によりにぶい赤褐色に変色している。焼成は良好である。鏝の幅は狭く、直立気味に口縁部～体部へ開くと推測されるため摂津C型の可能性がある〔菅原1983〕。

II-3層からの出土であり、時期は10～11世紀に比定される。

須恵器 (図28) 345は杯、346は椀、347は甕であり、いずれも焼成は良好である。

345は底部であり、復元底径5.5cmを測る。内外面には回転ナデ調整が施され、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内面が灰色、外面は黄灰色を呈する。346も底部であり、復元底径は5.6cmである。内外面ともに回転ナデ調整が施され、底部外面には回転糸切りの痕跡がみられる。胎土は精緻で、1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに底部付近が褐灰色であり、体部に近づくにつれて灰白色を呈する。東播系須恵器の可能性はある。

347は胴部であり、外面には3mm程度の格子目タタキ痕が密にみられる。内面には強いナデ調整と指頭圧痕がのこり、当て具痕も確認される。胎土は精緻で、1mm以下の長石粒を少量含む。色調は内面がオリーブ黒色、外面は暗灰色を呈する。器壁が薄く、外面に格子目タタキが施されていることから9～10世紀の十瓶山窯須恵器の可能性¹⁾がある。

347はII-3層、345、346はII-4層から出土している。345は古代後半、346は12世紀、347は9

2. 各トレンチの成果

～10世紀に比定される。

灰釉陶器（図28） 348は灰釉陶器の底部であり、復元底径6.0cm、高さ0.6cmの三日月状高台が貼り付けられる。外面には全体に釉が掛けられ、底部外面の中央には釉の付着がみられる。内面も施釉されているが、見込みには釉が掛けられていない。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。内外面ともに回転ナデ調整が施される。胎土は精緻で、色調はにぶい黄色を呈する。美濃産であり、O-53窯式期と考えられる²⁾。

Ⅱ-3層から出土しており、10世紀後半に比定される。

土製品（図28） 349は移動式カマドの裾部から底部にかけての破片である。裾部の設置面には平坦面がみられる。底部は体部に貼り付けられ、内外面ともにナデ調整が施され、指頭圧痕もみられる。端部には面が認められる。体部内外面にはナデ調整や指頭圧痕により凹凸がみられる。胎土には1mm以下の長石粒を多量に含み、赤色粒と金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面はにぶい褐色を呈し、一部二次的被熱の痕跡とみられる。

Ⅱ-3層から出土しており、10～11世紀に比定される。

製塩土器（図29） 350～360は手捏ね成形、361、362は型作り成形の可能性がある。なお、傾き

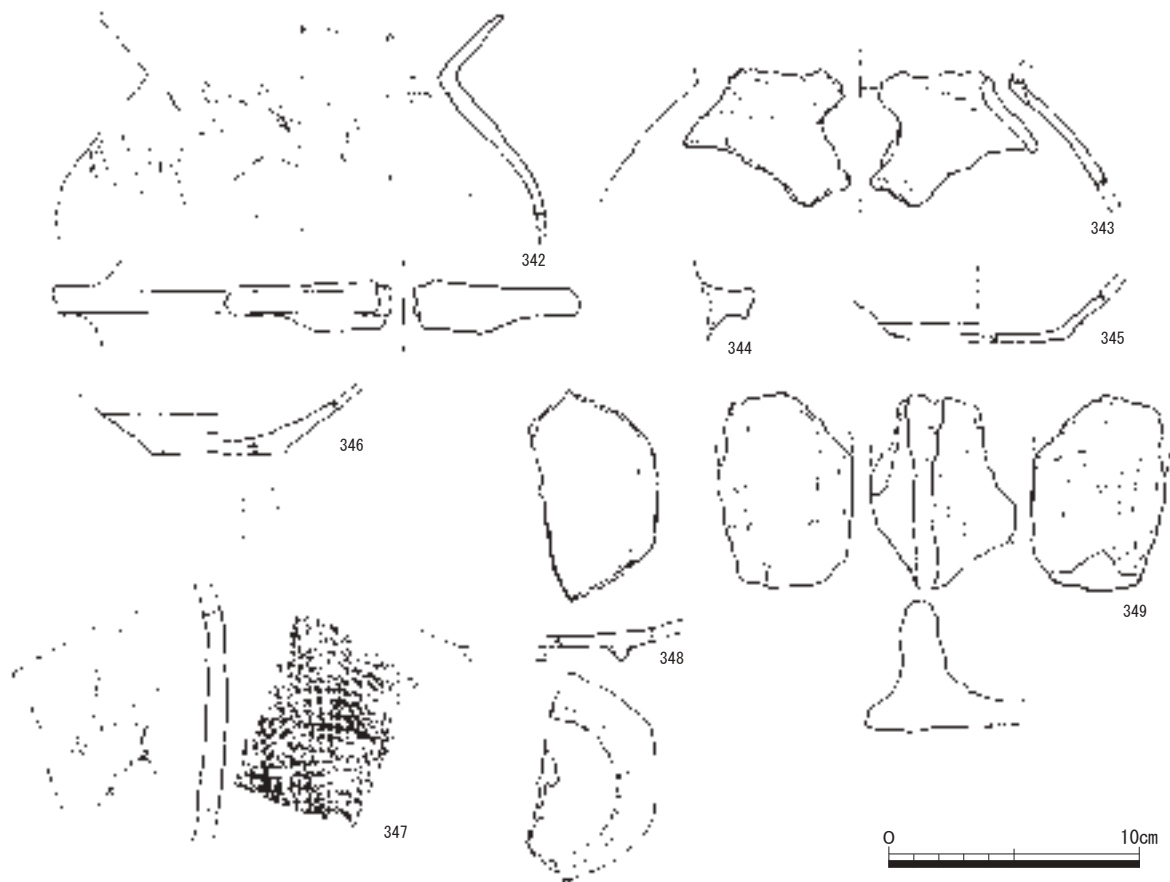


図28 Ⅱ区18トレンチ出土土器

が推測できないものは直立させて表している。焼成は350～363がいずれも良好であり、363はとくに堅緻である。いずれも赤色化などの色調の部分的変化や内外面の荒れがみられ、二次的被熱痕と考えられる。

350～362は口縁部である。口縁部はやや直立気味のもの、やや内湾しながら外方へ開くもの、直線的に外方へ開くものがある。350はわずかに内湾し、端部はやや面的である。内面は上半に横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。内外面ともに荒れており、胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。351は強く内湾しながら立ち上がり、端部は丸みを帯びる。内面は横位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともににぶい黄褐色を呈する。352はやや直線的に立ち上がり、端部はやや尖り気味である。内面は口縁部に強いナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。内外面ともに小さなひび割れが認められ、胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内面がにぶい黄色、外面はにぶい黄橙色を呈する。353は直線的に立ち上がり、端部はやや尖り気味である。内面はナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。外面はやや荒れており、胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、金雲母もみられる。色調は内面が暗灰黄色とにぶい橙色、外面は灰黄色を呈する。354は口縁端部がやや尖り気味で、端部内面には粘土のヨレがみられる。内外面ともに指頭圧痕が認められる。内外面ともにやや荒れており、胎土は1mm以下の長石粒を含む。色調は内外面ともに暗灰黄色であり、外面は部分的に黄灰色を呈する。355、356は口縁端部に面取りがみられる。355の内面はナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。外面はやや荒れており、胎土は2mm以下の長石粒を多量に含み、金雲母もみられる。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。356は内外面ともにナデ調整の可能性が高く、外面には細かなひび割れがみられ、内外面ともにやや荒れている。胎土は3mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともに灰黄褐色を呈する。357、358は直線的に立ち上がり、357の端部は平坦な部分と丸みを帯びる部分がみられる。内面は横位のナデ調整がみられ、外面には指頭圧痕が認められる。外面には小さなひび割れがみら

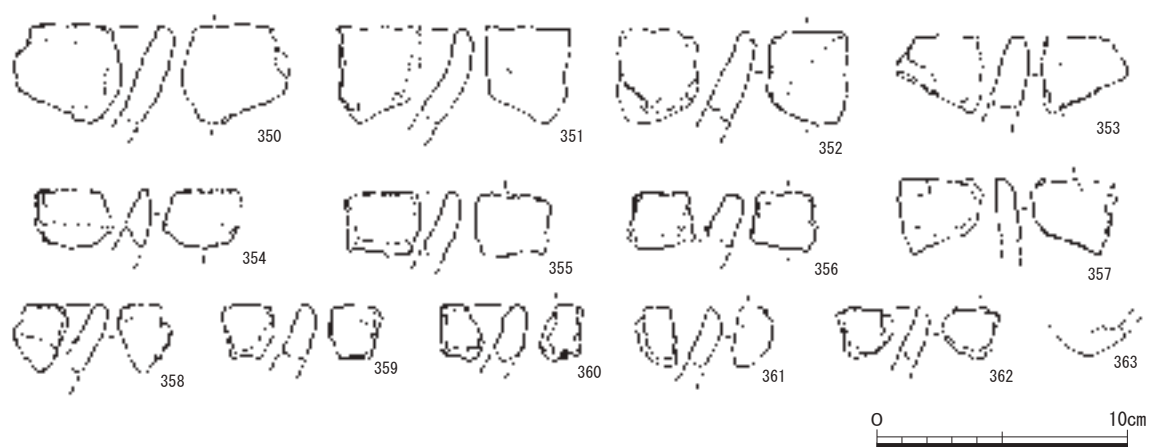
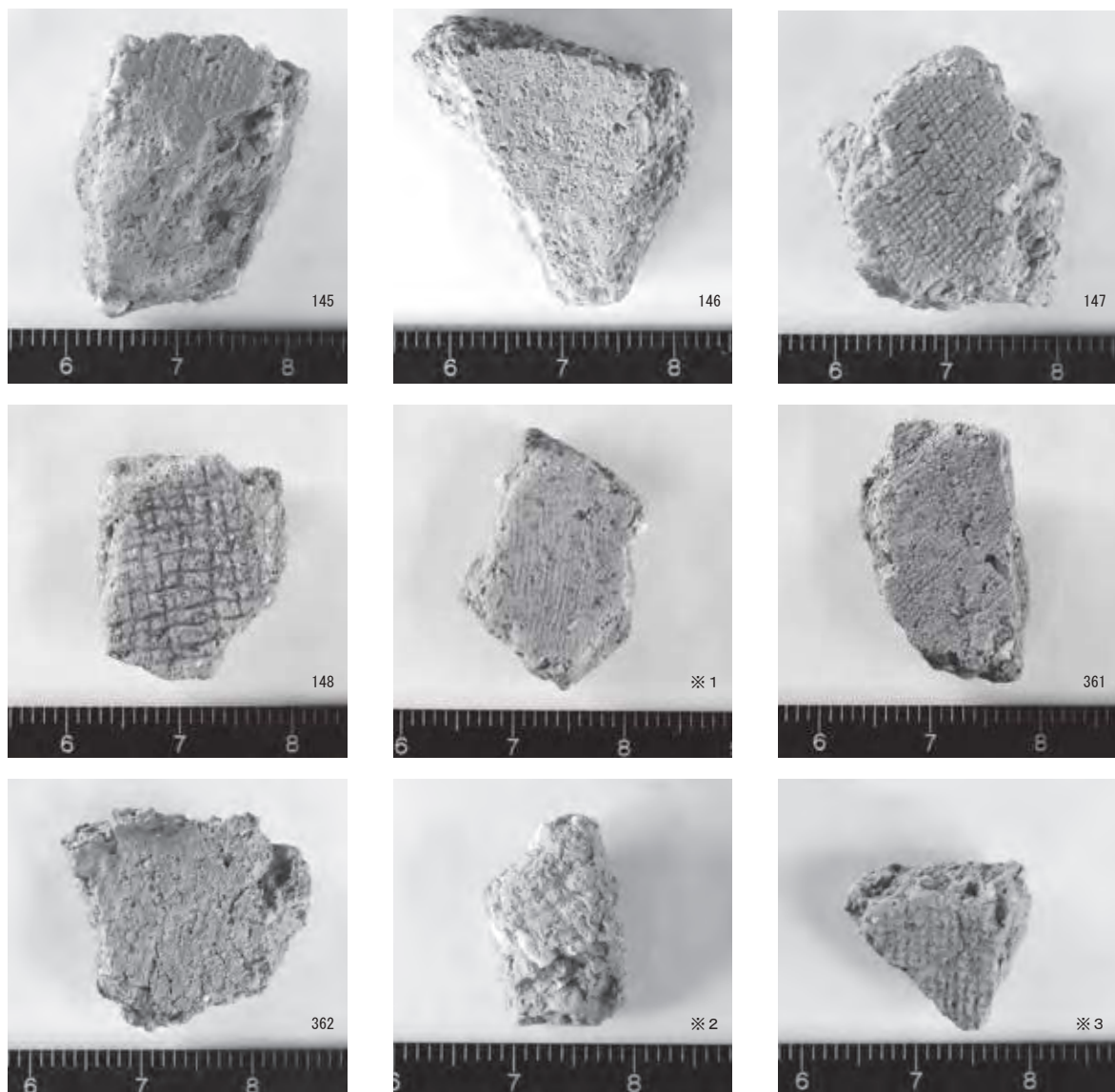


図29 II区18トレンチ出土製塩土器

2. 各トレンチの成果

れ、やや荒れている。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい黄褐色、外面はにぶい褐色を呈する。358の端部は丸くおさまる。厚さはやや薄く、8mm程度を測り、内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は1mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられる。色調は内面がにぶい橙色、外面は灰黄褐色を呈する。359は口縁端部にやや丸みを帯びる部分と面的な部分がみられる。内面に横位と斜位のナデ調整が施され、外面には指頭圧痕が認められる。外面にはひび割れがみられ、やや荒れている。胎土は2mm以下の長石粒を含み、金雲母もみられ、色調は内外面ともににぶい褐色を呈する。360は端部に凹みが観察され、内外面ともにナデ調整の可能性が考えられる。輪積み痕がみられ、胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。



※は実測図未掲載

145、146、147、148、※1：Ⅱ区12トレンチ 361、362、※2、※3：Ⅱ区18トレンチ

写真3 製塩土器内面の布目痕拡大写真

361は口縁端部が面取りされ、内面には布目痕がのこり、外面はナデ調整が施される。胎土は1mm以下の長石粒を含み、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。362は口縁端部が内側へわずかに折れ、面取りされる。内面は非常に細かい布目痕がのこり、外面にはナデ調整が施されている。内外面ともに細かいひび割れがみられ、やや荒れている。胎土は1mm以下の長石粒を少量含み、色調は内外面ともににぶい赤褐色であり、外面は部分的に褐灰色を呈する。

363は尖底を呈する底部である。内面はナデ調整、外面には指頭圧痕が認められる。胎土は3mm以下の長石粒と石英粒を含み、色調は内面がにぶい褐色、外面はにぶい褐色と褐灰色を呈する。薄手かつ尖底という特徴から「倉浦式土器」の可能性が高い。

350、351、353、355、356、358、362はⅡ－3層、352、354、357、359～361、363はⅡ－4層から出土した。いずれも9世紀代に比定される。

(益田千遥)

3. 小結

第13次調査では、第12次調査の18トレンチではじめて発見された古代製塩土器を含むⅡ－5層の広がり进行を明らかにすること、そして縄文時代の包含層であるⅣ層、とりわけその下層であるⅣ－2層の遺物相を把握することを目的とした。

調査の結果、18トレンチの西に接して設定した12トレンチでは、上層で製塩土器の出土は認められたものの、Ⅱ－5層本体は検出できなかった。しかしⅡ－4層では、報文にあるように一定量の古代製塩土器片が出土しており、その分布が12、18トレンチにあることは間違いない。新たに発見された古墳時代前期、古代の土器を含むⅡ－6層も東側の調査区では確認されていない。一方、12トレンチの西側は全く発掘を行っていないので、古代製塩土器の包含層あるいは古代製塩の痕跡はこの範囲のなかで検出を試みる余地がある。

もう一つの縄文時代包含層に関する目的については、Ⅳ－1層、Ⅳ－2層ともに新たな知見があった。Ⅳ－1層では第12次調査までにみられなかった前期～後期の土器が加わった。また打製石鏃、剥片、チップ類もこれまでになく多く出土し、安山岩に加えて姫島産黒曜石の剥片も2点検出された。片刃の磨製石斧片も新たな発見となった。

そして12トレンチのⅣ－2層では、破片も小さく、出土量は少ないものの、上層で撚糸文土器を、中層以下で肥厚する口縁部に刺突文をもつ土器片を検出することができた。また最下層で単純口縁に2段の刺突文を有する土器片が出土した。したがって今回の調査で刺突文土器、さらには肥厚口縁に刺突文を有する土器の存在を認めることとなった。報文では肥厚口縁として説明しているものの、口縁外面に粘土を貼付していることは間違いなく、それらを隆帯文とすることに大きな齟齬はないであろう。

なお、12トレンチの北側に位置する5トレンチにおいては、その東壁寄りの先行トレンチで、Ⅳ

3. 小結

Ⅱ-2層の中層から複数の無文土器片を検出している。この無文土器は底部が丸平底もしくは丸底が想定され、器壁が約3～5mmと薄く、内外面に指頭圧痕を顕著にのこし、器表の凹凸が著しい。またほとんどが赤褐色や黄橙色を呈している。今回の調査ではこの土器をⅣ-2層で発見することはできなかったが、12トレンチ（42、45）、17トレンチ（187、188）、18トレンチ（302、303）のいずれの調査でもⅣ-1層で検出することができた。とくに187の口縁端部には不揃いながら爪形の刻目が施されており、新たな発見となった。

この縄文包含層のⅣ層はⅡ区の調査ではじめから認識されていたわけではない。宮ノ浦遺跡第7次調査、すなわちⅡ区の第1次調査では、調査区南部に設定した1トレンチ、3トレンチで本層に遭遇していたものの、Ⅰ区での調査で経験した砂層とは弁別せずに掘り下げていた。そこで今回の第13次調査では、各トレンチを約1m四方、再発掘し、Ⅳ層の確認と1、2上下層の確認を行った。その結果、図30のように調査区の南北軸に沿った土層柱状図を作成することができた。3トレンチ南端から2トレンチ北端までの距離は24mである。この図によれば、Ⅳ-1層は9トレンチから、Ⅳ-2層は3トレンチと1トレンチとの間で急激に北への傾斜を強め、4トレンチ内で収束することが分かる。Ⅳ層の供給源、すなわち縄文時代の生活舞台となった埋没丘陵の頂部平坦面は3トレンチ以南となり、調査区南側の道路から住宅地の下にあることが推測される。

なお1トレンチ、3トレンチの再発掘の際、Ⅳ-1層より縄文土器片が出土した（図31）。364、365が1トレンチ、366、367が3トレンチ出土品である。364、365、367は深鉢で、366は浅鉢の可能性もある。364は口縁部片で、口唇部に刻目を付している。口縁部と胴部の境には粘土の積み上げ痕が明瞭にみられ、胴部外面には条痕が施されている。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、角閃

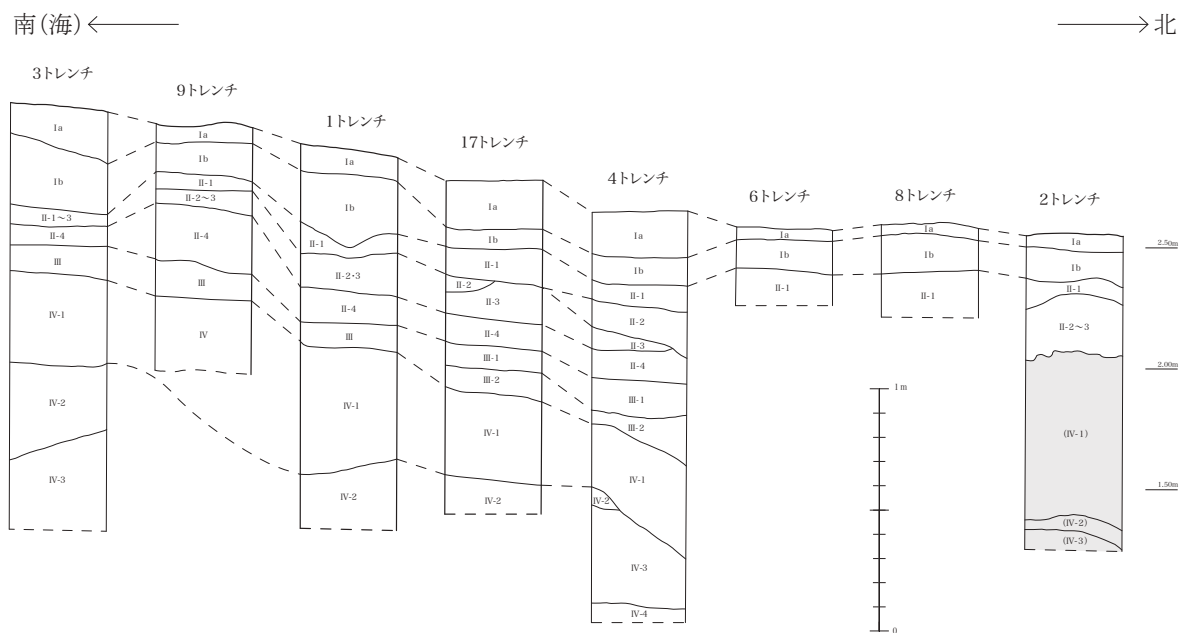


図30 Ⅱ区南北方向の柱状土層図
2トレンチのアミカケ部分は水成堆積層を示す。



図31 II区1・3トレンチ出土縄文土器

石粒、雲母粉を少量含み、色調は内外面ともににぶい橙色である。その他は胴部片であり、365は上部に波状沈線を2条施し、その上には縦位の沈線もみられる。また波状沈線の下には横位の沈線が施文されている。地文は斜位の撚糸と考えられ、原体は無節Lである。胎土は3mm以下の長石粒、石英粒、角閃石粉と雲母粉を含み、色調は外面がにぶい橙色、内面は浅黄色を呈する。366は外面に沈線が施されるが、沈線のモチーフは不明であり、内面は外面の沈線の影響によってわずかに突出する。器表は丁寧なナデ調整によって平滑に仕上げられている。胎土は2mm以下の長石粒、金雲母粒と角閃石粉を少量含む。色調は外面が浅黄色、内面はにぶい黄橙色を呈する。367は外面に貝殻条痕が横位に密に施され、上部には横方向に沈線が1条施文されている。内面にはナデ調整と指頭圧痕がみられる。胎土は5mm程度の長石粒を少量含み、3mm以下の長石粒、石英粒、赤色頁岩粒を多量に含む。色調は外面が浅黄色、内面は灰黄褐色である。364は彦崎Z I式あるいは月崎下層式、365は里木II式と考えられ、それぞれ縄文時代前期、中期後半に比定される。

(村上恭通)

【註】

- 1) 佐藤竜馬氏によりご教示をいただいた。
- 2) 尾野善裕氏によりご教示をいただいた。

【参考文献】

- 柴田昌兎 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎
- 高橋照彦 1995「3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 高橋照彦 2016「平安時代須恵器の研究現状」『土器編年研究の現在と各時代の特徴－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム 発表要旨集 考古学研究会関西例会
- 橋本久和 2018『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社
- 山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第6冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会

3. 小結

綿貫俊一編2016『森の木遺跡発掘調査報告書－東九州自動車道（佐伯～県境間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）－』
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第88集、大分県教育庁埋蔵文化財センター

第4章 自然科学分析

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

舟橋京子・米元史織・田渕朱莉

はじめに

愛媛県上島町宮ノ浦遺跡第12次調査が愛媛大学法文学部考古学研究室と上島町教育委員会によって行われ、中世初期（12世紀前半）に属する人骨が出土した。そこで、九州大学比較社会文化研究院基層構造講座・九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに調査の依頼があり、舟橋が現地に赴き調査の補助を行った。その後人骨が搬送され、九州大学比較社会文化研究院基層構造講座および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて、出土人骨のクリーニングを行った。

分析総数は1体である。人骨の年齢推定は、耳状面はLovejoy〔1985〕、咬耗は枋原〔1957〕を用い、性判定には、Buikstra and Ubelaker〔1994〕を基準に、頭蓋・骨盤を用いて判定を行った。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』（1988）記載の区分に従い、乳児0－1歳、幼児1－6歳、小児6－12歳、若年12－20歳、成年20－40歳、熟年40－60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上（詳細は不明）とする。

1. 出土状況

本人骨は墓境内より一部を除いてほぼ全身が関節状態を保った状態で出土しており、概ね四肢を伸展した伸展葬の状態である。

頭蓋骨および下顎骨は咬合状態であり、顔面を西側やや上方に向けている。右鎖骨は、肩峰端が右下顎角付近から、胸骨端が胸椎右側付近に位置し、長軸が体軸方向と水平な状態になっている。これは、胸骨が軟部組織の腐朽に伴い椎骨左側に落ち込んだ際、右鎖骨の胸骨端側が胸骨に引きずられる形で水平方向に移動したためと推定される。左右自由上肢は回内して躯体の外側に沿った状態で出土している（写真4）。

下肢に関しては、右下肢は中足骨までがほぼ伸展した状態で出土しており、基節骨以下は中足骨直上や中足骨周辺から出土している。ただし、左下肢に関しては、脛骨・腓骨の位置がやや乱れている。左脛骨は脛距関節が外れて遠位側が本来の位置よりも5cm程度跳ね上がった状態で出土している。また腓骨も遠位端が脛骨から離れ、左大腿骨から推定される本来の位置よりも足元側に10cm、内側に10cm程度移動している。一方で、腓骨遠位は距骨と関節状態を保っており、距骨・踵骨以下の中足骨までが内側を上、外側を下にし外旋した状態で出土している。以上のことから、本個体の

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

脛骨は、距骨以下の骨および腓骨と距骨が関節状態を保ちながらも、軟部組織の腐朽が進み、膝関節や上脛腓関節、脛距関節が外れるような段階で、何らかの外力により脛骨遠位部を上方に引き上げられたため、左下肢が外旋した状態になったと推定される。

以上の出土状況から、本個体は、埋葬時には趾骨より先の足先が持ち上がる程度長軸方向にやや狭隘な木棺内に埋葬されていたものが、軟部組織の腐朽が進んだ過程で、何らかの攪乱を受けたことが推定される。また、本個体は非常に保存状態が良好にもかかわらず動かされている脛骨遠位内果が2cm程度削られており、他にも下肢の中で最も垂直方向に高さのある恥骨付近も左右ともに遺存していない。これらの人骨破断面の海綿質には土がしっかりと詰まっており調査以前の土中埋没時にはすでに破損していたと推定される。さらに内側楔状骨の足底側には前頭方向に直径3mm程度



写真4 宮ノ浦遺跡の人骨出土状況

の穿孔がみられ、仰臥伸展葬で埋葬されていた本個体の場合、地面とは水平方向に力が加わったと推定される。したがって、これらの人骨の損傷も左脛骨の移動が古い時期の攪乱を示す証左となると考える。

なお、本個体に伴い、刀子2点と土師器の杯が1点出土している。刀子は体軸方向と平行にし、いずれも左右の前腕直下に置かれた状態で出土している。土師器に関しては左膝部外側に置かれていたと推定される。

2. 人骨所見

(1) 保存状態

本個体の保存状態は非常に良好である。頭蓋は大後頭孔付近を除いてほぼ完存している。歯牙も残存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

	×	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	
○	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

(○歯槽開放、×歯槽閉鎖、／欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c齲歯 以下同様)

歯牙咬耗度は柝原〔1957〕の2度b～3度である。

軀幹骨は、肋骨が左右12本ずつ、椎骨も頸椎7点、胸椎12点、腰椎5点・仙骨・尾骨が遺存している。

上肢骨は左右鎖骨・肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨が遺存している。また、小菱形骨・大菱形骨・舟状骨・有頭骨・有鉤骨・三角骨・月状骨第1－5中手骨が遺存している。左右指骨も一部を除いてほぼ完存している。

下肢骨は左右寛骨の恥骨を除いた部分および左右大腿骨、左右膝蓋骨、左右脛骨、左右腓骨の近位端を除いた部分が遺存している。また左右距骨・踵骨・舟状骨・立方骨・内側楔状骨・中間楔状骨・外側楔状骨および第1－5中足骨も遺存している。左右の趾骨も一部を除いてほぼ完存している。

(2) 性別・年齢

性別に関しては、頭蓋骨の眼窩上隆起及び外後頭隆起がやや発達しており、乳様突起も発達していること、寛骨の大坐骨切痕角も小さいことから男性と判定される。年齢に関しては、耳状面及び柝原の咬耗度より成年後半から熟年前半と推定される。

(3) 特記事項

下顎右第2大臼歯にC3齲歯がみられる。下顎左第3大臼歯が近心傾斜状態である。左上顎第1大臼歯は過度の咬耗で歯髓腔が露出しており、歯根先端部にはこれに起因すると推定される根尖病巣が認められる。

上顎中切歯および下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。

(4) 形質的特徴

① 頭蓋 (表5～7)

脳頭蓋に関しては、最大長は比較群の中世人中最も値が小さく、比較群中最も小さい値を示すえびの盆地古墳時代人と同程度の値である。最大幅に関しても、中世人比較群の中では小さく、その中でも材木座遺跡および吉母浜中世人と近似した値である。頭長幅示数は76.8で中頭型であり、尾窪遺跡中世人、福岡平野・三国丘陵・遠賀川流域・中津・佐賀平野古墳人、山口・北部九州・大友弥生人と同程度の値を示す。

顔面頭蓋に関しては、頬骨弓幅は比較中世人中最も大きく、比較群中最も大きい津雲・吉胡縄文人や北部九州弥生人よりも大きい値を示す。中顔幅に関しても比較中世集団中最も値が大きく、玉名平野遺跡出土古代人および北部九州の古墳人(福岡平野三国地域・遠賀川流域・筑後・京都平野・中津平野)、北部九州・大友・西北九州弥生人に近い値を示す。顔高及び上顔高は中世吉母浜人および日田・玖珠盆地古墳人と近似した値を示し比較群中では中間的な値である。顔示数は、コルマ

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

ンの顔示数が78.5で低顔－過広顔型、ヴィルヒョウの顔示数が112.5で低顔型、コルマンの上顔示数が46.3で低上顔－広上顔型、ヴィルヒョウの上顔示数が66.3で低顔型である。コルマンの顔示数は玉名平野古代人に近い値であり、低顔で知られる西諸県地域・えびの盆地古墳人および津雲・吉胡縄文人よりも低顔傾向を示す。これは、本個体の顔高が中世比較集団と同程度であるのに対し、頬骨弓幅が比較群中最も大きいことに起因していると考えられる。ヴィルヒョウの顔示数は材木座や尾窪遺跡中世人、福岡平野三国地域・遠賀川流域・筑後・肥後・えびの盆地古墳人、西北九州弥生人と同程度の値を示す。コルマンの上顔示数は由比ヶ浜南（集積）中世人、肥後・西諸県地域・えびの盆地古墳人、大友弥生人、津雲・吉胡縄文人に近い値を示す。ヴィルヒョウの上顔示数は関東室町・材木座遺跡中世人、福岡平野三国地域・遠賀川流域・玖珠盆地日田盆地・肥後・えびの盆地古墳人、大友・西北九州弥生人に近い値である。

眼窩は眼高に関しては比較群中で中間的な値をとる一方で、眼幅に関しては比較群中で小さい値を示す。眼窩示数は82.9で中眼窩であり、吉母浜中世集団、玉名平野古代人と同程度の値で比較群中で高い傾向を示している。これは、本個体の眼窩幅が狭いことに起因すると考えられる。鼻幅は比較群中で中間的な値をとるものの鼻高が比較群中最も高い値である。鼻示数は48.1で中鼻であり、西南日本現代人と同程度の値であり比較群中で高い傾向を示している。

全側面角は83°で中顎であり、比較中世個体群とほぼ同様な値である。一方で、歯槽側面角は77°で突顎であり、由比ヶ浜南を除く全ての中世集団が過突顎であることと一線を画し突顎度が弱い傾向がみられる。吉母浜報告書によると、材木座人では超突顎（ $\leq 59.9^\circ$ ）が男性の49.3パーセントに対し、吉母浜男性では14例中12例（87.5%）が過突顎（ $60.0^\circ - 69.9^\circ$ ）、吉母浜女性では超突顎が22例中9例（41%）であり、熊本県尾窪中世人でも男性の方が突顎度は弱い傾向がみられると指摘されている〔中橋・永井1985〕。中橋・永井氏は男性中世人に見られる突顎度がやや弱くなっている点を地方差の一端の可能性と評しており、本個体の特徴はこの指摘と整合する。

鼻根部の形状に関しては、前眼窩間幅は関東縄文人・北部九州山口縄文人と同程度の値であり、鼻根横弧長は比較中世人および北部九州山口弥生人・古墳人および西南日本現代人と同程度の値である。鼻根湾曲示数は関東の比較中世人および北部九州・山口古墳人・弥生人と同程度の値である。鼻根最小幅は比較群中最も大きな値を示す。これらの数値を見ると、本個体の鼻根部は幅広かつ平坦な特徴であることが読み取れる。

下顎骨に関しては、下顎頭間幅が非常に大きく、比較群中最大の値を示しており、頬骨弓幅が比較群中最大であったことと整合する。下顎角幅は同時代の比較群よりは大きいものの北部九州・土井ヶ浜弥生人と同程度の値である。下顎長は比較的短く、吉母浜中世人にやや近似した値をとる。オトガイ高は比較群中最も低い値であり深堀弥生人と同程度の値を示す。下顎枝高は比較群中最も高いのに対し、下顎枝幅は平均的な値である。そのため、下顎枝示数が非常に低い値になっており、深堀弥生人、津雲縄文人に近い値になっている。下顎枝角は比較群中最も小さく、頭蓋最大長が比較群中最も小さい値であったこととあわせて歯槽部も矢状方向にやや短い傾向を示している。

② 四肢（表8）

上腕骨は最大長・全長が比較群中北部九州・山口弥生人に次いで大きい値である。周径はそれぞれ吉母浜中世人とほぼ同程度の値である。骨体断面示数は玉名平野古代人に近い値である。長厚示数は山口弥生人および九州現代人とほぼ同程度の値である。橈骨は最大長・機能長が比較群中最も短い。周径は比較群とほぼ同程度の値であるが、骨体断面示数は比較群中最も小さい値を示す。これは、骨体横径が比較群中玉名平野古代人と並んで最も大きい傾向にあるのに対し、骨体矢状径が比較群中最も小さい値であることに起因すると考えられる。同様な理由から中央断面示数に関しても比較群中最も小さい値を示す。尺骨は最大長・機能長ともに比較群中最も小さい値である。周径は、最小周が最も大きく、矢状径は比較群と同程度の値である。示数は長厚示数が比較群中最も大きい値であり、玉名平野古代人が最も近似した値である。骨体断面示数は北部九州・南九州古墳人と同程度の値である。

下肢骨は、大腿骨の最大長・自然位長はそれぞれ大友弥生人と南部九州古墳人・吉母浜中世人と近似した値である。周径は吉母浜中世人とほぼ同程度の値であるが骨体上矢状径のみ比較群中最も大きい値である。長厚示数は比較群とほぼ同程度の値である。中央断面示数は吉母浜中世人と同程度の値である。骨体断面示数は骨体矢状径の値の効果で比較群中最も大きい値である。脛骨は周径のみ計測可能であり、中央最大径が北部九州弥生人、津雲縄文人に次いで大きい値であり、栄養孔位最大径は比較群中最大である。加えて、栄養孔位周・最小周も比較群中最大である。中央断面示数は玉名平野古代人、南部九州古墳人と近似した値であるのに対し、栄養孔断面示数は津雲縄文人に近似した値で強い扁平性を示す。腓骨も計測可能であったのは周径のみである。周径はいずれも比較群中で小さい値であり吉母浜中世人および南部九州古墳人と近似した値である。

③ 身長（表9）

平本氏によると日本人の平均推定身長は古墳時代から明治時代の間に低下するとされており〔平本1972〕、長岡氏ら〔2008〕においてもこれが支持されている。

藤井の計算式による本遺跡出土人骨の推定身長は、江戸の天福寺、深川集団に近く、吉母浜中世人や材木座中世人よりもやや低い値である。一方で、ピアソンの計算式による推定身長は吉母浜および材木座の中世人や津雲縄文人や近畿古墳人と近似した値である。

3. 頭蓋形質

本遺跡出土個体は1体のみであるものの、当該地域・時期の保存状態の良好な人骨資料は非常に少なくその形質的特徴に関する検討は意義があるため、先の頭蓋骨に関する諸特徴を総合して他集団と比較するために単変量による集団比較と多変量による主成分分析を行った。なお、この他集団との比較はあくまでも宮ノ浦遺跡出土中世人骨の個体の特徴であり、本個体の特徴が当該地域・時期の特徴を代表するものではない。

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

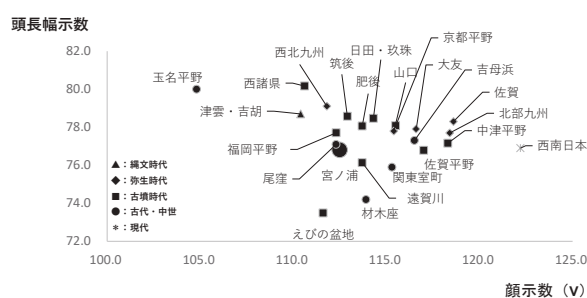


図32 単変量 (頭長幅示数/顔示数 (V))

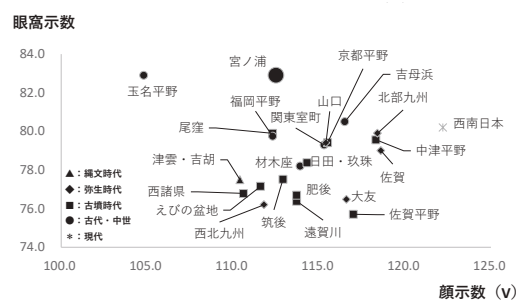


図33 単変量 (眼窩示数/顔示数 (V))

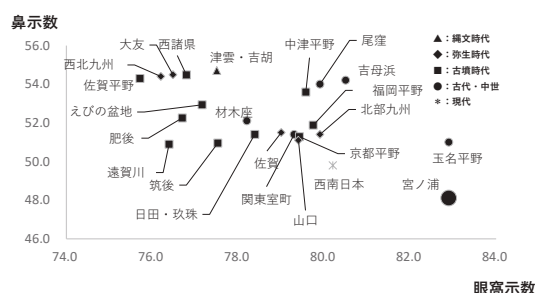


図34 単変量 (鼻示数/眼窩示数)

単変量比較には、宮ノ浦遺跡出土個体の特徴である、最大長の短さ、顔の広さ、眼窩の高さ、鼻の狭さに関連する示数を用いた。結果は図32～34の通りである。頭長幅示数／顔示数（V）に関しては（図32）、熊本県尾窪中世人と非常に近似した位置に分布する。加えて、福岡平野および遠賀川流域の古墳人とも近い位置に分布する。眼窩示数／顔示数（V）に関しては（図33）、分布図で

左下に行くほど眼窩・顔示数ともに小さい値、即ち低い傾向を示し、右上に行くほどそれぞれの示数が高い値を示す。概ね縄文時代以来の特徴を残す集団が左下、弥生・古墳時代以降半島からの形質的特徴の影響を色濃く受けている集団が右上に分布することになる。したがって、左下には縄文人や西北九州弥生人・西諸県古墳人が分布し、右上には北部九州・佐賀弥生人、中津平野古墳人、現代西南日本人が分布している。本遺跡出土人骨は顔が低い眼窩は高いことから、これら左下から右上にかけての集団の分布位置とは異なり、顔示数は福岡平野古墳人・尾窪中世人と近似しているものの、眼窩示数が大きく異なるため、いずれの集団からも離れた位置に分布する。鼻示数／眼窩示数に関しては（図34）、分布図で左上に行くほど眼窩は低く鼻が広い傾向を示し、右下に行くほど眼窩が高く鼻が狭い傾向を示す。概ね縄文時代以来の特徴を残す集団が左上、弥生・古墳時代以降半島からの形質的特徴の影響を色濃く受けている集団が右下に分布することになる。したがって、左上には縄文人や大友・西北九州弥生人、佐賀平野・西諸県古墳人が分布し、右下には北部九州・山口弥生人、福岡平野・京都平野古墳人、関東室町人、現代西南日本人が分布している。本遺跡出土人骨は、眼窩の高さと鼻の狭さから、本分布図においても比較集団中最も右下に位置する。以上の単変量の結果を総合すると脳頭蓋の形態および顔の部位に関しては短頭かつ高い傾向を示し非常に現代的であるが、顔の幅径に関しては低く縄文的というモザイク状の特徴を示している。

主成分分析には頭蓋の主要8項目（頭蓋最大長・頭蓋最大幅・中顔幅・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高・顔高）を用いている。第一主成分（固有値3.21、寄与率0.11%）の主成分負荷量は全ての項目で正の値であり、主成分得点が高いほど頭蓋、特に顔面頭蓋および眼窩・梨状孔のサイズが大きいことを示す（表10・11）。第二主成分（固有値1.93、寄与率24.10%）の主成分負荷量は顔面の各

計測項目の高さが正の値、幅が負の値を示している。また、脳頭蓋の長さ・幅ともに負の値を示している。したがって、主成分得点の散布図に関しては、X軸方向にプラスになるほど頭蓋の各計測項目が大きい、Y軸方向にプラスになるほど顔・眼窩・鼻部の高さが高くマイナスになるほど幅が広いといえる。主成分分析の結果を見ると（図35）、宮ノ浦遺跡はX軸方向においてはややマイナスの値を示しており、Y軸方向に関しては比較群中最も高い値を示している。これは、頭蓋の各計測値・示数で見たように、宮ノ浦遺跡出土人骨が顔面部の高さは低い

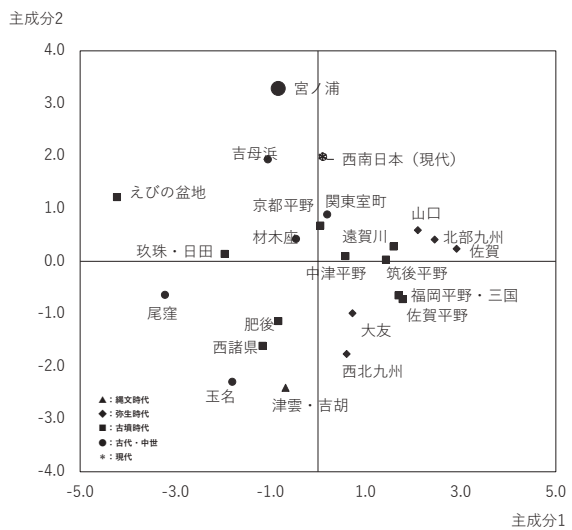


図35 主成分得点散布図

にもかかわらず眼窩や鼻部の高さが高いことに起因すると考えられる。他集団との位置を比較すると、中世集団は尾窪中世人を除いてほぼY軸周辺に収斂している一方で、Y軸方向に関しては尾窪中世人を除いて正の値を示す第1・2象限に位置しており、高顔・高眼窩傾向を示すものの、その中でも東日本の材木座・関東室町中世人と山口県の吉母浜中世人と本遺跡出土人骨で分布位置に大きな隔たりがある。加えて前項で指摘した通り、本個体は他の中世人と比して突顎度が弱い。中世人骨の頭蓋の一般的特徴である「長頭」「突顎」という形態的特徴の地域差に関しては既に先学により指摘されているところであり〔中橋・永井1985、長岡ほか2006〕、本遺跡出土人骨もその可能性を垣間見せる特徴であると言えよう。

4. 筋付着部に基づく活動負荷の復元

本稿で用いた筋骨格ストレスマーカー（Musculoskeletal Stress markers：以下MSMs）は、骨の機能適応モデルに基づいている。つまり筋使用あるいは筋にかかる負荷が強ければ強いほど、その負荷に適応するために筋粗面の複雑性は増していくということを前提に、その複雑さの程度を基準としたスコアを用いて、全身にわたる各付着部位の評価を行い、各部位の使用頻度負荷の強弱を読み取り、そこから長期継続的な体の使い方を推察しようとする手法である。Hawkey and Merbs〔1995〕によって体系化され、現在までその有効性に関する議論〔Cardoso2010など〕から過去の集団の活動パターンの再構築や階層性の検討など数多くの研究が行われてきた〔米元2012、Schrader2015など〕。MSMsの評価対象とした部位は、上肢下肢22部位の筋付着部のMSMsである（図36）。MSMsの評価は、Hawkey and Merbs〔1995〕の基準に従い、付着部の隆起としてあらわされる頑丈性（Robusticity）と、pittingや溝を形成するStress lesionsをそれぞれ3段階、最終的にスコア1から6までのグレードで評価した。各部位の評価基準や観察位置に関しては米元〔2012〕に詳述している。ここで対象にした筋付着部の変化の様相は部位によって特徴があり、部位間にみ

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

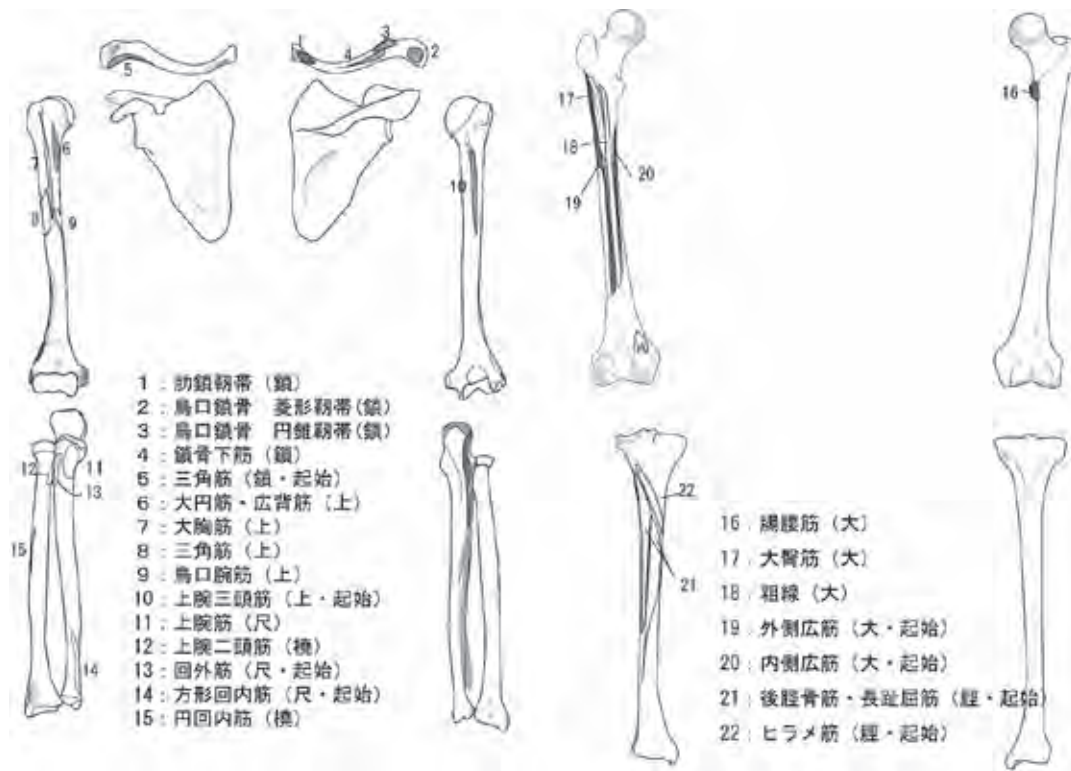


図36 MSMs対象22部位

られるスコアの値の高低が必ずしも筋の発達度の強弱を示すわけではないことを注記しておく。

Yonemoto [2015] において中世の揚浜式製塩民のMSMsパターンを検討し、揚浜式製塩民 (沢田・村松白根) の特徴は、いわゆる漁撈的なパターン (上肢のMSMsパターンのピークが肋鎖靱帯にあり、次いで大胸筋・三角筋のスコアが高い) とは異なり、MSMsパターンのピークが大胸筋にあり、肘関節の屈伸に作用する諸筋の中では、上腕三頭筋よりも、屈筋に作用する上腕筋の方がスコアは高く、上腕二頭筋に肘関節屈伸のスコアのピークがくること、手首の回内外に作用する諸筋のスコアは概ね同程度のスコアの高さを示すことを指摘した。上肢と下肢の発達のバランスも良く、全身的にMSMsスコアが高い傾向にある。

そこで、本研究では製塩民である可能性が高い宮ノ浦中世人骨のMSMsの検討を行った。結果は表12である。基本的に全部位のスコアが高いということと、中でも大胸筋のスコアが最大の6であること、左右差がほぼないことが明らかとなった。

MSMsは一個体のみではどれだけの短期的・特徴的な活動が反映されるか不明であることから基本的に集団の平均値で比較をする方法であり一個体のデータから活動の特徴を明らかにすることは困難である。そのため、一個体の検討のみで製塩民の特徴を有するとしていいかどうかは不明である。本個体に関して明らかなことは全身的にMSMsスコアが高く、中でも大胸筋のスコアが最大値の6を示すこと、左右差がないことであり、このことから本個体はきわめて活動負荷が強く片側に偏りのない活動を行っていたと考えられよう。

5. 墓制

本遺跡出土人骨に関しては、木棺の存在を裏付ける釘は出土していない。ただし、人骨の出土状況、特に胸骨が椎骨左側の胸腔内にずり落ちていること、その際鎖骨が本来の位置から水平方向に90度回転した状態になっていることから、遺体の周りには軟部組織腐朽時に空間があったと考えられる。加えて、趾骨より先が中足骨上あるいはその付近から出土していることから、身体長軸方向に狭矮な状態で埋葬されていたと考えられる。以上の出土状況を総合すると、本個体は本来木棺に埋葬されていたと推定される。当該期の木棺墓は必ずしも釘を伴う事例ばかりではなく、博多遺跡26次1号墓〔大庭・力武編1986〕や大宰府38次SX863号墓〔石松ほか編1977〕など、本遺跡と同様に釘が出土していないものの木棺と推定されるあるいは棺材が遺存している事例も認められる。したがって、本個体に関しても、釘は出土していないが本来木棺に埋葬されていたと推定される。以下本個体と同じ伸展用の木棺墓の類例を若干検討してみよう。

本出土人骨と同時代の墓はあまり類例がないが、近い時期の伸展葬の例としては少し時期を遡った古代の事例として、岡山県桃山遺跡の平安時代初期の土壌墓と推定される事例がある〔岡山県教育委員会1976〕。また中世墓が多く検出されている福岡市博多遺跡群の第173次調査においても釘の存在から木棺墓と推定されるSR108号（9世紀中ごろ～後半）〔山崎編2009〕や熊本県玉名平野遺跡SK04（7～9世紀）〔出見ほか編2022〕の例が報告されている。前後する時期の事例としては、本遺跡近傍では岡山県津寺遺跡中屋調査区の木棺墓の12世紀後半の事例や三手遺跡の13世紀前半の土壌墓事例があげられる。これらの岡山県中世遺跡においては、13世紀以降では屈葬が主流を占める。空間的には離れるが北部九州に目を向けると、同じく中世の博多遺跡やその周辺においても13世紀前半になると伸展葬（下肢を軽屈した状態も含む）と屈葬の木棺墓の両方がみられる（博多78次調査〔大庭編1995〕や博多26次調査〔大庭力武編1986〕など）。例えば、伸展葬用の木棺墓としては、福岡市箱崎遺跡26次調査SR-066（12世紀後半）〔松浦編2004〕や博多遺跡群築港線関係第2次調査683号墓（12世紀中ごろ）〔大庭・力武編1988〕などが報告されている。また、太宰府史跡第38次発掘調査〔石松・高倉ほか編1977〕では石組みないしは棺台を伴った木棺墓から伸展位でやや膝関節を屈した状態の人骨が出土しており、近接した位置から屈葬の木棺墓（12世紀中ごろ）が見つかっている。本埋葬もこのような中世初頭の伸展葬から屈葬への過渡期における木棺墓ないしは屈葬に移行する前段階の埋葬であったと推定される。

なお、本遺跡のような中世初頭の単独埋葬に関する評価として、津山遺跡の報告においては、平安時代中・後期の事例に見られる単独の伸展葬は中世以前の古い葬法を伝えるものであり、副葬品から見ても他の墓を凌駕するような輸入磁器や鏡などを伴うとの指摘がなされており、被葬者が地域の傑出した人物であったと評価されている〔亀山・大橋編1997〕。博多遺跡及びその周辺においても津山遺跡同様平安末から鎌倉時代の土壌墓が単独で営まれることが指摘されており〔大庭・力武編1988〕、特に博多遺跡周辺地域の単独埋葬に厚葬傾向がみられることが指摘されている〔大庭2002〕。このような西日本における中世初頭の墓制全体に位置づけると本埋葬の存在は非常に示唆

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

的である。類例の増加を待ちたい。

6. 結語

- ①宮ノ浦遺跡第12次調査1号墓から成年後半～熟年前半の男性1体が出土した。
- ②本個体は仰臥伸展葬であり、遺体埋没後軟部組織が完全に腐朽する以前の段階で遺体が一部攪乱を受けた可能性が考えられた。
- ③頭蓋形質に関しては、頭が短く、顔幅が広く、眼窩幅が狭く鼻高が高いという特徴を有しており、中世人の一般的な特徴とされる「長頭」「突顎」の度合いは弱く、主成分分析の結果も同時代人における形態的特徴の地域差を読み取りうるものであった。
- ④推定身長は比較中世集団よりやや低く近世江戸集団と近似した値であった。
- ⑤MSMsを用いた活動復元の結果、本個体は生前全身を左右バランスよく使用しており、活動負荷が高かったと推定された。
- ⑥人骨の出土状況から、本個体は木棺に埋葬されていたと推定され、北部九州から山陽地方の中世に一般的な屈葬前段階ないしは過渡期的な埋葬であると推定された。

謝 辞

本報告にあたり、上島町教育委員会の有馬啓介氏、愛媛大学の村上恭通先生には本遺跡出土人骨の調査・分析・報告に係る機会をいただきました。また、愛媛大学考古学研究室員および学生各位にも調査・報告過程において大変お世話になりました。この場を借りて謝意を表します。九州大学地球社会統合科学府の学生諸氏には人骨整理の作業を補助して頂き深謝します。

【参考文献】

- 阿部英世 1955「現代九州人大腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2、人類学研究発行所
- 石沢命達 1931「吉胡貝塚人人骨の人類学的研究第三部 下肢骨の研究」『人類学雑誌』46、日本人類学会
- 石松好雄・高倉洋彰・倉住靖彦・横田賢次郎・森田 勉・高橋 章・山本信夫・沢田康夫・松沢直子・伊藤かの子編1977『太宰府史跡昭和51年度発掘調査概報』九州歴史資料館
- 鑄鍋勝登 1955「九州人下腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2、人類学研究発行所
- 遠藤萬里・北條暉幸・木村 賛 1967「四肢骨」『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』東京大学出版会
- 大庭康時 2002「都市『博多』の葬送」『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院
- 大庭康時・力武卓治編1986『博多Ⅵ 博多遺跡群第26次調査の概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書144集、福岡市教育委員会
- 大庭康時編1995『博多44 博多遺跡群第78次発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第393集、福岡市教育委員会
- 大庭康時・力武卓治編1988『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書184集、福岡市教育委員会
- 大堀正俊 1958『山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の下顎骨に就いて』博士学位論文
- 小片 保 1981「縄文時代人骨」『人類学講座』5、雄山閣
- 岡山県教育委員会 1976「桃山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第12集、

岡山県教育委員会

金高勘次 1928「吉胡貝塚人人骨の人類学的研究 第壹部 頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』43、日本人類学会

亀山行雄・大橋雅也編1997『津寺遺跡4 山陽自動車道建設に伴う発掘調査14（第1分冊）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116、岡山県教育委員会

九州大学医学部解剖学第二講座編1988『日本民族・文化の生成2 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成』六興出版

清野謙次・平井 隆 1928「津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第3・4部 上肢骨の研究・下肢骨の研究」『人類学雑誌』43、日本人類学会

清野謙次・宮本博人 1926「津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第2部 頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』41、日本人類学会

鈴木 尚 1956『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』岩波書店

鈴木 尚・佐倉 朔・林都志夫・田辺義一・今井義量 1962「東京都芝白金旧海軍墓地に埋葬された江戸末・明治初年の日本人頭骨」『人類学雑誌』22、日本人類学会

専頭時義 1957「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4、人類学研究発行所

高棕浩史・米元史織 2023「なぜ人骨の形態に地域差が生じたのか」『古墳時代の親族と地域社会』同成社

出見優人・米元史織・星野宙也・松尾樹志郎・安達悠紀・舟橋京子 2022「玉名平野遺跡出土人骨の埋葬様態と形態的特徴」『玉名平野遺跡群1』熊本県文化財調査報告第345集、熊本県教育委員会

栃原 博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31、熊本医学会

内藤芳篤 1967「深堀遺跡 弥生」『人類学考古学研究報告』1、長崎大学医学部解剖学第二教室

内藤芳篤 1971「西北九州出土の弥生人骨」『人類学雑誌』79、日本人類学会

内藤芳篤 1973「人骨」『尾窪 - 熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査 - 』熊本県文化財調査報告第12集、熊本県教育委員会

長岡朋人・静島昭夫・澤田純明・平田和明 2006「中世日本人の頭蓋形態の変異」『Anthropological Science (Japanese series)』114、日本人類学会

中橋孝博 1987「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」『人類学雑誌』95、日本人類学会

長岡朋人・平田和明・大平里沙・松浦秀治 2008「鎌倉市由比ヶ浜南遺跡から出土した中世人骨の身長推定」『Anthropological Science (Japanese series)』116（1）、日本人類学会

中橋孝博 1993「福岡県筑紫野市・隈・西小田地区遺跡群出土の弥生時代人骨」『隈・西小田地区遺跡群 隈・西小田土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第38集、筑紫野市教育委員会

中橋孝博・永井昌文 1985「山口県吉母浜遺跡出土人骨」『吉母浜遺跡』下関市教育委員会

中橋孝博・永井昌文 1989「弥生人の形質」『弥生文化の研究』1、雄山閣

原田忠昭 1954「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」『人類学雑誌』1、日本人類学会

平本嘉助 1972「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」『人類学雑誌』80、日本人類学会

松浦一之介編2004『箱崎21 箱崎遺跡第26次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集、福岡市教育委員会

松下孝幸 1981「佐賀県大友遺跡出土の弥生人骨」『大友遺跡』呼子町郷土史研究会

溝口静男 1957「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4、人類学研究発行所

山崎龍雄編2009『博多130 博多遺跡群第173次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1042集、福岡市教育委員会

米元史織 2012「生活様式の復元における筋骨格ストレスマーカーの有効性」『Anthropological Science (Japanese series)』120-1、日本人類学会

Buikstra J.H., and Ubelaker D.H., 1994, Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville. Arkansas :Arkansas Archaeological Survey Report, Number44.

Cardoso FA., Henderson CY., 2010, Enthesopathy formation in the humerus: Data from known age-at-death and known occupation skeletal collections. *Am J Phys Anthropol*, 141.

Doi Naomi and Tanaka Yoshiyuki, 1987, A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun Skulls Western Japan.

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

Anthropological Science, 19– 3.

Hawkey DE., and Merbs CF., 1995, Activity-induced musculoskeletal stress markers (MSM) and subsistence strategy changes among ancient Hudson Bay Eskimos. *International Journal of Osteoarchaeology*, 5.

Schrader SA., 2015, Elucidating inequality in Nubia: An examination of enthesal changes at Kerma (Sudan). *Am J Phys Anthropol*, 156.

Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P., 1985, Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *Am J Phys Anthropol*, 68.

Yonemoto S., 2015, Differences in the effects of age on the development of enthesal changes among historical Japanese populations. *Am J Phys Anthropol*. DOI: 10.1002/ajpa.22870.

表5 主要頭蓋計測項目の平均値比較（男性）

♂		宮ノ浦遺跡		関東室町 ¹⁾		材木座遺跡 ²⁾		由比ヶ浜南 (単体) ³⁾		由比ヶ浜南 (集積) ³⁾		中世集団 墓地 ⁴⁾		吉母浜遺跡 ⁴⁾		尾窪遺跡 ⁵⁾		玉名平野遺跡 ⁶⁾		福岡平野 三園地域 ⁷⁾		遠賀川流域 ⁷⁾		筑後 ⁷⁾		京都平野 ⁷⁾	
		(中世)		(中世)		(中世)		(中世)		(中世)		(中世)		(中世)		(中世)		(古代)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	1	177.0	67	183.6	170	184.2	30	186.7	79	184.4	25	184.8	16	181.8	6	184.2	1	185.0	9	184.9	11	183.1	9	180.6	17	180.1
9	頭蓋最大幅	1	136.0	66	138.7	164	136.5	29	139.8	85	138.3	24	138.5	17	136.2	1	138.0	1	148.0	9	143.0	13	139.5	9	144.3	22	141.5
17	Ba-Br高	—	—	49	136.6	96	137.2	25	138.9	61	138.1	14	138.4	17	139.4	4	136.5	1	131.0	7	137.6	9	135.1	7	136.6	14	134.1
8/1	頭長幅示数	1	76.8	61	75.9	164	74.2	29	74.9	79	75.1	24	75.2	16	74.9	1	77.1	1	80.0	7	77.7	10	76.1	8	78.6	17	78.1
17/1	頭長高示数	—	—	48	74.7	94	75.0	24	74.5	58	74.6	14	75.0	16	76.8	4	74.8	1	70.8	6	73.6	8	73.5	7	75.3	11	74.1
17/8	頭幅高示数	—	—	49	97.9	93	99.8	23	99.2	61	99.8	14	99.6	17	102.5	1	99.3	1	88.5	7	95.3	8	96.7	7	96.9	14	95.7
45	頬骨弓幅	1	149.0	38	136.2	96	134.8	14	135.4	35	137.7	5	135.7	18	135.2	—	—	1	138.0	9	140.1	9	140.1	5	139.8	12	136.7
46	中顔幅	1	104.0	46	101.6	107	101.8	—	—	—	—	—	—	19	100.3	2	100.0	1	105.0	12	106.0	10	105.3	8	105.4	20	104.1
47	顔高	1	117.0	8	118.3	48	115.8	—	—	—	—	—	—	11	117.3	6	113.3	1	110.0	7	121.1	5	119.2	5	119.0	9	121.6
48	上顔高	1	69.0	44	68.7	119	64.7	20	68.2	—	64.8	17	67.9	15	69.8	7	63.6	1	62.0	12	71.6	9	71.9	8	72.9	18	71.7
47/45	顔示数 (K)	1	78.5	5	87.5	37	86.1	—	—	—	—	—	—	11	86.4	—	—	1	79.7	6	84.9	4	84.6	4	83.7	6	90.2
47/46	顔示数 (V)	1	112.5	7	115.3	43	113.9	—	—	—	—	—	—	15	116.5	2	112.3	1	104.8	7	112.3	4	113.7	5	112.9	9	115.5
48/45	上顔示数 (K)	1	46.3	34	50.7	87	49.6	10	50.7	—	47.1	4	50.8	11	51.7	—	—	1	44.9	10	51.0	7	50.8	5	51.7	10	53.5
48/46	上顔示数 (V)	1	66.3	41	67.7	97	65.6	—	—	—	—	—	—	15	69.9	2	61.7	1	59.0	12	67.6	8	68.3	8	69.3	18	69.0
51	眼窩幅 (左)	1	41.0	47	43.2	111	43.1	—	—	—	—	—	—	18	42.0	6	40.7	1	41.0	12	43.1	11	44.5	9	43.9	21	42.6
52	眼窩高 (左)	1	34.0	46	34.3	99	33.7	—	—	—	—	—	—	18	34.4	6	32.5	1	34.0	12	34.3	12	33.9	9	34.0	21	33.8
52/51(L)	眼窩示数 (左)	1	82.9	46	79.3	96	78.2	—	—	—	—	—	—	18	82.1	6	79.9	1	82.9	12	79.7	11	76.4	9	77.5	21	79.4
54	鼻幅	1	26.0	51	26.2	122	26.6	25	26.5	52	26.1	21	26.4	17	26.0	6	26.5	1	25.0	12	26.5	9	26.6	9	26.6	18	26.1
55	鼻高	1	54.0	48	51.7	121	51.1	23	51.5	58	52.1	20	52.6	16	51.4	7	49.0	1	49.0	12	51.2	9	52.3	9	52.3	19	50.9
54/55	鼻示数	1	48.1	48	51.4	96	52.1	20	50.7	50	50.9	19	50.9	16	50.5	6	54.0	1	51.0	12	51.9	9	50.9	9	50.9	18	51.3
72	全側面角	1	83.0	44	82.3	73	81.7	18	82.1	51	83.6	12	83.8	15	82.5	6	83.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
74	歯槽側面角	1	77.0	44	62.6	68	60.3	18	62.2	51	74.6	12	61.8	14	65.2	6	61.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
♂		中津平野 ⁷⁾		日田盆地 玖珠盆地 ⁷⁾		佐賀平野 ⁷⁾		肥後 ⁷⁾		西諸県 ⁷⁾		えびの盆地 ⁷⁾		山口地方 ⁸⁾		北部九州 ⁸⁾		佐賀 ⁹⁾		大友 ¹⁰⁾		西北九州 ¹¹⁾		津雲・吉朝 ¹²⁾		西南日本 ¹³⁾	
		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	9	182.0	11	181.9	4	184.5	10	182.5	7	182.7	24	176.1	61	182.9	118	183.7	26	183.0	24	183.7	21	182.8	60	184.2	108	181.4
8	頭蓋最大幅	9	140.3	12	141.1	3	140.7	9	143.7	11	143.9	25	136.9	66	142	117	142.4	22	143.6	24	143.3	20	144.9	62	144.9	108	139.3
17	Ba-Br高	6	136.0	12	134.6	5	131.6	11	136.0	12	134.8	31	133.5	45	135.2	101	137.7	14	137.5	20	135.6	15	134.6	26	135.5	108	139.3
8/1	頭長幅示数	9	77.2	9	78.5	2	76.8	7	78.1	5	80.2	17	73.5	59	77.8	104	77.7	21	78.3	21	77.9	20	79.1	55	78.7	108	76.9
17/1	頭長高示数	6	74.7	9	73.3	4	71.7	9	75.3	9	73.3	18	72.1	43	74.3	91	75.3	14	75.1	18	94.4	15	74.1	25	73.3	108	76.9
17/8	頭幅示数	6	96.1	9	95.5	3	93.4	8	95.2	8	96.1	23	93.9	45	94.8	91	97.0	13	95.4	7	83.9	14	93.1	26	93.6	108	100.1
45	頬骨弓幅	5	137.8	12	136.9	5	139.4	8	138.5	18	137.9	24	133.9	44	139.2	103	140.0	14	138.4	9	140.7	12	138.4	16	141.0	106	134.5
46	中顔幅	6	104.7	18	101.4	8	103.9	11	103.2	22	102.1	29	99.0	46	104.2	114	104.7	24	105.2	24	101.8	17	105.0	31	103.8	107	99.9
47	顔高	3	122.3	12	117.9	4	120.5	10	116.0	13	113.8	25	113.8	27	121.4	80	123.8	5	126.6	18	118.7	14	117.1	25	115.7	66	122.2
48	上顔高	6	71.7	19	69.0	5	71.4	10	67.4	21	64.4	28	66.4	38	72.7	114	74.8	23	73.9	16	66.6	17	68.1	28	66.3	92	71.8
47/45	顔示数 (K)	3	89.9	9	84.5	2	86.0	6	84.9	8	81.8	20	81.3	24	86.8	71	88.4	4	88.6	7	83.9	12	84.6	10	80.4	64	91.4
47/46	顔示数 (V)	3	118.3	11	114.3	4	117.0	9	113.7	12	110.6	22	111.6	27	115.4	74	118.4	5	118.6	17	116.6	14	111.8	18	110.4	65	122.2
48/45	上顔示数 (K)	5	52.1	12	50.3	4	52.5	7	48.7	13	46.2	22	47.6	34	52.1	95	53.3	13	53.3	7	47.6	12	49.3	10	47.0	90	53.5
48/46	上顔示数 (V)	6	68.5	18	68.1	4	70.3	9	65.6	17	62.3	25	65.1	37	69.4	105	71.5	22	70.5	15	64.5	17	64.8	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅 (左)	6	42.3	20	41.8	6	45.0	10	42.9	21	43.0	31	41.0	39	43.6	89	43.2	20	43.8	23	44.0	15	43.1	40	43.2	108	43.0
52	眼窩高 (左)	6	33.7	20	32.8	6	34.0	9	33.0	24	32.9	30	32.6	41	34.6	93	34.5	20	34.5	24	33.5	15	32.8	38	33.2	108	34.4
52/51(L)	眼窩示数 (左)	6	79.6	20	78.4	6	75.7	9	76.7	21	76.8	30	77.2	38	79.4	86	79.9	20	79.0	22	76.5	15	76.2	32	77.5	108	80.2
54	鼻幅	6	27.0	18	25.6	8	27.1	10	26.3	26	26.8	25	26.3	43	26.9	117	27.1	20	27.0	25	27.4	16	27.7	36	26.5	108	25.9
55	鼻高	6	50.5	20	50.6	9	50.6	12	50.1	26	49.6	27	48.4	42	52.8	116	52.8	21	52.2	23	50.7	16	51.0	30	48.1	108	52.2
54/55	鼻示数	6	53.6	18	51.4	8	54.3	10	52.3	24	54.5	24	52.9	41	51.1	113	51.4	19	51.5	22	54.5	16	54.4	27	54.7	108	49.8
72	全側面角	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	92	83.8
74	歯槽側面角	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	107	70.7

1) 鈴木ほか1962 2) 鈴木1956 3) 長岡ほか2006 4) 中橋・永井1985 5) 内藤1973 6) 出見他2022 7) 高橋・米元2023 8) 中橋・永井1989 9) Doi and Tanaka1987 10) 松下 1981 11) 内藤1971 12) 清野・宮本1926, 金高1928 13) 原田1954

表6 下顎骨計測値の比較（男性）

♂		宮之浦遺跡		材木座遺跡 ¹⁾		吉母浜遺跡 ²⁾		玉名平野遺跡 ³⁾		隈・西小田遺跡 ⁴⁾		北部九州 ⁵⁾
---	--	-------	--	---------------------	--	---------------------	--	----------------------	--	-----------------------	--	--------------------

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について

表8 四肢骨計測値（男性、左）比較

♂	宮之浦遺跡		吉母浜遺跡 ¹⁾		五名平野遺跡 ²⁾		北部九州 ²⁾		南部九州 ²⁾		北部九州 ³⁾		山口 ³⁾		大友 ⁴⁾		津雲 ⁵⁾		九州 ⁶⁾	
			(中世)		(古代)		(古墳)		(古墳)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(縄文)		(現代)	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上院骨																				
1 最大長	1	301.0	14	295.8	1	295.0	15	298.9	4	283.5	22	302.6	29	305.3	11	291.4	36	284.3	106	295.3
2 全長	1	297.0	14	291.6	1	291.0	12	291.8	3	280.3	17	296.8	23	300	8	285.8	35	280.6	106	290.6
5 中央最大径	1	22.0	20	22.6	1	24.0	33	23.2	20	22.3	76	23.3	61	23.1	34	23.4	50	24.1	106	21.9
6 中央最小径	1	18.0	20	17.6	1	20.0	33	17.5	20	17.1	76	17.4	61	17.6	33	17.6	50	17.8	106	16.9
7 骨体最小周	1	62.0	20	62.5	1	66.0	47	64	20	61.2	81	63.9	66	63.7	33	63.5	50	64	106	61.8
7 a 中央周	1	66.0	20	66.1	1	73.0	34	67.4	19	63.6	75	67.8	57	67.5	33	68.2	50	69.3	106	63.7
6/5 骨体断面示数	1	81.8	20	78.0	1	83.3	32	75.6	20	76.8	76	74.9	61	76.5	33	75	50	73.9	106	79.1
7/1 長厚示数	1	20.6	14	21.4	1	22.4	11	21.3	3	22.1	22	21.3	28	20.8	11	22.4	36	22.7	106	20.9
橈骨																				
1 最大長	1	217	17	228.0	-	-	12	226.6	7	224.6	37	236.5	27	236.9	6	231.5	27	230.6	64	219.9
2 機能長	1	205.0	16	213.6	1	217.0	11	216.4	7	210.6	28	220	24	222.4	9	215.8	28	217.4	64	208.2
3 最小周	1	43.0	20	41.9	1	44.0	30	41.6	29	41	78	43.1	51	42.5	15	44.7	38	44	63	40.1
4 骨体横径	1	18.0	20	16.9	1	18.0	35	17.1	33	16.1	79	17.2	51	17.4	25	17.1	42	17.1	63	16
4a 骨体中央横径	1	16.8	20	15.5	1	17.0	-	-	-	50	16	33	16	25	16.4	-	-	63	15.2	
5 骨体矢状径	1	11.2	20	12.1	1	13.0	35	12.2	30	11.9	79	12.5	51	12	25	12.4	42	12	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	1	11.5	20	11.9	1	13.0	-	-	-	50	12.6	34	12.4	26	12.4	-	-	63	11.9	
3/2 長厚示数	1	21.0	16	19.8	1	20.3	10	19.7	6	18.6	28	19.8	24	19.4	5	20.5	27	20.5	61	20.4
5/4 骨体断面示数	1	62.2	20	71.6	1	72.2	35	71.5	29	74.3	79	72.6	51	69.6	25	72.3	42	70.2	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	1	68.5	20	77.5	1	76.5	-	-	-	50	78.6	33	77.8	25	75.2	-	-	-	-	-
尺骨																				
1 最大長	1	233.0	14	247.4	1	248.0	5	250.2	-	-	12	253.2	26	258.5	9	249.6	19	249.1	62	236.2
2 機能長	1	202.0	12	217.5	1	216.0	7	226	8	210.5	15	224.7	21	226.2	13	222.9	25	219.7	64	209.2
3 最小周	1	40.0	17	37.5	1	39.0	17	35.8	19	35.1	63	37.4	35	38.2	22	37.2	34	37.7	65	35.8
11 尺骨矢状径	1	13.7	19	12.8	1	14.0	28	13.4	19	13.2	100	13.2	49	13.2	26	15	50	14.3	63	12.8
12 尺骨横径	1	17.0	19	17.6	1	16.0	28	17.1	19	16.2	100	17.6	49	17.2	26	17.2	50	16.3	64	16.5
3/2 長厚示数	1	19.8	11	17.9	1	18.1	6	16.7	8	16.5	15	16.8	21	17.2	13	16.8	25	17.4	63	17
11/12 骨体断面示数	1	80.6	19	73.7	1	87.5	27	78.1	18	81.1	100	75.4	49	77.2	26	88	50	88.5	63	74.9
大腿骨																				
1 最大長	1	422.0	16	419.1	1	414.0	37	429	18	414.7	60	430.9	37	434.4	15	420.1	19	414.1	59	406.5
2 自然位長	1	419.0	15	418.1	1	407.0	21	426.7	8	419.5	18	427.7	26	432.8	17	413.9	19	411	59	403.2
6 骨体中央部矢状径	1	27.0	19	28.1	1	25.0	94	28.8	59	27.7	162	29.7	72	29.1	41	28.6	47	29	59	26.5
7 骨体中央部横径	1	27.0	19	27.7	1	27.0	95	27.4	60	25.1	166	28	72	27.2	42	26.4	47	26	59	25.6
8 骨体中央周	1	87.0	19	87.8	1	84.0	88	88.4	57	83.4	161	90.8	72	88.9	41	87	47	87.4	59	82.4
9 骨体上横径	1	34.0	19	32.1	1	33.0	75	32.1	31	29.9	115	32.6	74	32.7	38	31.6	43	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径	1	30.0	19	24.4	1	23.0	75	25.6	28	24.2	115	26.2	74	26	38	25.2	43	25.5	59	24.3
8/2 長厚示数	1	20.8	14	21.2	1	20.6	21	20.5	7	20.2	18	21.4	26	20.5	16	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7 骨体中央断面示数	1	100.0	19	101.3	1	92.6	94	105.3	57	110.9	162	106.4	72	107.6	41	108.6	47	111.8	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	1	88.2	19	76.1	1	69.7	74	79.7	28	80.9	115	80.5	74	80	39	80.1	43	83.1	58	82.8
脛骨																				
1 全長	-	-	12	341.9	1	334.0	16	336.3	4	322.5	27	345.6	19	350.5	10	345.3	20	340	61	320.3
1 a 最大長	-	-	11	348.0	1	345.0	20	341.6	7	333.7	52	350.5	21	356.9	11	354.8	22	343.6	60	326.9
8 中央最大径	1	31.0	20	29.6	1	30.0	40	29.7	30	29.2	74	32	36	30.6	43	31	46	32.3	61	27.8
8a 栄養孔位最大径	1	38.0	20	33.8	1	34.0	63	34.7	43	33.2	153	36.5	60	35.7	35	34.5	38	35.2	60	30.6
9 中央横径	1	22.0	20	21.6	1	21.0	41	21.7	32	20.8	72	22.9	36	22.3	43	21.4	46	20.4	61	21.1
9a 栄養孔位横径	1	24.0	20	24.0	1	26.0	63	24.1	43	22.4	153	25.3	59	25.1	36	23.3	38	22.2	61	23.7
10 骨体周	1	84.0	20	80.8	1	80.0	39	81.4	30	79.1	74	86.5	36	83.6	41	83.4	45	84.5	62	78.4
10a 栄養孔位周	1	97.0	20	90.8	1	95.0	63	94	43	88.1	151	96.9	58	95.5	34	92.6	38	92.8	61	88.9
10b 最小周	1	77.0	20	74.5	1	75.0	59	75.1	25	73	122	78.4	63	75.4	38	75.6	41	76.7	60	71.3
9/8 中央断面示数	1	71.0	20	73.0	1	70.0	40	73.4	30	71.6	74	72.2	36	73	43	69.1	46	63.3	61	76.1
9a/8a 栄養孔断面示数	1	63.2	20	71.0	1	76.5	63	69.9	42	67.8	152	69.5	59	70.5	35	67.7	38	63	60	77.5
10b/1 長厚示数	-	-	12	22.0	1	22.5	16	22.2	3	21.6	26	22.7	19	21.5	10	21.9	20	22.9	60	22.4
腓骨																				
1 最大長	-	-	10	335.0	1	333.0	2	332.5	-	-	8	347.9	14	343.6	-	-	13	329.5	58	322.9
2 中央最大径	1	15.0	17	16.1	1	15.0	9	16.6	1	15	46	17	34	16.8	-	-	44	17.8	59	14.5
3 中央最小径	1	11.0	18	10.8	1	13.0	8	11.4	1	12	46	11.6	34	11.4	-	-	44	12.2	59	10
4 中央周	1	43.0	17	44.8	1	46.0	9	46.2	1	46	47	47.2	34	47.2	-	-	44	51.3	59	41.5
4a 最小周	1	36.0	19	37.3	1	41.0	12	37	1	29	24	39.7	25	40.1	-	-	29	39.2	59	35.6
3/2 中央断面示数	1	73.3	17	68.0	1	86.7	8	67.6	1	80	46	68.3	34	67.9	-	-	44	68.6	59	69.5
4a/1 長厚示数	-	-	11	11.5	1	12.3	2	11.7	-	-	8	11	13	11.8	-	-	13	12	58	11.1

1) 中橋・永井1985 2) 出見ほか2022 3) 中橋・永井 (1989) 4) 松下 (1981) 5) 清野・平井 (1928) 6) 阿部 (1955) ・鏑鍋(1955) 7) 専頭(1957)・溝口(1957)

表9 推定身長

		：藤井の式より算出/：右大腿骨平均最大長より計算	男性	(資料数)	女性	(資料数)
		Pearson	160.6	1	-	-
	宮ノ浦遺跡	*	藤井	159.1	1	-
(縄文)	津雲・吉胡			159.3	35	147.5
	津雲	**	[清野・平井 1928]	159.9	13	147.3
	吉胡	**	[石沢 1931]	158.9	22	147.7
	北部九州			159.2	8	150.5
	関東	*	[平本 1972]	159.1	11	148.1
	中・後・晩期		[小片 1981]	159.6	33	149.2
(弥生)	北部九州・山口			162.6	129	151.3
	北部九州			162.1	80	151.2
	山口			163.3	49	151.4
	西北九州		[内藤 1971]	158.8	16	147.9
	大友		[松下 1981]	159.1	15	149
	広田・鳥ノ峯		[九州大学 1988]	154	14	142.8
(古墳)	北九州・山口			162.8	40	150.2
	南九州			158.3	7	146.8
	中国			159.1	14	148.7
	近畿			160.8	17	146.7
	関東・東北			162.1	28	149.7
(古代)	玉名平野遺跡	*	[出見ほか2022]	157.1	1	-
(中世)	吉母浜		[中橋・永井 1985]	159.7	18	146.5
	材木座		[鈴木 1956]	159.7	10	146.9
	由比ヶ浜南	*	[長岡ほか 2008]	157.8	36	
(江戸)	天福寺		[中橋 1987]	159.4	24	146.5
	深川		[遠藤ほか 1967]	159.1	95	146.4
(近代)	北九州			157.7	37	146.3
	関東	**	[平本 1972]	158	43	145.6
(現代)	1970年日本		[平本 1972]	166.7	771	154.6

表10 固有ベクトル

	主成分1	主成分2
頭蓋最大長	0.208	-0.463
頭蓋最大幅	0.169	-0.567
中顔幅	0.389	-0.226
眼窩幅（左）	0.448	-0.146
眼窩高（左）	0.395	0.295
鼻幅	0.298	-0.169
鼻高	0.363	0.462
顔高	0.448	0.249

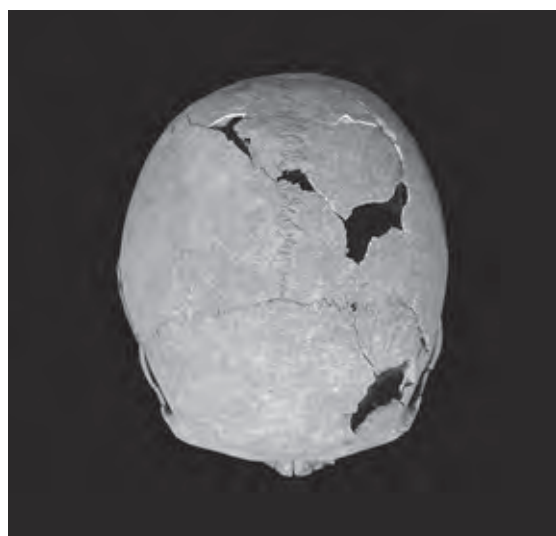
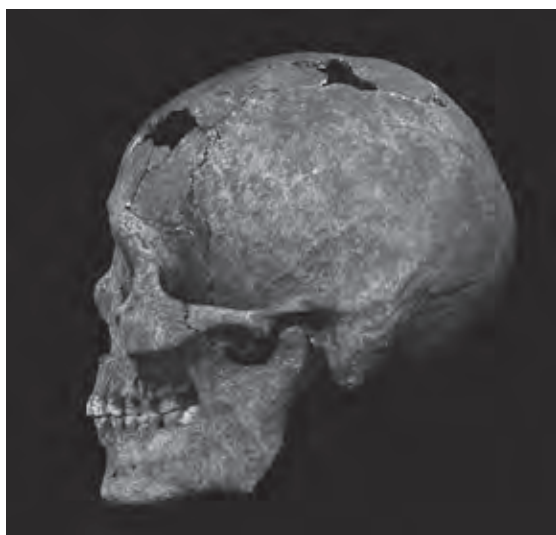
表11 主成分負荷量

	主成分1	主成分2
頭蓋最大長	0.372	-0.643
頭蓋最大幅	0.303	-0.788
中顔幅	0.696	-0.313
眼窩幅（左）	0.803	-0.203
眼窩高（左）	0.707	0.410
鼻幅	0.533	-0.234
鼻高	0.650	0.642
顔高	0.802	0.346

表12 宮ノ浦遺跡出土人骨のMSMsスコア

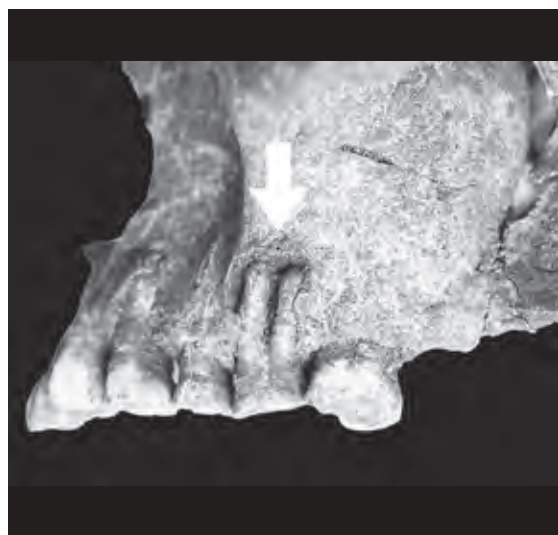
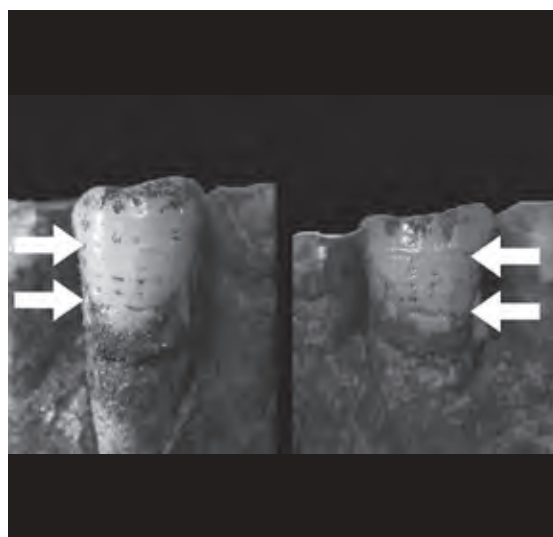
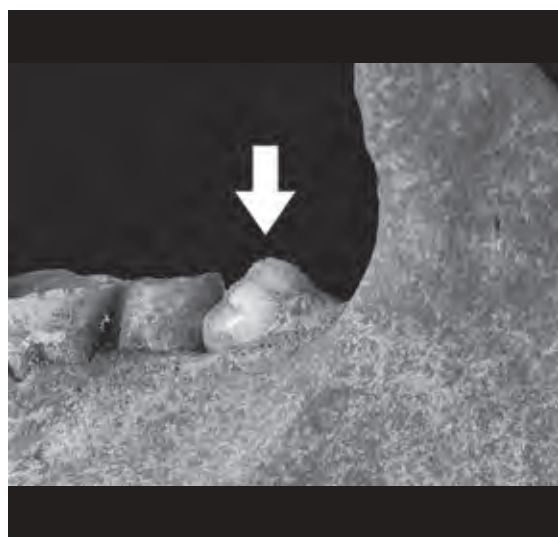
対象 性別 部位	宮ノ浦遺跡 男性	
	右	左
肋鎖靱帯（鎖）	3	3
菱形靱帯（鎖）	3	3
円錐靱帯（鎖）	3	3
鎖骨下筋（鎖）	1	1
三角筋の前部（鎖・起）	3	3
大円筋と広背筋（上）	3	3
大胸筋（上）	6	6
三角筋（上）	3	3
烏口腕筋（上）	2	2
上腕三頭筋外側頭（上・起）	3	3
上腕筋（尺）	3	3
上腕二頭筋（橈）	3	3
回外筋（尺・起）	3	3
方形回内筋（尺・起）	3	3
円回内（橈）	3	3
腸腰筋（大）	3	3
大殿筋（大）	3	3
粗線（大）	3	3
外側広筋（大・起）	3	3
内側広筋（大・起）	3	3
後脛骨筋と長趾屈筋（脛・起）	1	1
ヒラメ筋（脛・起）	3	3

I. 宮ノ浦遺跡第12次調査出土人骨について



左上段：頭蓋正面観
左中段：頭蓋側面観（左）
左下段：頭蓋上面観
右上段：上肢骨
右中段：下肢骨

写真5 宮ノ浦遺跡出土人骨 1



左上位：左下顎第3大臼歯植立状態
 左中段：左上顎第1大臼歯根尖病巣
 左下段：左右上顎中切歯のエナメル質減形成
 右上段：左右下顎犬歯のエナメル質減形成
 右中段：左内側楔状骨にみられる穿孔状の破損
 (左：内側観、右：外側観)

写真6 宮ノ浦遺跡出土人骨2

Ⅱ．宮ノ浦遺跡出土人骨の歯牙ストロンチウム同位体比分析

舟橋京子・足立達朗・米元史織・中野伸彦

はじめに

愛媛県上島町宮ノ浦遺跡より中世初頭の人骨が出土した。本遺跡に関しては、隣接する弓削島を中心として12～15世紀に荘園が営まれていたことが明らかになっており、13世紀に東寺への荘園の寄進を示す文書もみられる〔網野1978など〕。したがって、本遺跡出土個体の歯牙ストロンチウム同位体比分析を用いて在地成育者か否かの推定を行うことにより、中世初頭の塩田の生産体制ひいては弓削島荘成立前後の荘園運用体制の復元に寄与することが期待される。一方でこの分析は本来複数の個体を用いて分析を行うべきであるが、本遺跡ないしは関連遺跡から出土した人骨中分析可能な歯牙を有する個体は宮ノ浦遺跡1号墓出土個体のみである。ただし、本個体が当該地域で生育した個体か否かという情報は、当時の社会を復元する上で非常に有益な情報の一つになりうるため、本分析を行った。

1．Sr同位体比分析の方法

ストロンチウム（元素記号Sr）の同位体比分析は、人の移動や交流、生活・生育圏を明らかにしうる分析方法として、世界各地で様々な研究が行われている〔Bentley 2006; Bentley et al. 2003 : 2004; Kusaka 2009 : 2011 : 2018; Horstwood et al. 2008など〕。Srは岩石に多く含まれる元素であり、天然には4つの同位体（84、86、87、88）が存在する。そのうち放射性同位体である ^{87}Sr の存在量を安定同位体である ^{86}Sr の存在量との比で表した値がSr同位体比（以下 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ）である。 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 比は、岩石の化学組成、生成年代、起源物質等通常0.7000から0.7200程度の変動を示す〔Bentley 2006〕。基盤地質中に含まれているSrは、水を含む流体に比較的溶脱しやすく、河川水や湖水および地下水などを通して、飲料水として直接もしくは植物を摂取することで動物の体内に水やその水を摂取する動植物を通して人体、特に歯牙や骨に取り込まれる。体内でSrは、イオン半径が近いアルカリ土類金属であるCaと同様の挙動を示し、動物の骨格や歯牙に固定される。一般に生物体内に取り込まれた元素の同位体比は、化学反応の過程での質量差によって同位体分別効果が生じる。ところが、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 比の場合、両者の質量数が類似しているため同位体分別効果がほとんど生じず、同一地質体において生息する生物の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 比は近似した値をとることが知られている〔Blum et al., 2000〕。中でも歯牙は一度形成されるとリモデリングされないため、歯牙の形成時期である幼少期に生育した場所の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をある程度反映する可能性が指摘されている。

世界各地で行われている歯牙のSr同位体分析の多くは、表面電離型質量分析器を使用しており、歯牙を溶解して分析を行うため、資料の完全な破壊を伴う。しかし、Porhaska et al.〔2002〕で示

されたようにレーザー溶出装置を用いた分析は準非破壊であり、歯冠測定部位を残したままSr同位体比分析が可能である。近年、このレーザー溶出型のMC-ICP-MSを用いた研究も増えてきており〔Prohaska et al., 2006; Horstwood et al., 2008〕、一部の研究ではTIMSや溶解型MC-ICP-MSと比較するとデータの標準偏差が大きいことから分析精度に関する懸念が指摘されている。しかし、LA-MC-ICP-MSと溶解型MC-ICP-MSのデータを比較した場合、それぞれの平均値の差がわずか(0.0003 ± 0.0002)であることから、移動性や生育地の研究においてLA-MC-ICP-MSで測定されたSr値もある程度実態を反映していると考えられている〔Copeland et al., 2008, 2010〕。

本稿では、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに設置されているレーザー溶出型二重収束型高分解能ICPマルチコレクタ質量分析装置(LA-MC-ICP-MS、レーザー: Analyte G2(エキシマレーザー)、Photon Machines 社製; 質量分析計: Neptune Plus、Thermo Fisher Scientific 社製)を用いた。まず、電子顕微鏡を用いて歯牙の分析部位の状態の確認を行い、歯牙表面の風化や歯牙表面の曲面はレーザーのフォーカシングに問題となるため歯科用エンジン(円柱形極細ダイヤモンドポイント)によって分析対象とした場所(3mm×7mm程度)の表面研磨を行い、LA-MC-ICP-MSで $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ および $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ の分析を行った。また、歯牙の主成分はアパタイト($\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3(\text{F}, \text{Cl}, \text{OH})_2$)であるため、Caの濃度はほぼ一定である。Sr値だけでなく、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値を測定することで、資料間のSr含有量を相対的に比較することができる。

測定では1資料について1回あたり約1.4mmのライン分析を5回行い、その重み付け平均値をその資料の値とする。Sr値の個体内におけるばらつきに関しては今後も検討を行う必要があるが、Copeland et al.〔2008〕の指摘にあるように同一歯種内で得られたSr値を平均値化することである程度安定した値が得られると考える。しかし、5回の計測のうち、1回のみ誤差範囲が全く重複しないSr値を析出した場合に、その値は外れ値として重み付け平均値の計算の際には外している。分析を行った後、低真空走査型電子顕微鏡(SEM、Keyence 社製 VHX-D510)を用いて分析痕の観察を行った。対象とした歯牙は幼少期に形成される切歯を主に用いている。さらに個体間のSr値だけでなく、個体内でのSr値の変移から、個体の幼少期と若年期での生育地の異同を調べるため、可能な場合に1個体につき切歯と第3大臼歯の分析を行うことが理想である。ただし、本個体に関しては、歯槽骨から取り外しの可能な第3大臼歯が得られなかったため、代わって第2大臼歯を分析対象歯牙としている。解析には、マイクロソフト社の表計算ソフトExcel用のアドインモジュールであるIsoplot/Ex 3.70〔Ludwig 2008〕を用いた。

2. 分析結果

今回は、本遺跡出土人骨が1体のみであり、なおかつ周辺遺跡からも分析可能な歯牙の出土例がないことから、比較として本遺跡の所在する弓削佐島近隣の生口島内部で佐島と基盤地質が同じ白亜紀後期の黒雲母花崗岩帯の井戸水で生育した現代人の歯牙を参考試料として分析を行った(図37)。

測定を行った歯牙は表13の通りである。宮ノ浦遺跡出土1号墓の歯牙に関しては、上顎左中切歯エナメル質中央部および下顎右第2大臼歯エナメル質基部周辺を対象として分析を行った。これらの位置は、おおむね2-3歳と6-7歳で形成される部位である〔Hillson 1996〕。

Sr同位体比分析の結果を表13に示す。 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をグラフにしたものが図38、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値を横軸に、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を縦軸に展開したものが図39である。Sr同位体比分析の結果、3試料にいずれも良好なデータが得られた。分析試料は概ね0.7094-0.7100の値を示している。

宮ノ浦遺跡出土人骨（男性熟年）の上顎左側中切歯は5ヶ所分析を行い、加重平均値は 0.709422 ± 0.000043 でMSWDは1.5である。本試料の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられないといえよう。

同個体の下顎右側第2大臼歯は5ヶ所分析を行い、加重平均値は 0.709916 ± 0.000091 でMSWDは5.8である。分析番号3の値がやや低いが、誤差の範囲は重複しており、1号人骨本歯牙の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値に大きなばらつきはないといえる。 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられずまとまっているといえよう。

現代人歯牙は5ヶ所分析を行い、加重平均値は 0.709647 ± 0.000059 でMSWDは1.14である。各分析の誤差の範囲はやや大きいものの、本試料の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられないといえる。

以上の結果から、各試料の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値は極めて安定しており、特に $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値は各個体内でのばらつきが少ないことからCaの溶脱など二次的変質の影響を受けている可能性は低い。また、表13を見ると現代人は $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値が4.5319-4.7573であり遺跡出土試料と比してSr含有量が相対的に低いことがわかる。これらの個々の試料の分析結果を総合したうえで図38を見ると3試料ともに同程度の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を示すことがわかる。

3. 考察

本遺跡においては遺跡出土人骨1体分歯牙2本と現代人歯牙1本の分析を行った（表13）。1号墓人骨の値は下顎右第2大臼歯が 0.709916 ± 0.000091 、上顎左中切歯が 0.709422 ± 0.000043 であった。加重平均値は $0.709422 - 0.709916$ の範囲であり、2点の歯牙の加重平均値間の差は約0.0005である。また生口島の現代人の小白歯のSr同位体比は 0.709647 ± 0.000059 と1号人骨のSr同位体比のちょうど中間の値を示し、この2個体のSr同位体比に大きな違いはないことが明らかとなった。参考までに、同一遺跡内で複数個体の分析を行った事例の値を見ると、確率密度分布で検出されたピークを基にした同一地域生育個体の可能性のある試料のSr同位体比の加重平均値は博多遺跡203次調査の弥生時代人骨で $0.70847 - 0.70976$ （平均値差0.00129）〔舟橋ほか2021〕、瑞穂遺跡9次調査出土弥生人骨で $0.70851 - 0.70898$ （平均値差0.00047）〔米元ほか2022〕である。これらの値と比較すると、今回の試料3点の分析値は同一基盤地質で生育したと考えても差し支えない値である。したがって、本分析の結果は、宮ノ浦遺跡出土人骨が白亜紀後期の黒雲母花崗岩帯が豊富に存在する佐島を

II. 宮ノ浦遺跡出土人骨の歯牙ストロンチウム同位体比分析

含む芸予諸島もしくは広島県～岡山西半の海岸部などの地域で幼少期をすごした人物であると推定して矛盾はない値である。

ただし、本分析はあくまでも複数個体の出土人骨の中からSr同位体比の異なる試料があった場合に、当該個体が非在地生育者の可能性を指摘しうる方法であり、Sr同位体比は各地域でそれぞれ固有の値を示すわけではない。したがって、本分析個体が遺跡所在地域以外の類似した値を示すような基盤地質地域で生育した外来者である可能性を完全に排除することはできない。本個体が遺跡所在地生育者であると断定するためには、非在地系の遺物の出現の様相など考古資料と併せて総合的な評価を行う必要がある。

今後の当該地域における試料の増加が期待される。

謝 辞

本報告にあたり、上島町教育委員会の有馬啓介氏、愛媛大学の村上恭通先生には本遺跡出土人骨の分析・報告に係る機会をいただきました。また、愛媛大学考古学研究室員および学生各位にも報告過程において大変お世話になりました。この場を借りて謝意を表します。

【参考文献】

- 網野善彦 1978『中世東寺と東寺領荘園』東京大学出版会
- 舟橋京子・足立達朗・谷澤重里・米元史織・中野伸彦・小山内康人 2021「博多遺跡第203次調査出土人骨」『博多遺跡170』福岡市教育委員会
- 米元史織・足立達朗・舟橋京子・中野伸彦・小山内康人 2022「瑞穂遺跡出土弥生時代人骨の歯牙のストロンチウム同位体比分析」『瑞穂遺跡9』大野城市教育委員会
- Bently R.A. 2006 Strontium Isotopes from the Earth to the Archaeological Skeleton: A Review. *Journal of Archaeological Method and Theory*, 13: 135–187.
- Bently R.A., Krause R., Price T.D., Kaufmann B. 2003 Human mobility at the early Neolithic settlement of Vaihingen, Germany: evidence from strontium isotope analysis. *Archaeometry*, 45: 471–486.
- Bently R.A., Price T.D., Stephan E. 2004 Determining the 'local' $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ range for archaeological skeletons: A case study from Neolithic Europe. *Journal of Archaeological Science*, 31: 365–375.
- Blum, J. D., Taliaferro, E. H., Weisse, M. T., Holmes, R. T. (2000) Changes in Sr/Ca, Ba/Ca and $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ratios between trophic levels in two forest ecosystems in the northeastern U.S.A. *Biogeochemistry*, 49: 87–101.
- Copeland S. R., Sponheimer M., le Roux P.J., Grimes V., Lee-Thorp J. A., de Ruiter D. J. and Richards M. P., 2008 「Strontium isotope ratios ($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$) of tooth enamel: a comparison of solution and laser ablation multicollector inductively coupled plasma mass spectrometry methods」『*Rapid Communications in Mass Spectrometry*』 22: 3187–3194
- Copeland S. R., Sponheimer M., Lee-Thorp J. A., le Roux P.J., de Ruiter D. J. and Richards M. P., 2010 「Strontium isotope ratios in fossil teeth from South Africa: assessing laser ablation MC-ICP-MS analysis and the extent of diagenesis」『*Journal of Archaeological Science*』 37(7): 1437–1446
- Horstwood, M.S.A., A.J.A. Evans & J. Montgomery. 2008. Determination of Sr isotopes in calcium phosphates using laser ablation inductively coupled plasma mass spectrometry and their application to archaeological tooth enamel. *Geochimica et Cosmochimica Acta* 72: 5659–74. <https://doi.org/10.1016/j.gca.2008.08.016>

- Hillson S. 1996 『*Dental Anthropology*』 Cambridge University Press Cambridge.
- Kusaka, S., A. Ando, T. Nakano, T. Yumoto, E. Ishimatsu, M. Yoneda, F. Hyodo, F. & K. Katayama. 2009. A Sr isotope analysis on the relationship between ritual tooth ablation and migration among the Jomon people in Japan. *Journal of Archaeological Science* 36: 2289–97. <https://doi.org/10.1016/j.jas.2009.06.013>
- Kusaka, S., Nakano, T., Yumoto, T., & Nakatsukasa, M. 2011 Strontium isotope evidence of migration and diet in relation to ritual tooth ablation: A case study from the Inariyama Jomon site, Japan. *Journal of Archaeological Science*, 38, 166–174.
- Kusaka, S., Yamada, Y., Yoneda, M. 2018 Ecological and cultural shifts of hunter - gatherers of the Jomon period paralleled with environmental changes. *American Journal of Physical Anthropology*. 167, 377–388.
- Ludwig, K. R., 2008 「User's Manual for Isoplot 3.70: A geochronological toolkit for Microsoft Excel」 『*Berkeley Geochronology Center Special Publication*』 4 : 1–77
- Prohaska T., Latkoczy C., Schultheis G., Teschler-Nicola M., Stingeder G. 2002 Investigation of Sr isotope ratios in prehistoric human bones and teeth using laser ablation ICP-MS and ICP-MS after Rb/Sr separation. *Journal of Analytical Atomic Spectrometry*, 17:887–891.
- Prohaska T., Teschler-Nicola M., Galler P., Přichystal A., Stingeder G., Jelenc M., and Klötzli., 2006 「Non-destructive determination of $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ isotope ratios in early upper paleolithic human teeth from the Mladeč caves-preliminary results」 『*Early modern humans at the Moravian gate: the Mladeč caves and their remains*』 Teschler- Nicola M. (ed) Springer. 505–514

Ⅱ. 宮ノ浦遺跡出土人骨の歯牙ストロンチウム同位体比分析

表13 ストロンチウム同位体比分析の結果

遺跡名	資料番号	性別	年齢	分析箇所 分析箇所 推定年齢	分析番号	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	StdErr (2 σ)	$^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$	加重平均(全分析値)	誤差	MSWD
宮ノ浦	1号墓人骨	男性	成年後半 ・熟年前 半	上顎左中 切歯	1	0.70940	0.00005	2.7342	0.709422	0.000043	1.5
					2	0.70948	0.00006	2.8521			
					3	0.70941	0.00006	2.8419			
					4	0.70940	0.00005	2.8741			
					5	0.70943	0.00006	3.0228			
				下顎右第 2大臼歯	1	0.70989	0.00005	2.6305	0.709916	0.000091	5.8
					2	0.70992	0.00006	2.5816			
					3	0.70982	0.00006	2.5607			
					4	0.71001	0.00006	2.5520			
					5	0.70995	0.00008	2.5036			
現代人 (生口島)	—	—	—	小臼歯	1	0.70965	0.00014	4.7338	0.709647	0.000059	1.14
					2	0.70971	0.00013	4.7573			
					3	0.70953	0.00016	4.6820			
					4	0.70958	0.00014	4.5856			
					5	0.70970	0.00011	4.5319			



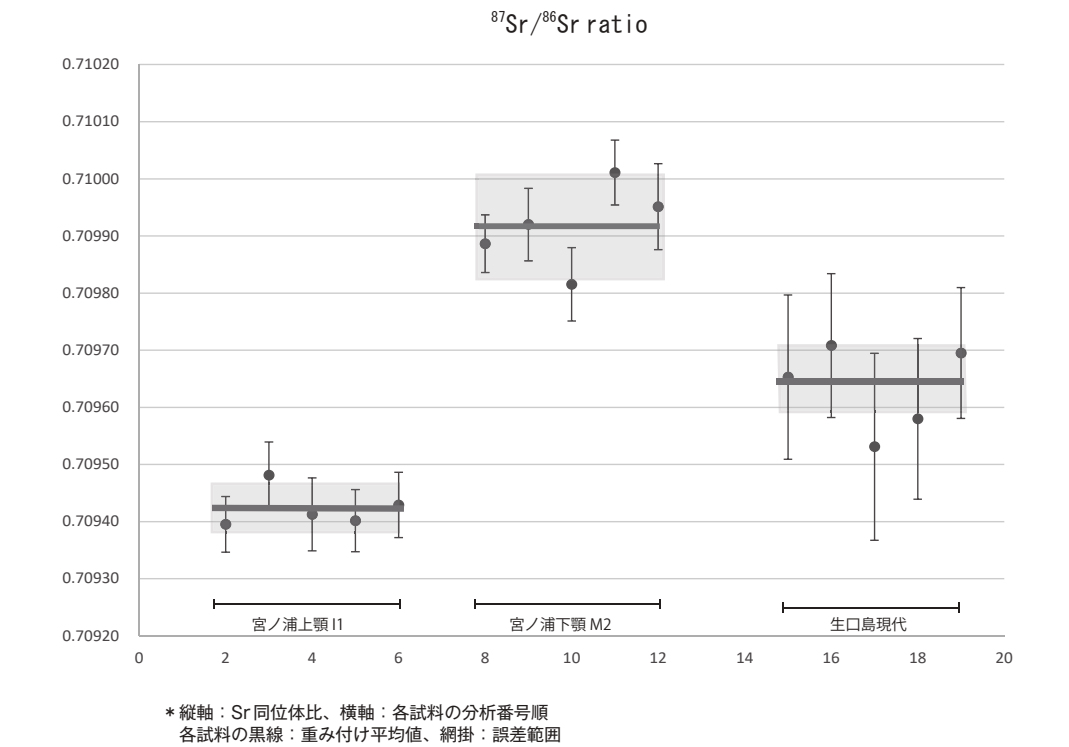
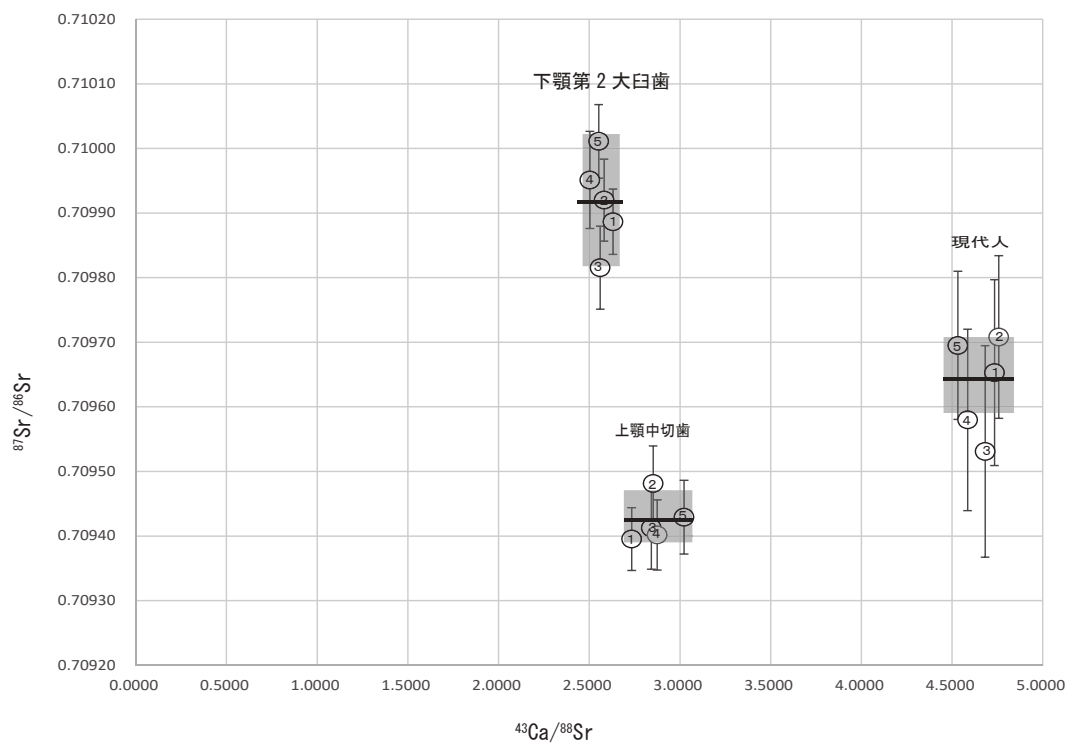


図38 Sr 同位体比分析結果



宮ノ浦遺跡出土人骨および現代人：図中の番号は表13の分析番号
黒い線は各試料の重み付け平均値。 網掛けは誤差範囲を示す。

図39 Sr 同位体比および $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 比の散布図

Ⅲ. サヌカイト石材の産地推定

竹原弘展

はじめに

愛媛県上島町の宮ノ浦遺跡第13次調査で出土したサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

1. 資料と方法

分析対象試料は、遺跡より出土したサヌカイト製石器6点である（表14）。試料は、サンドブラストを用いて風化層を一部除去し、新鮮な面を露出させて測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法は、黒曜石産地推定法として用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法〔例えば望月2004〕を、サヌカイトに適用した。方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチ

表14 分析対象

分析No.	備考
1	MYN13-18-83
2	MYN13-18-132
3	MYN13-18-187
4	MYN11-4-50
5	MYN11-4-74
6	MYN9-5-7

表15 原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
奈良	二上山	春日山	春日山みかん畑内(10)
香川	讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近(21)、神谷神社付近(8)、高産霊神社谷(1)、国分台下みかん畑(4)、蓮光寺山南東麓(1)
		国分台2	神谷神社付近(3)、高産霊神社谷(4)
		国分台3	自衛隊演習場付近(1)、神谷神社付近(2)、高産霊神社谷(7)、国分台下みかん畑(1)、蓮光寺山南東麓(25)、出雲神社周辺(5)
		赤子谷	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)
		法印谷	法印谷(10)
		金山1	北峰道路脇(9)、金山南麓(8)、金山北東部(27)
		金山2	北峰道路脇(1)、金山南麓(23)
		城山	城山南側(5)、城山北側(5)
		熊山1	雄山(5)、雌山(5)、神谷神社付近(4)、出雲神社周辺(23)、奥池付近(11)
		熊山2	神谷神社付近(3)、出雲神社周辺(2)、奥池付近(5)
		双子山	双子山南麓(10)
		青色山	佐伯神社付近(30)、宮々尾古墳周辺(1)
		大麻山北麓	宮々尾古墳周辺(2)

Ⅲ. サマカイト石材の産地推定

ウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps；count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)



図40 香川県内の原石採取位置

1. 自衛隊演習場付近 2. 神谷神社付近 3. 高産霊神社谷 4. 国分台下みかん畑 5. 蓮光寺南東麓 6. 出雲神社周辺 7. 赤子谷
8. 法印谷 9. 金山南麓・北峰道路脇・奥池付近 10. 金山北東部 11. 城山南側 12. 城山北側 13. 雄山・雌山 14. 双子山南嶺
15. 佐伯神社付近 16. 宮ヶ尾古墳周辺

3) Mn強度×100/Fe強度

4) log (Fe強度/K強度)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図（41）と横軸Sr分率－縦軸log (Fe強度/K強度) の判別図（42））を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。

さらに、上記指標値に加え、サヌカイト用に以下の2指標値を計算し、この2指標値を用いた判別図（43）も作成した。

5) Zr分率=Zr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

6) Ca強度/K強度

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。表15にサヌカイトの判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図40に香川県内のサヌカイト原石の採取地を示す。

2. 分析結果

表16にサヌカイト製石器の測定値および算出された指標値を、図41～43に、サヌカイト原石の判別図にサヌカイト製石器の分析結果をプロットした図を示す。判別図では視覚的に分かりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定の結果、試料No. 5が金山1群試料、No. 4、6の2点が金山2群と城山群の重複域、試料No. 2が鬼ノ鼻山群の範囲にプロットされた。試料No. 1、3の2点は、金山の判別群に近い組織を示すものの合致する判別群がなく、産地不明であった。

表16 測定値および産地推定結果

分析 No.	K強度 (cps)	Ca強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/ Fe	Sr分率log Fe/K	Zr分率	Ca/ K	判別群	ニシア	分析 No.
1	211.4	461.4	185.0	8666.8	624.3	1069.9	333.2	2040.2	13.38	2.13	35.78	1.61	43.71	?	不明	1
2	259.0	371.6	121.9	7073.7	722.2	1360.6	302.7	1228.9	20.55	1.72	35.87	1.44	34.97	鬼ノ鼻山	多久	2
3	158.7	350.0	144.9	6823.8	469.2	1257.0	250.8	1495.7	13.51	2.12	36.20	1.63	43.07	?	不明	3
4	205.2	455.9	172.8	8123.3	558.9	1552.8	306.7	1831.7	13.15	2.13	36.54	1.60	43.10	金山2群・城山群	讃岐	4
5	193.5	399.6	163.9	7426.0	530.6	1430.4	287.1	1751.5	13.27	2.21	35.76	1.58	43.79	金山1	讃岐	5
6	201.5	453.8	174.5	8160.0	525.3	1527.5	306.7	1789.3	12.72	2.14	37.06	1.61	42.85	金山2群・城山群	讃岐	6

3. おわりに

サヌカイト製石器6点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った。その結果、2点は産地不明であったものの、3点が金山産、1点が鬼ノ鼻山産の可能性が高いと推定された。

Ⅲ. サヌカイト石材の産地推定

【引用文献】

望月明彦 2004「用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定」『用田大河内遺跡』 かながわ考古学財団調査報告167、かながわ考古学財団 PP511-517

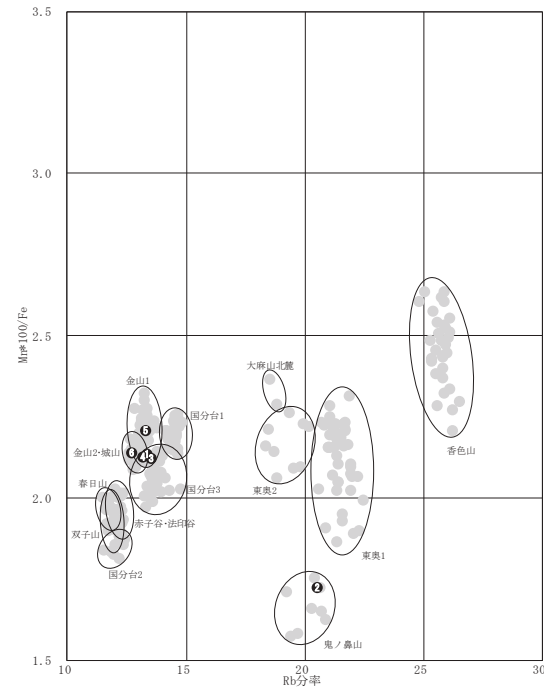


図41 サヌカイト産地推定判別図（1）

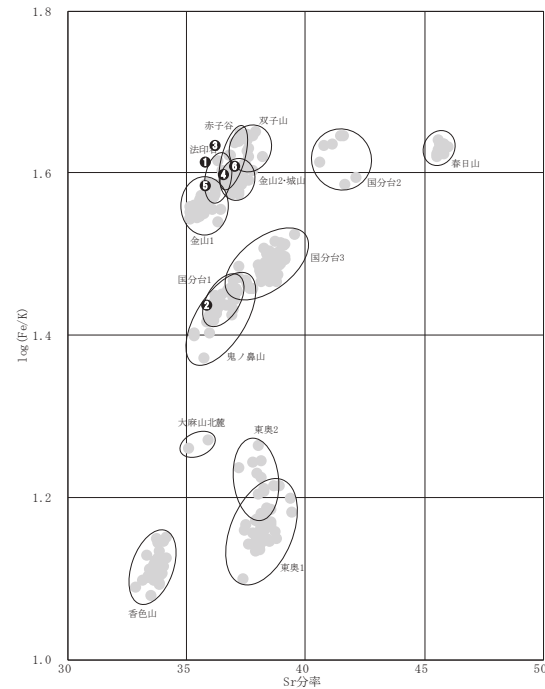


図42 サヌカイト産地推定判別図（2）

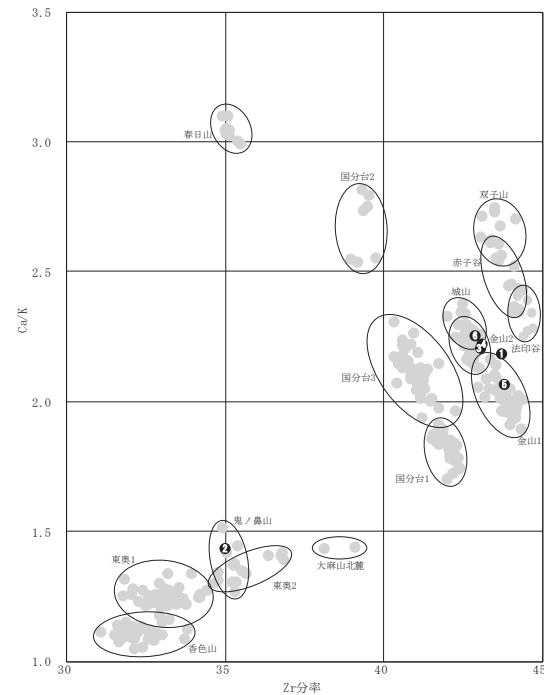


図43 サヌカイト産地推定判別図（3）

Ⅳ．放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・辻 康男

はじめに

愛媛県上島町の宮ノ浦遺跡第13次調査で検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

1．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表17のとおりである。年代測定試料を写真7、8に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表17 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-52261	遺跡名：宮ノ浦遺跡第13次 試料No. 1 採取位置：トレンチ：18Tr サンプル番号：No. 1 層位：IV-1層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-52262	遺跡名：宮ノ浦遺跡第13次 試料No. 2 採取位置：トレンチ：18Tr サンプル番号：No. 2 層位：IV-1層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）



写真7 資料No. 1 (PLD-52261)



写真8 資料No. 2 (PLD-52262)

2. 結果

表18に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図44に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差などに基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去

表18 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正した年代範囲	
				1 σ 暦年較正範囲	2 σ 暦年較正範囲
PLD-52261 試料No. 1	-27.78 ± 0.14	3065 ± 20	3065 ± 20	1389-1366 cal BC (18.47%) 1360-1337 cal BC (19.89%) 1321-1285 cal BC (29.91%)	1406-1265 cal BC (95.45%)
				3338-3315 cal BP (18.47%) 3309-3286 cal BP (19.89%) 3270-3234 cal BP (29.91%)	3355-3214 cal BP (95.45%)
PLD-52262 試料No. 2	-28.10 ± 0.44	3341 ± 23	3340 ± 25	1665-1660 cal BC (2.97%) 1630-1599 cal BC (27.23%) 1591-1543 cal BC (38.07%)	1730-1722 cal BC (1.76%) 1688-1650 cal BC (15.34%) 1646-1534 cal BC (78.36%)
				3614-3609 cal BP (2.97%) 3579-3548 cal BP (27.23%) 3540-3492 cal BP (38.07%)	3679-3671 cal BP (1.76%) 3637-3599 cal BP (15.34%) 3595-3483 cal BP (78.36%)

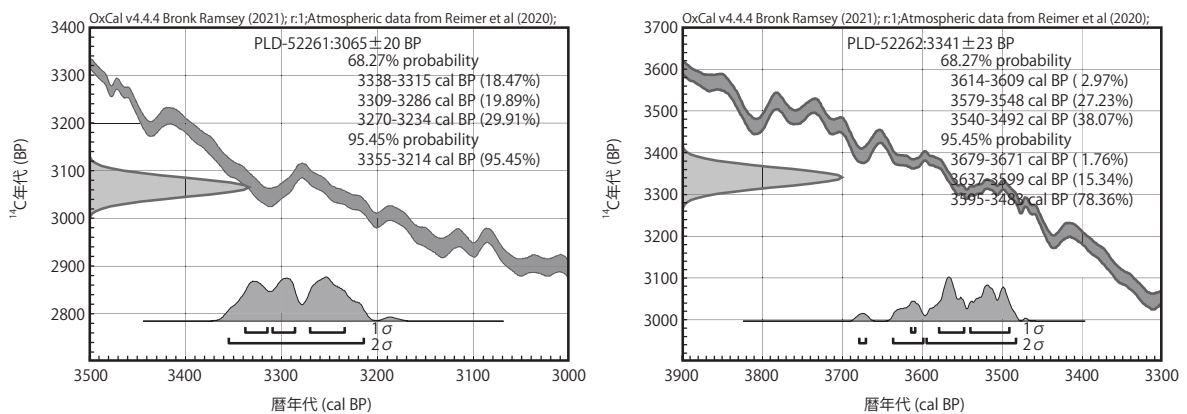


図44 暦年較正結果

の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

3. 考察

測定の結果（以下の較正年代は 2σ の値）は、以下のとおりである。

愛媛県上島町の宮ノ浦遺跡第13次調査から出土した炭化材片については、試料No. 1（PLD-52261）の ^{14}C 年代が 3065 ± 20 yrBP、較正年代が3355-3214 cal BP（95.45%）、試料No. 2（PLD-52262）の ^{14}C 年代が 3340 ± 25 yrBP、較正年代が3679-3671 cal BP（1.76%）、3637-3599 cal BP（15.34%）、3595-3483 cal BP（78.36%）であった。

宮ノ浦遺跡第13次調査出土の炭化材片の年代測定結果は、小林〔2017〕の放射性炭素年代値と土器型式および年代観に基づく、試料No. 1（PLD-52261）が縄文時代後期後葉、試料No. 2（PLD-52262）が縄文時代後期中葉に対比される。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、すべて最終形成年輪を確認できない部位不明の炭化材片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

【引用・参考文献】

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), pp.337-360

小林謙一 2017『縄文時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－』同成社 PP263

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会 pp. 3-20

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41>

IV. 放射性炭素年代測定

org/10.1017/RDC.2020.41 (cited 12 August 2020)

第5章 考 察

I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境－縄文時代草創期～早期の景観を意識して－

村上恭通・辻 康男

1. 宮ノ浦遺跡における地形環境に関する議論の過程

2011年8月に開始した宮ノ浦遺跡発掘調査の目的は、古墳時代前期における製塩址の解明にあった。第7次調査以降、現在にいたるまで発掘を継続しているⅡ区から約100m西に位置するⅠ区が当初の対象である。遺跡のある浜堤の北側には後背湿地があることから、環境因子を得るために、第3次および第4次調査において人力で湿地のボーリング調査を実施した〔佐々木2016〕。その結果、弥生時代から近世・近代にかけての生業活動に関する重要な所見を得た。

しかし、地表（湿地）面から1.8mまでのボーリングでは、浜堤形成のプロセスが十分に理解できないため、2016年に重機を用いたボーリング調査を実施し、ボーリング・コアを獲得し、精査することができた〔パリノ・サーヴェイ株式会社2018〕。その結果、地表から約11mにも達したが、基盤岩には到達することができなかった。基盤岩直上の堆積物は、崖錐にある花崗岩の表面が風化し、土壌クリーブにより二次的移動してたまった斜面堆積物である可能性が高いことが分かった。この層相と深度および年代値、さらに空中写真判読や踏査結果により付近の地形をふまえると、更新世末期～完新世初頭に、Ⅰ区は深い谷のなかにあったことが読み取れる。つまり古墳時代前期の製塩址を含め、縄文時代から現代にいたる人間の活動の場は、海進以降、崖錐堆積物に覆われた開析谷の内部に流入した海から供給された砂と崖錐斜面から供給される土砂によって形成されたのである。その高さは、崖錐底部から10mをはるかに超える。

この発見と成果をもって臨んだ第7次調査以降のⅡ区は、その当初からⅠ区と層順が異なることに驚かされた。Ⅰ区東部では白砂層の下にまず古墳時代前期のクロスナ層が検出されるのに対し、Ⅱ区のトレンチでは古代・中世クロスナ層（Ⅱ層）が現れた。そのクロスナ層に伴う遺構の調査中、発掘調査自体の収束をもくろみ、無遺物層まで掘り進めようとしたところ、クロスナ層の下に薄い古墳時代包含層（Ⅲ層）を確認した。それを掘り抜いて黄褐色の砂層（Ⅳ層）に達すると、花崗岩の角礫

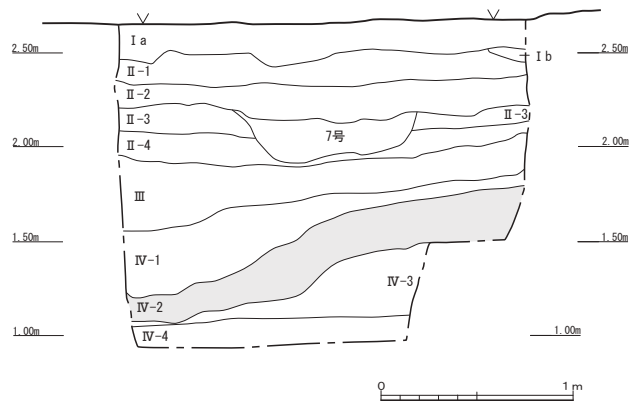


図45 Ⅱ区5トレンチ東壁土層図

が混じることに気づき、精査すると撚糸文土器を含む縄文土器が現れた。2019年度の第9次調査のできごとである。その発見の重要性と驚きは、次なる発掘への準備をかき立てたが、その後、新型コロナウイルスの影響下、発掘調査規模を縮小せざるを得なかった。発掘に参加したい学生が参加できないという状況下、輪番制など工夫しながら実施した第10次調査の期間中、4トレンチにおいてⅣ層が花崗岩の風化土を母体とすることを確認した。そして掘り下げると花崗岩の風化礫面にあたり、基盤岩が近いことを予測した。つまり調査区内の現地表面下に埋没丘陵が存在することが想定されるようになったのである。そして第12次調査の5トレンチにおいて、縄文包含層であるⅣ層が急角度で海に面した南から北に向けて大きく傾斜することを突き止め（図45）、その際、上層のⅣ－1層で縄文前期～後期の土器に加え撚糸文土器、薄手無文土器が出土し、下層のⅣ－2層で撚糸文土器、薄手無文土器を検出できた。

5トレンチⅣ層の傾斜は、海とは反対方向に谷が発達していたことを調査員達に想起させ、5トレンチの位置がまさに谷頭に当たるのであろうという議論になり、それをいかに証明するかが問題となった。そのためには岩盤の傾斜が分かればよく、それを効率よく把握するためにはサウンディング法によるボーリング調査が最適であるという結論に達した。そして実行した上で地形環境と包含層の形成を検討するにいたった。

また、宮ノ浦遺跡では押型文土器の出土が皆無であり、それよりも古い撚糸文土器や無文土器が発見されている。黄島式よりも古い押型文土器の年代は、香川県土庄町礼田崎貝塚出土資料の炭素14年代から8200－7800 cal BCと判明しており〔遠部ほか2007〕、撚糸文土器や無文土器が1万年以前に遡るという評価は許されるであろう。そうすると完新世の温暖化による海水流入前は陸地であると通説されていることから、遺跡のある佐島、上島諸島周辺がどのような地形環境にあったのかということも大きな関心事となった。それに関しては、既往の海底地形図のみならず、自ら工夫して海底地形を測量し、可視化したいと考えた。

この二つの問題意識に基づいて調査・検討した結果を示し、宮ノ浦遺跡周辺における更新世から完新世への移行期、すなわち縄文時代草創期末期から早期初頭にかけての地形環境について検討したい。

2. サウンディング法によるボーリング成果と地形観察からみた遺跡の立地

宮ノ浦遺跡のボーリングで採用した方法は、スウェーデン式サウンディング試験と呼ばれている。その名称はスウェーデン国鉄で開発されたことが由来となっており、日本国内ではJIS改正により、スクリュウウェイト貫入試験とも呼ばれている。鉄の棒（ロッド）に重しをかけつつ回転させながら地面に押し込み、その抵抗から地盤の固さを容易に調べる試験である。この調査業務を愛媛大学が株式会社シアテック（愛媛県新居浜市）に委託した。2023年2月1日に調査担当者と現地を踏査し、あらかじめ立ち入り許可をいただいた東隣の果樹園から発掘調査区にかけて東西2本の測線を設定し、調査区内でそれらに直行する南北の測線1本を設定した（図46）。そして2月23日に、測



試験ポイントSW-B2



試験完了後の残尺



先端状況



深度

写真9 サウンディング・ボーリング作業風景



図46 ボーリング地点

線上のポイント合計10カ所でボーリング調査を実施し（写真9）、その後、データ解析が行われ、その結果、基盤岩の標高が明らかとなった（表19）。

これらの図表にしたがうと次のように整理が可能である。

- ①南側、すなわち海側にある東西測線での計測値は、岩盤の標高が0.45～0.74mであり、30cm程度の比高差である。
- ②北側の測線では、東端（SW－C1）で－6.15m、西端（SW－A6）で－9.54mと急激に下がっている。機器の性能上測定深度は10mが限界であるため、SW－A6は途中で計測を停止しており、もっと深い可能性がある。

- ③南北の測線では、海側の南端（SW－A1）が最も高く、北のSW－A2で35cm程度下がり、SW－A3で約55cm下がり、北端のSW－A4で8m以上落ちる。

これらのことから、家屋が並ぶ浜堤直下あたりに東西に走る細い埋没丘陵平坦面があり、そこから南へ岩盤が徐々に傾斜し、SW－A2からSW－A3の間で傾斜が強くなり、SW－A3の北と西では崖のように急に落ちる様子がうかがえる。東端のSW－B1とSW－C1をみても北への傾斜がみられるが、その落差が小さいのは谷の縁に当たり、谷の法面に西への斜度があるた

表19 ボーリング結果

調査地点 No.	孔口標高 (TP. m)	貫入長 (m)	岩盤標高 (TP. m)
SW－A1	3.09	2.20	0.89
SW－A2	2.86	2.31	0.55
SW－A3	2.59	2.60	0.01
SW－A4	2.50	10.75	-8.25
SW－A5	2.70	2.25	0.45
SW－A6	2.96	12.50*	(-9.54)
SW－B1	2.66	2.13	0.53
SW－B2	2.74	2.00	0.74
SW－B3	2.82	2.13	0.69
SW－C1	2.42	8.57	-6.15

※測定限界

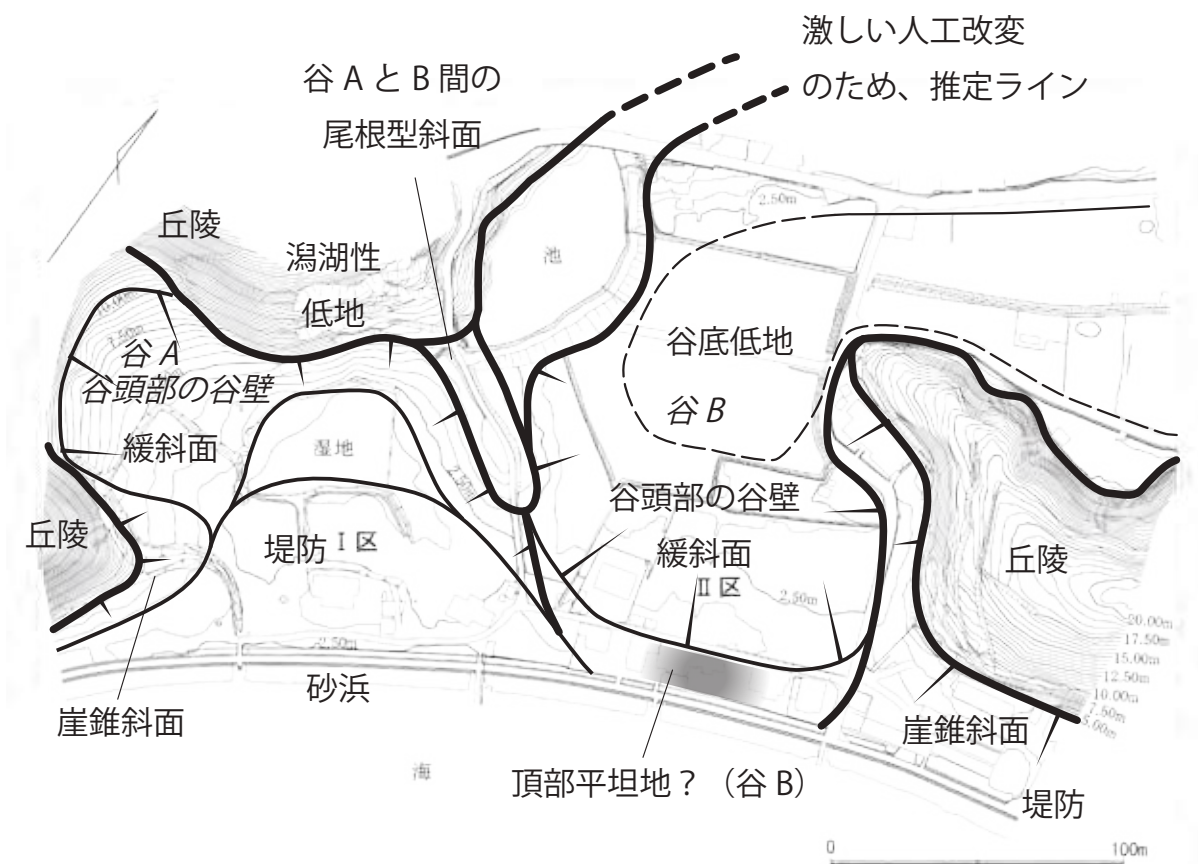


図47 宮ノ浦遺跡周辺の地形区分図

めであろう。

それではⅡ区内ではどのあたりから岩盤傾斜が強くなるのであろうか。SW-A2とSW-A3の間には南に18トレンチ、北に5トレンチが配されている。18トレンチの東壁土層図によるとⅣ-2層の傾斜は約 2.5° である（本書53頁、図23）。これに対し、5トレンチ東壁におけるⅣ-2層の斜度は 18.5° を測り、明らかに5トレンチ南端で傾斜が変化している。したがって、縄文包含層が形成される前段階の地形は、5トレンチあたりを谷頭にもつ谷が北東方向にのび、現在の江尻浜で開けていたのであろう。佐島住民からの聞き取り調査によれば、台風と大潮が重なった場合、海水が江尻浜から浸入し、宮ノ浦地区までおよぶという。その景観はまさに宮ノ浦から江尻浜に抜ける谷の形状を表しているのである。

以上の検討を通じて、更新世末期までには宮ノ浦遺跡周辺に大変複雑な地形が形成されていたことが判明する（図47）。Ⅰ区では北西部から、現在の海に向けての谷Aが開け、Ⅱ区では北東の江尻浜に開く谷Bがあり、それらは現在、海岸へ通じる細い道をいただく尾根型斜面により屏風のように区切られていたのである。谷Bの谷頭の北部は、現在、浜堤の最高所に当たり、宅地化されているが、この地下に細い東西方向の平坦地があり、その場所こそ縄文人により占地されることとなったのであろう。

3. 宮ノ浦湾の海底地形

遺跡の南に広がる宮ノ浦湾の海底については、国土地理院の1/25,000沿岸海域地形図「土生」によっても情報を得ることができる。しかしながら海進以前の地形復元に供するためにより詳細な



写真10 海底地形測量風景



図48 宮ノ浦湾の海底地形

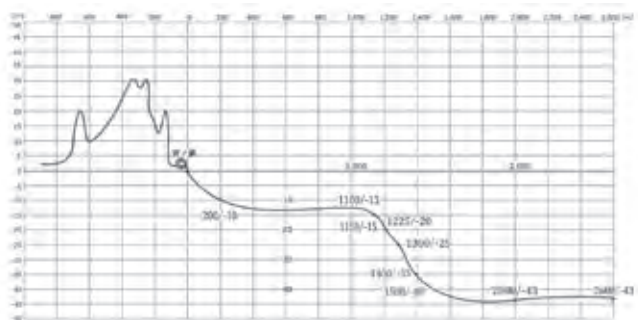


図49 海底の標高変化

I. 宮ノ浦遺跡と周辺の地形環境－縄文時代草創期～早期の景観を意識して－

データを得るべく、海底地形測量を2021～2023年の8月に実施した。そのデータ取りはGarmin社製魚群探知機GPSMAP8410xsvを取り付けた24フィートの和船で行った（写真10）。海底地形図の作成ソフトウェアは魚群探知機に内蔵されているQuickdraw Contoursを使用している。宮ノ浦湾内、そして一部湾外にも向けて25m間隔で走査し、その総測線距離は約55km、所要時間は8時間であった。

その結果は、前述の沿岸海域地形図とカシミール3Dスーパー地形図の合成図を用いて図48のように海底地形を描出できた。海底堆積物の厚さなど考慮すべきではあるが、おおむねその形状は表現されていると考える。弓削島の西海岸沿いと佐島南部の東岸沿いはやや深く谷が貫入しているが、宮ノ浦遺跡の前面には、標高－13mに長さ約930m、幅約590mの平坦地が広がっている。そして遺跡から約1100mの沖合から1600mにかけて約30m落ち込み、また－43mの平坦地が南に続くことが分かった（図49）。このような海底地形の形成は、海進による海波の営力により、まず－43mが平坦化され、さらなる海進で－13mの平坦地が形成されたと解釈することができる。すると、次はこの海進がどこまで北に及んだのか、遺跡に迫ったのかが問題であり、調査区のⅣ－2層を供給した頂部平坦面のウェーブカットに関わってくる。この点については、調査区の土層観察では何ら情報を得てはいない。現状では頂部平坦部の南縁までは海進で削られた可能性を想定しておきたい。

4. まとめ

以上のように、宮ノ浦遺跡をめぐる縄文時代草創期末から早期初頭の地形環境を提示することができた。Ⅱ区の頂部平坦面で生活した縄文人は、北に谷B、西に崖錐堆積物で埋没する過程の谷Aを眺めることができたであろう。谷Aは狭く、崖錐斜面が急なことから、法面を伝い流れる雨水の集約を可能とし、その底部は水場としての利用が想定される。一方、南側の景観については、その細かな土地の起伏は波で削平され、のこっていないことを改めて認識することとなった。

海進はⅡ区の頂部平坦地の南縁まで迫り、削ったのであろう。同時に谷Aには海が入り込み、谷Bも江尻浜側から海が入り込んだ。つまり宮ノ浦遺跡の頂部平坦面は三方を海で囲まれた細い陸橋の様相を呈することとなった。真水を得る場もない。こういったことが押型文土器段階の生活の舞台としてこの地が選ばれなかった理由なのかもしれない。

【参考文献】

- 遠部慎・宮田佳樹・加藤久雄・米田稔 2007「瀬戸内海最古の貝塚－豊島礼田崎貝塚の再評価－」『LAGUNA』14、汽水域研究会
- 佐々木尚子 2016「第6章 弓削佐島宮ノ浦遺跡における花粉分析」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2018「1. 宮ノ浦遺跡ボーリング調査および分析（概要）」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

Ⅱ．宮ノ浦遺跡における縄文時代草創期・早期移行期の土器

村上恭通

はじめに

宮ノ浦遺跡では西側のⅠ区17トレンチで甕式系土器の口縁部片が出土し〔福永2016〕、またⅡ区では第7次調査の1トレンチで短沈線で幾何学文を施した曾畑式系土器の口縁部が発見され〔有馬・持永編2018〕、縄文前期まで遡る土器が存在することは判明していた。そして第9次調査の5トレンチ東壁沿いで、古墳時代前期層であるⅢ層の下から花崗岩の風化砂礫層であるⅣ層が検出され、そこから撚糸文土器片が発見された。また、それ以前に5トレンチで先行的に深掘りした小トレンチ内の最下層からも撚糸文土器が出土していることを確認した。Ⅱ区でも押型文土器は1点も認められず、早期初頭のあとは前期まで空白期間があることを認識した。

第10次・第11次調査ではⅣ層が2層に分かれることが判明し、新型コロナの呪縛から解かれた第12次調査において5トレンチ東壁沿いを深く掘り下げ、Ⅳ－1層から縄文前期、中期、後期の土器片が出土し、稀に撚糸文土器や無文土器を含むことが分かった。またⅣ－2層で撚糸文土器、無文土器を検出した。そして第13次調査では、12トレンチにおいてⅣ－2層の上部で撚糸文土器、中部で隆帯文土器、最下部で刺突文土器が出土した。

土器片全てが小片であることから器形の復元や推定が困難であり、しかも包含層からの出土ということもあり、それらの本来の共時性についても確たる根拠はない。ただ、これらの資料が芸予諸島ではじめての出土例ということがあり、ここで整理することによって今後の調査における課題を明確にしておきたい。また発掘後間もなく、時間的な制約もあって十分な類例調査はできていないものの、渉猟し得た資料との比較検討の過程を示すことによって、各型式の土器の由来についても展望を示すこととしたい。

1．隆帯文土器・刺突文土器・無文土器・撚糸文土器の出土状況

前述のように最新の第13次調査では、12トレンチにおいてⅣ－2層の上部で撚糸文土器（図50－16～18）、中部で隆帯文土器（1、2）、最下部で刺突文土器（3）が出土した。第12次調査では、5トレンチ東壁寄りに設定した深掘りトレンチで、北に向けて大きく傾斜するⅣ－2層を確認し、撚糸文土器、無文土器片を9点検出した。撚糸文土器3点はⅣ－1層と2層の層境で2点（標高1.71m、1.66m）とⅣ－2層上部で1点（1.63m）出土しており、無文土器はⅣ－2層上部で1点（1.64m）、中部から下部にかけて6点（1.64m、1.68m、1.68m、1.68m、1.69m、1.72m）出土した。層の斜度、そしてⅣ－1層との層理面に起伏があることなどから、それらの出土レベルの有意性は十分とはいえないが、撚糸文土器よりも下位で無文土器が出土する傾向が看取できる。

Ⅱ. 宮ノ浦遺跡における縄文時代草創期・早期移行期の土器

5トレンチと12トレンチでの所見を総合すると、Ⅳ－2層の上部で撚糸文土器が出土する傾向が高い。隆帯文、刺突文と無文土器は同じトレンチでの検出例はないが、Ⅳ－2層中部～下部で出土する傾向が高く、12トレンチでは同層最下部で刺突文土器の出土を押さえている。包含層の供給源は、南の海側の浜堤頂部下に埋没する丘陵平坦面にあると想定しているが、プライマリーな堆積環境下においてこれらの出土状況を明らかにし、遺物の先後関係、共存関係の検証が望まれる。

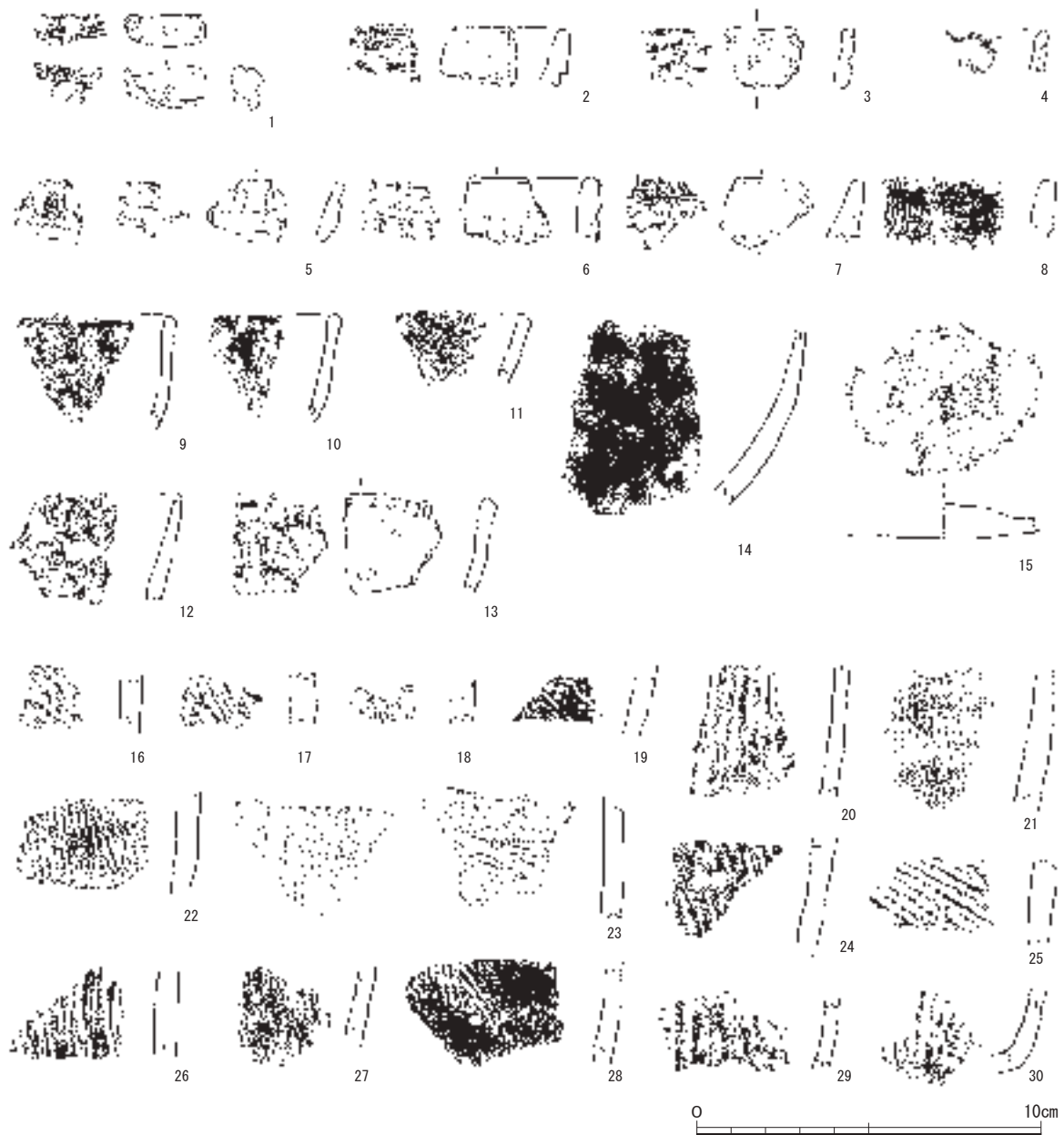


図50 宮ノ浦遺跡Ⅱ区出土の隆帯文土器・刺突文土器・無文土器・撚糸文土器

1～3、16～18：12トレンチⅣ－2層、5、6、15、23：12トレンチⅣ－1層、4、7：18トレンチⅣ－1層、8、21、26～28：4トレンチⅣ－2層、9、14：5トレンチⅣ－2層、10：5トレンチⅣ－1層、11：4トレンチⅣ－1層、12、25：18トレンチⅣ－1層、13：17トレンチⅣ－1層、19、24、30：5トレンチⅣ層、20、22、29：17トレンチⅣ－2層

2. 各土器の特徴

(1) 隆帯文土器と刺突文土器

隆帯文土器は第13次調査の12トレンチで確実にⅣ－2層から出土した資料（図50－1、2）以外にも、同トレンチⅣ－1層（5、6）、18トレンチⅣ－1層（7）で検出されている。いずれも小型土器の破片であり、器壁も薄い。その隆帯は幅狭と幅広の2種があり、いずれも低い。隆帯の下半に刺突文を施されており、それらの平面形には円形、略楕円形がみられる。口縁端部にわずかな平坦面をもつ例は、そこに刺突文をもっている（1）。

刺突文のみを施す口縁部片は、12トレンチⅣ－2層最下部の出土例（3）と18トレンチⅣ－1層出土例（4）とがある。前者は平面略方形の刺突文を2段施し、後者は小片のため刺突の形状が不明である。第11次調査の4トレンチⅣ－2層出土の口縁部片（8）は地文に細かな撚糸文をもち、刺突の形状は不詳であるが、相互の間隔を密に施されている。器壁が6.5mmと厚い点も第13次調査出土例とは特徴を異にしている。

(2) 無文土器

無文土器も小型に復元され、また器壁が薄い。器表に指頭圧痕を顕著にのこし、波打つところに大きな特徴がある。口縁端部は丸くおさめるもの（9、10）、内側に突出するもの（11）、尖り気味のもの（12）があり、雑に四角くおさめて外面に不規則な刻目を有するもの（13）もある。胴部下半の破片（14）は、断面がゆるやかに弧を描いており、平底の底部につながるとは考えづらい。12トレンチⅣ－1層出土の底部（15）は、内面に指頭圧痕をのこし、凹凸が著しく、底面は平坦でわずかに立ち上がりをみせており、丸平底を想定できる。

(3) 撚糸文土器

撚糸文土器は口縁形態は不明であるが、底部片（30）の特徴から丸平底が想定される。器壁は薄く、撚糸は細く繊細なものとやや太めのものとのがあるが、焼成の良さから硬質な土器片が多い。施文方向は縦位が主体で、斜位の例もあり、一つの破片に縦位、斜位双方を施した例（22）もある。施文後、文様をナデ消す例（21、24、27、28）もある。また絡状体を引きずって条痕様に仕上げる例（20）もみられる。

3. 各土器の類例について

南九州に分布の中心をもつ隆帯文土器は、愛媛県内でも愛南町平城貝塚〔松本2019〕や松山市北梅本乙井遺跡〔幸泉2019、兵頭・幸泉2018〕での出土が知られている。これらは複数の平

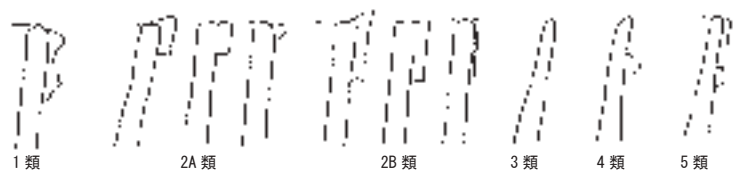


図51 森の木遺跡の隆帯文土器口縁部分類〔綿貫編2016〕

行する隆帯が貼り付けられ、隆帯上には連続する押圧あるいは刻目が施されており、宮ノ浦遺跡で出土した隆帯文土器とは異なっている。

これらに対し、口縁部のみに隆帯をもち、そこに刺突文を施す例が大分県佐伯市森の木遺跡で出土している。綿貫俊一氏は森の木遺跡から出土した草創期に属する隆帯文土器の分類に際し、施文方法から、隆帯上に刻みや刺突がみられる例を隆帯上施文と呼び、ない例を隆帯上無文と呼んだ〔綿貫編2016〕。また隆帯がない例に施文している場合についても、隆帯が形骸化する以前の施文伝統を引き継いでいるとみなし、擬隆帯上施文とした。そして口縁部形態を1類から5類に分類し、2類をA、Bに細分し、次のように説明した（図51）。

隆帯文系1類：低く幅広い隆帯を口縁部外面の直下に2条貼り付けたもので、隆帯間がナデによって低く連結している。

ㄥ 2類：口縁に接して1条の隆帯を貼り付けたもので、幅狭い2A類と幅広い2B類からなる。



図52 森の木遺跡出土縄文草創期土器の一例〔綿貫編2016〕

- ㄥ 3類：隆帯が極めて低く目立たないか、全く貼り付けていない場合。擬隆帯上施文の元になる土器。
- ㄥ 4類：口縁端部外面側のやや下側に横方向の隆帯を貼り付けた例。
- ㄥ 5類：幅広い隆帯の直下に細い隆線を貼り付けた例で、1類と2B類の中間的な特徴を有する。

そのうえで村上昇氏や児玉健一郎氏が示した南九州隆帯文土器編年案〔児玉2008、村上2007〕のなかに森の木遺跡における隆帯文系の主要な2A類・2B類が全く含まれていないという重要な指摘を行った。

以上のような綿貫氏が示した口縁部形態に対する分類案に基づけば、宮ノ浦遺跡出土の隆帯文土器は2A類、2B類に相当する¹⁾。また森の木遺跡では隆帯文上の文様が多様であり、刺突文にしても円形、略方形、短沈線状（鉛直、斜位）はそのバリエーションに含まれている（図52）。それだけでなく、単純口縁を隆帯が形骸化したものと評価し、擬隆帯上施文とされているために、宮ノ浦遺跡で「刺突文のみを施す口縁部片」（図50-3、4）とした土器も隆帯文土器との関係で説明できることとなる。

北部九州の刺突文土器については、福岡市柏原遺跡E区、F区の発掘担当者である山崎純男氏がその存在を指摘し〔山崎編1983、1988〕、大塚達朗氏がそれらを「柏原式土器」と呼称し〔大塚1991〕、近年、林潤也氏により体系化を目指した議論が進められている〔林2023〕。柏原式土器の一型式として福岡市大原D遺跡15-3区出土資料〔池田編2003〕を基準とする大原D式があり、そのなかにも宮ノ浦遺跡Ⅱ区12トレンチⅣ-2層下部で出土した土器と同じ2段刺突文がある。大原D遺跡出土土器はもとより大型品が多く、サイズの点で宮ノ浦遺跡出土資料と比較することに難があるものの、小型品についても器壁が厚く、調整も粗い。刺突文については林氏が指摘しているように「小型円形の深い刺突とは別に、あまり深くなく下方に押し引くように施す一群や複数段施す一群」が存在する。2段刺突文の場合、大原D遺跡出土品は上段と下段でその刺突法に違いがあり²⁾（写真11）、施文の原理や発想が異なるものとみられる。この点を考慮しても、宮ノ浦遺跡の刺突文土器は森の木遺跡のそれとの親縁性が深い。

撚糸文土器についても、福岡市松木田遺跡出土資料を中心に議論が活発である。報告者である米倉秀紀氏は、松木田遺跡出土の撚糸文土器について、器壁が1.2~1.4cmを測るものが多く厚いという点、胎土が粗くて脆い点、直線的な尖底・乳房状・丸底気味尖底という底部の特徴を示している〔米倉編2001〕。綿



写真11 大原D遺跡（左2点）と宮ノ浦遺跡出土の刺突文土器

貫氏はこの土器群に松木田式という型式名を与え、早期前葉の年代に位置付けている〔綿貫1999〕。松木田式土器と宮ノ浦遺跡出土撚糸文土器との間には大きな違いがみられるが、中四国地方で比較しうる資料がない現在、九州、そして近畿、北陸と資料の渉猟範囲を広めて撚糸文土器の動向を捉える必要がある。

薄手で表面の凹凸が著しい無文土器については、撚糸文土器以上に周辺地域との関係を検討することができなかった。森の木遺跡では無文土器の出土量が豊富であり、ナデ調整無文土器と条痕調整無文土器があり、綿貫氏は前者のなかに本来、草創期後半に含まれる土器がある可能性を指摘している〔綿貫編2016〕。森の木遺跡出土の無文土器は調整以外にも厚薄の多様性があり、特に薄手の土器については宮ノ浦遺跡出土品との比較検討の必要性を感じる。藤山龍造氏は、東日本における豊富な無文土器の検討成果を前提として西日本の資料についても検討を加えた〔藤山2020〕。藤山氏は愛媛県久万高原町の上黒岩岩陰遺跡第6層出土の無文土器について、口縁部が直立ないしは外傾し、一部の資料は胴下部で湾曲しながら底部に近づくという器形上の特徴を示し、薄手と厚手の一群がそれぞれ確認されると指摘した。そしてこの遺跡の無文土器群が隆起線文土器群に後続し、押型文土器群に先行することに問題なしと述べている。一定の期間にわたって継続したと藤山氏が考える無文土器について、宮ノ浦遺跡出土例がどの段階に位置付けられるのかも今後の検討課題である。

まとめ

以上、宮ノ浦遺跡出土の隆帯文土器、刺突文土器、無文土器、撚糸文土器について整理し、それぞれの類例に関する見解を述べてきた。冒頭で述べたように、宮ノ浦遺跡の資料は包含層出土であり、また小片が多いため、さまざまな点で評価に限界がある。より良好な出土状況との遭遇が望まれるところである。

この点については、石器についても同様のことがいえる。Ⅳ－2層では安山岩の剥片、チップを除くと製品の出土がない。しかしⅣ－1層出土の打製石鏃（図53）のなかには、左右非対称形、先

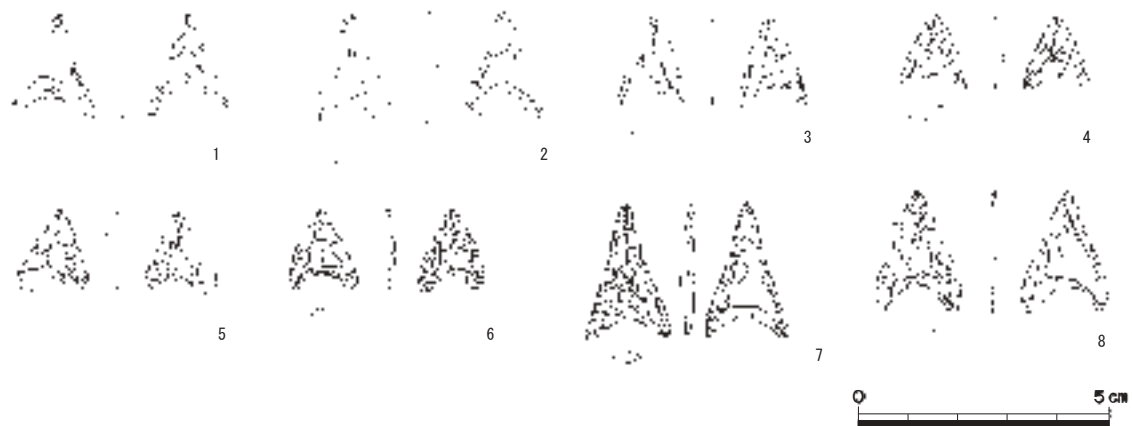


図53 宮ノ浦遺跡Ⅱ区出土打製石鏃

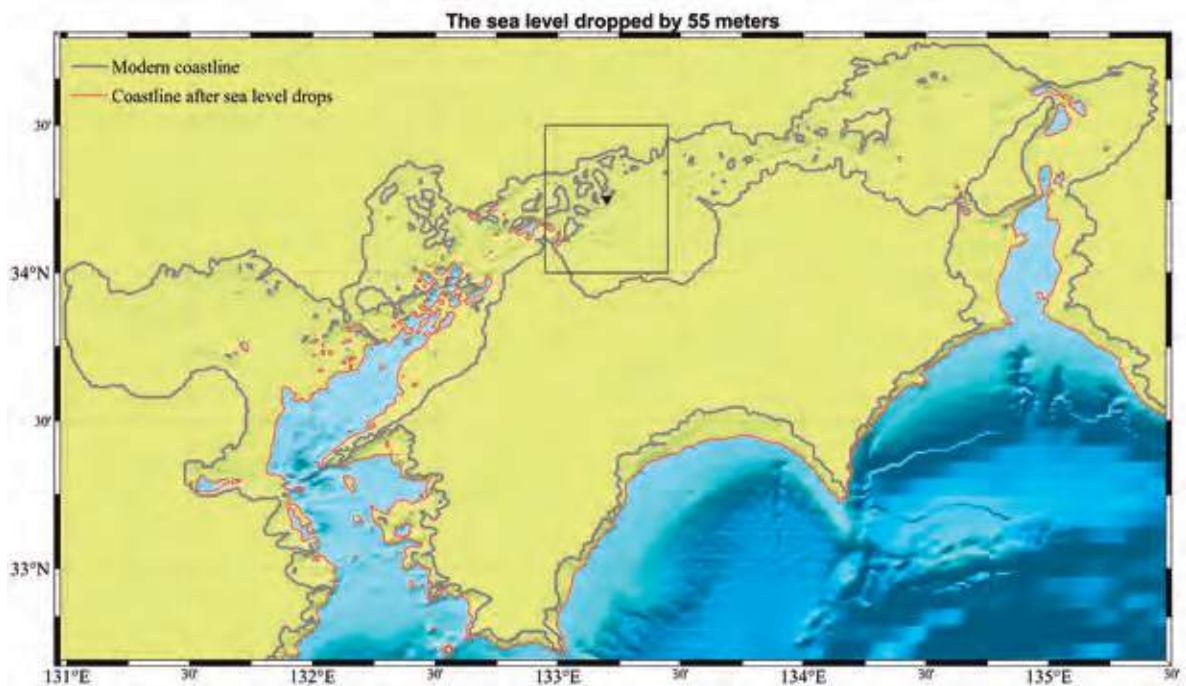


図54 1万年前の海岸線復元図

▼は宮ノ浦遺跡の位置

端突出形態、基部の先鋭な作り出しなど、及川穰氏が指摘する草創期の打製石鏃の特徴が観察される³⁾〔及川2014〕。Ⅳ－2層からの石鏃の検出と検討も今後の重要な課題といえよう。

さて、宮ノ浦遺跡では押型文土器の出土が皆無であり、それよりも古い段階の土器についてここで論及してきた。瀬戸内海域における黄鳥式よりも古い押型文土器の年代については、香川県土庄町礼田崎貝塚出土資料の炭素14年代から8200－7800 cal BCと判明しており〔遠部ほか2007〕、撚糸文土器や無文土器が1万年以前に遡るという評価は許されるであろう。郭新宇氏（愛媛大学沿岸環境科学研究センター）は全世界的な海水準変動に関する最新の研究〔Yokoyama et al. 2019〕に基づいて、瀬戸内海を中心とした海水準変動を解析し、海岸線の変化を明らかにした。⁴⁾ それにしたがい1万年前の海面が55m下がると仮定すると、その当時の海岸線は図54のようになる。豊後水道からの海は芸予諸島までおよんでおらず、四国は九州とも本州とも繋がっており、芸予諸島は低いやまなみであった。その北東麓の一角に宮ノ浦遺跡が存在したのである。やがて迫り来るさらなる海進によって、陸に適応した生活様式や文化が激変し、他地域との分断を補うべく新たな交流戦略が必要となることを宮ノ浦遺跡はものがたっている。

本稿を草するにあたり、次の諸氏より多々ご教示を賜りました。末筆ながら記名させていただき謝意を表します。岡田憲一（榎原考古学研究所）、及川 穰（中央大学人文科学研究所）、遠部 慎（久万高原町教育委員会）、久住猛雄（福岡市埋蔵文化財センター）、菅波正人（福岡市経済観光文化局）、長井謙治（愛知学院大学）、兵頭 勲（愛媛県教育委員会）、福永将大（九州大学総合研究博物館）、松本安紀彦（愛南町教育委員会）、山崎純男、綿貫俊一（大分県立埋蔵文化財センター）

II. 宮ノ浦遺跡における縄文時代草創期・早期移行期の土器

【註】

- 1) 綿貫俊一氏には森の木遺跡出土縄文土器について多くのご教示をいただいた。また宮ノ浦遺跡出土土器についても実見後、ご意見いただいた。
- 2) 大原D遺跡出土土器の調査に際しては福岡市埋蔵文化財センターの格別のご配慮を頂戴した。
- 3) 及川穰氏には宮ノ浦遺跡出土の打製石鏃を実見していただき、草創期に遡る資料が存在することをご教示いただいた。
- 4) 郭新宇氏よりデータを提供いただいた。

【参考・引用文献】

- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 池田祐司編2003『大原D遺跡群4－大原D遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告－縄文時代編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集、福岡市教育委員会
- 大塚達朗 1991「九州地方の縄文草創期編年と泉福寺洞穴」『縄文時代』2、縄文時代文化研究会
- 及川 穰 2014「日本列島における出現期石鏃の型式変遷と広域連動」『物質文化』94、物質文化研究会
- 遠部 慎・宮田佳樹・加藤久雄・米田 穰 2007「瀬戸内海最古の貝塚－豊島礼田崎貝塚の再評価－」『LAGUNA』14、汽水域研究会
- 幸泉満夫 2019「瀬戸内最古の土器」『愛媛大学法文学部論集人文学編』第47号、愛媛大学法文学部
- 児玉健一郎 2008「南九州隆帯文・爪形文系土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 林 潤也 2023「柏原式土器小考」『九州旧石器』第27号、九州旧石器文化研究会
- 兵頭 勲・幸泉満夫 2018「愛媛県の外來系土器の概要」『中四国地方の外來系土器 第29回中四国縄文研究会島根大会 発表資料集・集成資料集』中四国縄文研究会島根大会実行委員会
- 福永将大 2016「縄文土器について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 藤山龍造 2020「縄文時代草創期の無文土器群」『遺跡学研究の地平－吉留秀敏氏追悼論文集－』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
- 松本安紀彦 2019「四国西南地域の縄文文化（1）－草創期・土器の始原の頃について－」『縄文時代』30、縄文時代文化研究会
- 村上 昇 2007「日本列島西部における縄文時代草創期土器編年－南九州を中心に－」『日本考古学』第24号、日本考古学協会
- 山崎純男編1983『柏原遺跡群Ⅰ－縄文時代遺跡F遺跡の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集、福岡市教育委員会
- 山崎純男編1988『柏原遺跡群Ⅴ－先土器・縄文時代遺跡A－2・C・H・J～N遺跡の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集、福岡市教育委員会
- 米倉秀紀編2001「松木田遺跡群2 第3次調査下層（縄文時代早期）遺物編」福岡市埋蔵文化財調査報告書第686集、福岡市教育委員会
- 綿貫俊一 1999「九州の縄文時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談叢』第42集、九州古文化研究会
- 綿貫俊一編2016『森の木遺跡発掘調査報告書－東九州自動車道（佐伯～県境間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（4）』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第88集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
- Yokoyama, Y., Purcell, A., and Ishiwa, T. (2019) Gauging quaternary sea level changes through scientific ocean drilling. *Oceanography* 32(1): 64–71.

Ⅲ．古式土師器について

品川 愛

はじめに

宮ノ浦遺跡では第1次～第8次のⅠ区、第7次～第12次のⅡ区の発掘調査において、古式土師器が出土している。第5次調査までの出土品に関しては、すでに時期や系譜などについて検討がなされているが〔柳本・大山2016〕、以後の調査においても、例えば、Ⅰ区ではN15グリッドで土器だまりが検出されるなど、資料数が増加している。本稿では第12次調査までに出土した資料の概要を示し、各調査区で出土した古式土師器の時期について明らかにしたい。

1．各調査区の新式土師器の出土状況

Ⅰ区では、6、14、16、18、24、25、29トレンチ、N15グリッドでの出土量が多く、海岸線から15m付近と50m付近の調査区に古式土師器が多く分布するとみることができる。海岸線から15m付近の浜堤上に設定した15トレンチでは、古墳時代前期の製塩炉が検出されており、製塩活動にともなって使用された土器類が廃棄されたものと推測される。また、海岸線から50m付近には広い平坦面がみられ、この付近から出土した土器は居住にともなって使用された可能性がある。既往の調査では、平坦面付近に、居住に関する遺構は確認されておらず、トレンチ外に未確認の遺構が存在するか、背後の丘陵地に土器の供給源となった居住域が存在するものと考えられる。Ⅱ区ではⅠ区と比較して出土量が少ないが、調査区東側に設定したトレンチ（17・18トレンチ）に比較的集中しており、調査区外のとくに南側に生活域または生産域が存在する可能性がある。

2．対象とする資料群

次に、宮ノ浦遺跡で出土した古式土師器の時期について検討する。Ⅰ区に関しては資料数が多いため、まとまった数量が層位的に出土している29トレンチⅢe層、N15グリッドⅣ層、25トレンチⅥ層から出土した土器群を対象として時期を論じたい（図55）。Ⅱ区はⅠ区と比較して資料数が乏しいため、すべてのトレンチで出土した資料を対象とする（図56）。時期比定にあたっては、芸予諸島における古墳時代前期の土器編年が未確立であることから、当該期の土器編年が整備されている伊予地域の編年を参照する〔柴田・松村2014〕。

なお、各トレンチでは古式土師器と製塩土器が共伴して出土する事例が多数みられる。製塩土器は脚部径によって、時期の前後関係を推定することが可能であることが指摘されており〔柴田2015〕、古式土師器の時期を考えるうえで、共伴する製塩土器の特徴にも着目する。

3. I区出土古式土師器

25トレンチⅥ層 壺、甕、鉢、製塩土器が出土している。壺は複合口縁壺（1）と二重口縁壺（2）、甕は布留系甕（3・4）がみられる。二重口縁壺は山陰系と考えられる。いわゆる山陰系二重口縁壺は口縁内部に段をもつが、2は口縁端部から胴部にいたるまでなだらかに仕上げられており、模倣品との可能性が高い。鉢（5）は器高が低く、外反口縁をもつ。製塩土器の脚台径は4～5.2cmを測る。このうち、時期の検討が可能なものは1、5であり、複合口縁壺は布留0式、外反口縁鉢は布留1式以前に盛行する器種である。

29トレンチⅢe層 壺、甕、器台、製塩土器が出土している。壺には直口壺（11）、甕はタタキ甕（12・13）、吉備系甕（14）がある。製塩土器の脚台径は3.4～5.4cmを測る。時期の推定が可能なものは12、13、15であり、タタキ甕は布留0式、器台は布留2式以前に主にみられる。

N15グリッドⅣ層 壺、甕、鉢、高坏、器台、ミニチュア土器、製塩土器が出土している。壺は短頸壺（20・21）、直口壺（22）、二重口縁壺（23）、広口壺（24）が確認される。甕はタタキ甕（25～30）、布留系甕（32～34）が主な形態である。また、胎土や器形から36は讃岐系、37は近江系と考えられる。鉢は直口（38～40）、外反口縁（41）、二重口縁（43）があり、高坏は坏部が屈曲するもの（47～50）と椀型（51）の2種期がある。それらにともなう製塩土器の脚台径は3.8～6cmである。上記のうち、時期の検討が可能なものは、タタキ甕（25～30）であり、伊予地域においては布留0式以前まで存続する〔柴田・松村2014〕。高坏脚部の53は脚部が長脚化しており、布留2式に比定される。また、広口壺、二重口縁壺、外反口縁鉢や直口口縁鉢、器台は布留2式以前までみられる器種である。

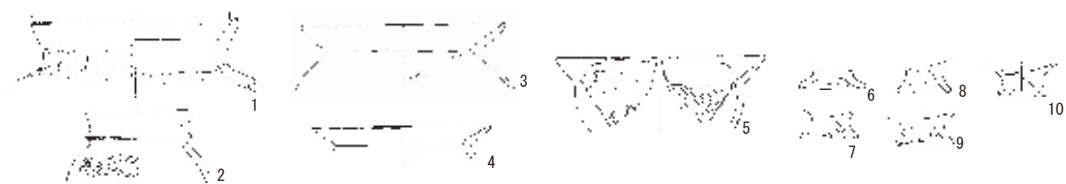
以上のように、I区では、壺、甕、鉢、高坏、器台、ミニチュア土器、製塩土器が出土しており、各器種は細部形状の差違によって複数の形態が確認される。それらのなかには、吉備系、山陰系、讃岐系、近江系といった外来系土器も含まれていた。外来系土器は各地域、甕、壺が1～2点程度出土している。いずれの地域の土器もまとまった器種、数量はみられないため、恒常的な交流による搬入品の可能性が高い。時期については、良好な一括資料が少なく、限定することが難しいが、ある程度時期を絞り込める資料を見た場合、おおむね布留2式以前におさまるものが多いといえる。古式土師器にともなう製塩土器は脚台径が3cm以上のものが主体である。

4. II区出土古式土師器

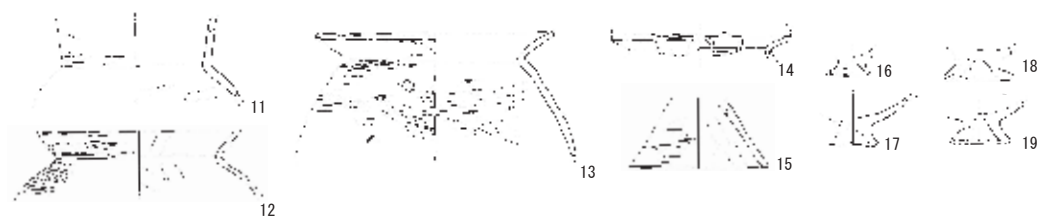
II区で出土した古式土師器を図56に示した。II区ではI区に比べて資料数が少なく、また各資料も小片であり、器種や時期を特定することが難しい資料が多い¹⁾。

1は壺、2～6は甕、20～22は高坏、23～35は製塩土器である。このほかは、器種の特定が難しい口縁部片が数多く出土している（7～19）。これらは、口縁部が短くのびるものが多く、甕か鉢と考えられる。口縁部片の形状は端部を丸くおさめるものが主体となり、I区と比較すると、形態

25 トレンチⅥ層



29 トレンチⅢe層



N15 グリッドⅣ層

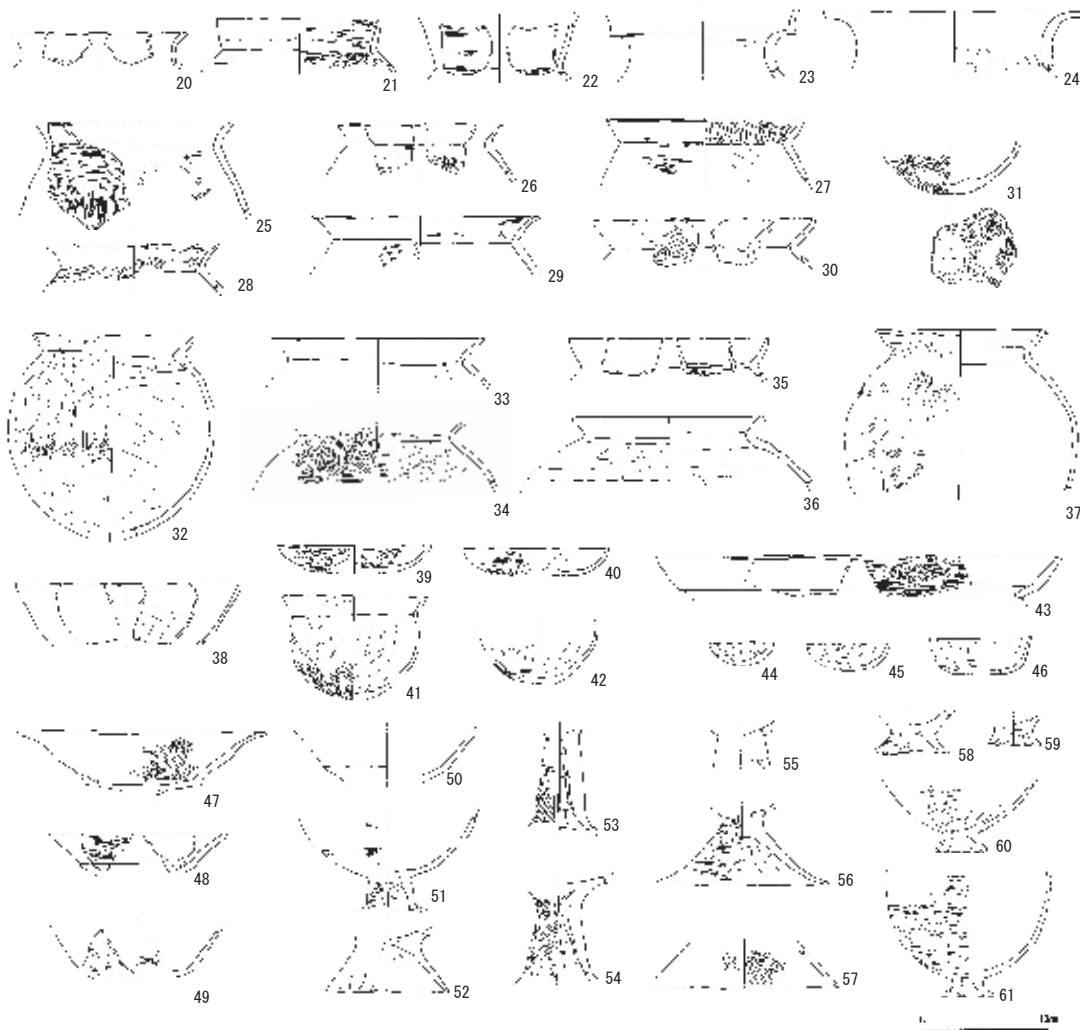


図55 I区出土の古式土師器と製塩土器

Ⅲ. 古式土師器について

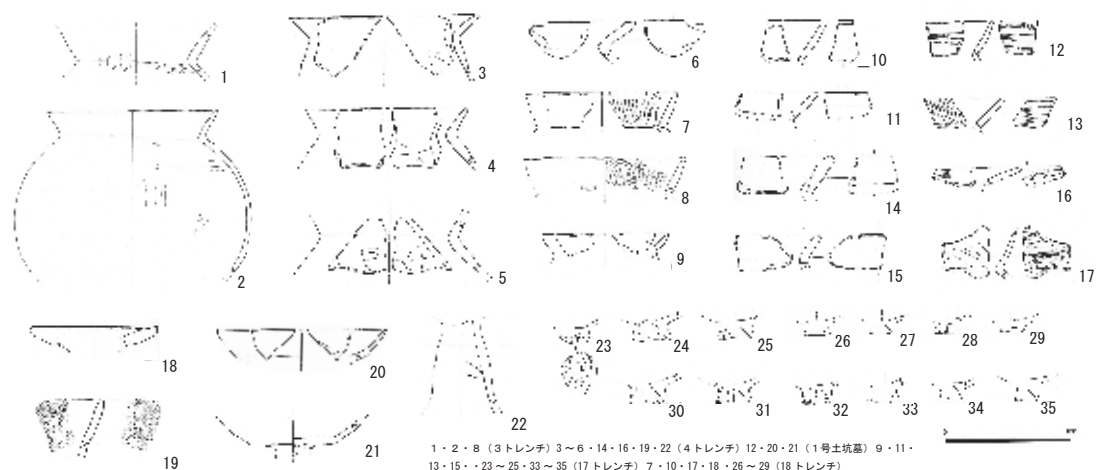


図56 II区出土の古式土師器と製塩土器

のバリエーションに乏しい点を指摘できる。また、製塩土器は脚台径3cm以下の小型品のみが出土している。

Ⅱ区の古式土師器の時期について考えてみたい。その検討が可能な資料は、2、6であり、2は胴部最大径が胴部中位にあり、やや下膨れの形態を呈することから布留2式以降の時期が妥当であるとする。6は口縁端部に強いナデを施しており、このような特徴をもつ甕は布留3式以降にみられる。

また、共伴する製塩土器の脚台部も時期を
考えるうえで重要である。Ⅱ区の製塩土器の
脚台径はすべて3cm以下であり、Ⅰ区と比較
して小型である。柴田昌児氏による製塩土器
の編年研究によると、布留0～1式併行期の
芸予Ⅲ-1類から布留4式併行期の芸予Ⅲ-
3類にかけて、脚台部の小型化が進み、その
間の布留2～3式併行期の芸予Ⅲ-2類で
は、大型と小型のものが共存する（図57）。
宮ノ浦遺跡で出土した製塩土器を脚台径に
よって分類すると、大きく底径1～3cmと3
～6cm程度の2種類がみられる（図58）²⁾。
両タイプの共伴関係に関して、宮ノ浦遺跡に
おいては、15トレンチⅦa層⑧（f）を除い
て共伴しない。また、Ⅰ区の6トレンチ、15
トレンチにおける調査では、大型品が小型品
よりも下層で検出されている。これらの点か
ら、宮ノ浦遺跡では大型と小型は共存しない

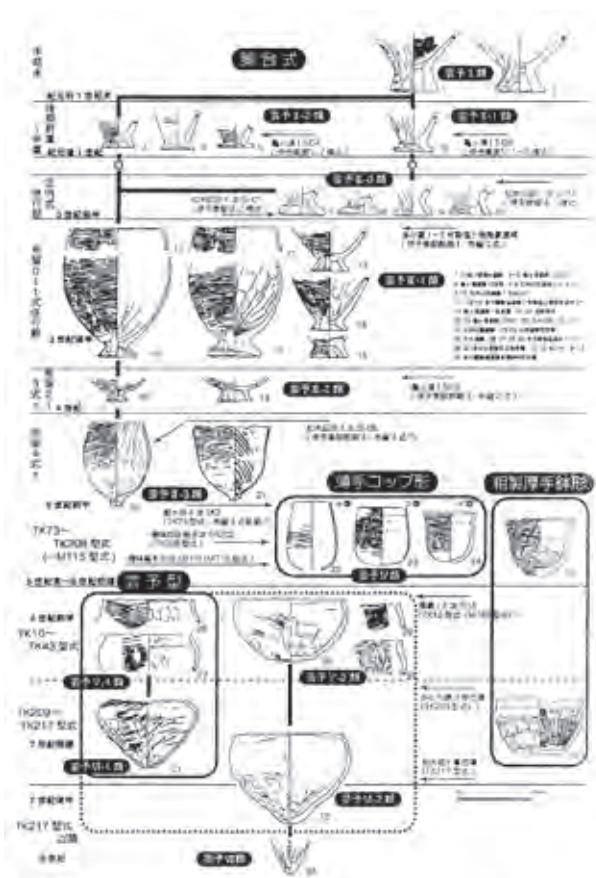


図57 製塩土器の変遷（柴田2015より引用）

可能性が高く、小型の一群は大型よりも新しいと判断される。時期に関しては、Ⅰ区18トレンチで検出されたS K18において、3 cm以上の脚台部に布留2式の古式土師器がともなっている。

以上をふまえると、Ⅱ区で出土した古式土師器に布留2式以前までのものが含まれるのであれば、Ⅱ区においても、大型の製塩土器が出土すると思われるが、Ⅱ区では脚台径3 cm以上の製塩土器が出土しておらず、共伴する古式土師器も基本的には布留2式以降の時期である可能性が高いと考えられる。なお、小型の製塩土器（芸予Ⅲ－3類）の時期に関しては、布留4式とする見解〔柴

田2015〕と布留3式の範疇でとらえる見解〔柳本・大山2016〕がある。愛媛県内では、布留3式の良好な資料が乏しく〔柴田・松村2014〕、資料の増加を待つて時期を評価する必要があると考える。

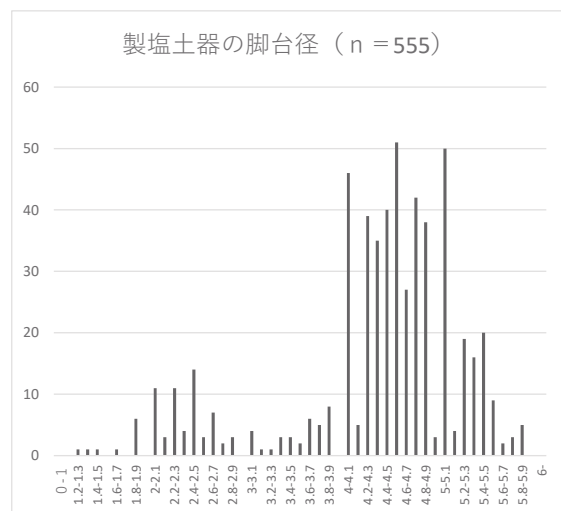


図58 製塩土器の脚台径

まとめ

本稿では、宮ノ浦遺跡で出土した古式土師器の時期について検討し、Ⅰ区に関しては、その特徴から多くの資料が布留2式以前であることを指摘した。また、Ⅰ区では第5次調査までは出土していなかった外来系土器が複数点確認された。芸予諸島は古墳時代前期の交通ルートの一部として機能していたと指摘されており〔次山2007〕、宮ノ浦遺跡もさまざまな地域の交流の場、あるいは海域を航行する際の停留場となっていたと考えられる。ただし、その頻度を必ずしも多く見積もることはできない。Ⅱ区では、出土した土器の多くが破片資料であり、器形から時期の検討をすることが難しかったことから、製塩土器との共伴関係に着目し、布留2式以降の時期を想定した。

以上の検討から、Ⅰ区とⅡ区では、土地利用に時期差があるものと考えられる。Ⅰ区の集団がⅡ区に活動の場を移したのか、また、Ⅱ区に新たな集団が定着したのか、という点については本稿では検討できなかったが、両者の関係性を明らかにすることも今後の課題である。

【註】

- 1) 既往の調査報告書においては、器種、時期に関する記述がみられる。ただ、いずれも小片であり、正確な径や傾きを割り出すことが難しい資料であると考えている。また、古墳時代前期の土器群は、細部形状にバリエーションがみられることが多く、破片資料から器種を特定することは難しいと考えている。
- 2) 分類にあたり、製塩土器全点を対象とした。

Ⅲ. 古式土師器について

【参考文献】

- 柴田昌兎 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 柴田昌兎・松村さを里 2014「愛媛県における古式土師器の基礎的研究」『古式土師器の編年研究－四国島の古墳時代前期の土器様相－』四国考古学研究会
- 次山 淳 2007「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」『考古学研究』54－3、考古学研究会編集委員会
- 柳本照男・大山裕矢 2016「古式土師器について」『宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛大学法文学部考古学研究室報告11、上島町教育委員会

Ⅳ.宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器

福本佳織

はじめに

宮ノ浦遺跡の第12次・第13次調査で発掘されたⅡ区12トレンチ、18トレンチにおいて古代の焼塩土器が大量に出土した。第12次調査出土資料と愛媛県内出土資料については『宮ノ浦遺跡Ⅶ』で若干の比較と検討を試みているものの〔福本2023〕、第13次調査における資料の増加をうけて、12トレンチ、18トレンチ出土資料を中心に再整理し、本遺跡出土の古代製塩土器の特徴と周辺地域資料との関連性及び分布圏について改めて検討したい。

1. 宮ノ浦遺跡出土古代製塩土器の特徴

本遺跡出土の製塩土器には、内面に布目痕がのこる型作り成形の土器、布目痕をとまわずナデ調整が顕著にみられる手捏ね成形と推測される土器、そしていわゆる「倉浦式土器」の可能性が高い薄手の土器があり、大きく3種類に分類される。本稿では、型作り成形の土器を「型作りタイプ」、手捏ね成形と推測される土器を「手捏ねタイプ」と呼称する。製塩土器は総重量4.725kgを測り、そのうち型作りタイプが0.167kg、手捏ねタイプが3.778kg、倉浦式土器と推測されるものが0.78kgであった。そのほとんどが小片のため全体形が判然とする資料はない。

宮ノ浦遺跡出土資料の中で、口径復元が可能な破片は数点ある。それらは12～13cmを測るものが大半を占め、一部16.0cmと、やや大きな数値を示すものもあるものの、これまで愛媛県内で出土した例とほぼ同じ数値を示す。小片であることに起因して口縁部の開き方が推測できない破片も多いが、口縁部は直立気味のもの、やや内湾しながら外方へ開くもの、直線的に外方へ開くものがある。また、口縁端部は、丸くおさまるもの、やや尖り気味のもの、面取りがみられるものが確認された。

手捏ねタイプの大多数は、内面にナデ調整が施されている（図59-1～28）。外面には指頭圧痕が認められるが、一部には口縁端部内面に強い横位のナデが施されているものも認められる（図59-1、2）。大半の破片内面に細い筋状のナデの痕跡が確認でき、内面はやや平滑気味に成形されているものが多く、本遺跡出土資料の特徴の一つであるといえる。胎土はやや粗く、1～5mmの長石粒を多量に含むものが大半であるが、石英粒や角閃石粒、雲母を含む例もみられ、色調はにぶい褐色やにぶい橙色を呈するものが主体である。

型作りタイプは薄手のものが多く、そのほとんどの厚みは0.6～0.9cmの範疇におさまる（図59-29～38）。内面の布目は非常に細かいもの（図59-36、37）と、やや粗めのもの（図59-38）が確認される。口縁端部はやや摩耗しているが、いずれもわずかに内側に湾曲しながら先端が突出し、

IV. 宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器

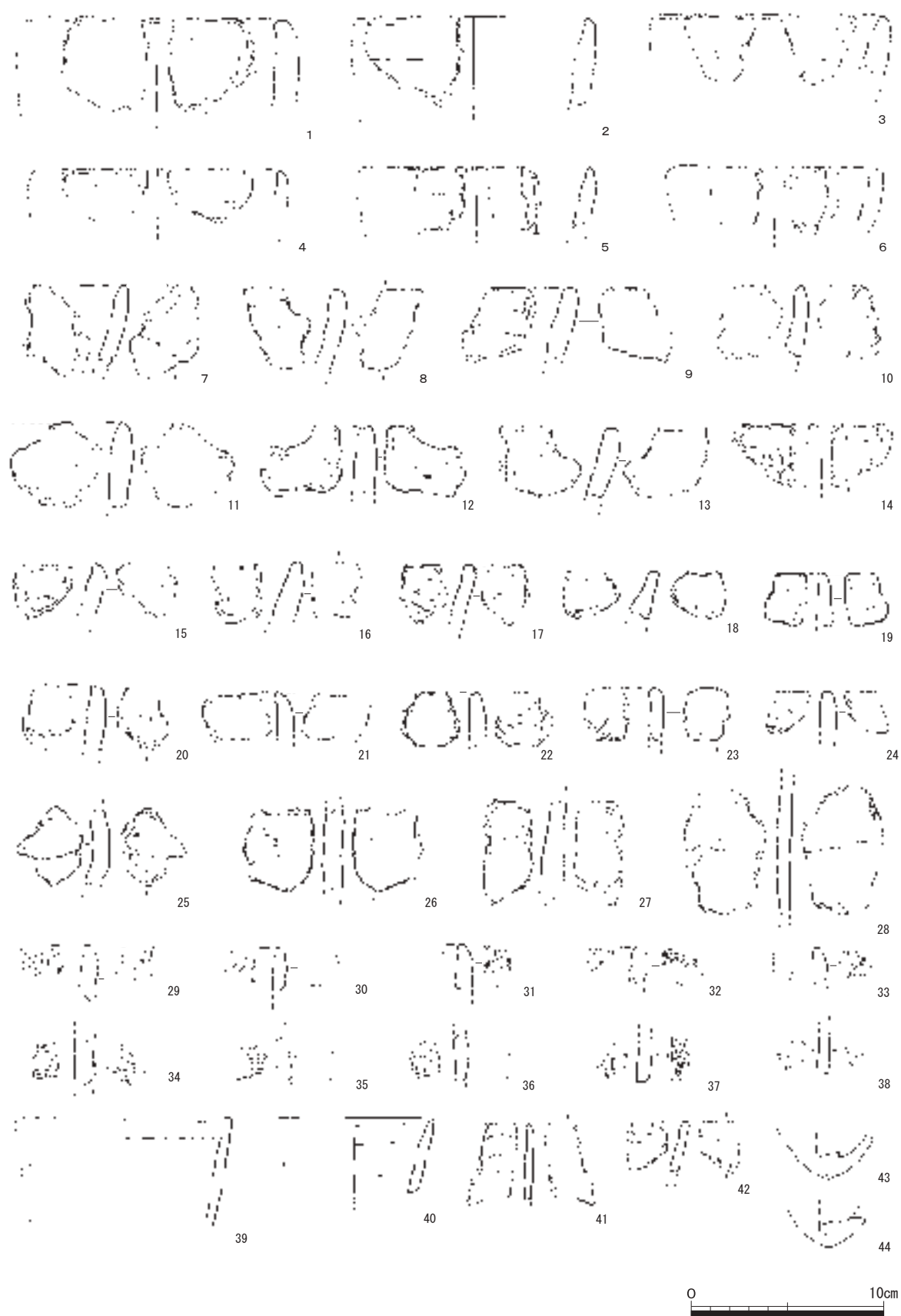


図59 宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器

1～28.手捏ねタイプ 29～38.形作りタイプ 39～44.倉浦式土器

外面には面取りがみられるという、型作りタイプに多くみられるような口縁端部形状をもつ。胎土や色調などの特徴は手捏ねタイプの製塩土器と同様である。

倉浦式土器の可能性のある土器はいずれも器壁が薄く、その厚みは0.3～0.6cmにおさまる（図59-39～44）。薄手かつ、焼成は堅緻で、尖底の底部が確認されたことから、倉浦式土器の可能性が高いと判断される。口径は8.0～12.0cmと推測され、色調は褐色や橙色を呈する。外面には赤色や褐色などの色調の部分的な変化がみられ、被熱痕が認められることから、焼塩工程などに使用された可能性が想定される。

時期の明らかな共伴遺物が少なく、現状では共伴して出土した須恵器片の年代から、本遺跡出土古代製塩土器は9世紀代に比定せざるを得ない〔有馬・大塩編2023〕。

2. 周辺地域との比較検討

（1）愛媛県内出土の古代製塩土器の概要

愛媛県内の古代製塩土器は宮ノ浦遺跡を含めて22ヶ所の遺跡で出土している¹⁾。その分布は今治平野、道前平野に集中するものの、松山平野の伊予市旗屋遺跡Ⅱ、伊方町野坂貝塚で出土例が確認されている。ここでは、型作りタイプ、手捏ねタイプ、倉浦式土器という三つの観点から、宮ノ浦遺跡出土資料と周辺地域出土資料とを比較、検討し、製塩土器の特徴に基づいた製塩土器分布圏の提示を試みたい。

東予地域出土の古代製塩土器は、丸底からゆるやかに立ち上がり、器高と口径の差がほとんどないと推測されるものと、丸底からゆるやかに立ち上がり、口縁部がやや強く内湾し、口径より器高が大きくなると推測されるものの2種類があり、前者を砲弾形、後者を略円錐形と表現する。県内唯一の完形出土例は今治市四村額ヶ内遺跡にあり、これらは略円錐形を呈する（図60-1、2）。また、完形ではないものの、今治市別名端谷Ⅰ遺跡2次調査で砲弾形を呈すると推測される製塩土器が出土している（図60-3）〔福本ほか2024〕²⁾。また、対岸の広島県でも同様の器形を呈する製塩土器が多く出土しており、東予・安芸・備後地域における製塩土器の典型例であると考えられる（図61）。前項で紹介した宮ノ浦遺跡は愛媛県・広島県間のほぼ中央に位置しており、製塩土器の全体形はおそらく周辺地域出土資料と同様に砲弾形、あるいは略円錐形を呈する可能性が高い。

（2）型作りタイプ

現時点で型作りタイプの出土が確認された遺跡は、愛媛県内では宮ノ浦遺跡、四村額ヶ内遺跡、今治市八町1号遺跡、同市馬島亀ヶ浦遺跡、同市別名端谷遺跡Ⅰ遺跡2次調査、旗屋遺跡Ⅱ、野坂貝塚の7遺跡である³⁾。そのうち後者二つの遺跡は「六連島式土器」と報告されており〔池尻ほか編2018、石貫2023〕、東予地域周辺出土の型作りタイプとは異なる製塩土器である。六連島式土器とは、北部九州地域～山口県を中心に分布する製塩土器であり、内面には成形時の痕跡である布目痕をのこし、全体の器形が円筒形を呈するという特徴がみられる〔市橋1982、小野1961、東2004〕。

IV. 宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器

山口県上関町田ノ浦遺跡出土の六連島土器はその器高が30cm前後を測り、器高が15cm程度である東予地域とは大きく異なる。また、筆者が福岡県福岡市海の中道遺跡、田ノ浦遺跡、野坂貝塚、旗屋遺跡Ⅱ出土の六連島式土器を熟覧したところ、焼成と胎土という観点において東予地域とは差異が認められた。前者は焼き締まりが良く、胎土は精緻であり、外面の器面はなめらかなものが多く、混和材を多量に含まないものが大半を占める。一方で後者は前者に比べ焼成がやや甘く、混和材を多量に含むことが特徴である。

宮ノ浦遺跡出土資料を観察すると、胎土と焼成の特徴は、六連島式土器に該当せず、やや東予地域出土資料と類似している。以上のことから、宮ノ浦遺跡出土資料を含む東予地域周辺の型作りタイプは六連島式土器とは全く異なる製塩土器であると評価したい。

(3) 手捏ねタイプ

前述したように、宮ノ浦遺跡出土資料の全体的な器形は、東予地域出土資料や広島県内出土資料の典型例である砲弾形あるいは略円錐形を呈する可能性が高い。しかしながら、口縁端部形態や胎

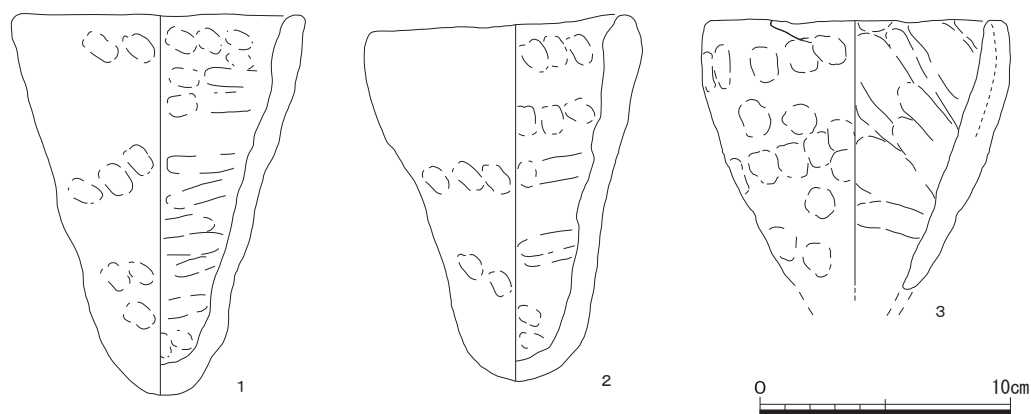


図60 略円錐形・砲弾形を呈する古代製塩土器

1・2. 四村額ヶ内遺跡〔廣田ほか編1997〕 3. 別名端谷Ⅰ遺跡2次調査〔福本ほか2024〕

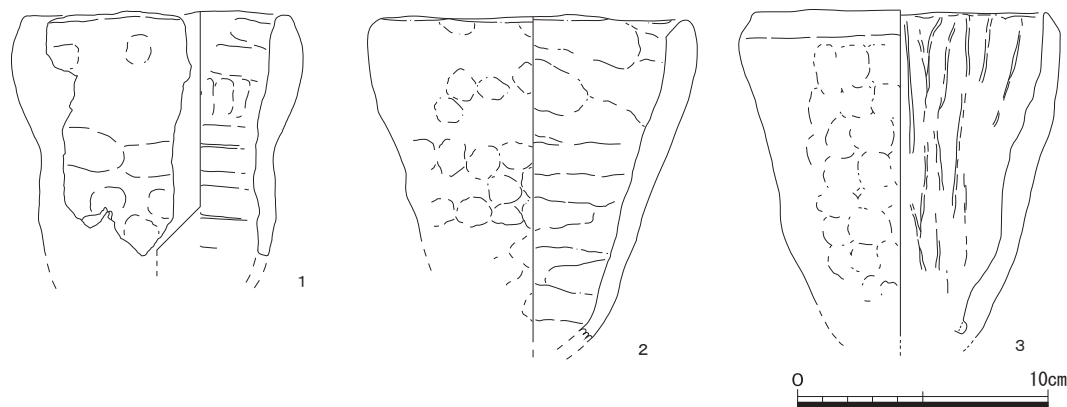


図61 東予・安芸・備後の典型的製塩土器

1. 大開遺跡 2. 安芸国分寺跡〔妹尾編2022〕 3. 岡野原遺跡〔山田編2013〕

土といった観点において、宮ノ浦遺跡と他遺跡出土資料では差異が認められる。

口縁端部のおさめ方はいずれも多様ではあるものの、東予地域で多くみられるような、肥厚して丸くおさまる口縁部形態（図60-2、図61-1）は宮ノ浦遺跡出土資料ではみられない。

胎土の観点では、宮ノ浦遺跡出土資料や広島県および愛媛県域出土資料の大半は長石粒や石英粒を含み、一部角閃石粒や雲母などを含む例があるという点で共通している。しかしながら、東予地域出土資料の胎土は粗く、器表面に1～5mm程度の砂粒が顕著にみられる例が多い一方で、宮ノ浦遺跡出土資料は、その砂粒は1～3mm程度と小さく、東予地域に比べ胎土は細かい。広島県福山市宇治島北の浜遺跡出土資料も、宮ノ浦遺跡出土の製塩土器と類似して砂粒が小さく、胎土も東予地域ほど粗いとはいえない。以上のことから、宮ノ浦遺跡における古代製塩土器の特徴は、広島県側出土資料に近い可能性が指摘でき、さらに砲弾形・略円錐形の製塩土器分布圏は胎土の差異から、南北に細分できる可能性がある。

（4）倉浦式土器

倉浦式土器とは、薄手かつ尖底を有し、焼成が堅緻な製塩土器である〔大久保2007〕。宮ノ浦遺跡周辺地域では倉浦式土器の完形出土例として広塚2号古墳出土資料が挙げられ、口径は12.0cmを測り、全体の器形は砲弾形を呈する。宮ノ浦遺跡出土資料も同様に、全体形は砲弾形を呈する可能性が高い。周辺地域における出土例が少ないかつ小片のため比較が困難であるが、前述したように宮ノ浦遺跡では0.78kgもの倉浦式土器片が出土しており、破片数は200点を優に超える。備讃瀬戸地域との交流などがあった可能性も考慮され、その背景について検討する余地がある。

（5）宮ノ浦遺跡と周辺地域出土資料の特徴に基づく分布圏

これまで、宮ノ浦遺跡出土資料を中心に周辺地域出土資料との比較を行い、見出した特徴の差異などに基づき、図62のような古代製塩土器分布圏を確認することができた。そのうち宮ノ浦遺跡は略円錐形・砲弾形の製塩土器分布圏および、倉浦式土器分布圏に属していることが分かる。宮ノ浦遺跡周辺の地域では、そのほとんどが略円錐形あるいは砲弾形を呈すると推測される製塩土器であり、倉浦式土器は客体的な存在であるということが出来る。広島県安芸灘付近では、古代製塩土器の報告例がない空白地帯を見出すことができ、さらに西側に目を向けると、山口県～北部九州地域を中心に六連島式土器分布圏が存在する。

略円錐形・砲弾形の製塩土器分布圏に着目すると、前述したように北側の宮ノ浦遺跡や宇治島北の浜遺跡より南側の東予地域に位置する遺跡では形態や胎土の特徴に差異が認められることから、この分布圏はさらに南北で細分できる可能性がある。

まとめ

以上、宮ノ浦遺跡出土古代製塩土器について、その特徴の評価、そして周辺地域出土資料との比較、検討を試みた。その結果、宮ノ浦遺跡出土の製塩土器は大きく3種類の分類が可能であり、その多様性が注目されること、そして周辺地域における器形の典型例を示し、宮ノ浦遺跡出土資料も

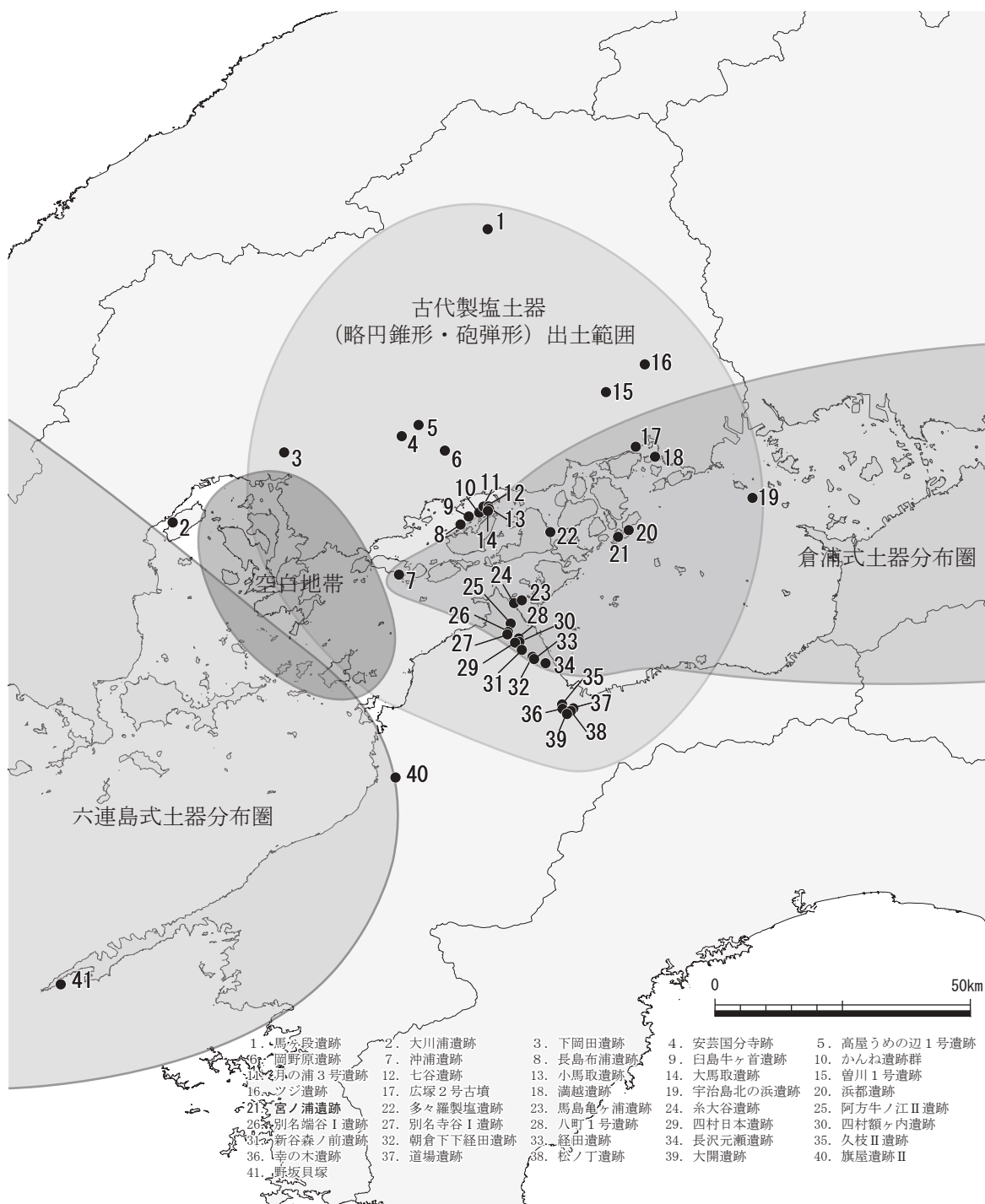


図62 愛媛県および広島県域における古代製塩土器出土遺跡分布図

同様の器形を呈する可能性が高いことを指摘した。加えて、愛媛県における型作りタイプに関して、宮ノ浦遺跡を含む東予地域出土資料は六連島式土器と全く異なるタイプの製塩土器であると論じた。手捏ねタイプ、倉浦式土器も同様に比較、検討を行い、前者では宮ノ浦遺跡出土資料と東予地域において形態や胎土に差があり、後者では客体的な存在にも関わらず出土量がやや多いことを指摘した。以上のことをふまえると、宮ノ浦遺跡周辺地域における製塩土器の分布は図62のように考えることができ、宮ノ浦遺跡出土資料は略円錐形・砲弾形の製塩土器分布圏と倉浦式土器分布圏に属する。

さらに重要な課題として、宮ノ浦遺跡が馬島亀ヶ浦遺跡とならぶ稀少な生産遺跡である可能性が高いという点を指摘できよう。宮ノ浦遺跡では馬島亀ヶ浦遺跡をはるかに凌駕する量の製塩土器片が出土しており、今後の宮ノ浦遺跡における発掘調査成果によって、生産遺跡における製塩土器の様相について解明されることを期待したい。加えて、本稿で十分に考察することが叶わなかった宮ノ浦遺跡出土製塩土器の時期については今後も検討する必要がある、本遺跡や周辺遺跡を含めた古代製塩土器の時期的変遷という課題の解明も急務である。

【註】

- 1) 伊予市上三谷篠田・鶴吉遺跡でも六連島式土器の出土が報告されているが〔池尻ほか編2018〕、古代製塩土器ではないと判断したため、本稿では取り上げていない。
- 2) 2024年5月頃刊行予定である。
- 3) 今治市四村額ヶ内遺跡及び八町1号遺跡未報告資料を筆者が確認したところ、内面に布目痕を有する土器片を確認し、古代製塩土器であると判断した。

【参考文献】

- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 池尻伸吾・石貫睦子・多田仁・土井光一郎・中野邦子編2018『旗屋遺跡Ⅱ 上三谷篠田・鶴吉遺跡－JR予讃線他埋蔵文化財発掘調査報告書－』埋蔵文化財発掘調査報告書194、愛媛県埋蔵文化財センター
- 石貫弘泰 2023「愛媛県伊方町野坂貝塚出土の焼塩土器－布目痕の観察を軸に－」『伊方町町見郷土館研究紀要』第7号、町見郷土館
- 市橋重喜 1982「第五章 調査の記録－遺物Ⅱ（生産用具）－1 製塩土器」『海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集、福岡市教育委員会
- 大久保徹也 2007「第四章 古代（飛鳥・奈良・平安時代）の土器製塩」『備讃瀬戸の土器製塩』吉備考古ライブラリー・15、吉備人出版
- 小野忠熙 1961「六連島遺跡」「筏石遺跡」『山口県文化財概要』4、山口県教育委員会
- 妹尾周三編2022『重要考古資料 安芸国分寺跡土坑出土品451号土坑出土の法会関係資料集成』東広島市教育委員会文化財調査報告書第66集、東広島市教育委員会（東広島市出土文化財管理センター）
- 東 哲志 2004「六連島式土器小考－長門国（山口県西部域）出例を中心に－」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』小田富士雄先生退職記念事業会
- 廣田秀久・白石聡・山本正廣編1997『四村額ヶ内遺跡発掘調査報告書』今治市埋蔵文化財調査報告書33、今治市教育委員会
- 福本佳織 2023「上島町宮ノ浦遺跡における古代の塩生産」『愛媛大学法文学部考古学研究室 第19回シンポジウム 古代の塩の生産と消費－中央と地方－』愛媛大学AIC 愛媛大学考古学研究室

IV. 宮ノ浦遺跡出土の古代製塩土器

福本佳織 2023「第5章 成果と課題 愛媛県内における古代の製塩土器出土遺跡について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

福本佳織・松葉竜司・青木聡志 2024「別名端谷I遺跡2次で確認された古代の製塩炉と製塩土器をめぐって」『紀要愛媛』第20号、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

山田繁樹編2013『小迫遺跡・岡野原遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第57集、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

V. II区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物

－ 2号遺構の再評価を中心に －

青木聡志

はじめに

II区4トレンチ2号遺構は4トレンチ北東壁沿い、3号遺構はトレンチ中央部に位置し、いずれもII-1層上層で検出された(図63)。2号遺構は平面形が略円形を呈し、直径約1.5m、深さ0.45mを測り、3号遺構は平面形が円形を呈し、直径約1.6m、深さ0.45mを測る。3号遺構は4号遺構を切り、東側の一部は2号遺構によって壊され、4号遺構→3号遺構→2号遺構の順に構築されている。床面には2号・3号遺構ともに厚さ5～10cm程度の粘土を貼り付け、その上面に10～15cmほどの垂円礫・円礫を密に貼り付けた槽状遺構である。2号遺構は南側の一部を除いて瓦器碗を主体とする遺物が全体的に広がり、トレンチ北壁沿いと東壁沿いに土器の密集域が確認され、北側と東側から土器が流入したと考えられている〔有馬・馬編2022〕。2号遺構の出土遺物は、第10次・第11次調査の概報である『宮ノ浦遺跡Ⅵ』で、筆者と大塩啓一郎氏によって報告されている。筆者は本遺構の最大の特徴として、一括性が高く、和泉II-2期の和泉型瓦器碗を多数含み、それらが完形もしくはそれに近い形で出土し、土師質土器などほかの土器よりも出土点数が多いことを挙げている〔青木2022〕。また、2号遺構から出土した貝類は、本遺跡で日常的に消費される貝類とはやや異なる様相がみられることから、特別な食事に供されたものであると指摘され、大量に廃棄された土器が飲食儀礼に関わる可能性があるかと推測されている〔福本2022〕。

しかしながら、『宮ノ浦遺跡Ⅵ』で報告した資料は、II区4トレンチ2号遺構で出土した資料の一部であり、時期的なまとまりや瓦器碗の卓越性などについて客観的に示すことができず、その全体を提示することが課題であった。本稿では、2号遺構出土遺物の全体像を示し、計量分析などを通して本遺構出土遺物の再評価を試みたい。加えて、多数出土した瓦器碗の分析から、2号遺構の特質や畿内とのつながりについて論じる。また、3号遺構は『宮ノ浦遺跡Ⅵ』で遺構の評価がされているものの、出土遺物が図化されておらず、遺構の廃絶時期について客観的に示されていないこ

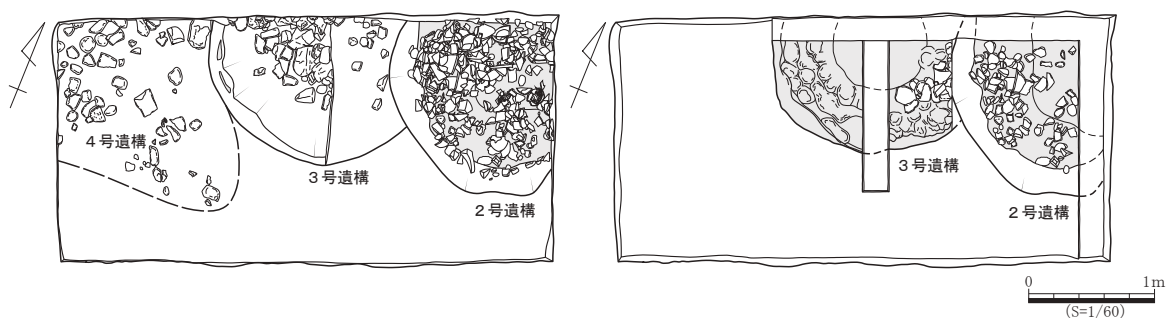


図63 II区4トレンチ2号・3号遺構検出状況(左)、完掘状況(右)

とが課題であった。出土遺物の量は2号遺構よりはるかに少ないものの、残存率の良好な資料が出土している。それらを提示して検討することで、3号遺構の廃絶時期を明示したい。

1. 2号遺構出土遺物の概要と時期

II区4トレンチ2号遺構から出土した資料は、『宮ノ浦遺跡Ⅵ』で一部掲載している。ここでは、本稿ではじめて掲載した資料を中心に概要を報告する(図64～66、表20、21)¹⁾。1～4は土師質土器の小皿である。口径は8.1～8.5cm、高さ1.2～1.4cm、底径5.6～6.2cmである。口縁部は1段ナデ調整のもの(1)、やや強い1段ナデ調整のもの(3)、2段ナデ調整のもの(2)がみられ、いずれも底部の切り離しは回転ヘラ切りである。5は高台付きの土師質土器小皿であり、高台のほとんどが欠損している。6は土師質土器皿であり、高台が柱状を呈し、底部の切り離しは回転糸切りである。7～11は土師質土器杯であり、口径13.4～14.3cm、高さ3.4～4.3cm、底径8.4～8.8cmを測る。口縁部はいずれもゆるやかな丸みをおびながら外方へ開き、回転ナデ調整の単位がやや広いもの(7、9)と狭いもの(8)がみられ、前者は胎土の色調が黄橙色系、後者は橙色系である。底部の切り離しはいずれも回転ヘラ切りである。12は土師質土器鉢であり、口縁部は内湾気味に開き、内面には上部にやや強いヨコナデ調整が認められ、口唇部には面がみられる。13は須恵器小皿であり、底径は5.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りであり、色調は灰白色を呈する。東播系もしくは備前焼の可能性がある。14は須恵器碗であり、高台は円盤状を呈し、底部内面には凸部がみられ、底部の切り離しは回転糸切りである。東播系須恵器の可能性がある。15は吉備型土師器碗であり、口縁端部は玉縁状にやや肥厚する。内面にはミガキが密に施され、外面は指頭圧痕を確認できるが、ミガキは認められない。山本編年Ⅱ期に位置付けられる〔山本1993〕。16、17は土師質土器甕である。口径は12.2～17.0cmとやや小型であり、16は内外面ともに二次的被熱を受け、特に外面の被熱度合いが強い。18～20は土師質土器鍋であり、口径32.4～39.2cmを測る。18は器壁がやや厚く、胎土は粗い。それに対し、20は胴部なかほどの器壁が薄く、底部に向かうにつれて厚くなっていき、胎土はやや精良である。鍋はいずれも外面に二次的被熱痕がみられ、黒色化している。21～29は移動式カマドであり、21、22は庇、24、28、29は裾部、25は掛口部、23、26、27は掛口部から庇である。胎土や色調の特徴から、胎土が精良で、色調が灰褐色系を呈するもの(21、22、23、25、26、28、29)、胎土と器面がやや粗く、色調が赤褐色系を呈し、二次的被熱を強く受けているもの(24、27)の大きく2タイプに区別できる。26は掛口部の直径が30.0cmであり、焚口上部には縦方向のハケメがみられる。庇には丁寧なナデ調整が観察され、掛口端部には面が認められる。30～59は和泉型瓦器碗であり、口径14.6～17.0cm、高さ4.5～5.6cm、底径3.4～6.4cmを測る。外面のミガキは隙間が目立ち、口縁部なかほどまでと口縁部上部に施されるものがある。見込みの暗文は、斜格子状暗文、鋸歯状暗文、連結輪状暗文、平行線状暗文、不定方向状暗文が認められる。高台の断面形態は四角・台形と三角形を呈する2種類がみられる。これらは和泉Ⅱ-2～3期に位置付けられ〔佐藤2022a、橋本2018〕、Ⅱ-2期が大半を占める。60～64は瓦器皿であり、口径9.3～10.8cmを測る。60は外面

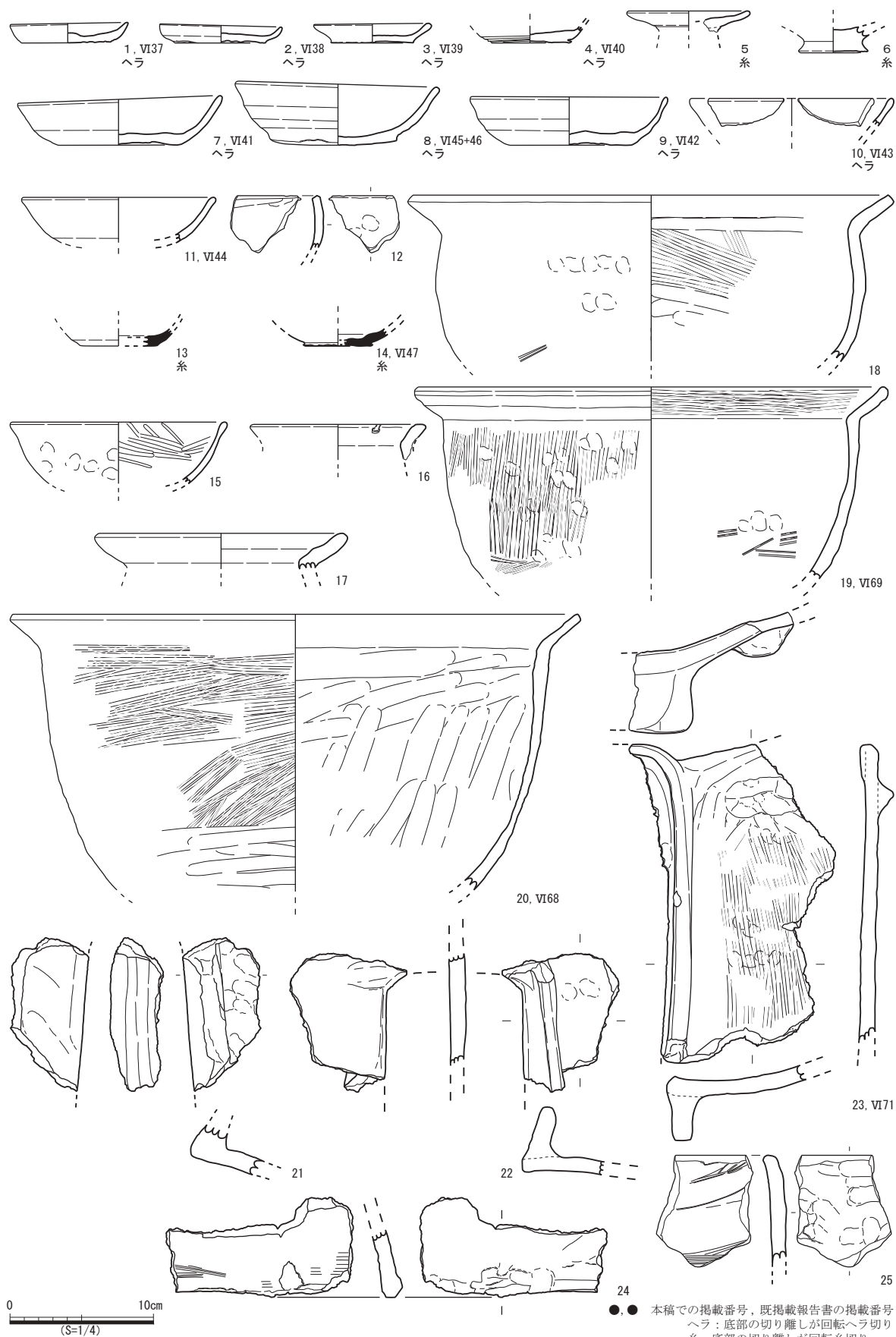


図64 II区4トレンチ2号遺構出土遺物その1

V. II区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物

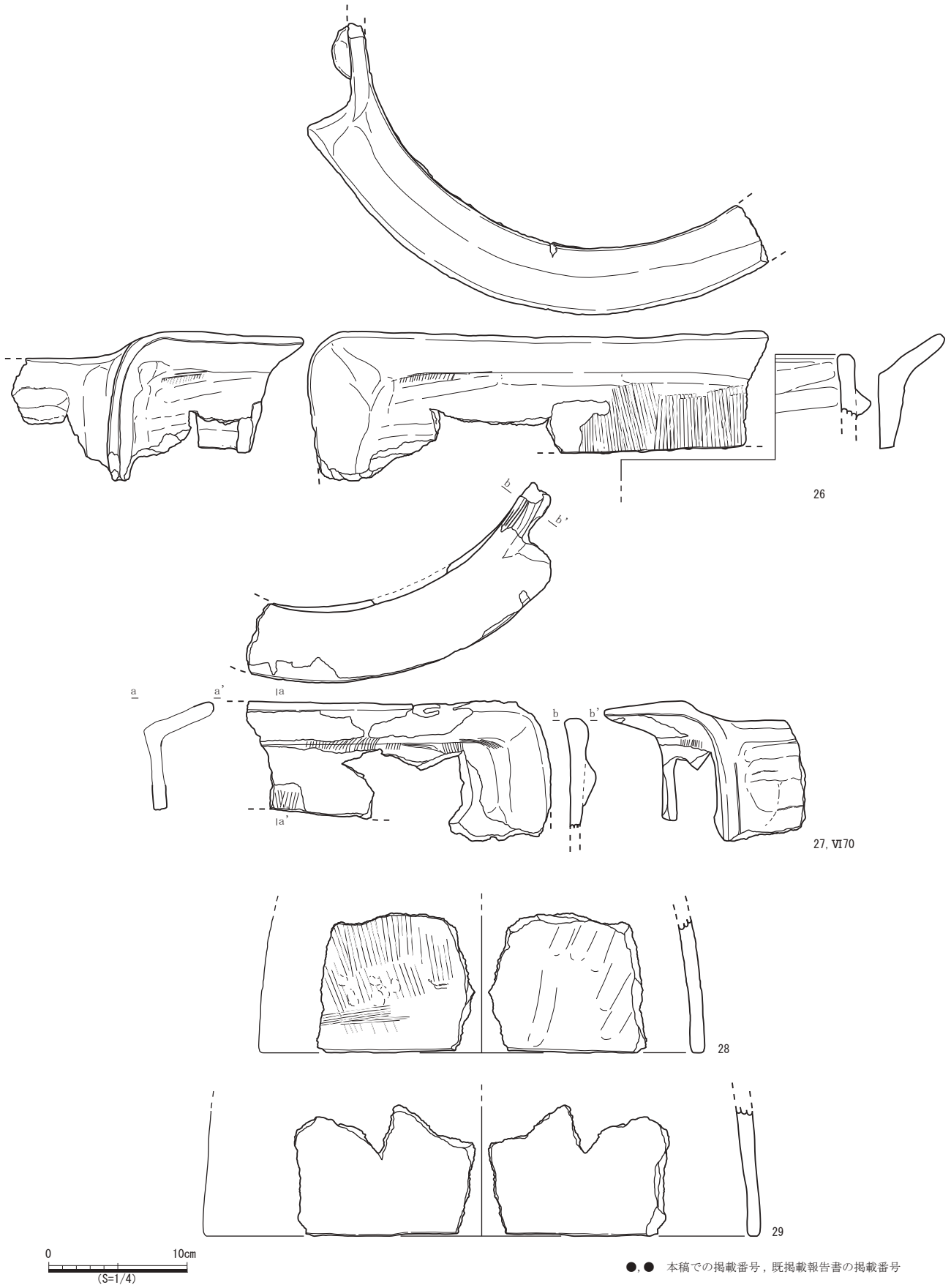


図65 II区4トレンチ2号遺構出土遺物その2

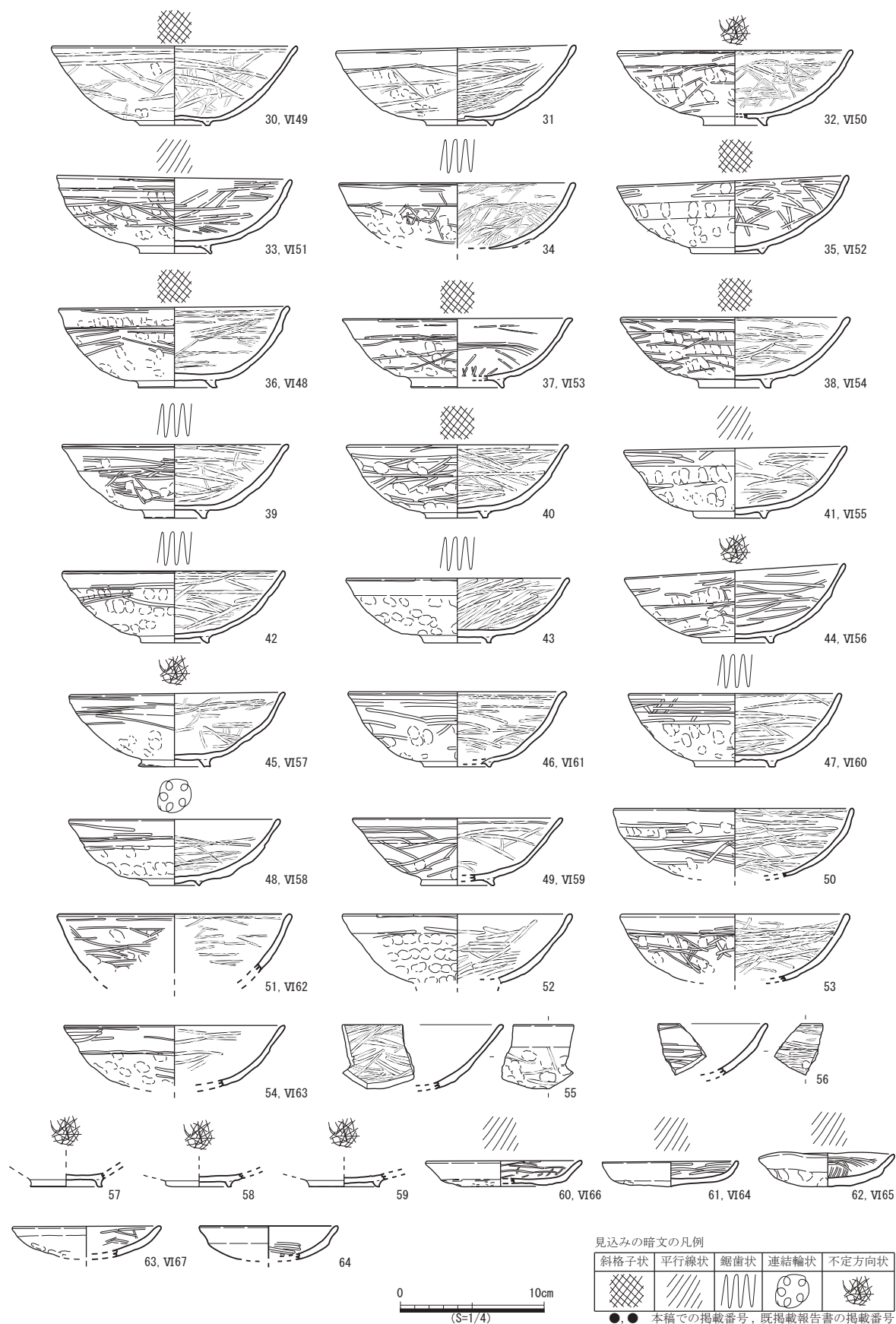


図66 II区4トレンチ2号遺構出土遺物その3

V. II区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物

にミガキがみられるが、61～64は確認できない。

2. 3号遺構出土遺物の概要と時期

3号遺構出土遺物の概要

3号遺構では、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、移動式カマド、貝、骨が出土している。これらのうち、実測可能であった14点を報告する（図67、表22）。

1～4は土師質土器小皿であり、3、4は口縁部が「て」字状を呈する畿内系土師器である。1、2はいずれも口縁部にやや強いヨコナデ調整が施され、やや外反する。底部の切り離しはいずれも回転ヘラ切りである。3、4は口径が9.0cm前後であり、色調や胎土から、京都市外の可能性が考えられる。5は土師質土器碗であり、口縁部は外方へ強く外反する。6は托のような台付き皿と想定され、口縁部と高台は欠損しているが、底部（底面）は欠損していない中空土器である。底部の中空部分は、底部外面側からヘラ状工具で底部を掻き切ったのち、丁寧なナデ調整が施され、平坦な面がみられる。高台はヘラ状工具で中空にした後に貼り付けられている。非常に特殊な器種であり、器台のような機能があったのではないかと推測される。7、8は土師質土器鍋であり、8は口径32.4cm、残存高17.0cmを測る。内面は口縁部から胴部にかけて平滑なナデ調整が施される。外面は胴部下位で横方向のやや粗いハケメ、中位から上位ではハケメ後、ナデ調整によりハケメがナデ消

表20 II区4トレンチ2号遺構出土遺物観察表その1

番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)	外面色調 内面色調	調 整	備 考
1 (VI37)	土師質土器	小皿	TR8. 1, LR6. 2, H1. 4	10YR7/4 10YR6/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り
2 (VI38)	土師質土器	小皿	TR8. 5, LR6. 3, H1. 2	7. 5YR7/5 7. 5YR7/5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	完形 底部：回転ヘラ切り
3 (VI39)	土師質土器	小皿	TR(8. 1), LR5. 8, H1. 4	7. 5YR8/6 7. 5YR8/6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り
4 (VI40)	土師質土器	小皿	LR5. 6, H [1. 4]	10YR7/3 10YR5/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り
5	土師質土器	台付き皿	TR(8. 6), H [1. 5]	10YR8/4 10YR6/4	外面：回転ナデ, ナデ 内面：回転ナデ	
6	土師質土器	皿か?	LR(4. 8), H [1. 8]	10YR7/4 10YR6/3	外面：回転ナデ, ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転系切り 高台は柱状高台
7 (VI41)	土師質土器	杯	TR14. 3, LR8. 5, H3. 4	2. 5Y5/2 10YR5/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	完形 底部：回転ヘラ切り 内外面ともにススの痕跡あり
8 (VI45+46)	土師質土器	杯	TR(14. 3), LR8. 8, H4. 3	5YR6/8 5YR6/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り 11 と同一個体の可能性あり
9 (VI42)	土師質土器	杯	TR(13. 5), LR8. 4, H3. 4	10YR7/3 10YR7/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り
10 (VI43)	土師質土器	杯	TR(14. 2), H [1. 9]	7. 5YR7/4 7. 5YR6/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
11 (VI44)	土師質土器	杯	TR(13. 4), H [3. 2]	5YR5/8 5YR5/8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	8 と同一個体の可能性あり
12	土師質土器	鉢か?	H [4. 0]	7. 5YR4/6 5YR4/4	外面：ナデ, 指頭圧痕 内面：ナデ	外面は少し荒れている
13	須恵器	皿か?	LR(5. 4), H [1. 2]	10YR8/2 10YR8/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転系切り 東播系・備前焼の可能性あり
14 (VI47)	須恵器	碗	LR(4. 8), H [1. 2]	2. 5Y7/2 5Y8/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転系切り 東播系の可能性あり
15	吉備型 土師器	碗	TR(15. 0), H [4. 3]	7. 5YR7/4 7. 5YR6/2	外面：ミガキ, ナデ, 指頭圧痕 内面：ミガキ	II-2 期
16	土師質土器	甕	TR(12. 2), H [2. 5]	10R5/4 2. 5YR4/4, 2. 5YR3/1	外面：ナデ 内面：ナデ	内外面ともに被熱を受け、特に外面の被熱度合いが高い
17	土師質土器	甕	TR(17. 0), H [2. 5]	10YR5/2, 10YR4/1 10YR5/3	外面：ナデ 内面：ナデ	
18	土師質土器	鍋	TR(33. 0), H [11. 7]	10YR3/1, 10YR4/1 10YR6/3, 10YR3/1	外面：ナデ・ハケメ 内面：ナデ・ハケメ	外面は二次的被熱を受けている 外面にはススが付着 二次的被熱を受けている
19 (VI69)	土師質土器	鍋	TR(32. 4), H [13. 3]	5YR5/6, 5YR3/1 5YR5/8, 5YR4/1	外面：ナデ, ハケメ, 指頭圧痕 内面：ナデ, ハケメ, 指頭圧痕	外面は一部二次的被熱を受け、黒色化 ハケメは2～3mm 間隔で8～9本が1セット
20 (VI68)	土師質土器	鍋	TR(39. 2), H [19. 2]	7. 5YR5/4, 10YR3/1 7. 5YR5/4	外面：ハケメ, ナデ 内面：ナデ	焼き締まりがやや良く、胎土が比較的精良

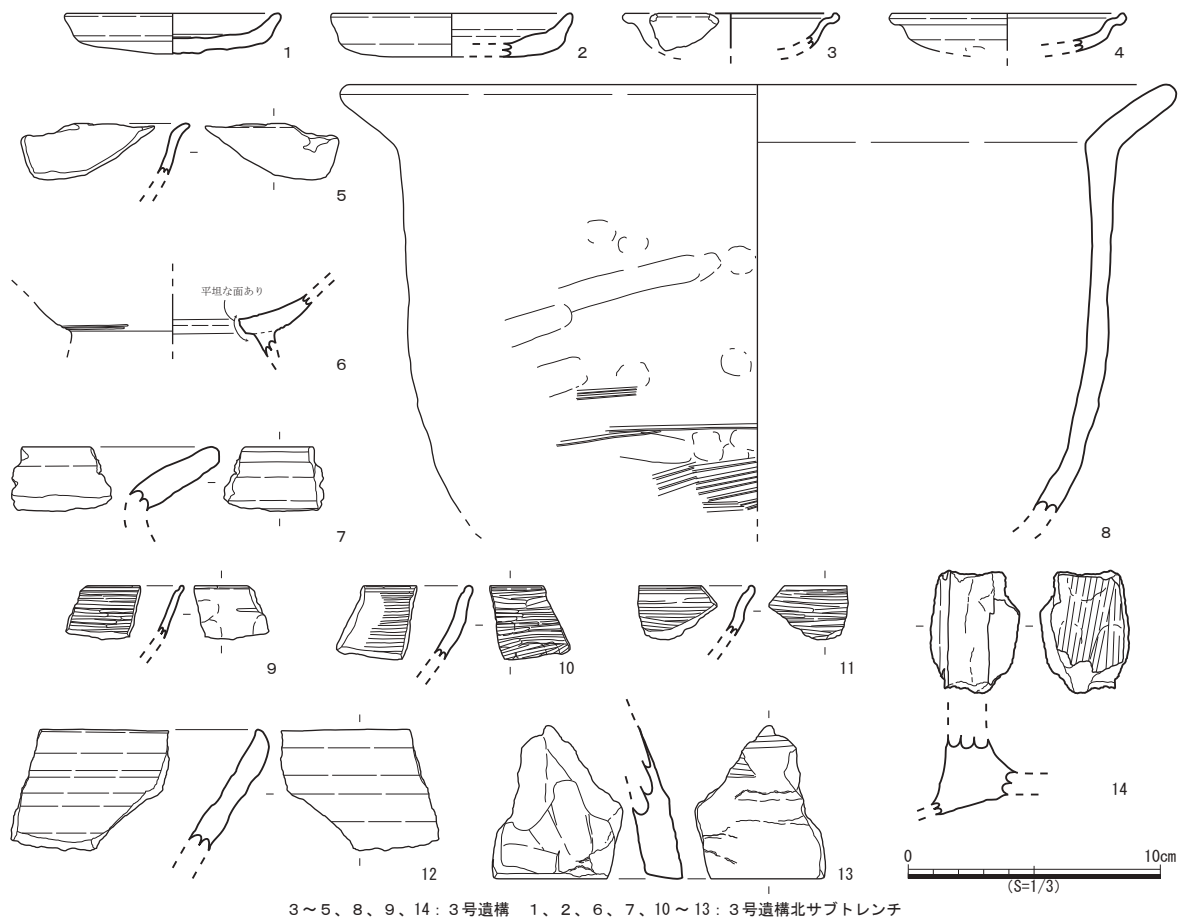
略記号 H: 器高・高さ TR: 口径 LR: 底径 (): 推定値 []: 残存値

表21 II区4トレンチ2号遺構出土遺物観察表その2

番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)	外面色調 内面色調	調 整	備 考
21	土製品	移動式カマド	H [10. 7]	10YR4/2 10YR4/2	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ナデ	
22	土製品	移動式カマド	H [9. 7]	5YR6/6, 7. 5YR5/2 2. 5YR5/8, 7. 5YR4/2	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ナデ	
23 (VI71)	土製品	移動式カマド	H [20. 2]	5YR5/4 5YR5/4, 5YR3/1	外面：ナデ，ハケメ，指頭圧痕 内面：ナデ	底の内側、焚口上部は二次的被熱を受け、黒色化
24	土製品	移動式カマド	H [7. 0]	5YR4/3 5YR5/4	外面：ナデ，ハケメ 内面：ナデ	
25	土製品	移動式カマド	H [8. 8]	2. 5YR6/6 2. 5YR6/6	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ナデ，ハケメ	把手が貼り付けられていた痕跡あり
26	土製品	移動式カマド	TR (30. 0), H [10. 8]	5YR5/2, 5YR3/1 5YR5/2, 5YR4/1	外面：ナデ，ハケメ 内面：ナデ	底上部は赤色化、黒色化しているため、二次的被熱を受けている
27 (VI70)	土製品	移動式カマド	H [10. 2]	2. 5YR5/6, 5YR4/2 2. 5YR5/6, 5YR4/4	外面：ナデ，ハケメ 内面：ナデ，ハケメ	内外面ともに器表面が荒れ、剥離や摩耗が激しい
28	土製品	移動式カマド	LR (32. 2), H [10. 1]	5YR5/6 5YR4/2, 7. 5YR2/1	外面：ナデ，ハケメ，指頭圧痕 内面：ナデ	内面の一部が二次的被熱を受けている
29	土製品	移動式カマド	LR (40. 0), H [9. 4]	7. 5YR5/3 7. 5YR6/4, 7. 5YR4/1	外面：ナデ 内面：ナデ	
30 (VI49)	瓦器	椀	TR17. 0, LR4. 8, H5. 5	7. 5Y5/1 7. 5Y3/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには斜格子状暗文 1/2 程度残存
31	瓦器	椀	TR16. 7, LR4. 6, H5. 6	5Y4/1 5Y3/1, 5Y7/2	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形
32 (VI50)	瓦器	椀	TR16. 4, LR4. 5, H5. 2	10BG1. 7/1, 7. 5Y6/6 10BG3/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには不定方向状暗文
33 (VI51)	瓦器	椀	TR16. 4, LR5. 0, H5. 3	N3/0, 10YR7/4 N3/	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面三角形 見込みには平行線状暗文 ほぼ完形
34	瓦器	椀	TR (16. 4), H [4. 6]	2. 5Y3/1, 10YR5/3 10YR4/1, 5YR6/6	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには鋸歯状暗文
35 (VI52)	瓦器	椀	TR16. 1, LR5. 0, H5. 3	10YR5/1 10YR4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-3期 高台は断面三角形 見込みには斜格子状暗文 ほぼ完形
36 (VI48)	瓦器	椀	TR16. 0, LR5. 5, H5. 6	10BG3/1, 5YR7/4 5BG4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには斜格子状暗文 1/2 程度残存
37 (VI53)	瓦器	椀	TR (16. 4), LR (6. 4), H4. 8	10YR7/3, 10YR4/1 10YR6/4	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには斜格子状暗文
38 (VI54)	瓦器	椀	TR (16. 0), LR5. 0, H4. 9	10BG5/1 10BG3/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには斜格子状暗文 1/2 程度残存
39	瓦器	椀	TR (15. 8), LR (4. 4), H5. 2	10YR7/3, 2. 5Y4/1 10YR7/3, 2. 5Y4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには鋸歯状暗文
40	瓦器	椀	TR15. 4, LR4. 4, H5. 1	2. 5Y5/1 5Y6/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには斜格子状暗文 1/2 程度残存
41 (VI55)	瓦器	椀	TR15. 7, LR5. 1, H5. 0	2. 5Y3/1, 7. 5YR6/3 2. 5Y4/1, 7. 5YR6/3	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2～3期 高台は断面四角・台形 見込みには平行線状暗文 完形
42	瓦器	椀	TR15. 5, LR4. 8, H5. 0	10YR6/3, 10YR4/1 10YR6/3, 10YR4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2～3期 高台は断面四角・台形 見込みには鋸歯状暗文
43	瓦器	椀	TR (15. 5), LR5. 1, H4. 5	N4/ 2. 5Y5/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-3期 高台は断面四角・台形 見込みには鋸歯状暗文
44 (VI56)	瓦器	椀	TR15. 4, LR5. 0, H5. 5	10YR3/1, 10YR6/3 10YR3/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには不定方向状暗文 ほぼ完形
45 (VI57)	瓦器	椀	TR15. 2, LR5. 0, H5. 1	2. 5Y6/2 2. 5Y6/3	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2～3期 高台は断面四角・台形 見込みには不定方向状暗文 完形
46 (VI61)	瓦器	椀	TR15. 2, LR (4. 6), H5. 3	N3/ 10YR7/1, 2. 5Y4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面三角形 見込みには平行線状暗文 ほぼ完形
47 (VI60)	瓦器	椀	TR14. 9, LR5. 6, H5. 1	2. 5Y3/1, 2. 5Y7/1 N3/	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2～3期 高台は断面四角・台形 見込みには鋸歯状暗文 1/2 程度残存
48 (VI58)	瓦器	椀	TR (14. 9), LR3. 4, H4. 7	10YR7/1, 10YR4/1 10YR7/2, 10YR4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2～3期 高台は断面三角形 見込みには連結輪状暗文 1/2 程度残存
49 (VI59)	瓦器	椀	TR (14. 6), LR (5. 2), H4. 7	2. 5Y5/2, 2. 5Y6/1 2. 5Y6/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みの暗文は不明
50	瓦器	椀	TR (16. 6), H4. 8	N5/ N6/	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 1/2 程度残存
51 (VI62)	瓦器	椀	TR (16. 4), H [4. 1]	N4/ N4/	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期
52	瓦器	椀	TR (16. 0), H [4. 9]	2. 5Y4/1, 10YR5/4 2. 5Y4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期 高台は断面四角・台形 見込みには斜格子状暗文
53	瓦器	椀	TR (16. 0), H [4. 8]	10YR5/1 10YR5/1, 2. 5Y6/3	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期
54 (VI63)	瓦器	椀	TR (15. 4), H [4. 2]	5Y3/1 5Y4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2～3期
55	瓦器	椀	H [4. 5]	7. 5Y5/1 M5/	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期
56	瓦器	椀	H [3. 6]	N4/ 5Y4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ-2期
57	瓦器	椀	LR4. 8, H [0. 9]	10YR7/3, 10YR5/1 10YR6/3, 5Y4/1	外面：ナデ 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ期 高台は断面四角・台形 見込みには不定方向状暗文
58	瓦器	椀	LR4. 5, H [0. 9]	2. 5Y4/1 2. 5Y5/2	外面：ナデ 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ期 高台は断面四角・台形 見込みには重ね焼きの痕跡と不定方向状暗文
59	瓦器	椀	LR (4. 8), H [0. 9]	10YR5/3 2. 5Y3/1	外面：ナデ 内面：ミガキ	和泉型Ⅱ期 高台は断面四角・台形 見込みには不定方向状暗文
60 (VI66)	瓦器	皿	TR (10. 8), H1. 8	N4/, 2. 5Y6/3 10YR4/1	外面：ナデ，ミガキ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型 見込みには平行線状暗文
61 (VI64)	瓦器	皿	TR9. 5, H1. 8	10YR4/4, 2. 5Y3/1 10YR7/4, 10YR6/1	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型 見込みには平行線状暗文 ほぼ完形
62 (VI65)	瓦器	皿	TR9. 3, H2. 4	5BG2/1 5BG2/1	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型 見込みには平行線状暗文 ほぼ完形
63 (VI67)	瓦器	皿	TR (10. 4), H [2. 1]	5BG2/1 5GY3/1	外面：ナデ，指頭圧痕 内面：ミガキ	和泉型
64	瓦器	皿	TR (9. 7), H [2. 7]	2. 5Y6/1 5Y6/1, 5Y7/1	外面：ナデ 内面：ミガキ	和泉型

略記号 H: 器高・高さ TR: 口径 LR: 底径 (): 推定値 []: 残存値

V. II区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物



3～5、8、9、14：3号遺構 1、2、6、7、10～13：3号遺構北サブトレンチ

図67 II区4トレンチ3号遺構出土遺物

されている。外面は一部黒色化しており、二次的の被熱痕と推測される。9～11は黒色土器であり、9は畿内系黒色土器A類碗、10、11は畿内系黒色土器B類碗である。口縁端部内面には沈線が1条巡り、いずれも明瞭である。11は口縁部上部に明瞭なナデ調整が施され、外反度合いがやや強い。ミガキはいずれも緻密に施される。12は東播系須恵器捏鉢であり、口縁部外面上位には自然釉が観察される。口縁部の面が器壁に対して直交し、口縁端部が若干上方に拡張していることから、佐藤分類のⅡ－1類に比定される〔佐藤2022b〕。13、14は移動式カマドであり、13は裾部、14は底である。13は内外面ともに調整がやや粗く、外面はハケメの後に一部ナデ消されている。裾部の設置面には平坦な面がみられる。14の内面は、ハケメの後にナデ調整が施される。

3号遺構の時期

II区4トレンチ3号遺構の出土遺物は、3～5、8、9、14は3号遺構の埋土、1、2、6、7、10～13は3号遺構北側サブトレンチから出土している。3号遺構の埋土からは、11世紀ごろの畿内系土師器と畿内系黒色土器A類が出土している。その一方で、3号遺構北側サブトレンチでは、11世紀ごろの畿内系黒色土器B類と12世紀前半ごろの東播系須恵器、12世紀ごろの土師質土器小皿が出土している。また、遺構の切り合い関係から、3号遺構は2号遺構よりも古い。

以上のことから、II区4トレンチ3号遺構は12世紀前半ごろに廃絶されたと推測される。

表22 II区4トレンチ3号遺構出土遺物観察表

番 号	種 別	器 種	法 量 (cm)	外面色調 内面色調	調 整	備 考
1	土師質土器	小皿	TR(8.6), H1.5	5YR6/4 5YR6/4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り スノコ痕あり
2	土師質土器	小皿	TR(9.6), H1.7	5YR6/6 5YR6/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	底部：回転ヘラ切り
3	土師質土器	小皿	TR(8.6), H [1.4]	7.5YR7/4 7.5YR7/4	外面：ナデ 内面：ナデ	畿内系「て」の字口縁皿
4	土師質土器	小皿	TR(9.2), H [1.5]	7.5YR7/6 7.5YR6/6	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ナデ	畿内系「て」の字口縁皿
5	土師質土器	椀	H [1.8]	10YR7/3 10YR7/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
6	土師質土器 (中空土器)	台付き皿か?	H [2.5]	5YR5/8 7.5YR5/2	外面：回転ナデ・ナデ 内面：ナデ	底部は中空。焼成前にヘラ状工具を用いて底部側から土器を切り、中空にしている。その後高台を貼り付ける。
7	土師質土器	甕か鍋	H [2.5]	5YR4/6, 5YR4/2 2.5YR5/8, 5YR4/2	外面：ナデ 内面：ナデ	
8	土師質土器	鍋	TR(32.4), H [17.0]	7.5YR6/4, 7.5YR3/1 5YR5/3	外面：ナデ、ハケメ、指頭圧痕 内面：ミガキ	外面は二次的被熱を受けている 焼き締まりがややよく、胎土が比較的精良
9	黒色土器 A類	椀	H [2.1]	2.5Y6/3, 2.5Y3/1 2.5Y3/1	外面：ナデ、ミガキ、指頭圧痕 内面：ミガキ	畿内系黒色土器A類 内面のミガキは緻密
10	黒色土器 B類	椀	H [3.0]	2.5Y3/1 2.5Y3/1	外面：ナデ、ミガキ、指頭圧痕 内面：ミガキ	畿内系黒色土器B類 内外面ともにミガキが緻密
11	黒色土器 B類	椀	H [2.1]	2.5Y3/1 2.5Y3/1	外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ	畿内系黒色土器B類 内外面ともにミガキが緻密
12	須恵器	こね鉢	H [4.8]	N4/ 5YR4/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	東播系 II-1 類〔佐藤 2022b〕か 外面上半には自然釉が付着
13	土製品	移動式カマド	H [6.0]	7.5YR6/4 7.5YR5/2	外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ	内外面ともに調整がやや粗い
14	土製品	移動式カマド	H [4.8]	5YR5/6 5YR5/6	外面：ナデ 内面：ハケメ、指頭圧痕	

略記号 H: 器高・高さ TR: 口径 LR: 底径 (): 推定値 []: 残存値

3. 2号遺構の土器組成

II区4トレンチ2号遺構では、土師質土器皿、杯、甕、鍋、移動式カマド、須恵器椀、皿、黒色土器A類椀、和泉型瓦器椀、皿、吉備型土師器椀が出土している。これらの計量分析では、破片数計測および重量計測を試みた(図68、表23)。

破片数計測では土師質土器甕・鍋が53%、瓦器椀24%、土師質土器杯7%、移動式カマド7%、その他は2%以下であり、甕・鍋が半数を占め、瓦器椀が続く。重量計測では土師質土器甕・鍋が39%、移動式カマド28%、瓦器椀26%、土師質土器杯4%、その他は2%以下であり、甕・鍋がやや多く、移動式カマド、瓦器椀がそれに続き、甕・鍋、瓦器椀、移動式カマドが約9割を占めている。破片数計測と重量計測では、土師質土器甕・鍋の数値がどちらも大きい。しかしながら、これらは供膳具と比較すると大型であること、破碎したときに供膳具よりも破片数が多くなることが想定される。甕・鍋は口縁部残存率1/6以上の個体が3個体であり、破片数143個の大多数はこれら3個体の同一個体と推測される。そのため、甕・鍋を2号遺構の主要遺物と位置付けるのは難しい。移動式カマドの数値の大きさも同様であり、18点出土しているが、胎土や色調などの特徴から同一個体と思われる破片が複数点存在し、それらを勘案すると、3個体程度の移動式カマドが廃棄されていたと考えられる。そのようななか、瓦器椀は破片数計測および重量計測ともに20%以上を占め、口縁部が1/6以上残存している個体が24点あり、完存率は他の器種よりも圧倒的に高い。

続いて、土師質土器甕・鍋、移動式カマドを除いた供膳具から2号遺構出土遺物について検討する。土師質土器杯、皿、瓦器椀、皿、須恵器椀、皿、黒色土器A類椀、吉備型土師器椀の破片数、重量計測の割合を示したのが図69である。瓦器椀は破片数、重量計測ともに60~80%と過半数以上を占めている。土師質土器杯は、破片数で18%、重量計測で12%を示す。しかしながら、土師質土

器杯の破片数は、図64に掲載している土器以外は全て実測不可能な小片である。

以上より、II区4トレンチ2号遺構は、多数の瓦器碗とともに土師質土器杯、皿、甕・鍋、移動式カマドが意図的に廃棄された遺構である。そして、本遺構の大きな特徴である、瓦器碗が圧倒的多数を占め、その他の土器の個体数が少ないことを追認でき、これらは計量計測からも客観的に示される。また、黒色土器A類、須恵器碗・皿は、残存状況が悪く、出土点数も非常に少ないため、瓦器碗などのように意図的に廃棄されたのではなく、埋没過程で周辺域から混入したことが推察される。

4. 2号遺構出土の瓦器碗

本遺構の特色として、瓦器碗が大多数を占めていることを再確認した。ここでは、瓦器碗の分析を通し、2号遺構で出土した瓦器碗の評価を試みたい。宮ノ浦遺跡では、これまで楠葉型瓦器碗と和泉型瓦器碗が出土している。しかしながら、II区4トレンチ2号遺構で出土した瓦器碗は全て和泉型であり、楠葉型は1点も出土していない。

瓦器碗の時期

本遺構で出土した和泉型瓦器碗の特徴として、①口径17cm 程度のものが一部みられるが、大半は口径15～16cm代、器高は5cm 前後に集中する（図70）、②外面のミガキはすきまが目立ち、口縁部なかほどから端部にかけてミガキが施されるものと、口縁部上部のヨコナデ調整付近から上部にかけて粗略化したミガキが施され、なかほど以下にはミガキがみられない2タイプがある、③高台は断面三角形と断面四角・台形のものが確認できる、④焼成は良好であり、焼き締まりが良い、⑤イブシは良好なものが一部みられるものの、そのほとんどはあまり良くないことが挙げられる。瓦器碗の各時期の出土数を示したのが図71であり、II-2期は18点、II-2～3期は6点、II-3期は3点確認できる。本遺構から出土した瓦器碗は、II-2期を中心に、II-3期へと移り変わっていく時期と判断される。

5. 2号遺構の瓦器碗からみた宮ノ浦遺跡と畿内との関係

和泉型瓦器碗は、現在の大阪府を中心とする摂津、河内、和泉全域に分布する土器であり、地域によって特徴に差異が存在する〔佐藤2022a〕。佐藤重聖氏は大阪府下の和泉型瓦器碗の地域相を把握するために、和泉型瓦器碗の暗文構成、高台形状、法量、ヘラミガキの太さ、焼成を分析し、大阪府下に四つの地域相を異にする領域が存在することを指摘した〔佐藤2011〕。佐藤氏の研究成果を参考に、II区4トレンチ2号遺構で出土した和泉型瓦器碗の暗文構成、高台形状、焼成について検討し、2号遺構で出土した瓦器碗が大阪府下のどの地域・領域から持ち運ばれたのか検討する。

内面見込みの暗文文様

2号遺構で出土した瓦器碗の内面見込みの暗文は、斜格子状暗文6点、平行線状暗文2点、鋸歯状暗文5点、連結輪状暗文1点、不規則状暗文6点が確認できる（図72）。佐藤氏の分類〔佐藤

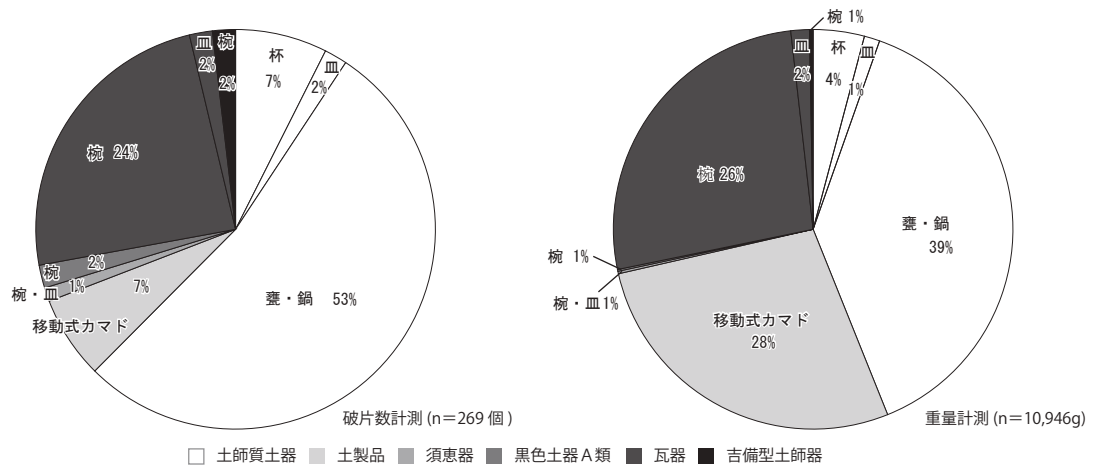


図68 II区4トレンチ2号遺構出土遺物破片数計測（左）および重量計測（右）

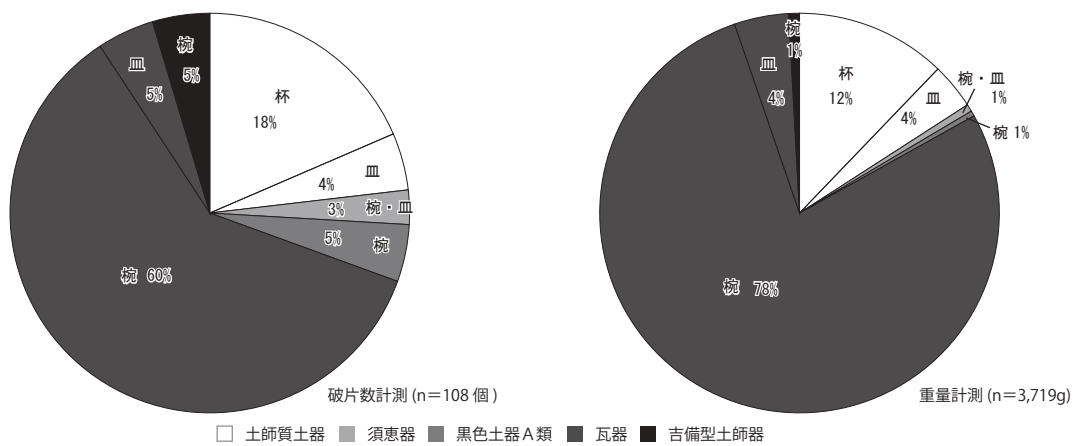


図69 II区4トレンチ2号遺構供膳具破片数計測（左）および重量計測（右）

表23 II区4トレンチ2号遺構出土遺物の内訳

種別	器種	破片数(個)	重量(g)	口縁部1/12 以上残存(個)	口縁部1/6 以上残存(個)
土師質土器	杯	20	453	5	1
	皿	5	138	3	3
	壺・鍋	143	4216	3	3
土製品	カマド	18	3011	0	0
須恵器	碗・皿	3	22	0	0
黒色土器A類	碗	5	16	0	0
瓦器	碗	65	2894	25	24
	皿	5	164	4	3
吉備型土師器	碗	5	32	1	1
合計		269	10,946	41	35

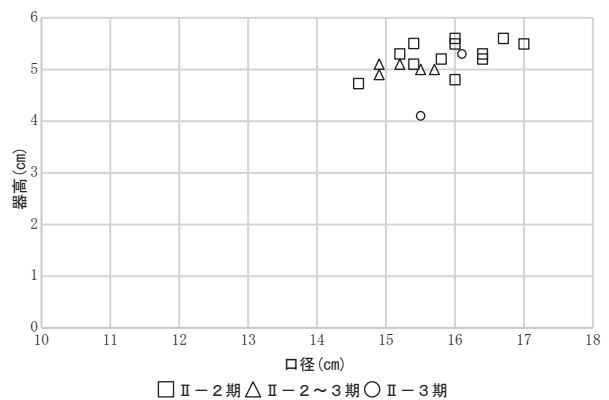


図70 和泉型瓦器碗の法量分布

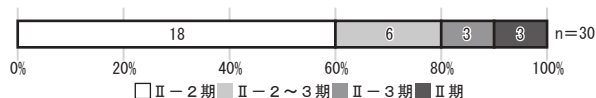


図71 和泉型瓦器碗の時期と出土点数

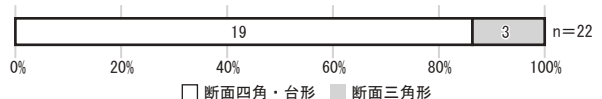


図73 和泉型瓦器碗の高台形状

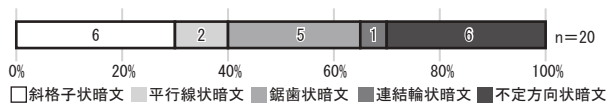


図72 和泉型瓦器碗の見込みの暗文

2011〕を参考にすると、a類（斜格子暗文）6点、b類（平行・ジグザグ状暗文）7点、d類（連結輪状暗文）1点、e類（不規則暗文）6点である。佐藤氏によると、II期は、大阪府下では中河内地域～和泉北部を中心に瓦器碗の出土遺跡が認められ、淀川以北ではe類暗文を主体としてb類暗文が続き、a類暗文が非常に少ない。それに対し、淀川以南ではa類暗文が主体である。III-1期では、淀川以北ではb類とe類暗文で構成される基本構成に変化がみられないのに対し、淀川以南では、中河内地域ではa類、b類暗文が集中し、和泉北部ではe類暗文が残存するのに加えて、c類暗文（渦状暗文）が出現し、泉南地域は中河内地域に類似すると論じた。

2号遺構で出土した瓦器碗の暗文は、特定の文様に偏らず、a類、b類、e類がいずれもほぼ均等である。暗文文様では、大阪府下の特定の地域から持ち込まれたことを想定するのは難しい。

高台形状

瓦器碗の高台形状は、断面四角・台形が19点、断面三角形が3点認められる（図73）。大阪府下では、淀川以北地域は断面四角形のもの80%、中河内地域はほとんどの遺跡で断面四角形の高台はみられず、和泉北部地域はほとんどの地域で断面四角形の高台が40%以下、泉南地域では、断面四角形の高台は20%以下と指摘されている〔佐藤2011〕。

2号遺構で出土した瓦器碗の高台形状の比率は、断面四角形86%、断面三角形14%であり、前者が圧倒的多数を占めている。高台形状からは、淀川以北の地域を中心に持ち込まれた可能性を指摘できる。

焼成・イブシ

焼成は全て良好であり、焼き締まりが良く、不良のものはみられない。イブシは、一部良好なものもみられるが、大半はやや不良であり、なかには灰白色や赤褐色を呈する固体もある。大阪府下では、淀川以北地域は出現期から消滅期まで一貫して良好な焼成とイブシを保ち続けるのに対し、泉南地域は南部に向かうほど焼成・イブシともに不良になると指摘されている〔佐藤2011〕。

焼成・イブシからみた場合、特定の地域からの持ち込みを指摘することは難しいが、2号遺構で出土した瓦器碗はいずれも焼成が良好であるため、泉南地域から持ち込まれた可能性は低い。

小結－瓦器碗からみた畿内との関係－

以上、内面見込みの暗文、高台形状、焼成について検討した。それぞれの分析を総合すると、本遺構の瓦器碗は、佐藤氏が設定した領域のうち、領域1～3から搬入されたことが推測される。つまり、淀川以北地域を中心に、河内地域と和泉北部地域から持ち込まれた可能性がある。

和泉型瓦器碗は同一生産集団内でも複数種類の瓦器碗が生産され、これらの瓦器碗は一つの生産地から複数の消費地へと供給されていたことが指摘されている〔佐藤2011〕。本遺構の瓦器碗は複数地域から持ち込まれ、特に淀川北部地域を中心とするものが見受けられるため、中河内地域や淀川南部地域のものが一度淀川北部に集積されたのち、本遺跡に持ち込まれたことが推測される。本遺跡では、ほとんど広域に流通することがない播磨系須恵器の可能性のある供膳具や、山陽・中国山地を由来とする土器が出土しているため²⁾、山陽側の海路を経由したことが考えられる。これらは瀬戸内海の東西・南北を担う海上交易だけでなく、本遺跡が所在する佐島は1158（保元3）年に

石清水八幡宮領の荘園として記録が残っており、石清水八幡宮などの諸権門によって組織された神人などによって持ち込まれたことが想定される。

6. II区4トレンチ2号遺構出土遺物の評価

本遺構では和泉型瓦器碗だけでなく、煮炊きに使用する甕・鍋や移動式カマドが出土している。これらは二次的の被熱痕がみられるだけでなく、一部ススも観察される。そして、残存率も良好であるため、使用後にある程度時間を置かずに廃棄された可能性がある。さらに、日常的に消費される貝とはやや異なる貝が出土し、特別な食事に供されたものであることが指摘されている〔福本2022〕。これらの出土遺物から、本遺構の周辺では土師質土器鍋と移動式カマドを用いた炊事が行われ、和泉型瓦器碗を中心に、土師質土器杯・皿に盛り付けて食事を行い、その後に本遺構に廃棄された可能性が推測される。鈴木康之氏は、古代後半から中世にかけてみられる土器の大量一括廃棄事例を、各地で繰り返された儀礼や饗宴の痕跡と指摘しており〔鈴木2011、2020〕、本遺構の出土遺物のあり方は、この地で執り行われた儀礼や饗宴の痕跡を示している可能性がある。

おわりに

II区4トレンチ2号遺構の出土遺物を再整理し、本遺構で出土した遺物群の若干の評価を試みた。本遺構の土器群は、佐島の荘園成立期の資料として評価できるだけでなく、荘園として取り込まれていくなかの中央権門との結びつきや、それらとの間で執り行われた何らかの儀礼との関わりとして再評価できる。何らかの儀礼として、鈴木氏は佐島の海浜における生産物に注目し、その収納をめぐるために執り行われた可能性を指摘している〔鈴木2020〕。本遺跡では、鹹水溜めと考えられる槽状遺構が検出されており、塩生産を行っていた可能性が考えられる〔村上2022〕。2号遺構出土遺物の評価に際して塩との関係を論じることができなかったが、本遺構出土遺物がみせる何らかの儀礼に関しても、鈴木氏が論じているように塩との関係を考える必要があろう。今後は島嶼部や周辺地域の一括廃棄事例を検討し、比較することで、本遺構の性格を改めて再評価するだけでなく、本遺跡で取り交わされた儀礼の一端について文献史などからもアプローチし、荘園成立期の動向について検証していく必要がある。

謝 辞

本稿をなすにあたり、大塩啓一郎氏にはトレースやII区4トレンチ2号遺構の整理作業をご協力いただきました。また、柴田圭子氏、首藤久士氏（以上、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター）には土器を実見していただき、多くのご教示をいただきました。末筆にはなりますが感謝を申し上げます。

V. II区4トレンチ2号・3号遺構出土遺物

【註】

1) 図64の8は再整理時に『宮ノ浦遺跡Ⅵ』図12の45と46が接合することを確認したため、接合後、再実測して掲載した。なお、10も8と同一個体の可能性があるが、接合できなかったため、別個体として報告している。同図18と20も再整理時に接合個体を確認できたため、接合後に再実測して掲載した。図65の27は『宮ノ浦遺跡Ⅵ』図14の70で報告しているが、土器を設置する向きが異なっていたため、再実測して再掲載した。

2) 本報告書の別稿で播磨系須恵器の可能性のある土器について論じている。

【参考文献】

- 青木聡志 2022「第5章 成果と課題 槽状遺構（2号遺構）の出土遺物」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 佐藤亜聖 2011「大阪府下における和泉型瓦器碗の地域相抽出とその意義」『中世土器の基礎研究』23、日本中世土器研究会
- 佐藤亜聖 2022a「畿内産瓦器碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 佐藤亜聖 2022b「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 鈴木康之 2011「日本中世社会の宴会と土器」『家具道具室内史』第3号、家具道具室内史学会
- 鈴木康之 2020「宮ノ浦遺跡における古代末～中世初頭の出土資料について」『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 橋本久和 2018『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社
- 福本佳織 2022「第4章 宮ノ浦遺跡出土貝類について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通 2022「第5章 成果と課題 まとめ」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

Ⅵ. 宮ノ浦遺跡の古代・中世土器

－流通品からみた宮ノ浦遺跡－

青木聡志

はじめに

宮ノ浦遺跡の古代・中世土器は、『宮ノ浦遺跡Ⅱ』で織田誠司氏によって報告されている〔織田2016〕。織田氏は第1次～第5次調査で出土した12世紀後半～14世紀中ごろの資料を報告し、吉備型土師器が上島島域の在地土器として位置付けられると論じた。第5次調査までは、古代・中世土器ともに出土数が少なく、資料的な制約があった。そのようななかで、第6次調査のⅠ区27トレンチおよび第7次調査からのⅡ区の発掘調査を契機に、古代・中世土器の資料数が一気に増加した。鈴木康之氏は第8次調査までの古代末～中世初頭に位置付けられる広域流通品に注目し、その多くに国衙や中央権門との結びつきを示すものが含まれることを指摘した〔鈴木2020〕。そして、これらの資料は当該期の支配者層が佐島の海浜の生産物に着目し、その収納をめぐる何らかの契約儀礼が行われた痕跡であるとした。筆者はⅡ区4トレンチ2号遺構の出土遺物から、宮ノ浦遺跡は畿内との交流関係が強いことを改めて指摘し、吉備地域が本遺跡と畿内地域との関係にとっての仲介的なあり方を示唆していることを述べた〔青木2022〕。

本稿では、これまでの調査で出土した古代～中世にかけての土器・陶磁器の特質を改めて整理し、当該期の土器からみた宮ノ浦遺跡の評価を試みたい。その際、瓦器や陶磁器といった流通品¹⁾に注目し、Ⅰ区・Ⅱ区それぞれの地区の特徴を概観する(図74)。本遺跡では、在地土器と想定され

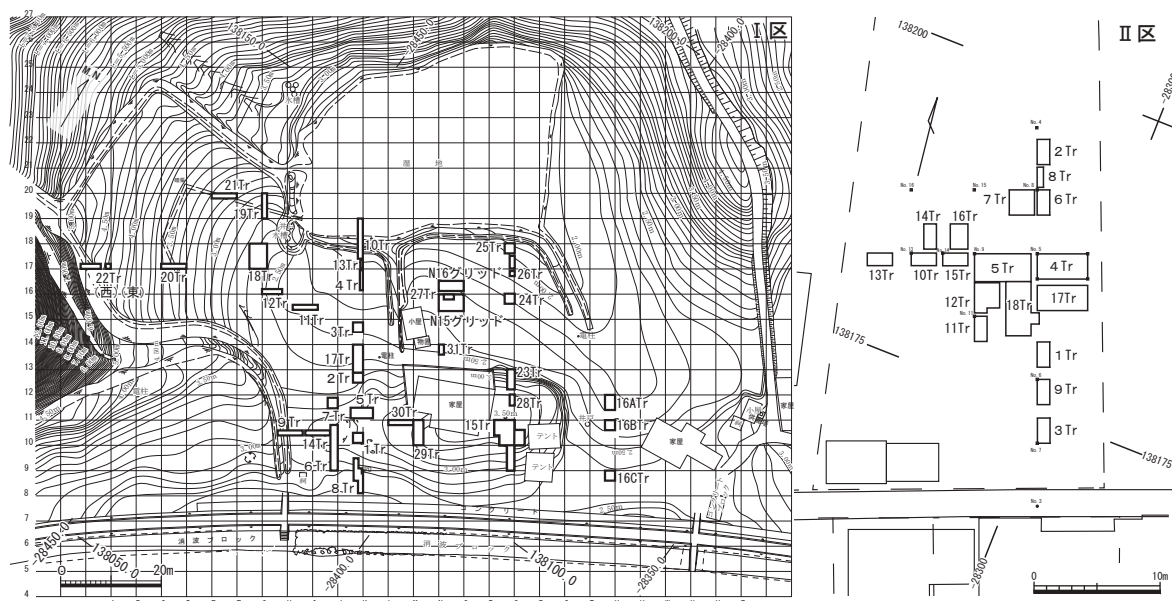


図74 宮ノ浦遺跡の調査区配置図

る土師質土器杯・皿や須恵器の杯・椀類が多数出土しているが、周辺地域の土器様相の形式的な変遷過程が明らかになっていないため、これらの土器については言及を控える。なお、Ⅱ区4トレンチ2号遺構で出土した土師質土器杯・皿は、その特徴から備後を中心とした吉備地域由来の土器と考えられる〔青木2022〕。

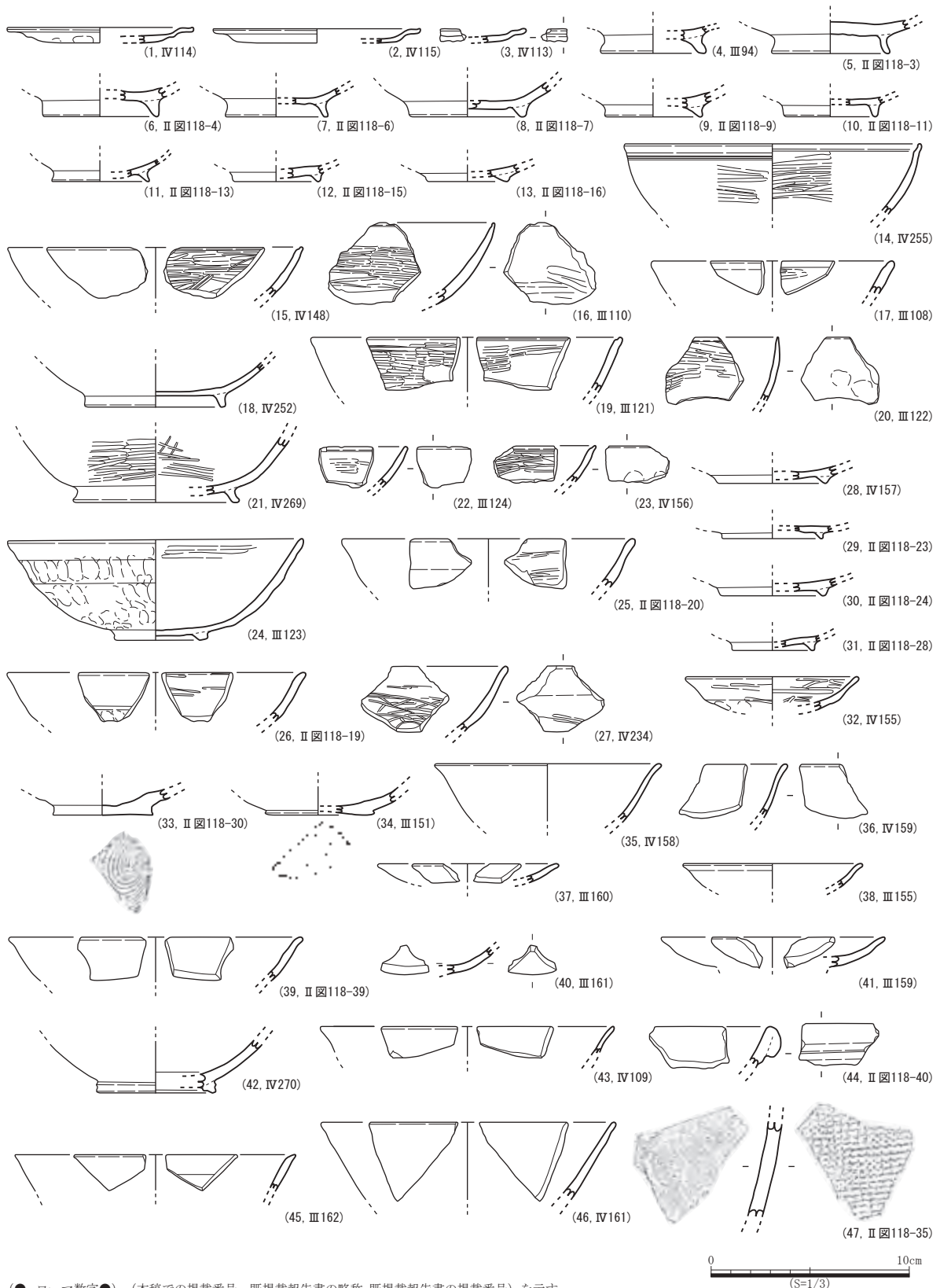
1. Ⅰ区出土の流通品

Ⅰ区では流通品として、畿内系土師器、吉備型土師器、畿内系黒色土器A類、畿内系黒色土器B類、楠葉型瓦器、和泉型瓦器、播磨系須恵器²⁾、緑釉陶器、白磁、青磁、亀山焼が確認される(図75)。また、備前焼や西村系須恵器椀の可能性が指摘されている土器片も出土している〔織田2016〕。

畿内系土師器は、「て」字口縁皿であり、11世紀代に位置付けられる(1~3)。吉備型土師器椀は山本Ⅰ-3期(4)~草戸Ⅱ期前半(13)〔鈴木1996、山本悦1993〕にかけてみられ、特に13世紀以降のものが多数を占める。畿内系黒色土器A類椀は、口縁端部内面の沈線がやや幅広く明瞭に巡り、器壁が薄く、内外面ともにミガキが緻密なもの(14)と、沈線がやや不明瞭で、器壁が4mm前後とやや厚く、外面のミガキが粗雑なもの(15~17)がある。後者がやや多く、10~11世紀に位置付けられる〔森1995〕。畿内系黒色土器B類椀は内外面ともにミガキが緻密であり、器壁がやや厚いもの(19)と薄いもの(20)が認められ、11世紀ごろとみられる〔森1995〕。楠葉型瓦器椀は口縁端部内面の沈線が明瞭に施されたもの(22)とやや不明瞭なもの(23)があり、後者は外面のミガキが確認できない。22は楠葉Ⅱ-1~2期、23は楠葉Ⅲ期〔佐藤2022b、橋本2018〕に位置付けられる。和泉型瓦器椀は和泉Ⅱ-3期(27)~Ⅲ-1期(24)を中心とする時期〔佐藤2022b、橋本2018〕のものが出土し、特にⅢ期の瓦器椀が多い。播磨系須恵器椀は見込みに凹みがみられるもの(33)と凹みが不明瞭なもの(34)があり、11世紀後半~12世紀前半に位置付けられる〔森田1995〕。緑釉陶器は椀と皿が確認され、京都産(39)と近江産(36~38、40~42)、防長産(35)が出土している。時期は9世紀前半(39)~10世紀後半(42)にかけてであり、10世紀後半に比定される近江産が多い。白磁は太宰府分類のⅡ類かⅪ類と考えられる碗(43)、碗Ⅳ類(44)、碗Ⅴ類(45)がある。青磁は太宰府分類の青磁碗Ⅰ-1a類(46)が出土している。これらの貿易陶磁器は10世紀後半~12世紀中ごろの年代〔山本信2000〕が想定される。亀山焼(47)は甕の体部片が出土しており、詳細な年代は不明であるが、中世前半ごろとみられる。

2. Ⅱ区出土の流通品

Ⅱ区では流通品として、畿内系土師器、吉備型土師器、畿内系黒色土器A類、畿内系黒色土器B類、楠葉型瓦器、和泉型瓦器、篠窯須恵器、播磨系須恵器、古瀬戸灰釉陶器、緑釉陶器、灰釉陶器、亀山焼、越州窯系青磁、白磁、青磁が出土している(図76)。また、十瓶山系の可能性が指摘され



(●, ローマ数字●) (本稿での掲載番号, 既掲載報告書の略称 既掲載報告書の掲載番号) を示す。

1～3 畿内系土師器 4～13 古備型土師器 14～18 畿内系黒色土器A類 19～21 畿内系黒色土器B類 22、23 桶葉型瓦器 24～32 和泉型瓦器 33、34 播磨系須恵器 35～42 緑釉陶器 43～45 白磁 46 青磁 47 亀山焼
 44: 2Tr 10、26: 3Tr 11: 11Tr 9: 12Tr 7、39: 15Tr 8: 16ATr 13: 17Tr 5、6、12、25、29～31、33、47: 18Tr 45: 24Tr 16、17、19、20、38: 27Tr
 21、42: 31Tr 1～4、14、15、18、23、24、27、28、32、35～37、40、41、43、46: N15 グリッド 22、34: N16 グリッド

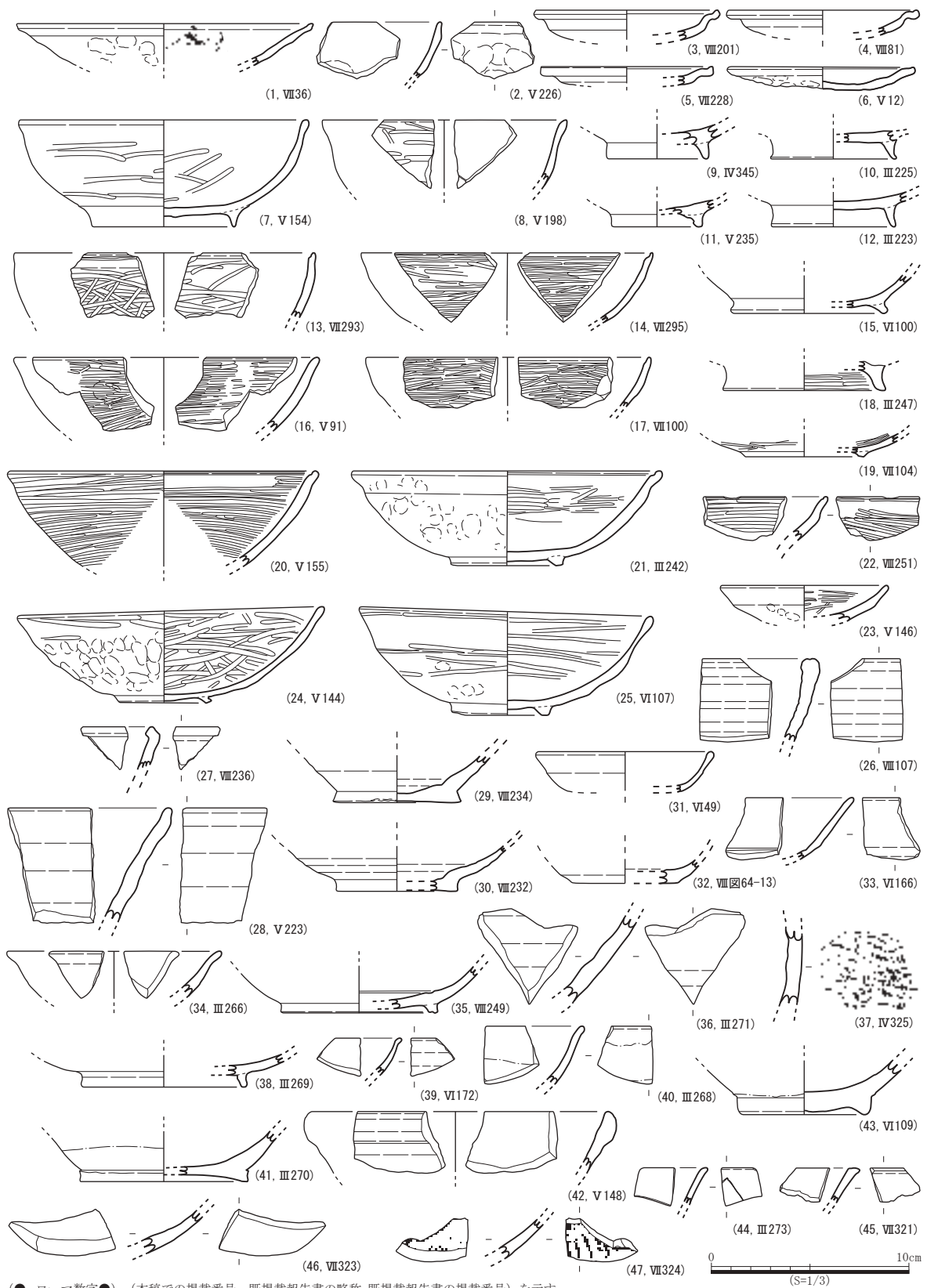
図75 I区出土流通品

ているものもある（図28-347）。

畿内系土師器では、平尾政幸氏の2B～3段階〔平尾2019〕と考えられる皿（1、2）と「て」字口縁皿（3～6）が確認され、前者は9世紀後半～10世紀、後者は11世紀の年代が想定される³⁾。吉備型土師器碗は山本Ⅰ-2期（10）～Ⅲ-1期（11）が出土し、Ⅰ-3～Ⅱ-1期の12世紀前半ごろが多数を占める。（12）は山本Ⅰ-1期まで遡る可能性がある。畿内系黒色土器A類碗は口縁端部内面の沈線が明瞭に施されているもの（13、14）が多く、10～11世紀に位置付けられる⁴⁾。畿内系黒色土器B類碗は口縁端部内面の沈線が明瞭なもの（16）とやや不明瞭（17）なものがみられ、いずれも内外面のミガキは緻密である。また、器壁が4mm前後とやや厚いもの（16）と、2～3mm前後の薄いもの（17）があり、高台は内面にもミガキが施される（18）。いずれも11世紀に位置付けられる⁵⁾。楠葉型瓦器碗（20～22）は楠葉Ⅰ-2～Ⅱ-3期のものが出土し、特にⅠ-2～Ⅱ-1期が多い⁶⁾。和泉型瓦器碗（24、25）は和泉Ⅱ-2～Ⅲ-1期にかけてみられ、Ⅱ-2～3期のものが主体を占めている。Ⅱ区4トレンチ2号遺構ではⅡ-2期を中心とし、Ⅱ-3期にかけて位置付けられる瓦器碗が多数出土している。篠窯須恵器捏鉢（26）は口縁端部が玉縁状に肥厚し、その特徴から西長尾5・6号窯に位置付けられ、10世紀後半の年代が想定される〔高橋2016〕。播磨系須恵器（27～32）は捏鉢と碗、小皿が出土している⁷⁾。捏鉢は口縁部の面が器壁に対して外傾し、端部が上方へ若干突出して丸くおさまるため、Ⅲ-1類の特徴をもつ〔佐藤2022a〕。時期は12世紀後半ごろに位置付けられる。碗は見込みの凹みがやや不明瞭ながら残っているため、12世紀前半ごろと考えられる。小皿（31、32）は外面上半が灰色、下半は灰白色を呈し、重ね焼きの際に生じたと考えられる。緑釉陶器は碗と皿が確認され、京都産（33）と近江産（34、35）が出土している。これらの時期は9世紀後半～10世紀後半に位置付けられる。古瀬戸灰釉陶器（36）は四耳壺の胴部片であり、13世紀後半～14世紀初頭のものである。亀山焼（37）は甕の体部片が出土しており、詳細な年代は不明であるが、中世前半ごろとみられる。灰釉陶器（38～40）は碗が出土し、K90～O53号窯式期〔山下1995〕のものが確認される。図28-348は10世紀前半ごろの美濃産の可能性が指摘されている。越州窯系青磁は底部が円盤状高台であり、底部下半から高台外面は露胎し、太宰府分類の碗Ⅱ類（41）である。図76に掲載していないが、17トレンチでも碗Ⅱ類と考えられる体部片が出土している（『宮ノ浦遺跡Ⅵ』図22-165）。白磁は太宰府分類の碗Ⅳ類（42、43）、碗Ⅺ類（44）、碗Ⅴ類あるいはⅧ類（45）が出土している。青磁は太宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類（46）、同安窯系青磁碗Ⅰ類（47）が確認される。これらは10～12世紀の年代が想定される。

3. 流通品からみたⅠ区・Ⅱ区における生活の場の変化

宮ノ浦遺跡で出土した流通品をトレンチごとに集計し（表24）、流通品からみた各トレンチの時期ごとの消長を示したのが図77である。Ⅰ区では、15トレンチや29・30トレンチが位置する浜堤裏側から、後背湿地にかけて位置するN15・16グリッドを中心に10～12世紀の土器が集中し、その他のトレンチではこの時期の土器がほとんどみられず、出土しても1、2点である。つまりⅠ区で



(●, ローマ数字●) (本稿での掲載番号, 既掲載報告書の略称 既掲載報告書の掲載番号) を示す。
 1～6 畿内系土師器 7～12 吉備型土師器 13～15 畿内系黒色土器A類 16～19 畿内系黒色土器B類 20～22 楠葉型瓦器 23～25 和泉型瓦器 26 篠森須恵器
 27～32 播磨系須恵器 33～35 緑釉陶器 36 古瀬戸灰釉陶器 37 亀山焼 38～40 灰釉陶器 41 越州窯青磁 42～45 白磁 46, 47 青磁
 10, 36: 1Tr 15, 20, 25, 31, 32, 38, 41, 43: 4Tr 1, 6, 12, 16, 17, 19, 21, 44: 5Tr 18, 34, 40: 7Tr 37: 9Tr 9, 23, 24, 42: 10Tr 3, 4, 26:
 12Tr 7: 14Tr 8: 15Tr 2, 11, 28: 16Tr 27, 29, 30, 33, 35, 39: 17Tr 5, 13, 14, 22, 45～47: 18Tr

図76 II区出土流通品

VI. 宮ノ浦遺跡の古代・中世土器

表24 宮ノ浦遺跡の流通品出土点数

	畿内 土師	吉備	畿内 黒A	畿内 黒B	楠葉	和泉	篠原	播磨	古瀬戸	亀山	緑釉	灰釉	越州	白磁	青磁
I 区															
2Tr															1
3Tr		1				2									
9Tr		2													
11Tr		1													
12Tr		1				1									
14Tr						1									
15Tr		2									1				
16ATr		1													
17Tr		1				1									
18Tr		5				8		1		1					
24Tr														1	
27Tr			4	2							1				
31Tr			1								1				
N15グリッド	3	1	3	2	1	3					5			2	1
N16グリッド					1			1			1				
II 区															
1Tr		3							1					2	
4Tr		2	1	3		23		1				1	1	1	
5Tr		4	5	1	20	2	13	1						1	
6Tr						1									
7Tr	1			1		1					2	1			
9Tr					1	4				2				3	
10Tr		4		3		3		1						1	
12Tr	2	3		6		2	1	1						1	
13Tr	3	1		2											
14Tr		2		1	1			1							
15Tr		1		1		6									
16Tr	1	5		2		4		1							
17Tr		1			1			1			6	2	1		
18Tr	3	8	3	3		3		1			1	1		3	2
表採一括					1										
合計	19	49	11	47	8	76	1	11	1	3	18	6	2	16	3

*報告書掲載点数のみカウント。未報告資料を含めると本表よりも増加するトレンチもある。

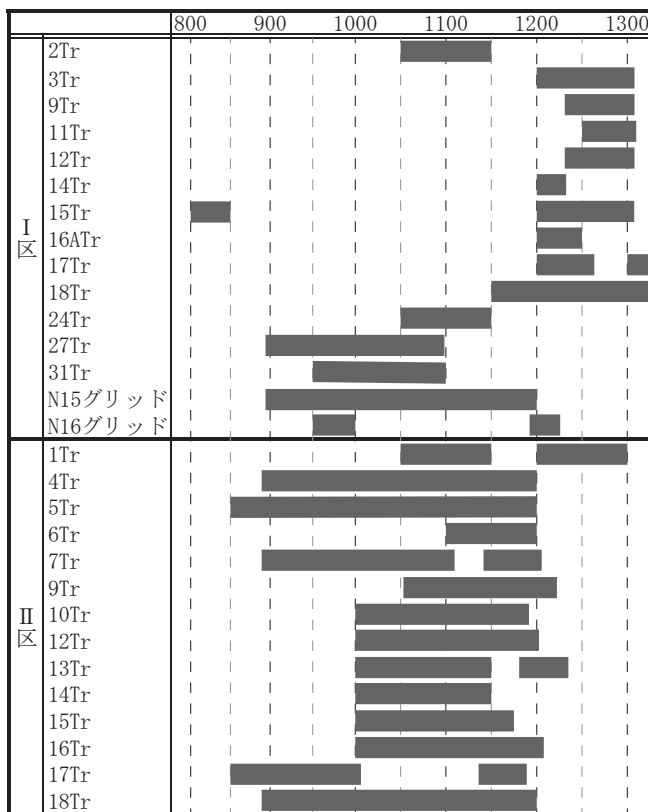


図77 流通品からみた消長

で畿内系黒色土器が出土しているのも注目される。13世紀以降は1トレンチで古瀬戸灰釉陶器四耳壺が出土していること以外に、この時期の流通品を確認することはできない。そのため、集落の中心がⅡ区周辺に移動したか、あるいは12世紀と比べて人々の活動が停滞していたことが推測される。

は、当該期の人々の活動の中心はN15・16グリッド周辺の狭い範囲であったことを示唆する。N15グリッド周辺では、一般的な集落では出土することが少ない緑釉陶器や、伊予国内でも出土することが非常に稀な畿内系黒色土器が出土しており、注目される。その後、13～14世紀にかけて、Ⅰ区西側を中心に当該期の土器がまばらにみられ、特に18トレンチでは多数出土している。それに対し、N15・16グリッドではこの時期の土器がほとんどみられない。2・17トレンチでは13～14世紀ごろに比定される塩田の浜床状遺構が確認され、Ⅰ区の西側では塩田面が形成されていたことが推測される。当該期になると、主体となる生産内容などが変化したことによって、N15グリッド周辺から18トレンチ周辺に人々の活動域が移り変わったことが想定される。

Ⅱ区では、5・17トレンチで9世紀後半ごろ、4・18トレンチでは10世紀ごろ、その他のトレンチでは11世紀ごろから流通品が確認される⁸⁾。そして、いずれのトレンチでも12世紀の流通品が出土している。すなわち、Ⅱ区では浜堤後背地に位置する1トレンチから後背湿地付近の2トレンチの間の空間で、10世紀前後から人々が活動していたことが伺える。Ⅱ区では緑釉陶器だけでなく、灰釉陶器や越州窯系青磁、同安窯系青磁など、富裕層しか入手することが難しい土器がみられるのは特筆され、ほとんどのトレンチ

以上、宮ノ浦遺跡から出土した流通品について整理した。Ⅰ区・Ⅱ区ともに10世紀前後～12世紀にかけて、Ⅰ区N15グリッド周辺およびⅡ区5トレンチ周辺、13世紀以降はⅠ区18トレンチ周辺およびⅡ区の調査範囲外で人々の生活が営まれていることが推測される。本稿では対象としていないが、土師質土器や須恵器、製塩土器のなかには9世紀に比定されるものがあるため、流通品は少ないもののⅠ区・Ⅱ区ともに9世紀のある段階から人々の活動が営まれていた可能性が高い。両調査区ともに流通品が多数出土している10～12世紀では、Ⅰ区よりもⅡ区で越州窯系青磁や楠葉型瓦器碗など、官衙や寺社のような有力者層が関与した遺跡で出土する事例が多い遺物が目立つ。そのため、本遺跡の北側背後にある丘陵から南側にのびる低い舌状台地を境にした東側浜堤であるⅡ区には何らかの重要な施設や政治的な場が存在していた可能性がある。Ⅰ区でもN15グリッド周辺ではⅡ区と同様の施設や場が整備されていたと想定されるが、出土遺物の違いから、Ⅱ区とは何らかの用途や機能差といった差別化が図られていたことが推測される。

4. 流通品からみた宮ノ浦遺跡

鈴木氏は宮ノ浦遺跡から出土した土器・陶磁器を(a)10世紀ごろ、(b)11世紀～12世紀にかけて、(c)12世紀後半～13世紀初頭にかけて、(d)13世紀後半～14世紀初頭にかけての4時期に区分した〔鈴木2020〕。第9次調査以降に出土した流通品も鈴木氏が区分した時期に逸脱するものはみられないため、鈴木氏の時期区分を参照しながら、流通品からみた宮ノ浦遺跡の評価を試みたい。

(a)10世紀ごろ

当該期の流通品には畿内系土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁、畿内系黒色土器A類、篠窯須恵器などがあり、緑釉陶器は京都産、防長産、近江産が出土している。注目すべき点は防長産緑釉陶器と越州窯系青磁である。防長産緑釉陶器は防長地域や大宰府などの北部九州を中心に供給され、生産地より東に目を向けると、平安京周辺や国府推定地でしか出土していない〔高橋1995〕。伊予では本遺跡例以外で防長産緑釉陶器は出土していない⁹⁾。越州窯系青磁は、太宰府分類の碗Ⅱ類が出土している。碗Ⅱ類は粗製品であり、北部九州地域で集中的に出土し、平安京などでは出土することが極めて稀な製品である〔山本信1995〕。畿内系黒色土器A類と篠窯須恵器も限定的な出土を示す遺物であり、前者は、伊予では管見の限り、糸大谷遺跡、伊予国分寺跡（以上、今治市）、石井幼稚園遺跡(松山市)、後者は八町1号遺跡、伊予国分寺跡、阿方春岡遺跡、糸大谷遺跡（以上、今治市）などで確認できる。これらの遺跡は官衙関連の性格が想定され、瀬戸内海に面している糸大谷遺跡は御厨あるいは荘園の一画としての性格が指摘されている〔谷若1996〕。

これらの製品は、瀬戸内海航路によってもたらされ、京都系土師器や畿内系黒色土器A類の存在は畿内（淀川流域沿い）との強い結びつきを伺わせる一方で、防長産緑釉陶器と越州窯系青磁碗Ⅱ類は、北部九州地域や防長地域との交流が存在していたことを指摘できる。すなわち、瀬戸内海の東西交流において、宮ノ浦遺跡は交通の要衝の一つであり、寄港地であった可能性がある。

(b) 11世紀～12世紀

当該期の流通品には畿内系土師器、畿内系黒色土器B類、白磁（碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅺ類）、龍泉窯青磁碗Ⅰ類、吉備型土師器、楠葉型瓦器、播磨系須恵器がある。畿内系黒色土器B類は楠葉産か検討する余地はあるが、楠葉産であるならば、特定階層向けの特異な生産のされ方であった可能性が指摘され〔森1995〕、本遺跡の評価をする上で重要であろう。伊予では、畿内系黒色土器B類は8遺跡で出土し、いずれの遺跡も瓦や墨書土器、貿易陶磁器など一般の集落では出土することが少ない遺物をみることができる。このうち、永地遺跡（今治市）は12世紀中ごろに「醍醐寺」の荘園になる大島に所在している〔安部・木原編2003〕。楠葉型瓦器碗は地域の政治・経済の拠点的な遺跡からの出土例が多いことが指摘され〔橋本2009〕、出土数が少ないながらも楠葉Ⅰ～Ⅲ期の製品をみることができる。また、吉備型土師器碗では、山本編年のⅠ～Ⅲ期（草戸Ⅱ期前半）が出土していることは、佐島は吉備地域の土器文化圏であることを示唆する。すなわち、佐島を含む上島諸島において、11世紀後半～14世紀ごろの土器文化圏は、伊予の今治平野を中心とする土器文化圏ではなく、吉備地域沿岸部の土器文化圏であったことを意味する。吉備地域沿岸の土師質土器杯・皿の底部の切り離しは回転ヘラ切りであり、本遺跡で出土している土師質土器の底部の切り離しはほとんどが回転ヘラ切りであるため、土師質土器杯・皿からも吉備地域沿岸の土器文化圏であることを追認できる。しかしながら、底部の切り離しが回転系切りである土師質土器も出土しており、これらは伊予もしくは中国地方の内陸部などから持ち込まれた土器であろう¹⁰⁾。

前時期と同じく、瀬戸内海航路を通じた交流が活発に行われ、淀川流域沿いの畿内地域との交流が強だけでなく、吉備地域沿岸地域を中心とした瀬戸内海地域との結びつきも強くなったことで、様々な流通品がこの地にもたらされたことが推測される。

(c) 12世紀後半～13世紀初頭

この時期の流通品には和泉型瓦器碗、播磨系須恵器がある。和泉型瓦器碗は12世紀後半～13世紀を中心に、瀬戸内海沿岸地域に多量に分布している。この時期の和泉型瓦器碗は、航路の潮待ち・風待ちや、荘園の倉敷地、船津と推測される遺跡で出土しており、これらは遠隔地の荘園支配のための物資集散地や流通経路の整備・掌握を意図した院や権門の動向を反映し、水陸交通路が荘園公領制の下に再編されたため、流通に関わる多様な人々が相互に関係していたことが指摘されている〔橋本2009〕。宮ノ浦遺跡が所在する佐島は、1158(保元3)年に石清水八幡宮の荘園領として記されている¹¹⁾。Ⅱ区4トレンチ2号遺構では和泉型瓦器碗が多数廃棄されており、この廃棄のあり方として、飲食儀礼との関わりが示され〔福本2022〕、荘園成立以前に行われていた契約儀礼が、荘園成立・展開期の荘園領主層にも引き継がれた可能性が指摘されている〔鈴木2020〕。また、土師質土器托や器台のような土器が数点ながら出土しており、これらの土器の時期はやや遡る可能性もあるが、本遺跡で何らかの儀礼が行われていたことを裏付けている。播磨系須恵器の捏鉢は西日本を中心に広域に流通した土器であり、本遺跡でも数点出土している。注目されるのは碗・小皿、西播磨産の可能性のある土器の出土である。播磨系の小皿は捏鉢とは異なり、広域に流通しないものであり、西播磨系の須恵器も特徴的な製品以外は、西播磨地域で消費されているものである〔稲本

2023〕。本遺跡で出土している播磨系須恵器は、海上交通の担い手や支配者層の携行品あるいはそれらが播磨地域に寄港した際に入手した可能性があり、畿内だけでなく、播磨地域との何らかの関係を示唆している。捏鉢も出土量が少なく、商品的な性格よりも携行品あるいは生活に必要な道具として持ち込まれた可能性が考えられる。佐島を含む上島諸島は、この時期には吉備地域沿岸の土器文化圏であるため、吉備型土師器碗は流通品ではなく、在地土器として位置付けられ、碗だけでなく、土師質土器杯・皿も吉備地域の土器文化圏の一端を示している。

(d) 13世紀後半～14世紀初頭

当該期の流通品は、古瀬戸灰釉陶器四耳壺が出土している。前時期と比べて流通品が激減する時期であり、在地土器である土師質土器杯・皿の出土も非常に少ない。流通品や在地土器が減少する理由として、宮ノ浦遺跡内での生産内容や生活の変化、石清水八幡宮領荘園との関係性、海上交通網の変化などが考えられる。前時期までは、Ⅱ区で検出された槽状遺構を用いた塩生産であったが、この時期になるとⅠ区2・17トレンチ周辺で確認された揚浜式塩田と考えられる浜床状遺構を用いた塩生産へと変化している。それにともない、前時期まで一帯となっていた生産と生活の場は塩田を中心とする塩業活動へと変化し、生活の場がⅠ区・Ⅱ区の周辺域に移り変わったか、集落自体が佐島の別の場所に移動した可能性が推測される。石清水八幡宮との関係では、佐島は1158（保元3）年に岩城島、生名島とともに石清水八幡宮の荘園として記されているが、1284（弘安7）年の記事では、岩城島と生名島は石清水八幡宮の荘園として記述されているのに対し、佐島は確認できない¹²⁾。1284（弘安7）年頃は、宮ノ浦遺跡ではⅠ区で浜床状遺構を用いた製塩活動が行われている。それにも関わらず、佐島が記述されていないことは、岩城島や生名島と比べて、塩田に適した浜が少なく、製塩業の発展とともに忘れ去られた可能性がある。また、この記述から、石清水八幡宮が岩城島と生名島を重視していたことが伺え、それにともない、海上交通もこれらの島々へ行くのに近い佐島北側の航路が主要ルートとして使用されていたことが想定される。こうした現象が当該期の土器の出土量が急激に減少することと関連している可能性がある。土器様相の大きな変化がどのような背景のもとで生じたか、詳述することはできないが、製塩業の発達による生産体制の変化とそれにとない石清水八幡宮との関係について指摘しておきたい。

おわりに

本稿では、宮ノ浦遺跡のⅠ区・Ⅱ区それぞれの調査区で出土した土器・陶磁器について、流通品を対象に整理し、各調査区や時期別にみた宮ノ浦遺跡の特徴について論じた。

前述したように、佐島は1158（保元3）年に石清水八幡宮の荘園領であったことが記されている。この時期は石清水八幡宮の所領が拡大した時期であり、畿内地域を由来とする遺物が多数出土していることを直接的に石清水八幡宮と結びつけることは安直であるが、これらの土器を無視することはできない。畿内と九州をつないだ石清水八幡宮ネットワークについて検討した藤本史子氏によれば、石清水八幡宮は宇佐弥勒寺を媒介として九州とのつながりが強くなり、国府や主要荘園では、

楠葉型黒色土器B類やI期の楠葉型瓦器碗が出土し、中央政府や権門勢力とのつながりが強いことを指摘している〔藤本2016〕。これは、主要な港や津といった海上交通の要衝をおさえ、権力基盤の確立に向けた動きと捉えることができる。このような動きから、佐島も1158（保元3）年以前から石清水八幡宮をはじめとした中央権門との何らかの強い影響関係が存在していたことを出土遺物から想定できる。本稿でも明示したが、鈴木氏が指摘するように、10～12世紀に比定される流通品からは、国衙や中央権門との結びつきを示すものが多く、このことは当該期の支配者層が塩や海産物など佐島の生産物に注目していたことと関係しているであろう〔鈴木2020〕。このように宮ノ浦遺跡は塩生産や海上交通の要衝であったために10世紀前後から国衙や中央権門などが何らかの関与をし、1158（保元3）年以前に石清水八幡宮領の荘園として取り込まれたことが推測される。

本稿の検討を通して、宮ノ浦遺跡が石清水八幡宮領の荘園として成立する過程の一部を明らかにすることができた。しかしながら、石清水八幡宮と国衙、中央権門との具体的な結びつきや塩生産との関わり、11世紀以前の土器文化圏の把握および土器様相、土器の出土量が激減する13世紀以降の背景、海上交通における宮ノ浦遺跡のあり方など、検討すべき課題は多い。今後これらの課題を明らかにしつつ、宮ノ浦遺跡および上島諸島の当該期の様相を明らかにしていきたい。

謝 辞

本稿をなすにあたり、稲本悠一氏（公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター）、尾野善裕氏（京都国立博物館）、佐藤亜聖氏（滋賀県立大学）、佐藤竜馬氏、谷本峻也氏（以上、香川県埋蔵文化財センター）、柴田圭子氏、首藤久士氏、乗松真也氏（以上、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター）、高橋照彦氏（大阪大学大学院）、中井淳史氏（兵庫県立大学大学院）、藤本史子氏（武庫川女子大学）、森島康雄氏（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）には土器・陶磁器の年代および産地について多くのご教示をいただきました。末筆にはなりますが、感謝を申し上げます。

【註】

- 1) 本稿で論じる流通品とは、狭域に分布してそれぞれの地域ごとの特徴をもつ土器（在地土器）が、本来の分布域以外で出土している土器（瓦器碗や吉備型土師器碗など）や、貿易陶磁器や施釉陶器のように、特定の生産地から広域に広がっている土器のことである。つまり、佐島は現在愛媛県越智郡上島町（伊予国）に所属しており、伊予国で生産されておらず、伊予国以外の他地域から持ち込まれた土器のことである。佐島は1158（保元3）年に伊予国に所属しているが、この時期以前に伊予国に所属していたかは検討する余地がある。本稿では本遺跡の流通品の有様を伊予国の出土事例と比較しているが、佐島が伊予国に所属している前提で論じている。周辺地域の事例とも比較する必要があり、今後の課題としたい。
- 2) 本遺跡では稲本悠一氏から広域流通することの少ない西播系須恵器の可能性のある碗が出土しているのご教示頂いたが、筆者の力量では東播系須恵器と西播系須恵器を識別することが困難であった。そのため、本稿では東播系・西播系須恵器の可能性のある土器を播磨系須恵器と呼称して報告する。
- 3) 1、2、4～6は胎土や色調・厚みなどから、京都市外の乙訓、北摂、山城地域でみられる特徴に類似し、3は京都市域あるいはその周辺地域の特徴に類似していると中井淳史氏からご教示頂いた。中井氏にご教示頂いたのち、これまでの報告資料を見直したところ、本遺跡では、京都市外の特徴に類似している畿内系土師器の出土が多い。
- 4) 14、15は森島康雄氏、佐藤亜聖氏に実見していただき、畿内系黒色土器A類であるのご教示頂いた。また、外面の色調が

- 褐色系であること、胎土に金雲母を多数含有していることから、畿内の中でも河内地域の可能性があると指摘頂いた。
- 5) 藤本史子氏、森島康雄氏に実見していただき、畿内系黒色土器B類であるのご教示頂いた。しかしながら、実見して頂いた資料の残存状況が良好ではなかったため、楠葉産とは断言できないとご指摘頂いた。
- 6) 22は藤本史子氏、森島康雄氏に実見していただき、楠葉型瓦器碗であるのご教示頂いた。
- 7) 27、29～31は稲本悠一氏、谷本峻也氏に実見していただき、ご教示頂いた。27は東播系の碗ではないが、形状だけであれば西播系にあり、12世紀前半ごろである。29は播磨系の可能性があり、西播磨であれば10～11世紀に位置付けられる。31は東播系もしくは備前焼の可能性があり、12世紀後半～13世紀ごろに位置付けられる。
- 8) 6、7、8、10、11、13、15、16トレンチでは、古代（10～11世紀）の土器が主体的に出土するⅡ－3～Ⅱ－4層を掘り下げていないことに注意する必要がある。
- 9) 本郷遺跡（新居浜市）や国分向遺跡（今治市）では、報告書に防長産緑釉陶器が出土していることが明記されている。しかしながら、大阪大学大学院の高橋照彦氏に実見して頂いた結果、いずれも京都産であった。管見の限り伊予では、防長産緑釉陶器は本遺跡の出土例しか確認できない。
- 10) 宮ノ浦遺跡で出土している底部の切り離しが回転系切りの土器は、いずれも焼成が非常に良好であり、焼き締まりが良く、胎土もあまり混和物を含まないという特徴がある。伊予の今治平野の土器と比較すると、今治平野の土器は焼成が良好であるが、宮ノ浦遺跡で出土した資料ほど焼き締まっておらず、胎土も1mm以下の長石や石英を含み、やや粗いという特徴がある。そのため、本遺跡で出土している底部が回転系切りの土師質土器は、伊予の今治平野から持ち込まれた可能性は低く、周辺域から持ち込まれたと仮定するならば、中国山地や防長地域の可能性が推測される。なお、11世紀前半以前の土器文化圏については、吉備地域沿岸地域と指摘するのは尚早である。周辺地域の土器様相と比較する必要がある、今後の課題としたい。
- 11) 「宮寺并極楽寺諸国莊園官符」『大日本古文書 家わけ第四 石清水文書之一 田中家文書』東京帝国大学
- 12) 「楠葉集」『石清水八幡宮史』第二巻

【参考文献】

- 青木聡志 2022「第5章 成果と課題 槽状遺構（2号遺構）の出土遺物」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 安部光洋・木原貴子編2003『永地遺跡 一般国道317号大島道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』埋蔵文化財発掘調査報告書第104集、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 稲本悠一 2023「西播磨における須恵器生産の展開と変容－編年の再検討を中心に－」『第41回中世土器研究会 須恵器生産の中世 変容と展開』日本中世土器研究会
- 織田誠司 2016「古代～中世の土器・陶磁器について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 佐藤亜聖 2022a「東播系須恵器」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 佐藤亜聖 2022b「畿内産瓦器碗」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 鈴木康之 1996「土師質土器の編年」『草戸千軒遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県教育委員会

VI. 宮ノ浦遺跡の古代・中世土器

- 鈴木康之 2020「宮ノ浦遺跡における古代末～中世初頭の出土資料について」『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター
- 高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 高橋照彦 2016「平安時代須恵器の研究現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉まで－』考古学研究会関西例会
- 谷若倫郎 1996「Ⅶ遺跡総論」『糸大谷遺跡 来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第2集』埋蔵文化財発掘調査報告書第63集、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 橋本久和 2018『概論 瓦器・土器研究と中世社会』真陽社
- 平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 福本佳織 2022「宮ノ浦遺跡出土貝類について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 藤本史子 2016「石清水八幡宮ネットワークによる中世土器・陶磁器の流通」『中近世陶磁器の考古学』第3巻、雄山閣
- 森 隆 1995「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山本悦世 1993「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本信夫 1995「貿易陶磁器（中世前期の貿易陶磁器）」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 山本信夫 2000『太宰府条坊跡XⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会

Ⅶ. 宮ノ浦遺跡の発掘調査とまちづくり

有馬啓介

1. 調査の指標としての宮ノ浦遺跡

上島町の佐島に所在する宮ノ浦遺跡での発掘調査の端緒は、1990年ごろに郷土史家の児島公尊氏が行った踏査による古墳時代前期の脚台式製塩土器の発見であった。発見箇所であるⅠ区の作業小屋周辺では地中に古墳時代前期の遺物包含層が存在するが、現代の攪乱によってその時代の遺物が地表に姿を現していた。また、2009（平成21）年には、愛媛大学法文学部考古学研究室による宮ノ浦海岸での踏査が行われた。これらの踏査の所見を踏まえて、2011（平成23）年から宮ノ浦海岸の西側の浜堤に設定されたⅠ区での発掘調査が開始された。当初は、古墳時代における製塩活動の実態解明を目的に調査が実施された。その後、東側の浜堤に新たな調査区であるⅡ区を設定し、今日までの調査にいたっている。これまで蓄積してきた調査成果から、宮ノ浦遺跡は、縄文時代から現代にいたるまでの瀬戸内海の島嶼部の生業や景観などを示す重要な遺跡であることが分かってきた。

上島町およびその周辺地域は古くから製塩業が盛んであり、同町の生名島や岩城島では昭和40年代まで流下式塩田での塩づくりが行われていた。一方、この地は中世の瀬戸内海の代表的な製塩地として日本史上よく知られている。特に、伊予国弓削島荘は、中世に塩を東寺（教王護国寺）に貢納したことから、塩の荘園として著名である。弓削島荘は平安時代後期から室町時代まで存続し、鎌倉時代の1239（延応元）年からは東寺領となった。本荘については、「東寺百合文書」に代表される多くの関係史料がのこされていること、瀬戸内海に浮かぶ島嶼の荘園であるという特異性を有することなどによって、これまで多くの調査研究が積み重ねられてきた。

2015（平成27）年10月に国宝「東寺百合文書」がユネスコ「世界の記憶」に登録されたことは、この地域に生きた先人の貴重な歴史を再認識する絶好の機会となった。これを受けて、上島町では平成28年度から令和2年度にかけて弓削島荘総合調査事業が実施された。総合調査の実施によって、弓削島およびその周辺地域にのこる荘園時代の歴史文化資源を相互に関連づけて、一体的に捉え、荘園遺跡としての弓削島荘遺跡の価値を理解することが可能となった。弓削島荘遺跡は、2021（令和3）年10月11日付け官報告示により国史跡に指定された。

昭和の高度経済成長以降、瀬戸内海の島嶼部の姿は劇的に変貌してきた。昭和30年代に入ると、瀬戸内海の島々の多くの海岸では埋め立てが行われ、生活のために護岸や道路などが整備された。そのため、一般的な荘園遺跡では当時の生産活動によって形成された景観が水田としてのこっているのに対し、現在の弓削島にはかつての製塩の場であった塩浜の景観が見られない。また、生名島や岩城島の塩田跡地は、車エビの養殖場や運動場、造船所などとして利用されており、現代の人々にとって、島のかつての主要産業であった塩業は遠い存在になりつつある。弓削島荘総合調査では、

VII. 宮ノ浦遺跡の発掘調査とまちづくり

中世の弓削島荘の主要な所出物であった塩の生産の場である塩浜の景観を復元するために、発掘調査による埋蔵文化財の調査を実施した。その結果、調査箇所の大田林や高浜八幡神社、島尻海岸では、中世に揚浜式製塩が行われていたことが分かった。

このように、かつての島の景観や産業を復元する方法として、遺跡の発掘調査は極めて有効である。宮ノ浦遺跡では、これまで13次にわたる発掘調査が実施され、多くの考古学的な成果が蓄積されてきた。佐島から弓削瀬戸を隔てて指呼の間にある弓削島のみならず、周辺の島々は同一文化圏であり、宮ノ浦遺跡での調査成果が今後の弓削島荘遺跡をはじめとした周辺地域の遺跡の調査における大きな指標となることが期待される。宮ノ浦遺跡が所在する佐島と同じく石清水八幡宮領荘園であった岩城島の西部地区には「ハマトコ」と呼ばれる地名があり、令和5年度からその場所で塩田の発掘調査を開始した。新たな製塩遺跡の調査であるが、宮ノ浦遺跡や弓削島荘遺跡などの発掘調査で蓄積された調査成果がこの遺跡の解釈を行うための重要な指標（道標）となるであろう。

2. 宮ノ浦遺跡の発掘調査とまちづくり

2022（令和4）年10月に策定された第2期上島町総合戦略には5つの基本目標が設定されており、そのひとつに「歴史・文化を継承し、活かすまちづくり」が掲げられている。史跡をはじめとした文化財の活用は、本町の重要施策となっている。

宮ノ浦遺跡のⅡ区での発掘調査は、撚糸文土器・無文土器を含む縄文時代早期の遺物包含層の広がりや古墳時代前期から中世にいたるまでの製塩活動の解明を主たる目的として実施されてきた。そのようななか、12世紀中葉ごろの鹹水溜めの機能が想定される複数の槽状遺構や人骨が良好に遺存した中世初頭の土坑墓などの発見があった。佐島は中世には石清水八幡宮領荘園であった歴史を有しており、これらは荘園成立期の様相を示す貴重な遺構である。一方、第13次調査では、縄文時代草創期の特徴がある打製石鏃が出土した。さらに、12トレンチにおいてⅣ－2層の上部で撚糸文土器、中部で隆帯文土器、最下部で刺突文土器の出土がみられた。このように宮ノ浦遺跡は、上島町を代表する遺跡であるとともに芸予諸島、ひいては瀬戸内海地方の生業・景観・文化を通史的に理解するうえで重要な遺跡である。そのため、遺跡を確実に保存するとともに、地域資源として位置付け、その魅力を町内外に発信し、地域振興・観光振興などの分野において適切に活用することが求められている。

上島町では、だれもが地域の歴史・文化を学ぶことができ、まちづくりに寄与するような「上島町にふさわしい資料館」を設置するために、2023（令和5）年3月に「（仮称）上島町資料館基本計画」を策定した。本施設は、歴史・文化の情報発信と学習機能を担う施設であり、文化財を活かしたまちづくりの拠点施設として位置付けられる。宮ノ浦遺跡をはじめとした町内の遺跡で出土した考古資料（埋蔵文化財）などが将来整備される博物館施設で地域の宝として保存・活用されることが期待される。また、中世の揚浜式製塩を体験する場として、弓削島の鎌田地区には塩田が復元整備されている。本施設は、宮ノ浦遺跡や弓削島荘遺跡で確認された「上島町原風景・塩業史」

を追体験できる場として位置付けられている。今後、多くの来訪者に対応するために塩田の再整備を検討する必要がある。

現在、日本の各地域では、過疎化・少子高齢化が著しく進行している。このような背景から、文化財を取り巻く環境も変化し、2018（平成30）年に文化財保護法の改正が行われた。その趣旨にもあるように、地域社会総がかりで文化財を保存・活用し、次世代に確実に継承することが私たちに求められている。史跡や遺跡をはじめとした文化財を地域のアイデンティティの核となる資源と位置付け、地域社会が一体となって、よりよい状態で次世代に引き継ぐとともに、その活用によって地域振興が図られる仕組みづくりを進めることが重要である。

第6章 総括

1. 宮ノ浦遺跡の発掘調査にいたるまで

しまなみ街道開通前の1996年9月、今治発のフェリーに車で乗り込み、はじめて弓削島に渡った。そして2000年、科学研究費『古墳時代の製塩に関する生態学的研究』（奨励研究(A)）の一環で、製塩遺跡の立地と海藻植生の対応性を調査すべく弓削島を含む周辺の島々を踏査した。その後は大島、伯方島を含めて古墳時代の製塩遺跡を発掘するために踏査や自治体との交渉を続けたもののその結果は芳しくなかったが、弓削町（現、上島町）だけは、当時の（故）木下良一町長をはじめとして前向きに接していただいた。そして村上律子氏（当時、弓削町企画情報課）が漁協を含めた各所との関係構築を率先して推進し、考古学的には（故）児島公尊氏（当時、岩城村役場）の協力を得て、発掘調査の実現に向けた環境が醸成していった。そして2003年、弓削島の東南約4 kmに浮かぶ豊島で長井數秋氏（愛媛考古学研究所）と踏査し、長井氏が発見した豊島東遺跡で脚台式製塩土器を含む包含層が露出した法面を観察した。さらに学生達と踏査を継続し、この包含層の遺物を供給した生活域の存在が想定される平坦地を突き止め、調査実施を決定した。これが豊島明神遺跡である。

豊島明神遺跡の調査は、2006年にディーン・グッドマン氏（当時、マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所・中島研究室）による地中探査から始めた。遺構の探索のみならず、調査範囲がかつて宅地であったため、建物の基礎などを避けて発掘区を設定する目的があった〔石井編2008〕。そして2008年に発掘調査を開始し、探査で捉えた大型の土坑を掘り上げ、その壁と底から脚台式製塩土器片を発見し、設定した調査区内を掘り下げていった。その結果、製塩土器は、島外産の礫や鍛冶滓を集積した遺構や焼土にともなっており、この遺跡が製塩址ではなく、祭祀行為などでの消費活動の痕跡をのこすものと結論づけた〔村上編2016〕。当初の調査目的が製塩址の発見にあったため、2010年度の第3次調査が終了すると、児島氏とともに新たな遺跡を求めて上島諸島内を踏査した。そして氏が熟知していた製塩土器片の散布地である佐島・宮ノ浦での発掘調査を上島町教育委員会に起案し、協議するにいたった。

豊島明神遺跡の調査は、財団法人 福武学術文化振興財団（現、公益財団法人 福武財団）の研究助成を受けて開始し、その後は「伯方の塩」の伯方塩業株式会社社長、（故）丸本執正氏からの申し出があり、会社の記念事業の一環として援助を頂戴し、実施し得たことを記しておかなければならない。

2. 宮ノ浦遺跡の古墳時代前期の製塩址

以上のように、2000年以来、一貫して古墳時代前期の製塩址の発掘調査を目指して上島諸島を含めた地域で活動を続け、2011年によく佐島の宮ノ浦遺跡Ⅰ区の第1次調査にこぎ着けた。その

2. 宮ノ浦遺跡の古墳時代前期の製塩址

調査の目的は、古墳時代前期の採鹹工程を含めた製塩技術を解明することにあった。それは福岡市海の中道遺跡における発掘調査で、焼けた海藻付着性の微小貝を検出し、古代の藻塩焼き技術、製塩の季節等を明らかにしたという経験に根ざしている〔山崎編1993〕。宮ノ浦遺跡で、浜堤の前浜、頂部、後浜を含めた範囲を発掘対象とし、製塩炉、土器廃棄場のみならず、採鹹にともなう残滓、廃棄場を発見することを具体的な目的として掲げた。

採鹹にともなう情報を遺構から発見することはできなかったが、黒住耐二氏がⅠ区東部（15トレンチ）のサンプル土壌から、焼けた葉上性（海藻付着性）微小貝、すなわちウズマキゴカイ、カンザシゴカイ類を数点検出した〔黒住2018〕。黒住氏は遺跡の立地や環境と、その他の微小な自然遺物のあり方から、これらが溶化あるいは飛散したという重要な指摘を行った。採鹹技術の十分な解明とまではいたらなかったが、このような問題意識が同様の遺跡の発掘において活かされることを今後に期待する次第である。

遺構としては、Ⅰ区東部15トレンチの浜堤頂部で製塩炉1基、複数の製塩土器廃棄場などを検出した。脚台式製塩土器は前期のあいだに脚台部の大きさ・直径が大型、中型、小型と変遷することがわかっており〔柴田2015〕、一般化した理解となっている。Ⅰ区では西部で大型脚台部をもつ製塩土器の使用がはじまり、中型、小型とその数を減少させる一方、東部の浜堤最高地点では中型脚台部の段階からはじまり、その豊富な量はⅠ区における生産の中心であったことを示す。しかし小型になると激減し、代わって東の調査区Ⅱ区における小型品の増加がみられる。ただし、この段階には中型脚台部の土器が使用されたころの製塩の活況はみられない。なお脚台部の製作法に注目すると、中型の段階に技術が多様化することが明らかにされている¹⁾。

このような古墳時代前期の製塩活動がクロスナ層で検出されることを明確にした点も宮ノ浦遺跡発掘調査の重要な成果である。これを契機に芸予地域や淡路島で検証すると、脚台式製塩土器を用いた製塩址は全てクロスナ層にともなうことがわかり、クロスナ層の形成に関する学説からみて脚台式製塩土器を用いた塩作りが温暖気候における活動であることを指摘してきた。さらにⅠ区東部のクロスナ層は小型脚台の段階に黒みが薄れ、部分的に茶褐色を呈しており、気候変化（＝冷涼化）を反映している可能性がある。

この製塩関連遺構の周囲では動物、魚貝類の遺存体が検出され、石丸恵利子氏と山崎純男氏により捕食対象の精緻なリストが提示された〔石丸2016、山崎2016〕。また高宮広土氏の指導下実施したウォーターフローテーションではコメ、アワを検出することができた〔高宮2018〕。コメは当時の佐島における稲作を想定しがたいため、島外への塩の搬出に呼応する現象としてその背景を考えることができる。また島外からの招来という点では、Ⅰ区N15グリッドで発見された鞆羽口も注目される〔有馬・品川編2019〕。後浜に位置するN15グリッドでは、鍛造剥片も検出されており、鉄素材を搬入して鍛冶が行われたことをものがたっている。漁撈や動物、魚貝類の解体に必要とされた鉄製品を生産、修理する工房が存在したのである。

なお古墳時代前期の製塩土器と共伴する古式土師器の時期に関する詳細な検討は、報告書Ⅱ〔柳本・大山2016〕と本書第5章Ⅲで論じられている。

3. 古墳時代前後の宮ノ浦遺跡

以上のような古墳時代前期の製塩関連資料のみならず、古くは縄文時代草創期末から、そして古代～近世・近代の遺構もしくは遺物までも内包するところに宮ノ浦遺跡の意義があり、またこのことが13次におよぶ発掘調査を必要とした理由でもある。

縄文時代 縄文時代草創期末～早期初頭については、遺跡をめぐる地形環境を含めて本書第5章Ⅰ、Ⅱで詳述したとおりである。Ⅱ区の成果によれば、海進以降、押型文土器の段階は遺跡の空白期間となり、前期以降、人が戻り、中期、後期と占地されたことが判明した。つまり海を知らない縄文人の空間と海に囲まれた縄文人の空間がこの遺跡にのこされていたのである。Ⅰ区では前期、後期初頭、晩期の土器と石器が10点程度検出されたに過ぎない。浜堤形成と崖錐斜面からの土砂の供給が絶え間なくあったⅠ区では、安定した生活空間の確保が困難であったと推測される。

弥生時代 弥生時代はⅠ区で中期中葉の土器が1点、後期とみられる土器が数点、そしてⅡ区でも時期不明の土器が数点出土しただけである。佐島周辺の岩城島では積善山遺跡、生名島では立石山遺跡が凹線文期の高地性集落として知られているが、宮ノ浦遺跡には当該期の遺物は皆無である。高地が居住域となる段階に、臨海地の利用はごく短時間であった可能性が考えられる。

古代前半 第12次調査におけるⅡ区5トレンチと18トレンチの連結部分で焼塩土器の小片が多数出土した〔有馬・大塩編2023〕。それまでもⅡ区では薄手の倉浦式土器の小片が数点発見されていたが、その寡少性から搬入品として判断する傾向にあった。しかし、5・18トレンチの焼塩土器は多様ながら厚手が主体を占め、二次被熱に起因する細片化が顕著に認められた。またそれらを含むⅡ-5層の土質がクロスナ層を母体としながらも堅く、粘性に富むことから、塩分あるいはニガリ分の影響を受けたものと判断した。つまり、土器の加熱後、解体に伴う塩の飛散もしくは土器内部の塩分やニガリ分が溶出するという現象が起こりうる場であり、焼塩工程、すなわち生産址に近い場所での堆積であると評価した。また焼塩土器は内面に型作りの証左となる布目痕をのこす例もあり、広島側の島嶼部での類例はいわゆる六連島式土器と評価されてきた経緯があるものの、本書第5章Ⅳで示されているように、広島と愛媛東部、そして両者をつなぐ芸予諸島に分布する独自の焼塩土器型式であることが明らかになった。その形は砲弾形であり、大きさは器高15cm程度、口径12cm程度に復元される。さらに土器の細部に着眼すると、その分布圏は広島側と愛媛側とに大別され、宮ノ浦遺跡のそれは広島側に近いこともわかった。ただ、宮ノ浦遺跡出土の焼塩土器にはそれ以外にも倉浦式をはじめ、細かな布目痕をもつ薄手土器など多様性があり、その意味や背景は興味深いものの、その解明は将来に委ねなければならない。また焼塩土器に共伴した土器が少ないため、現状では9世紀という年代が与えられるのみであり、さらなる時期の絞り込みが必要となろう。

古代後半～中世 古墳時代前期以上に遺構数や遺物量が多い時期である。Ⅱ区の調査成果によればクロスナ層が形成される時期に相当し、前代までに傾斜を弱めた後浜は整地によって平坦面が拡張されたことが層の堆積状況や含まれる貝の破碎率から読み取られている。

Ⅰ区出土土器・陶磁器に対する整理を経て〔織田2016〕、Ⅱ区出土品を中心に鈴木康之氏が検

3. 古墳時代前後の宮ノ浦遺跡

討し〔鈴木2020〕、本書第5章ⅥにおいてⅠ区・Ⅱ区全体を包括した土器・陶磁器の展開が明らかにされている。それによれば宮ノ浦遺跡出土の土器・陶磁器は10世紀ごろ、11世紀～12世紀にかけて、12世紀後半～13世紀初頭にかけて、13世紀後半～14世紀初頭にかけて、という四つの時期に区分される。

その検討成果にしたがうと、宮ノ浦遺跡には10世紀ごろから、一般集落には不相応な土器・陶磁器が東西から搬入されている。そして11世紀～12世紀は、吉備型土器分布圏に包摂されながらも北部九州を窓口として龍泉窯青磁や白磁が、畿内からは土師器、黒色土器、瓦器がもたらされており、土器・陶磁器からみると遺跡に交流の拠点的性格があったことを看取できる。遺物はⅠ区東部、Ⅱ区で出土量が増し、とりわけⅡ区は遺構の検出も多く、遺跡の中核となっている。この段階までに5トレンチのカマド状遺構や4トレンチで検出された鹹水溜め用の槽状遺構である3号遺構がのこされている。5トレンチでは大量の貝、魚骨が出土しており、これを食料生産の痕跡とみなすとカマド状遺構との関連がうかがえ、また3号遺構は製塩関連施設である。宮ノ浦遺跡の交流拠点的性格は、この段階からその背景に製塩業や漁業があったと考えられる。第12次調査で発見された人骨は、第4章Ⅱで示されたように佐島周辺島嶼の出自であることが明らかであり、この周辺地域で成長した人の亡骸である。

次の12世紀後半～13世紀初頭には、引き続き吉備型土師器の分布圏に属しながら、和泉型瓦器や播磨系須恵器が受容されており、畿内との関係を強めている。4トレンチで検出された2号遺構も鹹水溜め用の槽状遺構であり、製塩と対外交流との関係が継続していたものと思われる。佐島は1158（保元3）年に石清水八幡宮の荘園領となっており、隣島の弓削島荘が東寺に対して行ったように塩を貢納していたと考えられることから、宮ノ浦遺跡が石清水八幡宮領荘園の一角を占めていた可能性が想定される。上述の2号遺構では、移動式カマド、鍋と一緒に大量の和泉型瓦器碗が廃棄された状況で出土しており、それらに共伴する稀少かつ高価な貝類とを併せて評価し、饗応儀礼、飲食儀礼の痕跡と考えられている〔鈴木2020、福本2022〕。このようにⅡ区にうかがえる生産活動、饗応を含む人間の多様な活動は、続く13世紀～14世紀初頭にはその痕跡がⅠ区に偏在して、しかも遺物、遺構の様相から著しく退行したことがわかっている。東に対面する弓削島が東寺領荘園として以後も存続するのに対し、佐島の宮ノ浦遺跡は衰退し、石清水八幡宮領荘園としての機能は佐島の西、北に浮かぶ生名島、岩城島に移行したとみられる。

近世・近代・現代 Ⅰ区では各トレンチの上層で波佐見焼を含む肥前系陶磁器、淡路の珉平焼など、17世紀後半から19世紀にかけての陶磁器片が多数出土した〔有馬・八木編2016〕。また佐々木尚子氏は、後背湿地においてハンドボーリング調査を実施した結果、深度54cm以浅ではイネ科花粉が非常に多く検出され、粒度の大きい花粉も多いことからそれらが栽培イネと評価した。その下層からソバ属花粉が検出され、それらにワタ花粉が含まれることを明らかにした。佐々木氏は隣島の岩城島において、江戸時代末から明治時代にかけての主要作物がワタであったとする岩城村誌の記録に着目し、同時期の佐島においてもワタ栽培が行われていたことを指摘した〔佐々木2016〕。佐島の地域住民には、昭和までこの後背湿地で水田が営まれたという記憶がある。商品作物の栽培につい

ては、現在、柑橘類が主であるが、昭和の時代は蚊取り線香の原料となる除虫菊の白い花が各所にみられたという。さらに遡るとワタが商品作物として栽培されていたのである。また昭和に関する地元住民の記憶によれば、宮ノ浦湾の浅瀬に豊かなアマモの藻場があり、それを住处とする桜エビの漁が盛んだったようである。この桜エビは乾燥して下関に出荷し、中華料理の食材として上海に輸出され、その結果、宮ノ浦の住民の懐が潤ったという。しかし、分厚いコンクリートの防波堤で陸地と切り離された海にはアマモの藻場はなく、漁師の船もないというのが宮ノ浦湾の現在の姿である。

まとめ

古墳時代前期における製塩の解明を目的として開始した宮ノ浦遺跡の発掘調査は、その前後の悠久の時代をものがたる資料も提供した。海のない瀬戸内の縄文文化について、地形環境も含めて議論でき、今後の研究の展開が期待される。また古墳時代以降の調査成果は、この宮ノ浦の地で展開された生業史ともいえよう。これはサンプリング法を含めて、自然科学的な視点での調査を推進してきた各方面の研究者と協業を行った結果である。

さて、発掘中の豊島明神遺跡訪問をきっかけとして（故）木下良一氏の発声で設立された「弓削塩文化を伝える会」は今なお精力的に活動を続けており、宮ノ浦遺跡の発掘調査についてもさまざまな方面から支援いただいた。宮ノ浦遺跡の発掘中、調査員を割いて弓削島の高浜八幡神社境内を試掘し、国宝『東寺百合文書』の記述に比定される塩浜、すなわち揚浜式塩田の浜床を発見した。その成果は、弓削島荘遺跡群の国史跡指定に向けての調査に大きな指針を与えた。そして2021年の史跡指定以降は、「弓削塩文化を伝える会」が史跡の保存活用を支える母体となっている。ただ弓削島荘遺跡群はその構成要素の性格上、出土遺物が少なく、活用するうえでいずれ学びの対象となろう当時の物質文化に乏しい。その点、小規模ながらも発掘調査を積み重ねてきた宮ノ浦遺跡には、立荘以前からの遺物が豊富にあり、その点を補う役目を果たすことができる。今後、本格化する弓削島荘遺跡群の利活用に際しては、佐島の宮ノ浦遺跡も必要不可欠な存在として理解され、その発掘成果が活かされることを期待したい。

13年間におよぶ宮ノ浦遺跡の発掘調査にはのべ213人の学生が参加した。彼らの労をねぎらい、努力に感謝しながら、本報告書の総括を撰筆することとしたい。

（村上恭通）

【註】

- 1) 古江七海 2023『製作技法からみた古墳時代芸予諸島の脚台式製塩土器の基礎的研究』2022年度愛媛大学法文学部提出卒業論文

【参考文献】

有馬啓介・青木聡志編2021『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅴ－第9次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

まとめ

- 有馬啓介・大塩啓一郎編2023『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅶ－第12次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・品川愛編2019『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅳ－第8次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・曾根大地編2020『弓削島庄総合調査報告書』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・馬赤嬰編2022『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・持永壮志朗編2018『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 有馬啓介・八木宏明編2016『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 石井千絵里編2008『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』愛媛大学法文学部考古学研究室
- 石丸恵利子 2016「15トレンチから出土した脊椎動物遺存体」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 織田誠司 2016「古代～中世の土器・陶磁器について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 黒住耐二 2018「貝類遺体からみた宮ノ浦遺跡－第6・7次発掘調査－」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 佐々木尚子 2016「弓削佐島 宮ノ浦遺跡における花粉分析」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 柴田昌晃 2015「瀬戸内海における製塩考古学の現状と課題」『東アジア塩業考古学の提唱』愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
- 鈴木康之 2020「宮ノ浦遺跡における古代末～中世初期の出土資料について」『東寺領荘園（新見荘・弓削島荘）の考古学的基礎研究』2016年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター
- 高宮広土 2018「宮ノ浦遺跡第6・7次発掘調査における出土植物遺体」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅲ－第6次・第7次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 福本佳織 2022「第4章 宮ノ浦遺跡出土貝類について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅵ－第10次・第11次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 村上恭通編2015『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅰ－第1次～第4次発掘調査概報－』愛媛県越智郡上島町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室
- 村上恭通編2016『愛媛県越智郡上島町豊島明神遺跡』愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 柳本照男・大山裕矢 2016「古式土師器について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会
- 山崎純男編1993『海の中道遺跡Ⅱ』朝日新聞社西部本社福岡本部社会部・海の中道遺跡発掘調査実行委員会
- 山崎純男 2016「宮ノ浦製塩遺跡出土の貝類について」『愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅱ－第1次～第5次発掘調査報告－』愛媛県越智郡上島町教育委員会

图 版



1. 宮ノ浦遺跡遠景（南から）



2. 全景（南から）

図版 2



1. 12 トレンチ全景（南から）



3. 12 トレンチⅡ層上面礫群（南から）



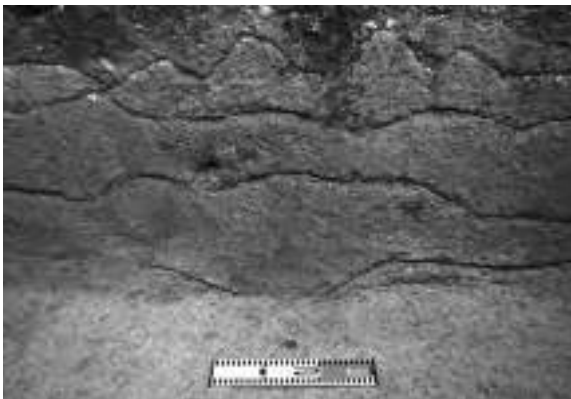
2. 12 トレンチ東壁（一部）



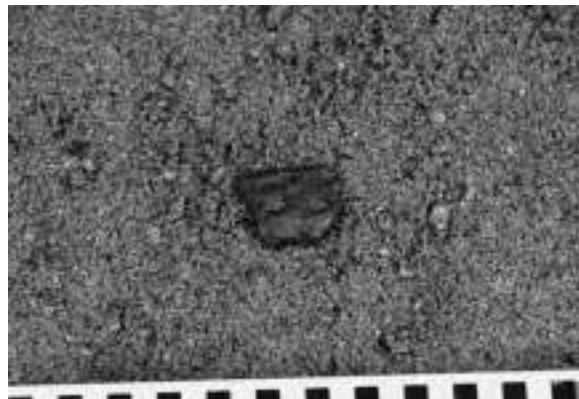
4. 12 トレンチ2号遺構（南から）



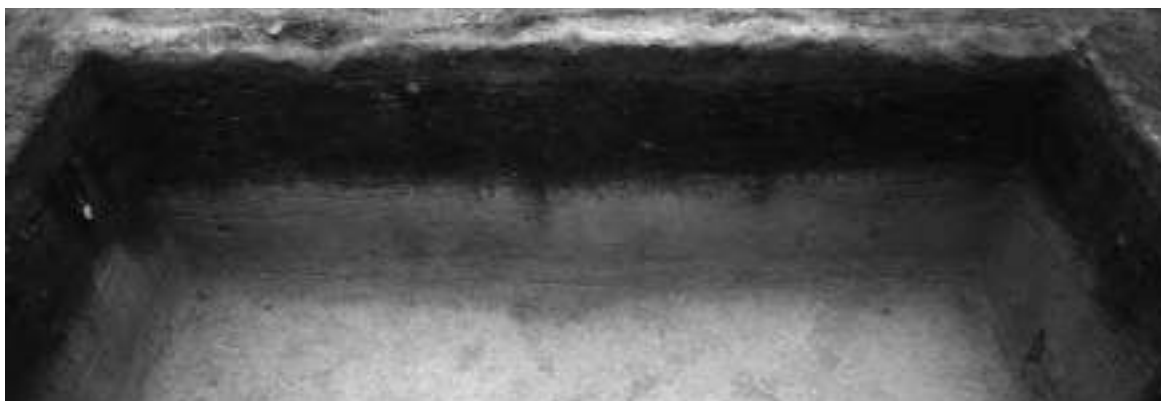
5. 12 トレンチ4号遺構半裁状況（西から）



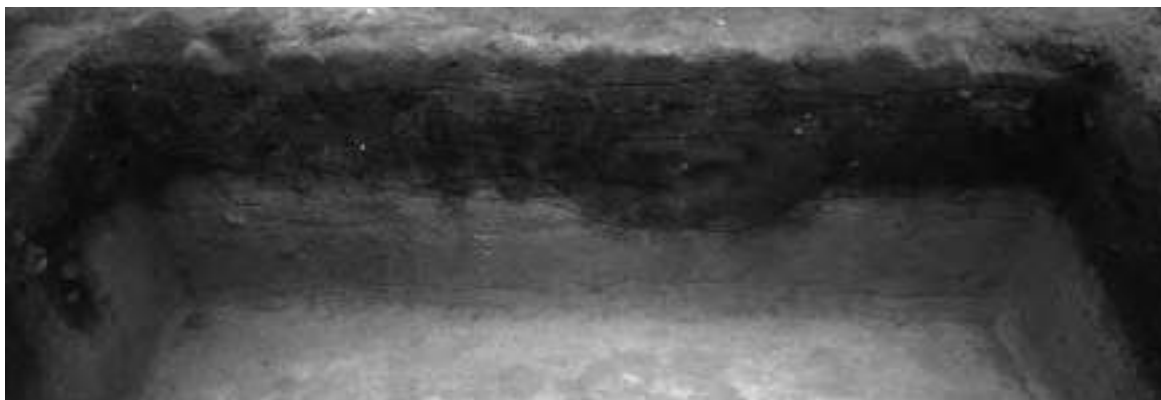
6. 12 トレンチⅣ-2層刺突文土器出土状況(南から)



7. 左の写真の拡大



1. 17 トレンチ北壁



2. 17 トレンチ南壁



3. 17 トレンチ東壁



4. 17 トレンチ西壁



5. 17 トレンチⅣ-1層下層縄文土器（西から）



6. 17 トレンチⅣ-1層下層縄文土器（北から）

図版 4



1. 18 トレンチ東壁



2. 18 トレンチ西壁



3. 18 トレンチ北壁



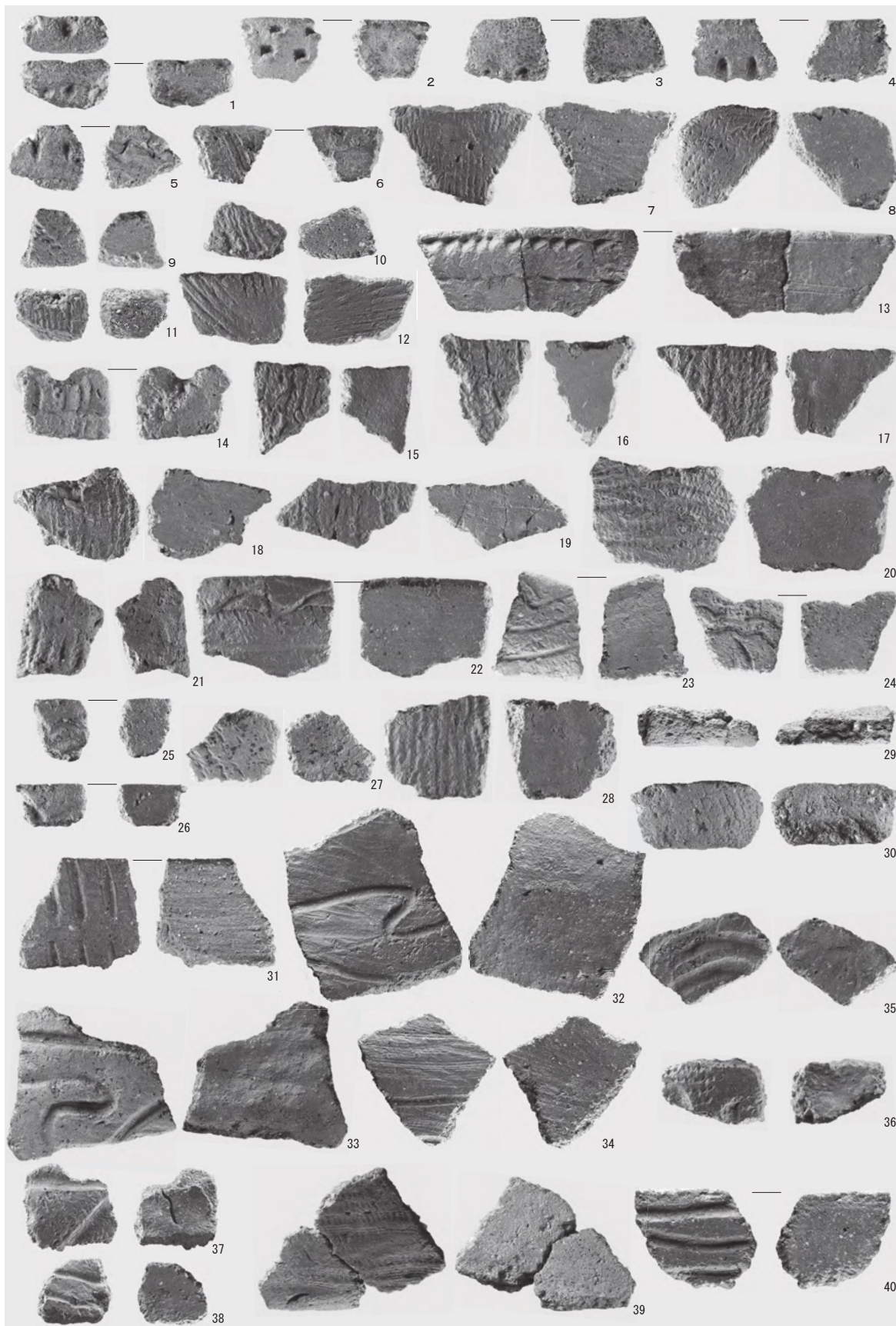
4. 18 トレンチ南壁



5. 18 トレンチⅣ - 1層遺物出土状況（西から）

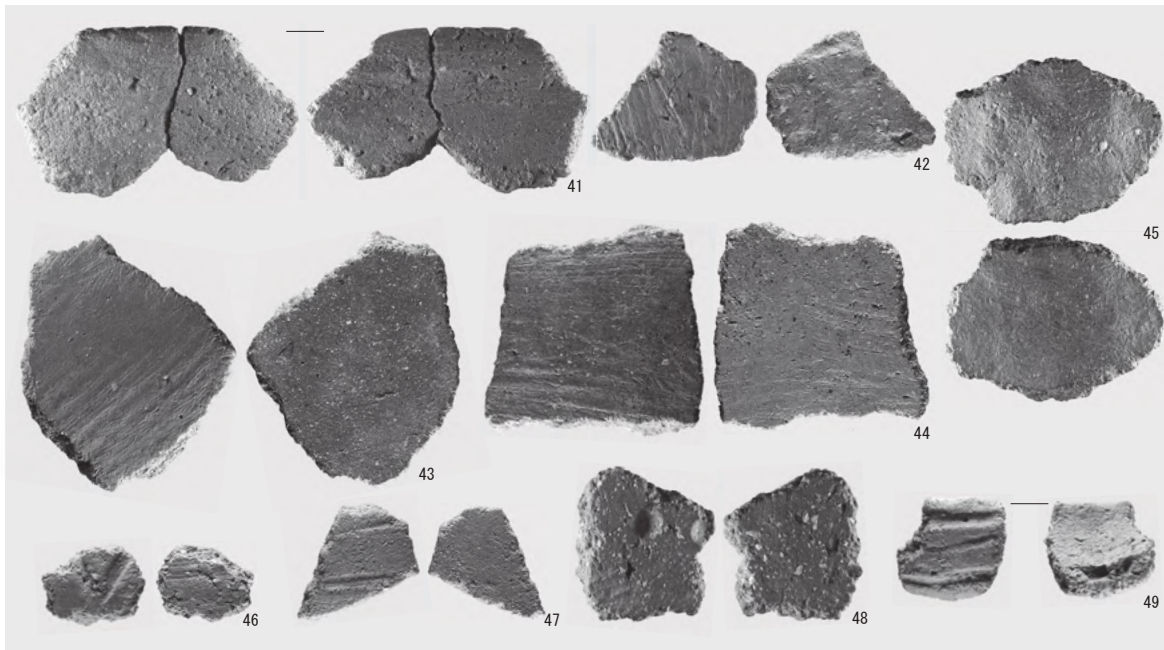


6. 18 トレンチⅣ - 1層遺物出土状況（西から）

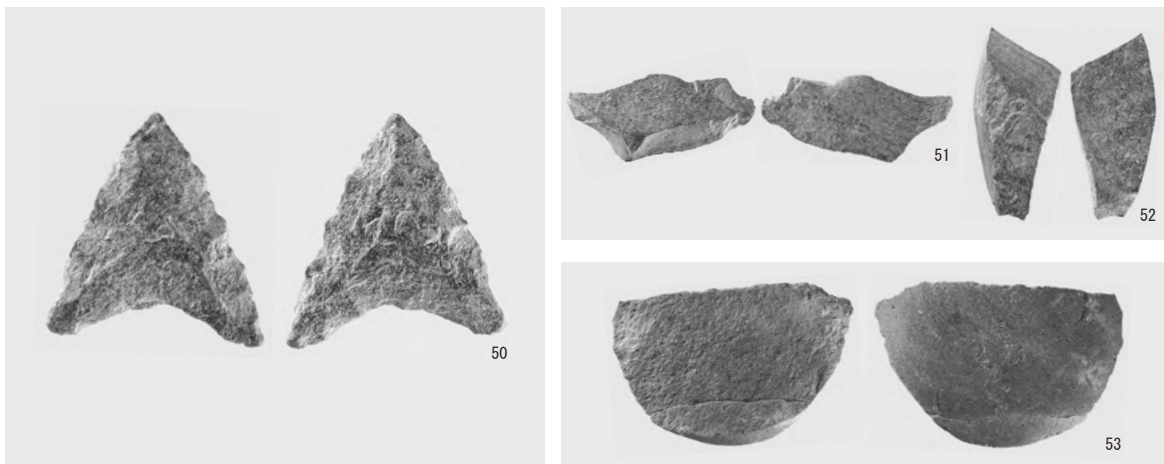


12トレンチ出土縄文土器1

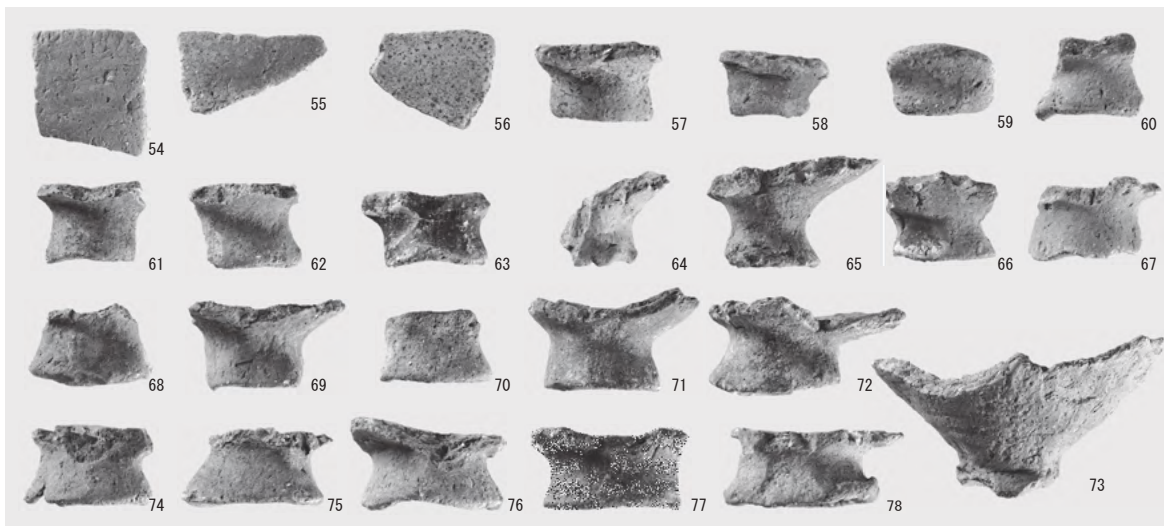
図版 6



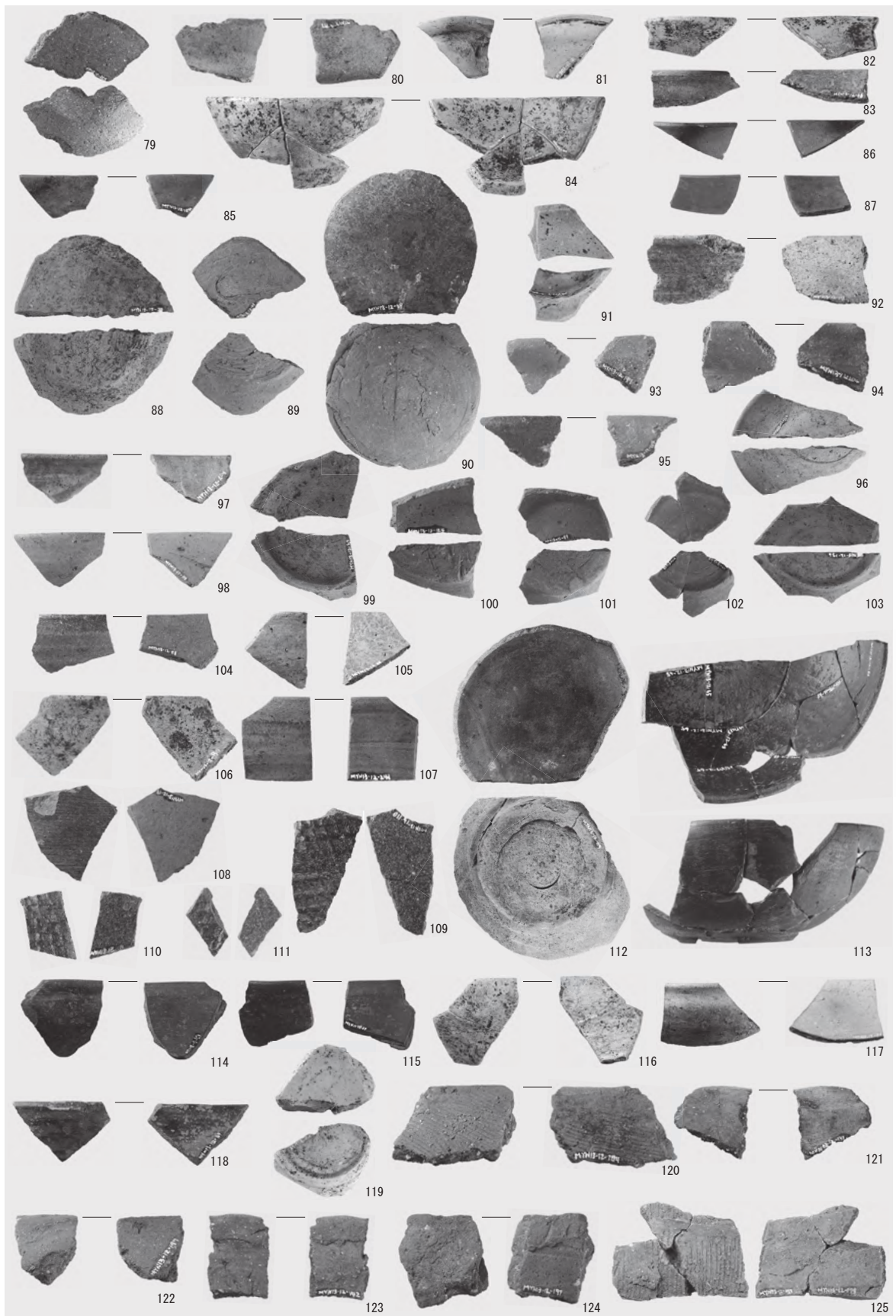
12トレンチ出土縄文土器2



12トレンチ出土石器

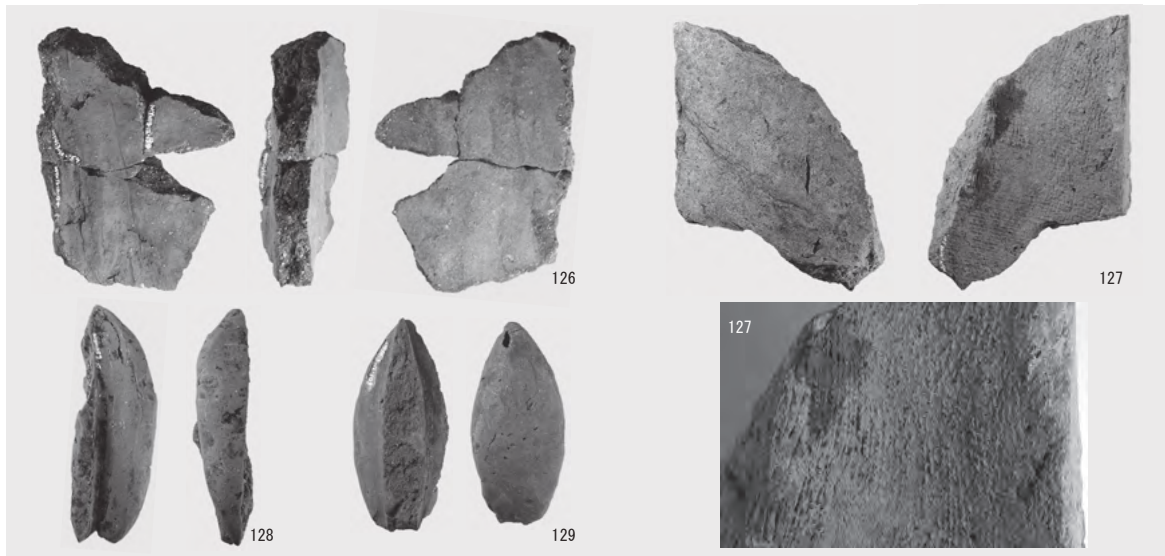


12トレンチ出土脚台式製塩土器

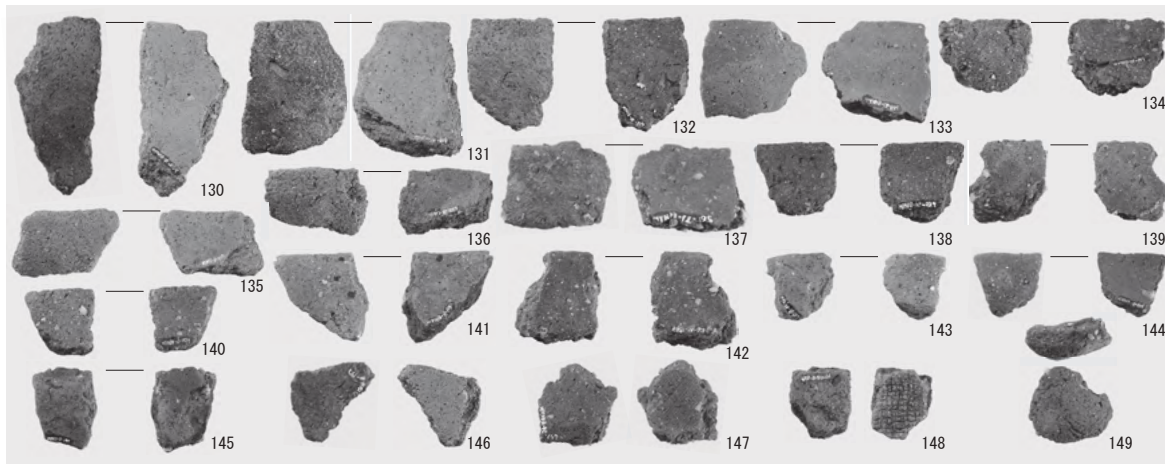


12 トレンチ出土遺物1

図版 8



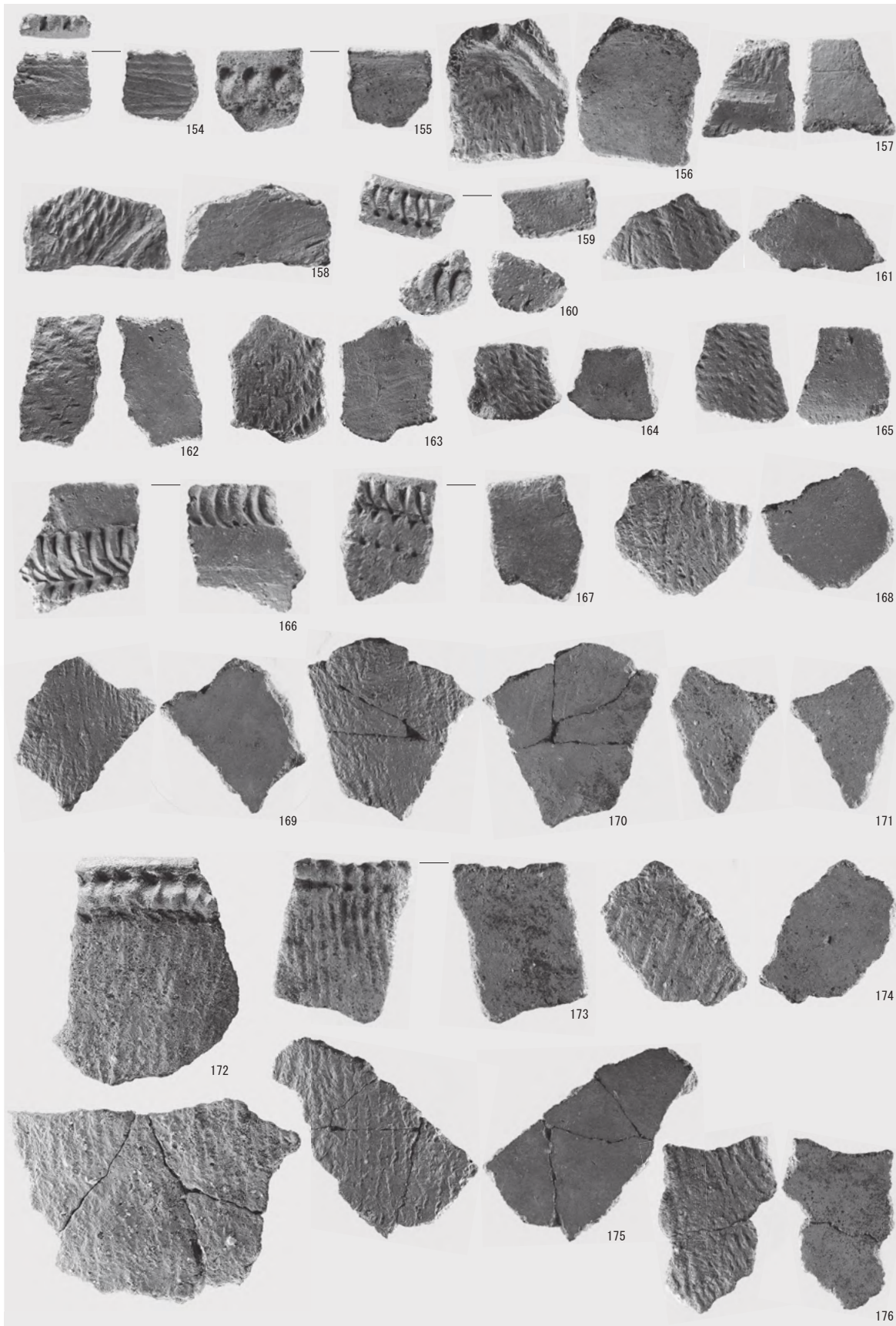
12トレンチ出土遺物2



12トレンチ出土製塩土器

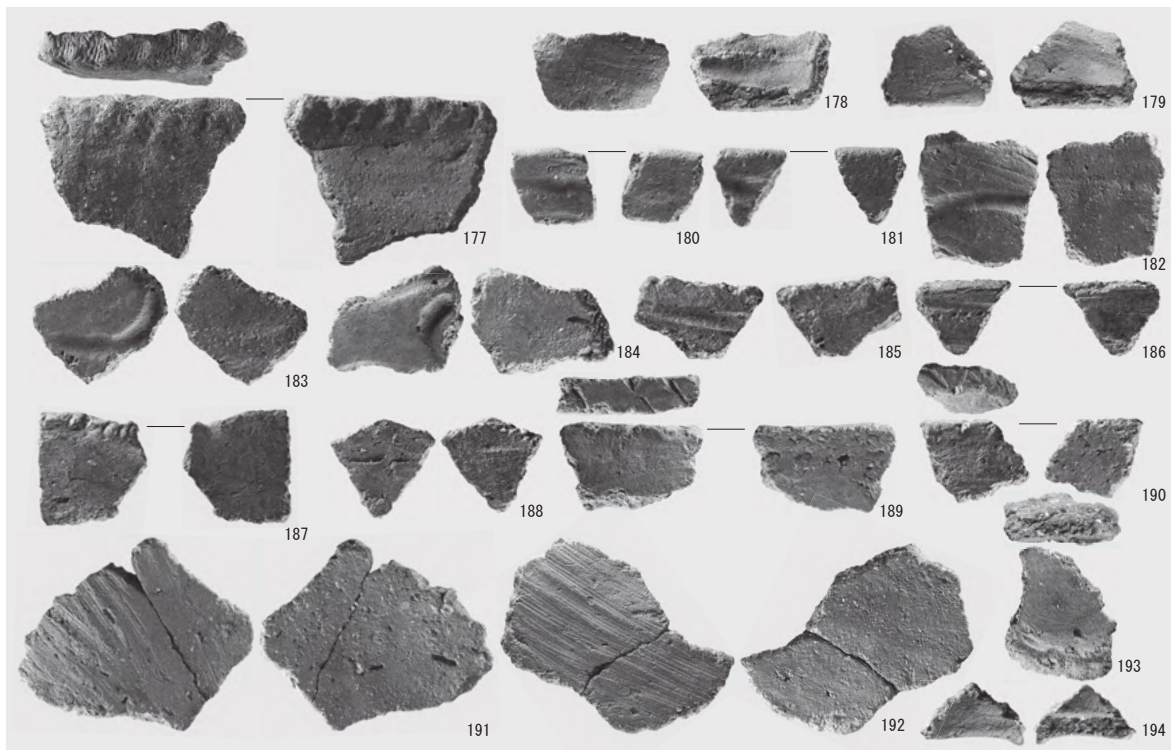


12トレンチ出土鉄製品・鍛冶関連遺物

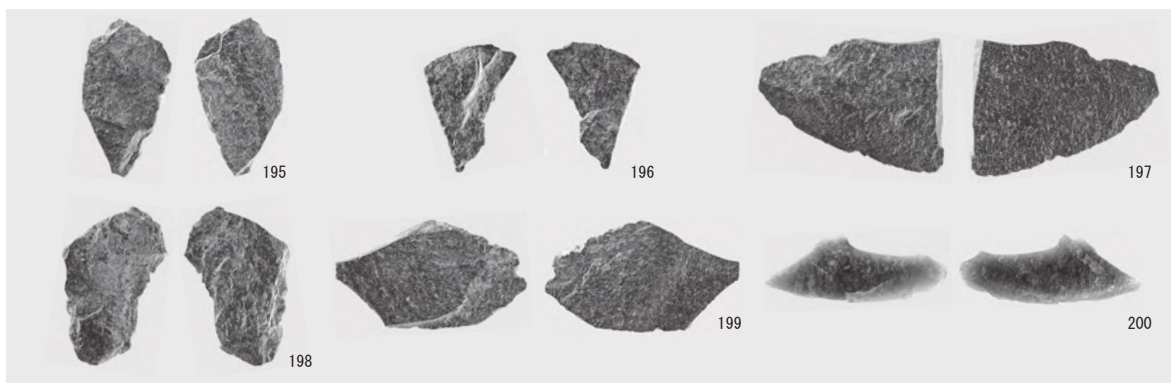


17トレンチ出土縄文土器 1

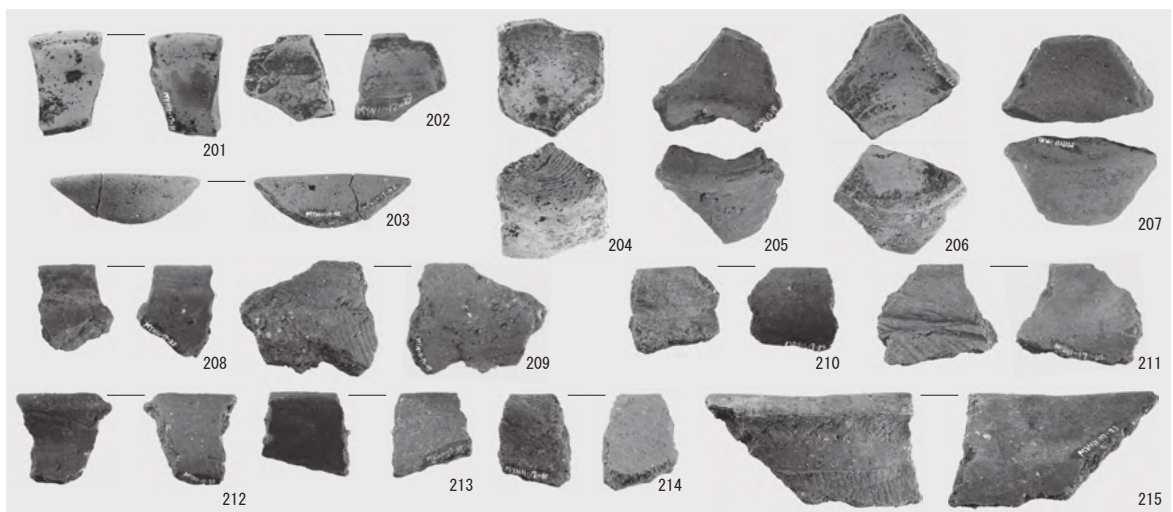
図版 10



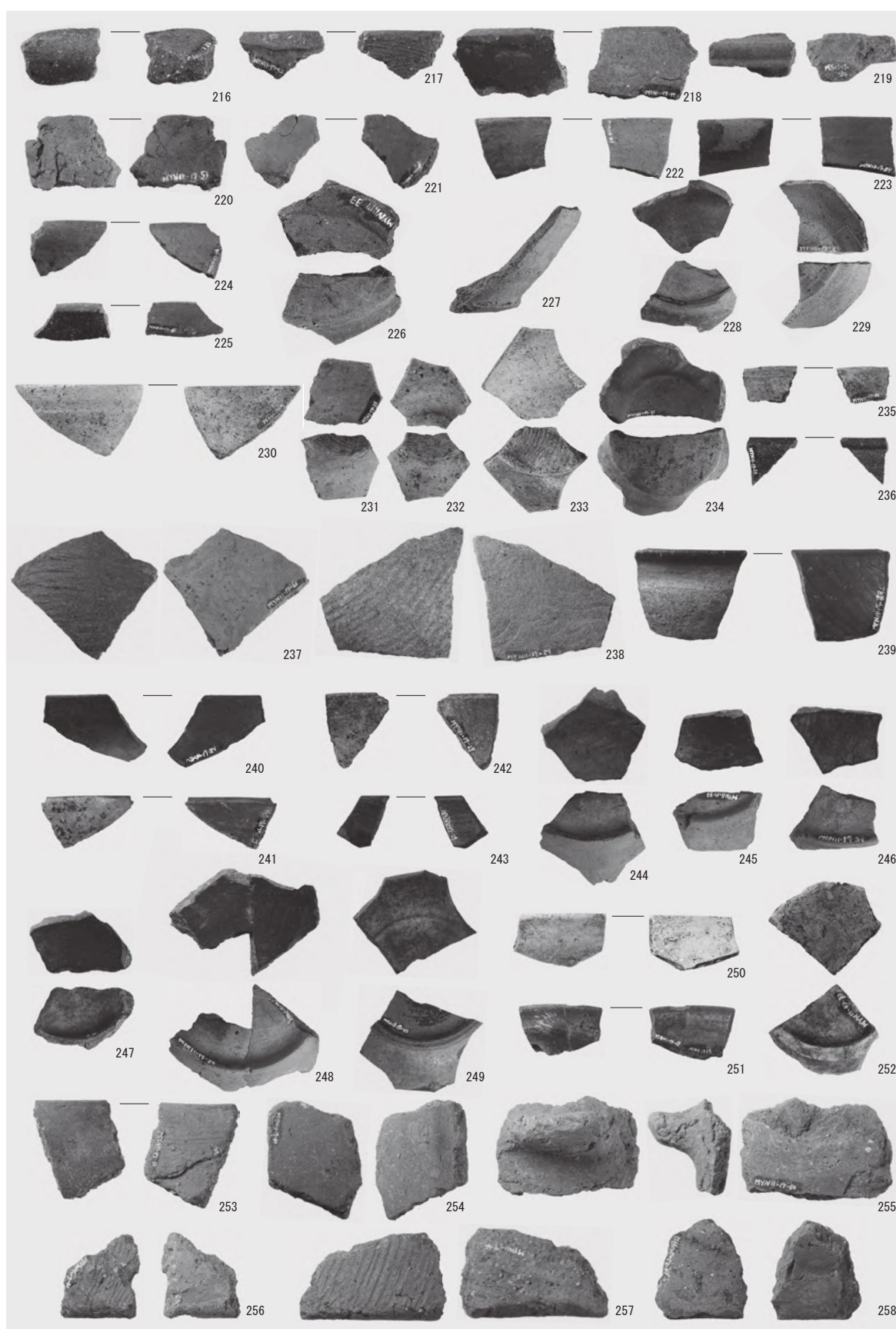
17トレンチ出土縄文土器2



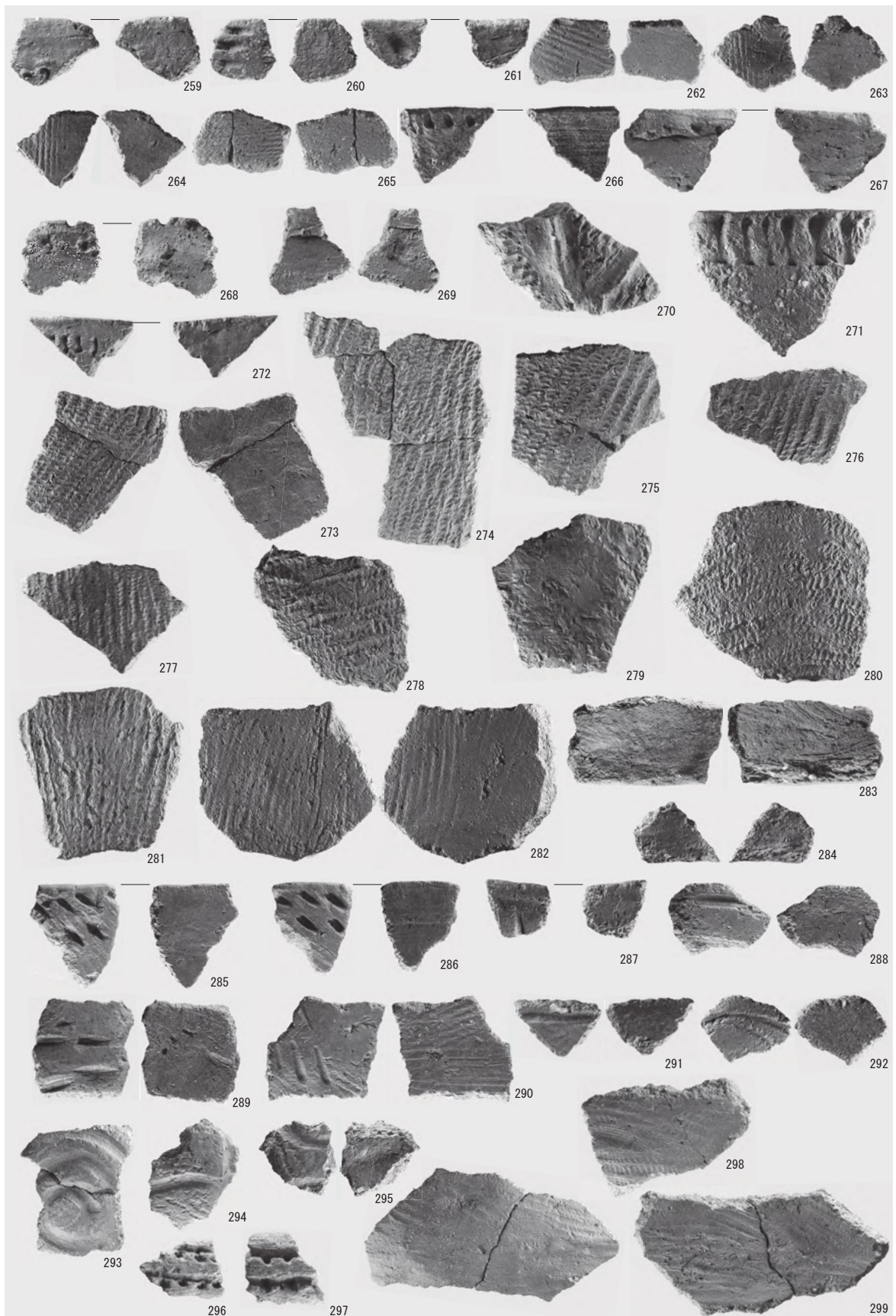
17トレンチ出土石器



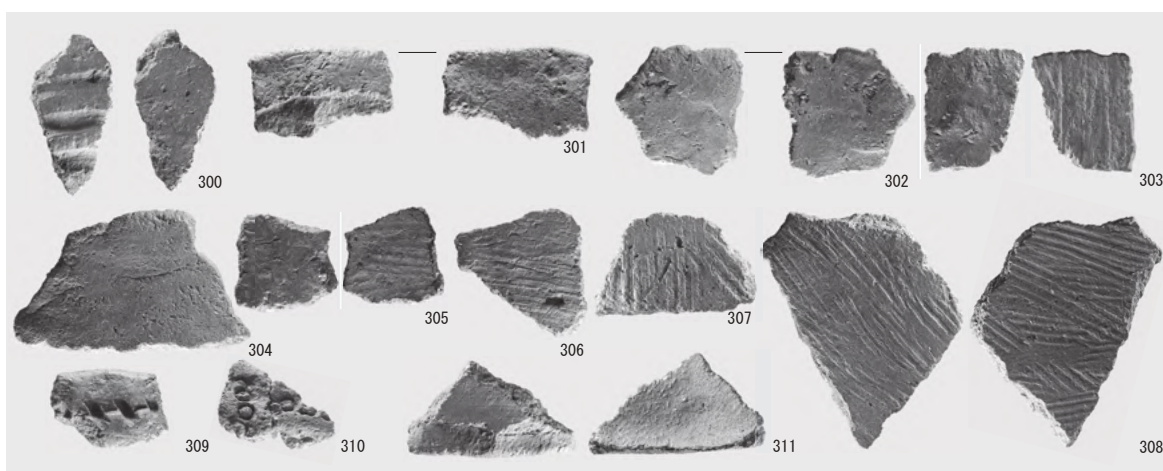
17トレンチ出土土器 1



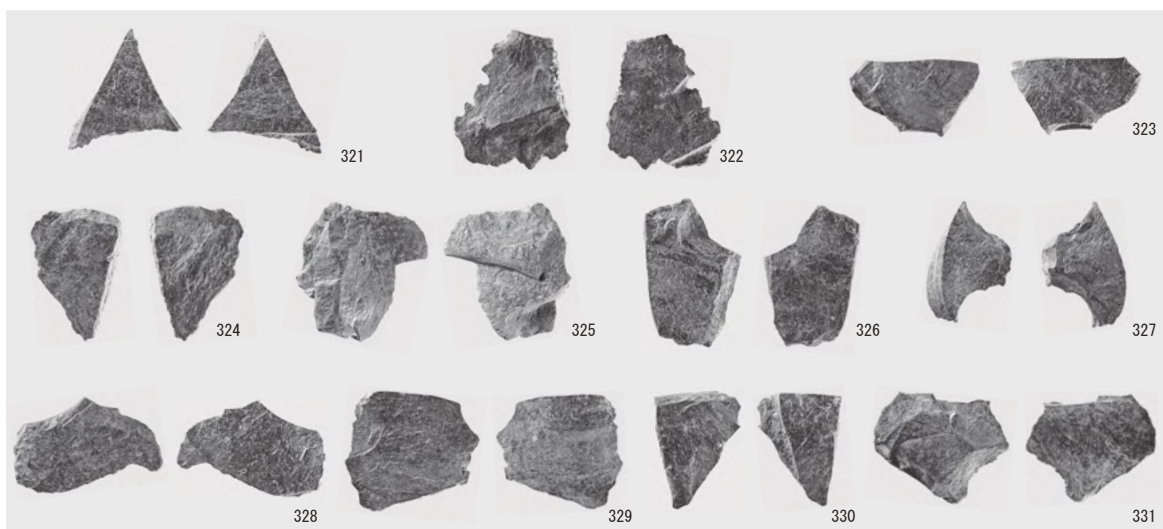
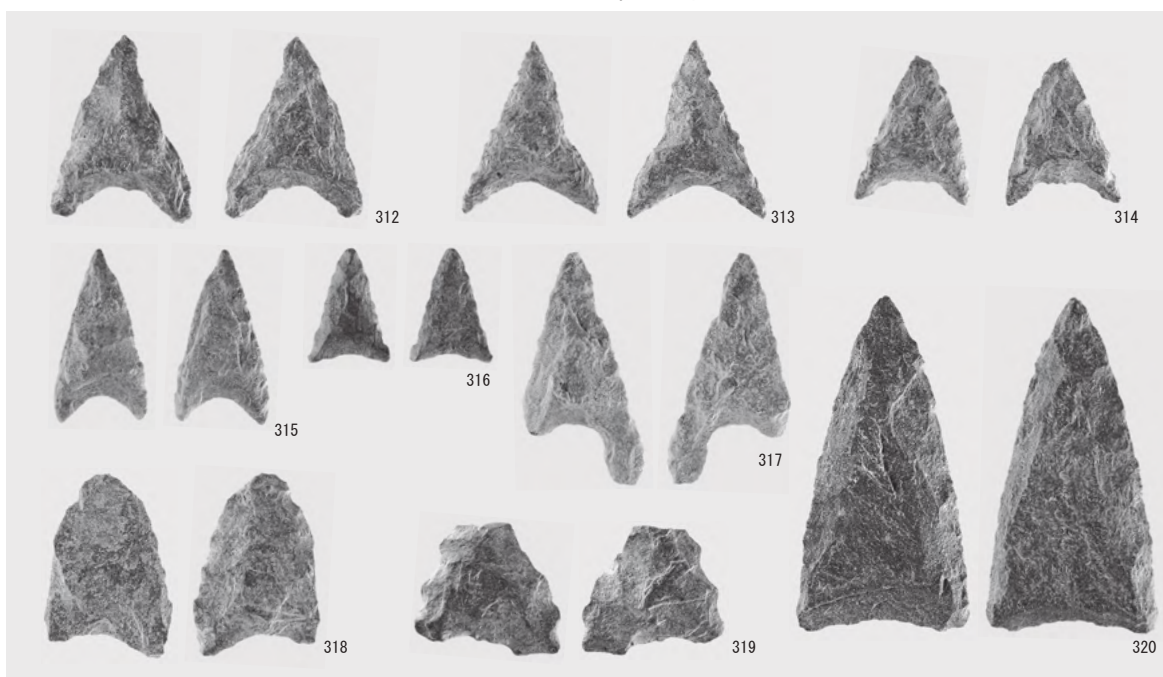
17 トレンチ出土土器 2



18 トレンチ出土縄文土器 1

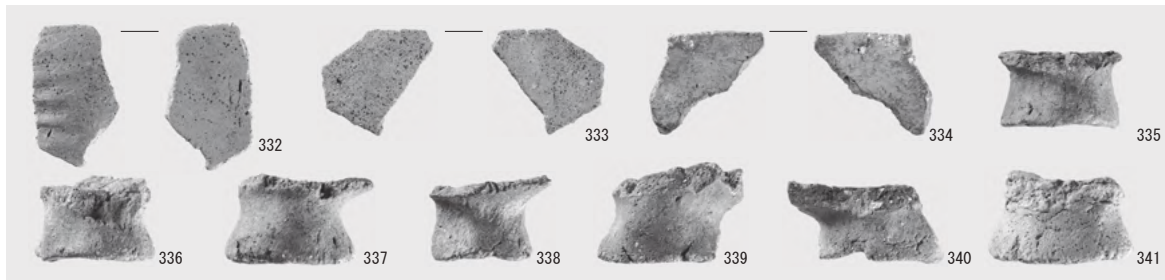


18トレンチ出土縄文土器2

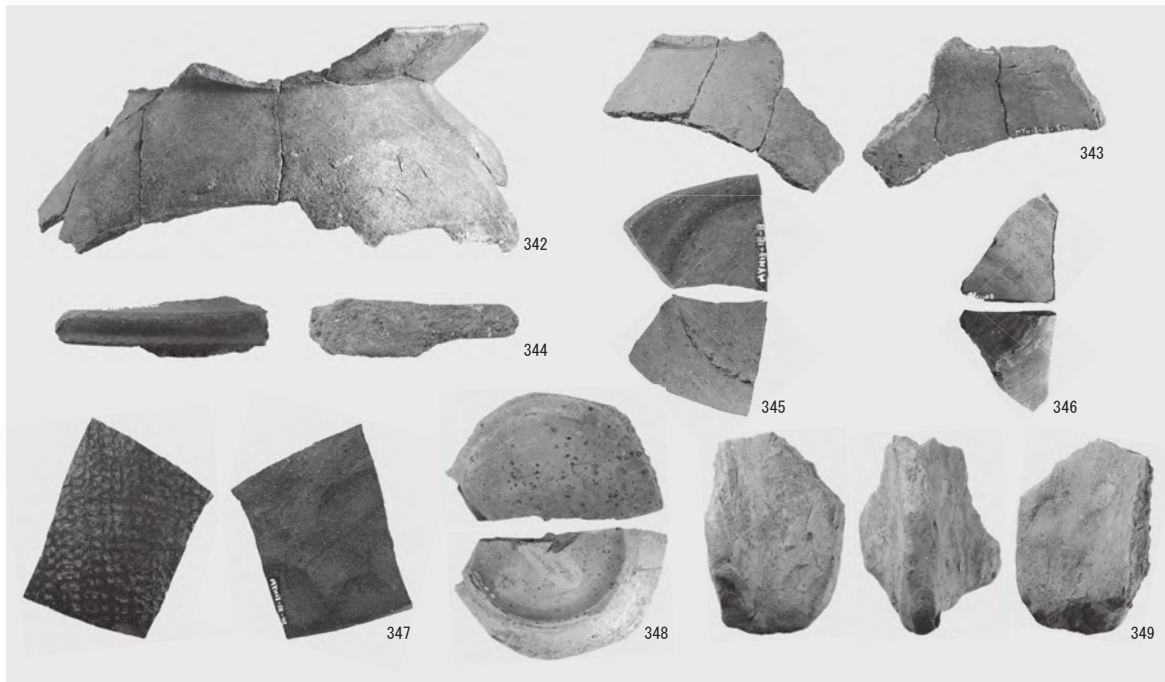


18トレンチ出土石器

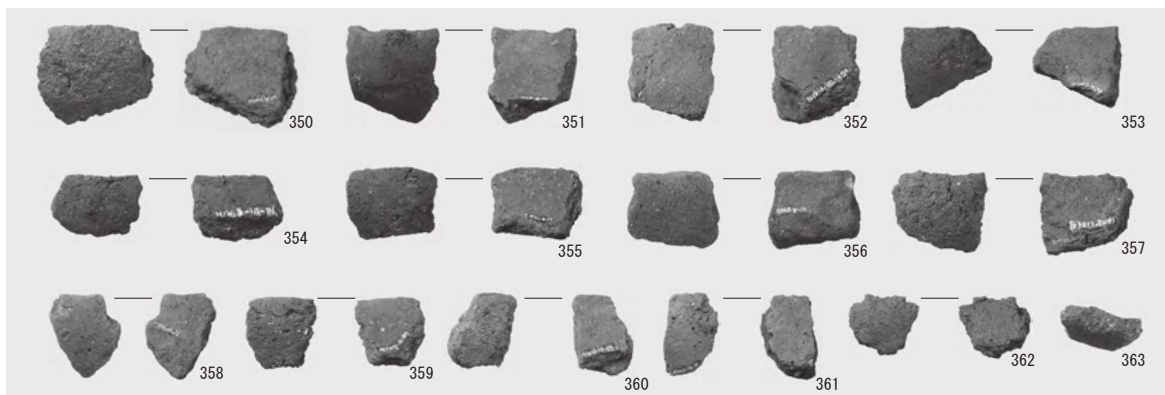
図版 14



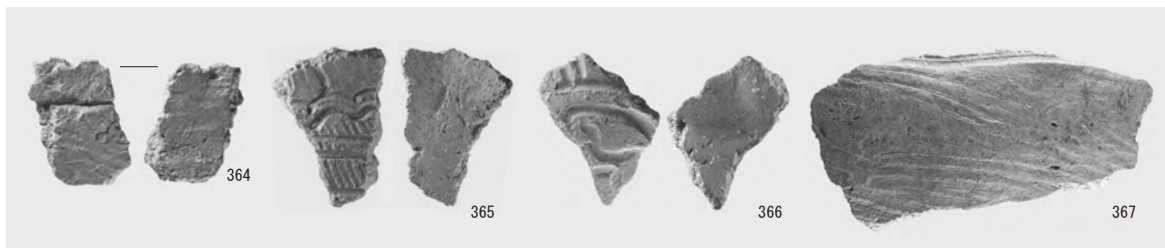
18トレンチ出土脚台式製塩土器



18トレンチ出土土器



18トレンチ出土製塩土器



1・3トレンチ出土縄文土器

報告書抄録

ふりがな	えひめけんおちぐんかみじまちょう みやんないせき							
書 名	愛媛県越智郡上島町 宮ノ浦遺跡Ⅷ							
副 書 名	第13次発掘調査報告							
シリーズ名	上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	11							
編著者名	(編者) 有馬啓介、鄭宗鎬、福本佳織 (著者) 青木聡志、朝日岳斗、足立達朗、有馬、伊藤茂、植田知也、江本晃季、加藤和浩、笹田朋孝、佐藤正教、品川愛、竹原弘展、田渕朱莉、鄭、辻康男、中野伸彦、伴井嘉正、廣田正史、福本、藤原碧生、舟橋京子、ブズレン・サミ、馬赤嬰、益田千遥、村上恭通、山形秀樹、米元史織、Zaur Lomtadize							
編集機関	上島町教育委員会							
所 在 地	〒794－2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 TEL 0897-77-2070							
発行年月日	2024年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやんな いせき 宮ノ浦遺跡	えひめけん おちぐん 愛媛県越智郡 かみじまちょう 上島町 ゆげさしま 弓削佐島	38356		34° 14′ 42″	133° 11′ 30″	2023 0802～18	23㎡	保存目的調査
	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物			特記事項
	集落 散布地	縄文時代 古墳時代 古代 中世		土坑	縄文土器、石鏃、製塩土器、古式土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器、瓦器、吉備型土師器、貿易陶磁器、土錘、土製品、羽口、鉄製品、自然遺物			縄文時代草創期末～早期初頭の土器、古代製塩土器が出土
要約	Ⅱ区12、17、18トレンチで発掘調査を行い、12トレンチの最下層の包含層から隆帯文土器や撚糸文土器を検出した。また12トレンチ、18トレンチの北部で古代の製塩土器が出土した。							

愛媛県越智郡上島町
宮ノ浦遺跡Ⅷ
— 第13次発掘調査報告 —

(上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第11集)

2024年3月27日発行

編集・発行 愛媛県越智郡上島町教育委員会
〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地
印刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 愛媛県松山市湊町7-1-8
